公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（51）

南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 北山（きたやま）遺跡 1

（阿久根市山下・波留）

2023年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（51）
北山遺跡1

二〇二三年三月
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

鹿児島県

# 巻頭図版



遺跡上空より調査区を望む（遠景　東シナ海）

# 序　文

この報告書は，南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）の建設事業に伴って，令和２年度から実施している阿久根市山下・波留に所在する北山遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は，愛宕山の麓に広がる阿久根平野を流れる高松川の左岸，標高約30～35ｍのシラス台地上に位置する縄文時代～近世までの複合遺跡であり，発掘調査により発見された遺構・遺物は，北薩地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものと考えます。

本報告書では，遺跡の西側にあたる地点についての調査成果を報告しています。古墳時代の竪穴建物跡からは，床面付近で甕や壺，高坏などの土器類が多数出土しました。また，中世の掘立柱建物跡が13棟発見され，阿久根を治めた有力者の集落跡であると推測されます。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただくとともに，文化財保護の普及・啓発や研究などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘から報告書刊行までの一連の調査にあたり，御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，阿久根市教育委員会，並びに調査において御指導いただいた先生方や発掘作業，整理作業に従事された方々に対し，厚くお礼申し上げます。

令和５年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　中　村　和　美

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | きたやまいせき |
| 書名 | 北山遺跡１ |
| 副書名 | 南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ名 | 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第51集 |
| 編集者名 | 肥後弘章　川口雅之 |
| 編集機関 | 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター |
| 所在地 | 〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995-70-0574 |
| 発行年月 | 西暦2023年３月 |

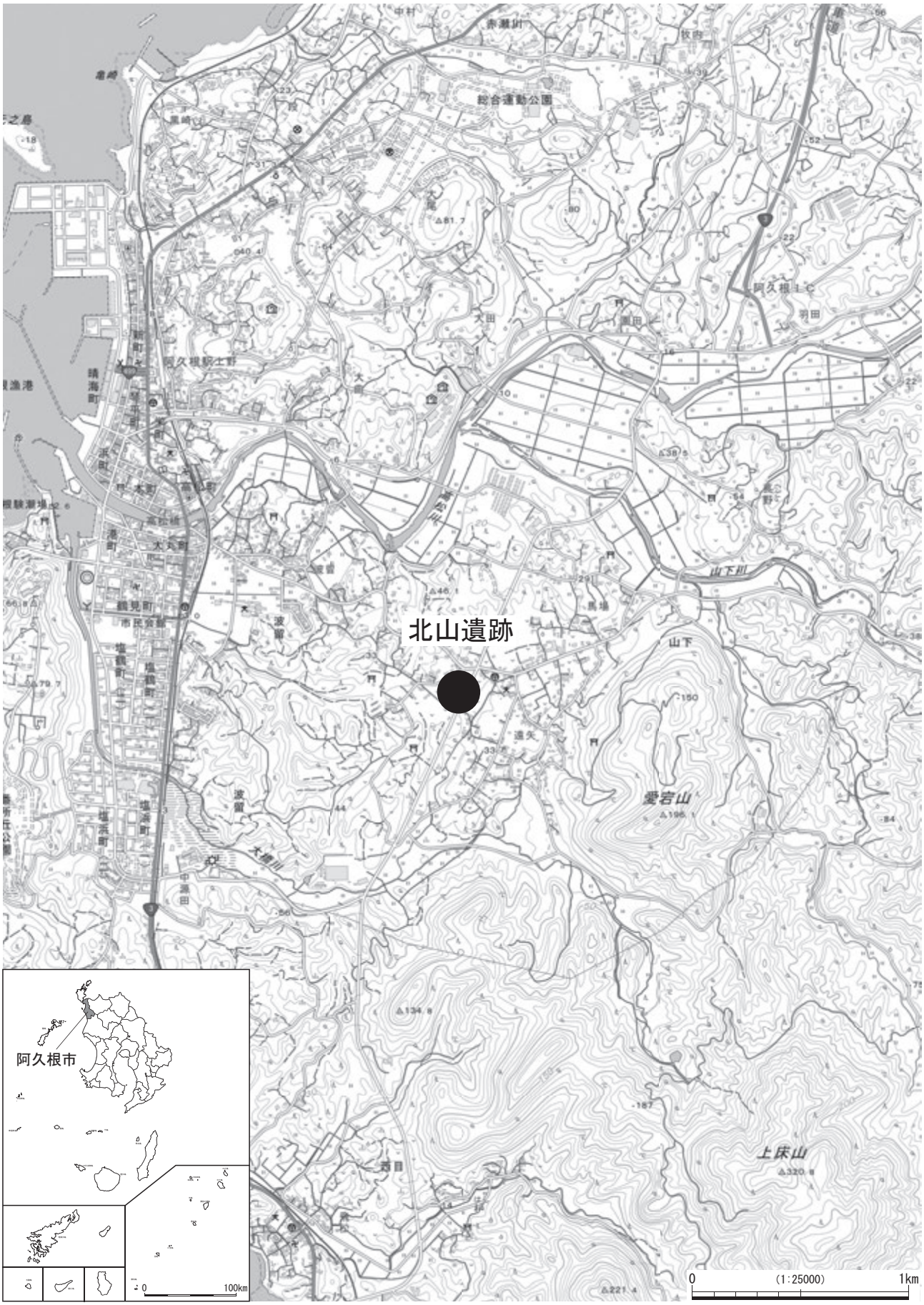
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積（㎡） | 発掘起因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| きたやまいせき<br>北山遺跡 | かごしまけん<br>鹿児島県<br>あくねし<br>阿久根市<br>やましたあざ<br>山下字<br>きたやま<br>北山 | 46206 | 206-34 | 32°00′39″ | 130°12′47″ | 本調査<br>2020.10. 1～<br>2021. 1.27 | 3,121 | 南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う記録保存調査 |
| | | | | | | 本調査<br>2021. 5.10～<br>2021. 7.28 | 4,481 | |
| | | | | | | 本調査<br>2021.10. 4～<br>2022. 1.28 | 11,549 | |

| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|
| 散布地<br>集落 | 縄文時代<br>早期～晩期 | － | 吉田式土器，塞ノ神式土器，轟式土器，尾田式土器，南福寺式土器，市来式土器，西平式土器，縄文晩期土器<br>石鏃，凹石，磨製石斧，打製石斧 | － |
| | 古墳時代<br>前期 | 竪穴建物跡３軒 | 東原式土器（甕，壺，高坏等）等 | － |
| | 古　代 | 土坑１基 | 土師器，須恵器，黒色土器Ｂ類<br>越州窯系青磁，転用硯，ヘラ書土師器，鉄滓 | － |
| | 中　世 | 掘立柱建物跡13棟<br>竪穴建物跡３軒<br>土坑墓２基<br>溝跡９条<br>土坑８基<br>柱穴約400基 | 土師器，中世須恵器，擂鉢，東播系須恵器，陶磁器（常滑焼・黄釉鉄絵陶器盤・青花等），青磁碗，坏，梅瓶，白磁皿，合子，瓦質土器，滑石製石鍋，風炉，洪武通宝，土錘，土製品，鉄鏃，碁石，羽口，巻貝 | － |
| | 近世～近代 | 掘立柱建物跡１棟 | 陶器（薩摩焼等），磁器（染付等）<br>鉄滓，煙管，寛永通宝 | － |

**遺跡の概要**

北山遺跡は，阿久根市山下及び波留に位置し，高松川左岸の標高30～35ｍの台地上に所在する。遺跡周辺は，古代の英祢駅比定地のひとつと考えられ，東側に位置する愛宕山には，中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡があるなど，古代～中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。

調査区では，古墳時代前期の竪穴建物跡，中世（13～16世紀）の掘立柱建物跡，溝跡，土坑墓等が検出された。遺物は，縄文時代の土器，石器，古墳時代の甕や壺，高坏，古代の土師器・須恵器，中世の土器・陶磁器，近世～近代の陶磁器・煙管などが出土した。中世の遺構・遺物から阿久根地域における有力者の集落跡と推測される。




遺跡位置図（1:25000）

# 例　言

1　本書は，南九州西回り自動車道(阿久根川内道路)建設に伴う北山遺跡の発掘調査報告書である。本書では，令和２～３年に本調査を実施した調査区のうち西側の調査報告を行う。

2　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下「鹿児島国道事務所」という。）から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「調査センター」という。）へ調査を委託して実施した。

3　発掘調査は，令和３年５月～７月に調査センターが直営で行い，同じく10月～１月に調査センターが発掘調査支援業務を国際文化財株式会社へ委託し，調査センターの指揮・監督のもと行った。

4　整理・報告書作成業務は，令和３年度から令和４年度まで調査センターが実施した。

5　掲載遺構番号は，遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
　遺構番号・掲載遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。

6　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＫＹ」である。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

9　本書で使用した方位は，すべて座標北（Ｇ．Ｎ.）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。空中写真撮影は，令和３年度に株式会社ふじたに委託した。

11　本書に係る遺構実測図の作成及びトレースは肥後・川口の指示・確認のもと，調査センターの整理作業員が行った。

12　本書に係る出土遺物の実測・トレースは，肥後・川口の指示・確認のもと，調査センターの整理作業員が行った。なお，報告書の作成には，adobe社製の「IllustratorＣＣ」，「PhotoshopＣＣ」を使用した。

13　出土遺物の写真撮影は，肥後弘章，藤﨑光洋が行った。

14　金属製品の保存処理は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の隈元俊一が実施した。

15　本書に係る自然科学分析は，年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。

16　本書の執筆は次のように分担し，編集は肥後・川口が行った。
　第Ⅰ章　肥後
　第Ⅱ章　肥後
　第Ⅲ章　肥後
　第Ⅳ章　肥後（古墳時代）・川口（縄文時代，古代～近世）
　第Ⅴ章　株式会社加速器分析研究所・成尾英仁・肥後・川口
　第Ⅵ章　肥後・川口

17　記載した土色は『新版　標準土色帖』(1970　農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。

18　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
　ＳＩ：竪穴建物跡
　ＳＢ：掘立柱建物跡
　ＳＫ：土坑・土坑墓
　ＳＤ：溝跡
　ＳＰ：ピット
　ＳＸ：その他

19　遺構図の縮尺は，以下を基本とした。また，各図中にも縮尺を示している。
　竪穴建物跡　：1/40
　掘立柱建物跡：1/40
　土坑・土坑墓：1/20，1/40，1/80
　溝跡　　：1/60，1/400

20　遺物の縮尺は，以下を基本とした。また，各図中にも縮尺を示している。
　土器・土師器・須恵器・土製品・陶磁器：1/3
　石器・鉄器・銅製品：1/1 ～ 1/3

21　観察表のうち，口径・底径が括弧書きのものは復元径，器高が括弧書きのものは残高である。

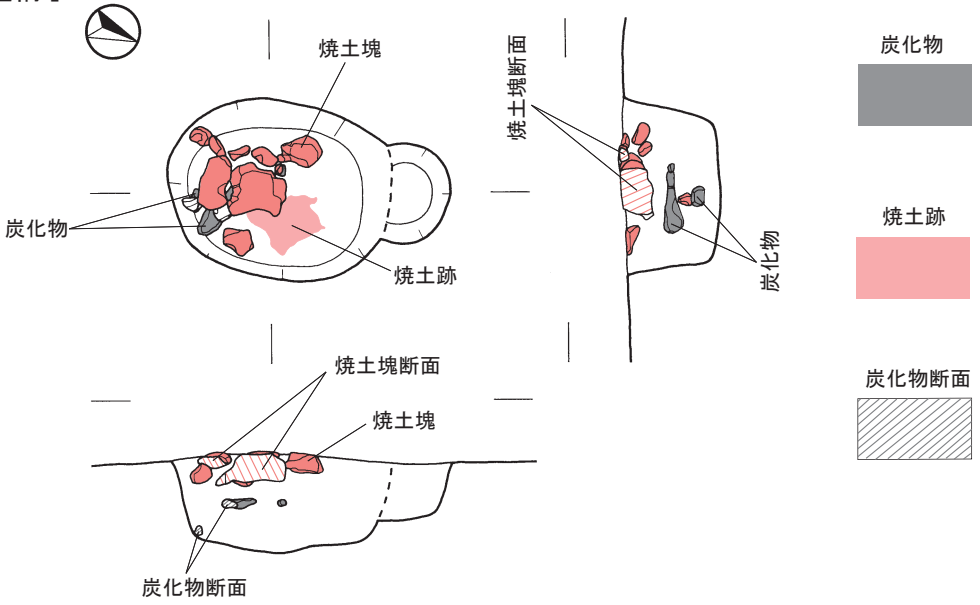
22　遺構番号については，調査時に付されたものから，報告書掲載順に付け替えた。

23　本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

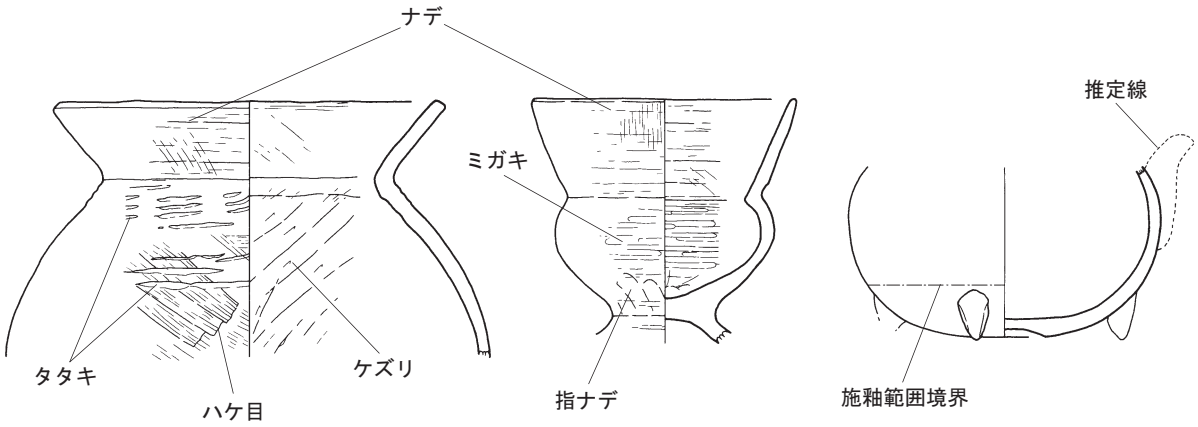
24　遺跡周辺の地質については，現地にて令和２年11月18日に成尾英人氏（伊集院高教諭）からご指導を頂き論文を掲載した。

# 凡　　例

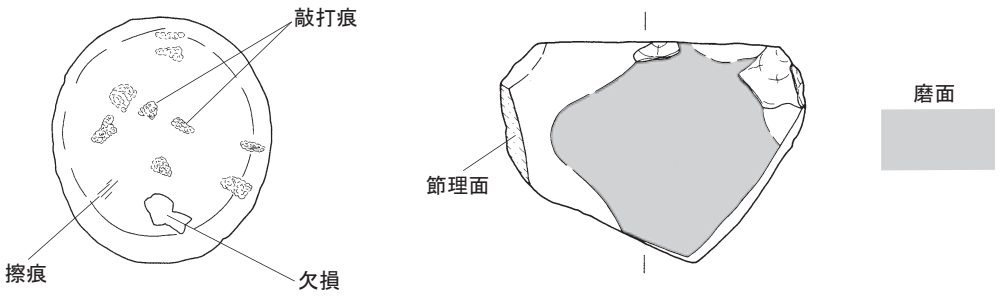
［遺構］


焼土塊
炭化物
焼土跡
焼土塊断面
炭化物
焼土塊断面
焼土塊
炭化物断面
炭化物
焼土跡
炭化物断面

［土器］


ナデ
タタキ
ハケ目
ケズリ
ミガキ
指ナデ
推定線
施釉範囲境界

［石器］


敲打痕
擦痕
欠損
節理面
磨面

# 目　次


**巻頭図版**
**序文**
**報告書抄録**
**例言・凡例**
**第Ⅰ章　発掘調査の経過**…… 1
第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　調査の組織…… 1
1　分布調査…… 1
2　試掘調査…… 1
3　確認調査…… 1
4　本調査…… 3
第３節　発掘調査の経過…… 5
第４節　整理作業の経過…… 8
**第Ⅱ章　遺跡の位置と環境**…… 10
第１節　地理的環境…… 10
第２節　歴史的環境…… 10
第３節　野田IC周辺～阿久根IC間の遺跡…… 13
**第Ⅲ章　調査の方法と層序**…… 15
第１節　本調査…… 15
1　発掘調査の方法…… 15
2　遺構の検出方法…… 15
第２節　整理・報告書作成作業…… 15
1　整理作業の方法と内容…… 15
2　報告書作成作業の方法と内容…… 15
第３節　新旧遺構対応表…… 17
第４節　層序…… 17
**第Ⅳ章　調査の成果**…… 23
第１節　縄文時代の調査成果…… 23
1　調査の概要…… 23
2　出土遺物…… 23
第２節　古墳時代の調査成果…… 32
1　調査の概要…… 32
2　遺構…… 32
3　包含層出土遺物…… 45
第３節　古代の調査成果…… 49
1　調査の概要…… 49
2　遺構…… 49
3　包含層出土遺物…… 49
第４節　中世の調査成果…… 58
1　調査の概要…… 58
2　遺構…… 58
3　包含層出土遺物……103
第５節　近世以降の調査成果……116
1　調査の概要……116
2　遺構……116
3　包含層出土遺物……116
**第Ⅴ章　自然科学分析等**……120
第１節　北山遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)
……120
第２節　北山遺跡および周辺の地形と地質……125
第３節　鹿児島県の杓子形土製品について……129
第４節　中世須恵器の産地調査について……131
**第Ⅵ章　総括**……132
第１節　縄文時代……132
第２節　古墳時代……132
第３節　古代……132
第４節　中世……133
第５節　近世以降……135
**写真図版**……137


# 挿図目次


第１図　北山遺跡トレンチ配置図…… 4
第２図　発掘調査の進捗図…… 7
第３図　遺跡周辺の地形図…… 11
第４図　北山遺跡周辺遺跡位置図…… 12
第５図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図…… 14
第６図　北山遺跡グリッド配置図…… 16
第７図　土層断面図①…… 18
第８図　土層断面図②－１…… 19
第９図　土層断面図②－２…… 20
第10図　土層断面図③…… 21
第11図　土層断面図④…… 22
第12図　縄文時代遺物出土状況…… 24
第13図　縄文土器実測図１…… 25
第14図　縄文土器実測図２…… 26
第15図　縄文時代の石器１…… 27
第16図　縄文時代の石器２…… 28
第17図　縄文時代の石器３…… 29
第18図　古墳時代遺構配置図…… 32
第19図　竪穴建物跡１号…… 33
第20図　竪穴建物跡１号遺物出土状況…… 33
第21図　竪穴建物跡１号出土遺物１…… 34
第22図　竪穴建物跡１号出土遺物２…… 35
第23図　竪穴建物跡１号出土遺物３…… 36
第24図　竪穴建物跡１号出土遺物４…… 38
第25図　竪穴建物跡１号出土遺物５…… 40
第26図　竪穴建物跡２号…… 41

第27図　竪穴建物跡２号遺物出土状況…… 42
第28図　竪穴建物跡２号出土遺物…… 43
第29図　竪穴建物跡３号…… 44
第30図　古墳時代包含層出土遺物１…… 46
第31図　古墳時代包含層出土遺物２…… 47
第32図　古代の遺構配置図…… 49
第33図　土坑１号　実測図及び出土遺物…… 50
第34図　土師器（埦・坏）…… 52
第35図　土師器（甕）…… 53
第36図　土師器（皿・鉢・蓋）…… 54
第37図　須恵器…… 54
第38図　須恵器・紡錘車・越州窯系青磁…… 55
第39図　中世の遺構配置図…… 58
第40図　掘立柱建物跡１号…… 60
第41図　掘立柱建物跡１・２号出土遺物…… 61
第42図　掘立柱建物跡２号…… 62
第43図　掘立柱建物跡３号…… 63
第44図　掘立柱建物跡４号…… 64
第45図　掘立柱建物跡５号・出土遺物…… 65
第46図　掘立柱建物跡６号・出土遺物…… 67
第47図　掘立柱建物跡７号・出土遺物…… 68
第48図　掘立柱建物跡８号…… 69
第49図　掘立柱建物跡９号…… 70
第50図　掘立柱建物跡10号…… 71
第51図　掘立柱建物跡11号・出土遺物…… 72
第52図　掘立柱建物跡12号…… 74
第53図　掘立柱建物跡13号…… 75
第54図　竪穴建物跡４号出土遺物…… 76
第55図　竪穴建物跡４号…… 77
第56図　竪穴建物跡５号・出土遺物…… 79
第57図　竪穴建物跡６号・出土遺物…… 80
第58図　土坑墓１・２号・出土遺物…… 81
第59図　土坑２号・出土遺物…… 83
第60図　土坑３・４・５号・出土遺物…… 84
第61図　土坑６・７号・出土遺物…… 85
第62図　土坑８号出土遺物…… 86
第63図　土坑８・９・10・11・12号…… 87
第64図　土坑13・14・15号…… 88
第65図　焼土跡…… 89
第66図　溝跡１号出土遺物…… 89
第67図　溝跡（28～37区）…… 90
第68図　溝跡１・２・６・７号断面図…… 91
第69図　溝跡（18～27区）・断面図…… 92
第70図　溝跡２号出土遺物１…… 94
第71図　溝跡２号出土遺物２…… 95
第72図　溝跡３号出土遺物…… 95
第73図　溝跡４・５・６・７号出土遺物…… 96
第74図　SP420内出土貝殻 …… 98
第75図　ピット出土遺物…… 99
第76図　ピット配置図（18～28区）……101
第77図　ピット配置図（28～39区）……102
第78図　包含層出土青磁……104
第79図　包含層出土白磁……105
第80図　包含層出土青花……105
第81図　包含層出土土師器……107
第82図　包含層出土陶器……109
第83図　包含層出土須恵器……109
第84図　包含層出土擂鉢・片口鉢……110
第85図　包含層出土瓦質土器・滑石製石鍋……111
第86図　包含層出土金属製品……111
第87図　包含層出土鍛冶関連遺物……112
第88図　包含層出土石錘・土錘……113
第89図　包含層出土石器……113
第90図　近世以降の遺構配置図……116
第91図　掘立柱建物跡14号……117
第92図　包含層出土染付……118
第93図　包含層出土陶器……118
第94図　包含層出土硯・煙管……118
第95図　暦年較正年代グラフ……123
第96図　試料写真……124
第97図　遺跡周辺の地形……125
第98図　遺跡周辺の陰影図……125
第99図　阿多鳥浜テフラと小原礫層……126
第100図　遺跡の模式地質柱状図 ……127
第101図　鬼界アカホヤ火山灰一時堆積物 ……127
第102図　杓子・匙形土製品出土遺跡図 ……129
第103図　杓子形土製品(左)・匙形土製品(右)例
　　（麦之浦貝塚　出土遺物） ……130
第104図　出土遺跡毎の長さ平均(㎜) ……130
第105図　樺番城窯出土の甕 ……131
第106図　中世の遺構変遷 ……134
第107図　調査区と現在の地籍図 ……136

# 表目次


第１表　周辺遺跡一覧表…… 11
第２表　野田IC周辺～阿久根IC間の遺跡…… 13
第３表　新旧遺構対応表…… 17
第４表　縄文土器観察表…… 30
第５表　縄文石器観察表…… 31
第６表　竪穴建物跡１号出土遺物観察表１…… 39
第７表　竪穴建物跡１号出土遺物観察表２…… 40
第８表　竪穴建物跡１号出土遺物観察表３…… 41
第９表　竪穴建物跡２号出土遺物観察表…… 42
第10表　包含層出土遺物観察表…… 48
第11表　土坑１号出土遺物観察表…… 51
第12表　土師器観察表…… 56
第13表　須恵器観察表…… 57
第14表　紡錘車・越州窯系青磁・把手観察表…… 57
第15表　掘立柱建物跡出土遺物観察表…… 73
第16表　竪穴建物跡出土遺物観察表…… 78
第17表　土坑墓出土遺物観察表…… 82
第18表　土坑出土遺物観察表…… 85
第19表　溝跡出土遺物観察表…… 97
第20表　ピット出土遺物観察表……100
第21表　ピット出土遺物一覧表……100
第22表　包含層出土青磁・白磁・青花観察表……106
第23表　包含層出土土師器観察表……107
第24表　包含層出土陶器・須恵器観察表……114
第25表　包含層出土擂鉢・片口鉢観察表……114
第26表　包含層出土瓦質土器・石鍋観察表……114
第27表　包含層出土金属製品観察表……114
第28表　包含層出土鍛冶関連遺物観察表……115
第29表　包含層出土石製品・土製品観察表……115
第30表　包含層出土石器観察表……115
第31表　包含層出土染付観察表……119
第32表　包含層出土陶器観察表……119
第33表　包含層出土硯・煙管観察表……119
第34表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}$C補正値）……121
第35表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}$C未補正値，暦年較正用$^{14}$C年代，較正年代）……122
第36表　杓子・匙形土製品の出土が確認された鹿児島県内遺跡と点数……129
第37表　主な県内出土の杓子・匙形土製品の長さ……130
第38表　甕の類似度比較表……131
第39表　遺構の年代別一覧表……133


# 図版目次


図版１　調査区……137
図版２　調査状況・土層断面……138
図版３　古墳時代　竪穴建物跡……139
図版４　古墳時代　竪穴建物跡……140
図版５　古墳時代　竪穴建物跡・古代　土坑……141
図版６　中世　掘立柱建物跡……142
図版７　中世　掘立柱建物跡……143
図版８　中世　掘立柱建物跡・竪穴建物跡……144
図版９　中世　竪穴建物跡……145
図版10　中世　竪穴建物跡・溝跡……146
図版11　中世　溝跡……147
図版12　中世　溝跡……148
図版13　中世　土坑墓・土坑……149
図版14　中世　土坑・焼土跡……150
図版15　縄文時代　包含層出土土器……151
図版16　縄文時代　包含層出土石器……152
図版17　古墳時代　竪穴建物跡１号出土遺物１……153
図版18　古墳時代　竪穴建物跡１号出土遺物２……154
図版19　古墳時代　竪穴建物跡１号出土遺物３……155
図版20　古墳時代　竪穴建物跡２号出土遺物・包含層出土遺物１……156
図版21　古墳時代　包含層出土遺物２……157
図版22　古代　土坑１号出土遺物……158
図版23　古代　包含層出土遺物１……159
図版24　古代　包含層出土遺物２……160
図版25　中世　遺構内出土遺物１……161
図版26　中世　遺構内出土遺物２……162
図版27　中世　遺構内出土遺物３……163
図版28　中世　遺構内出土遺物４……164
図版29　中世　遺構内出土遺物５……165
図版30　中世　遺構内出土遺物６……166
図版31　中世　包含層出土遺物……167
図版32　近世　包含層出土遺物……168

# 第Ⅰ章　発掘調査の経過

## 第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及び，その取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき，鹿児島国道事務所は，南九州西回り自動車道(阿久根川内道路)建設の施工計画に基づき，事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課(以下「県文化財課」という。)に照会した。

これを受けて埋文センターが，平成29年度に計画路線(阿久根川内道路のうち，阿久根～西目ＩＣ間)の分布調査を実施した結果，事業区内には北山遺跡を含む３か所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。分布調査の結果をもとに事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて，鹿児島国道事務所，県文化財課，埋文センターの三者で協議を行い，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に確認調査を実施することとした。

県文化財課が平成30年７月に試掘調査，埋文センターが令和元年から令和３年に確認調査を行ったところ，事業区域内の表面積13,190㎡の範囲に遺物包含層が存在することが判明した。

確認調査の結果，本調査は，県文化財課からの委託を受けて調査センターが担当することとなった。鹿児島国道事務所からの要望を受け，鹿児島国道事務所と県文化財課，調査センターの三者で協議を行った結果，北山遺跡の本調査においても，一部において民間支援組織を導入し，支援業務委託契約を締結して実施することとなった。

本調査が必要と判断された総表面積約26,500㎡のうち，令和２年度は，調査着手のための条件が整った範囲，表面積2,230㎡(延面積3,121㎡)の調査を行い，終了した。調査期間は，令和２年10月１日(木)から令和３年１月27日(水)(実働66日間)である。

令和３年度は，前期に条件が整った範囲の表面積3,104㎡(延面積4,481㎡)の本調査を行い，終了した。調査期間は，令和３年５月10日(月)から令和３年７月28日(水)(実働43日)である。続いて，後期に同じく条件が整った範囲の表面積7,721㎡(延面積11,549㎡)の本調査を行い，終了した。調査期間は，令和３年10月４日(月)から令和４年１月28日(金)(実働63日間)である。

## 第２節　調査の組織

### １　分布調査(平成29年度)

北山遺跡に関する分布調査は，鹿児島国道事務所から南九州西回り自動車道(阿久根川内道路)阿久根～西目ＩＣ間の分布調査依頼を受け，平成29年に実施した。調査体制は，次のとおりである。

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
調　査　者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　平　美典
　　県立埋蔵文化財センター
　　調査課第一調査係長　中村　和美
立　会　者　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
　　南九州西回り自動車道プロジェクト推進室
　　事業対策官　沼田　英昭
　　計画課　専門官　中薗　雅人
　　企画係長　岡元　侑己
　　技官　鶴丸　巧
　　技官　馬場ひなの
協　力　者　阿久根市教育委員会　生涯学習課
　　主事補　宮田　大之

### ２　試掘調査(平成30年度)

北山遺跡の試掘調査は，分布調査の結果を受けて，平成30年７月に実施した。調査の結果，古墳時代から古代の遺跡が残存していることが確認された。調査体制は，次のとおりである。

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
調　査　者　〃
　　文化財主事　平　美典
調査協力　阿久根市教育委員会　生涯学習課
　　主事補　宮田　大之

### ３　確認調査

遺跡の確認調査は，令和元年度から令和３年度にかけて，条件整備が整った範囲を対象に計30箇所の確認トレンチを設定し順次実施した。トレンチの規模は，任意の大きさで設定し，必要に応じて拡張を行った。調査は，確認トレンチ部分の表土を重機により剥いだ後，鋤簾等による人力掘削を基本として遺構・遺物の確認を行った。遺構については，各層の上面で検出を行った。

**令和元年度**

調査は，北山遺跡の西側約9,500㎡を対象に17か所の確認トレンチを設定し，令和元年12月２日から12月25日まで実施した。調査の結果，縄文時代早期・後晩期，古墳時代，古代の遺物が出土した。

| | | |
|---|---|---|
| 事業主体 | 国土交通省 | |
| | 九州地方整備局鹿児島国道事務所 | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 調査統括 | 県立埋蔵文化財センター | |
| | 所長 | 前迫　亮一 |
| 調査企画 | 次長兼総務課長 | 野間口　誠 |
| | 調査課長 | 中村　和美 |
| | 第二調査係長 | 三垣　恵一 |
| 調査担当 | 文化財主事 | 隈元　俊一 |
| | 文化財研究員 | 加世田　尊 |
| 調査事務 | 主査 | 新穂　秀貴 |

**確認調査の概要（第１図）**

**（４トレンチ）**

Ｅ－30・31区に東西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅳ層が露出した。Ⅳ層では，土坑１基，ピット３基を検出した。遺物は成川式土器，青磁，東播系須恵器，染付，陶器，滑石，黒曜石製フレーク，チャート製フレークが出土した。遺構を検出したため，Ⅳ層で掘削を終了した。

**（５トレンチ）**

Ｇ・Ｈ－31区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅵa層が露出した。Ⅵa層上面を精査したが，遺構・遺物は発見されなかった。その後下層の掘削を行ったところ，明赤褐粘質土に砂質の土塊が混入するⅦa・b層が堆積していることを確認した。深度が深くなったため，Ⅶb層の途中で掘削を終了した。

**（６トレンチ）**

Ｆ・Ｇ－38・39区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅵb層が露出した。Ⅰ層で青磁片が出土したのみで，遺構は検出されなかった。調査は，Ⅶb層で終了した。

**（７トレンチ）**

Ｈ－28区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅱb層が露出した。遺構は検出されなかった。遺物はⅡb層で加栗山式土器，成川式土器，土師器，染付，Ⅲ層で形式不明土器が出土した。調査はⅣ層途中で終了した。

**（８トレンチ）**

Ｅ－25区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅲ層が露出した。Ⅲ層で精査したが，遺構・遺物は確認できなかった。その後重機により下層確認トレンチを入れたが遺構・遺物はなく，Ⅳ～Ⅵa層の堆積を確認して調査を終了した。

**（９トレンチ）**

Ｅ－34区からＨ－35区にかけて，北西－南東方向に約31ｍのロングトレンチを設定した。表土を重機で掘削したところ，北西側ではⅥa層が，南東側ではⅡa層が露出した。その後人力でⅡａ・b層を掘削した。遺構はⅡb層で焼土跡１基，Ⅲ層上面で土坑２基，Ⅵa層上面で土坑１基を検出した。遺物は縄文土器，成川式土器，須恵器，土師器，白磁，青磁，瓦質土器，土錘，鞴の羽口，陶器，染付，打製石鏃，磨石，鉄滓，黒曜石製フレーク，チャート製フレークが出土した。調査はⅢ～Ⅵa層上面で終了した。

**（10トレンチ）**

Ｇ－24･25区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅵa層が露出した。Ⅵa層上面を精査したところ，土坑１基，ピット１基を検出した。遺物は成川式土器と思われる土器片と土師器が出土した。調査はⅦa層で終了した。

**（11トレンチ）**

Ｅ－22区に設定した。表土を重機で掘削したところⅥa層が露出した。南東方向へ拡張したところ，Ⅵa層上面で土坑４基を検出した。遺物はⅠ層で染付が出土したのみであった。調査はⅦa層で終了した。

**（12トレンチ）**

Ｆ－18・19区に北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅳ層が露出した。遺構は土坑１基，ピット１基を検出した。遺物は縄文時代のものと思われる土器片が出土した。遺構部分を避けて重機を用いて下層確認トレンチを入れたところ，Ⅴ～Ⅵb層は堆積しておらず，Ⅶa層が露出した。Ⅶa層上面で調査を終了した。

**（13トレンチ）**

Ｇ－32 ～ 34区に設定した。表土を重機で掘削したところ，南西側でⅥa層，北東側でⅡa層が露出した。遺構は検出されなかった。遺物はⅡa層で染付が出土したのみである。Ⅱb ～Ⅳ層は堆積しておらず，Ⅵa層上面で調査を終了した。

**（19トレンチ）**

Ｆ－37区に北西－南東方向に設定した。この地点はⅥa層より上位の層が残存していないことが分かっていたため，Ⅶ層以下の層の堆積状況を調査するために重機を用いて掘削した。Ⅶb層以下は10㎝程度の粘質土が堆積し，その下は約300万年前の阿久根火砕流によると思われる溶結凝灰岩層が露出した。

遺構・遺物は確認できなかった。調査は溶結凝灰岩層

で終了した。

**（20トレンチ）**

Ｅ・Ｆ－31区に北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅱa層が露出した。Ⅱa層を人力で掘削したがあまり残存しておらず，下位のⅡb～Ⅴ層は堆積していなかった。遺構は検出されず，遺物はⅠ層で染付，Ⅱa層で稜花皿が出土した。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

### 令和２年度

調査は，北山遺跡の北側約2,800㎡を対象に４か所のトレンチを設定し，令和２年９月１日から９月28日まで実施した。調査の結果，古代から中世の遺構・遺物が出土した。

| | | |
|---|---|---|
| 事業主体 | 国土交通省 | |
| | 九州地方整備局鹿児島国道事務所 | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 調査統括 | 県立埋蔵文化財センター | |
| | 所長 | 前迫　亮一 |
| 調査企画 | 次長兼総務課長 | 野間口　誠 |
| | 調査課長 | 中村　和美 |
| | 第一調査係長 | 三垣　恵一 |
| 調査担当 | 文化財主事 | 上浦　麻矢 |
| | 文化財主事 | 馬籠　亮道 |
| 調査事務 | 主査 | 新穂　秀貴 |

**確認調査の概要**

**（21トレンチ）**

遺構・遺物は確認できなかった。

**（22・24トレンチ）**

近世と考えられる造成土と土坑や柱穴が発見された。

**（23トレンチ）**

古代から中世の土師器，陶磁器，土坑や柱穴が発見された。

### 令和３年度

調査は，北山遺跡の東側約12,000㎡を対象に９か所のトレンチを設定し，令和３年５月18日から６月11日まで実施した。調査の結果，縄文時代早期，古代から中世の遺物が出土した。

| | | |
|---|---|---|
| 事業主体 | 国土交通省 | |
| | 九州地方整備局鹿児島国道事務所 | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 調査統括 | 県立埋蔵文化財センター | |
| | 所長 | 中原　一成 |
| 調査企画 | 次長兼総務課長 | 大口　浩嗣 |
| | 調査課長 | 寺原　徹 |
| | 第一調査係長 | 三垣　恵一 |
| 調査担当 | 文化財主事 | 湯場﨑辰巳 |
| | 文化財主事 | 上浦　麻矢 |
| 調査事務 | 主査 | 和田　賢 |

**確認調査の概要**

**（25・26トレンチ）**

表土下からⅤ層が検出され，縄文時代早期と考えられる土器や石器が出土した。また，Ⅵa層上面では，古代～中世と考えられる土坑・柱穴等が発見された。

**（27トレンチ）**

表土下からⅤ層が確認され，縄文時代早期と考えられる土器が出土した。また，Ⅵa層上面では，縄文時代早期と考えられる土坑が発見された。

**（28トレンチ）**

表土下からⅥa層が確認され，Ⅵa層上面で古代～中世と考えられる柱穴や，縄文時代早期と考えられる土坑が検出された。遺物は出土しなかった。

**（29トレンチ）**

表土下からⅤ層が確認され，黒曜石のチップが出土した。また，Ⅵa層上面では，縄文時代早期と考えられる土坑が検出された。

**（30トレンチ）**

表土下からⅥa層が確認され，Ⅵa層上面では，古代～中世と考えられる土坑や柱穴が検出された。遺物は出土しなかった。

**（31トレンチ）**

表土下からⅡb層が確認され，近世と考えられる陶磁器や鉄滓が出土した。また，Ⅵa層で，古代～中世と考えられる土坑や柱穴が検出された。Ⅱb層直下は，Ⅵa層で，Ⅲ～Ⅴ層は残存していなかった。

**（32トレンチ）**

表土下からⅦ層が確認された。旧石器時代の可能性も考えを行ったが，遺構・遺物は確認できなかった。

**（33トレンチ）**

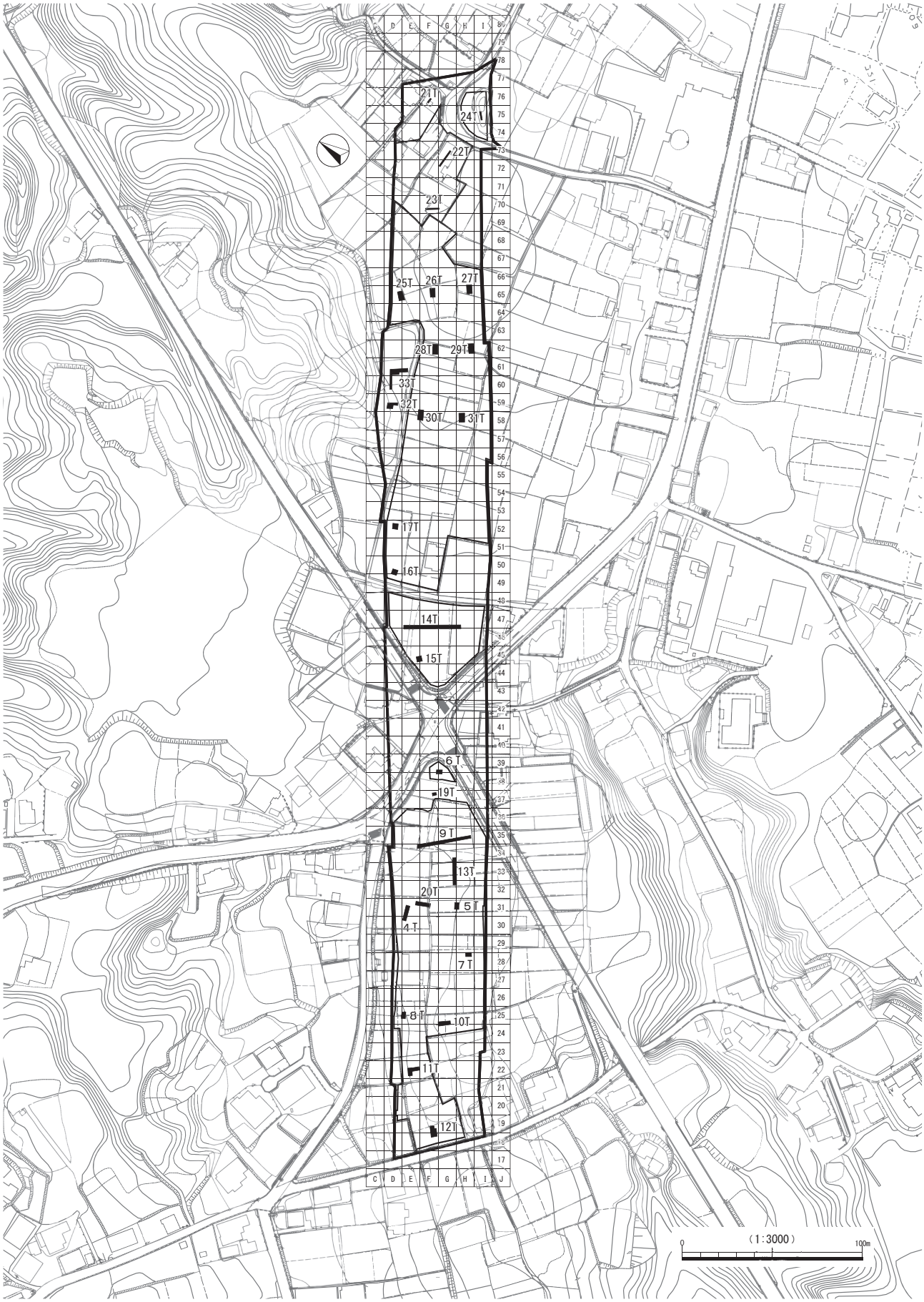
表土下からⅥa層が確認された。Ⅵa層上面での，遺構・遺物は確認できなかった。

## ４　本調査（第２図）

確認調査の結果，本調査の範囲は，12トレンチ西側の市道から21・24トレンチ東側の集落道までとした。現道部分は，深く削平されていたため，調査範囲に含めていない。調査対象面積約26,500㎡である。

### 令和２年度

令和２年度は，調査着手のための条件が整った範囲，表面積2,230㎡（延面積3,121㎡）の調査を行い，終了し




第１図　北山遺跡トレンチ配置図

た。調査期間は，令和２年10月１日(木)から令和３年１月27日(水)(実働66日間)である。

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中原　一成
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
　　調査課長　寺原　徹
　　調査第二係長　有馬　孝一
調査担当　文化財専門員　加世田　尊
　　文化財専門員　高吉　伸弥
調査事務　主事　上園　慶子

**令和３年度**

令和３年度は，前期に条件が整った範囲の表面積3,104㎡(延面積4,481㎡)の本調査を行い，終了した。前期の調査期間は，令和３年５月10日(月)から令和３年７月28日(水)(実働43日)である。

**(直営)**

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中村　和美
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
　　調査課長　福永　修一
　　調査第二係長　有馬　孝一
調査担当　文化財専門員　加世田　尊
　　文化財専門員　肥後　弘章
　　文化財専門員　田上　俊一
　　文化財専門員　林田　真一
調査事務　主事　上園　慶子

続いて，後期に同じく条件が整った範囲の表面積7,721㎡(延面積11,549㎡)の本調査を行い，終了した。調査期間は，令和３年10月４日(月)から令和４年１月28日(金)(実働63日間)である。

発掘調査の実施にあたり，調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，国際文化財株式会社へ本調査(記録保存調査)等の支援業務委託を実施した。

なお，調査センター職員２名が常駐し，調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

(民活：民間支援業務委託)
調査担当　文化財専門員　加世田　尊
　　文化財専門員　田上　俊一
調査事務　主事　上園　慶子
委託先　国際文化財株式会社
調査体制　国際文化財株式会社
　　主任技術者　飯田　英樹
　　主任調査支援員　安村　健
　　調査支援員　宮田　慈
　　四家　礼乃
　　土岐　耕司
　　(10月)
　　駒井　沙紀
　　長林　大
　　(10月～)
委託期間　令和３年10月４日～令和４年３月11日
委託内容　記録保存調査　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
検査　中間検査　令和３年12月15日(水)
　　完成検査　令和４年２月25日(金)
　　(実地検査)
　　令和４年３月１日(火)
　　(成果物検査)

## 第３節　発掘調査の経過

発掘調査の経過については，刊行地点関係の日誌抄を月ごとに集約して記載する。

### １　調査の過程(日誌抄　刊行地点関係のみ記載)

**令和３年度(直営)**

**５月**

Ｆ－18・19区，Ｅ－20～25区，Ｆ～Ｈ－24・25区
表土剥ぎ(重機使用)，Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，土坑(SK52，53)掘り下げ
Ｆ・Ｇ－38・39区
表土剥ぎ(重機使用)，Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，地形測量，土層断面図作成，写真撮影，ピット実測，埋め戻し
25日　安全パトロール
　　監理業務　立神文化財主事(県文化財課)
　　現地調査　有馬係長

**６月**

Ｄ～Ｆ－19～25区，Ｇ・Ｈ－18～20区，Ｇ～Ｉ－24・25区
Ⅱb層掘り下げ，Ⅲ層掘り下げ

SI１・２，SD１・２，SK52・54調査，SP122 ～ 127調査，
先行トレンチ，写真撮影，SI３，柱穴調査
現地視察　中村センター長
現場指導　福永調査課長
現地調査　有馬係長

**７月**

Ｅ～Ｈ－18・19区，Ｄ～Ｈ－19・20区，Ｄ～Ｆ－21
～ 25区，Ｇ～Ｉ－24・25区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅲ層掘り下げ，トレンチ拡張，調査
区実測，セクションポイント実測
SI３，SK60，ピット調査
6日　空中写真撮影
28日　埋め戻し
調査終了
監理業務　立神文化財主事
監理業務　西園係長(埋文センター)
現地視察　中村センター長
現場指導　福永調査課長
現地指導　中島総務課長
現地調査　有馬係長
鹿児島国道事務所来跡

**令和３年度(民活)**

**10月**

Ｄ～Ｉ－25 ～ 37区
表土剥ぎ(重機使用)，Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，
遺構検出，遺構掘削
現地視察　中村センター長
現場指導　中島総務課長
現地調査　有馬係長

**11月**

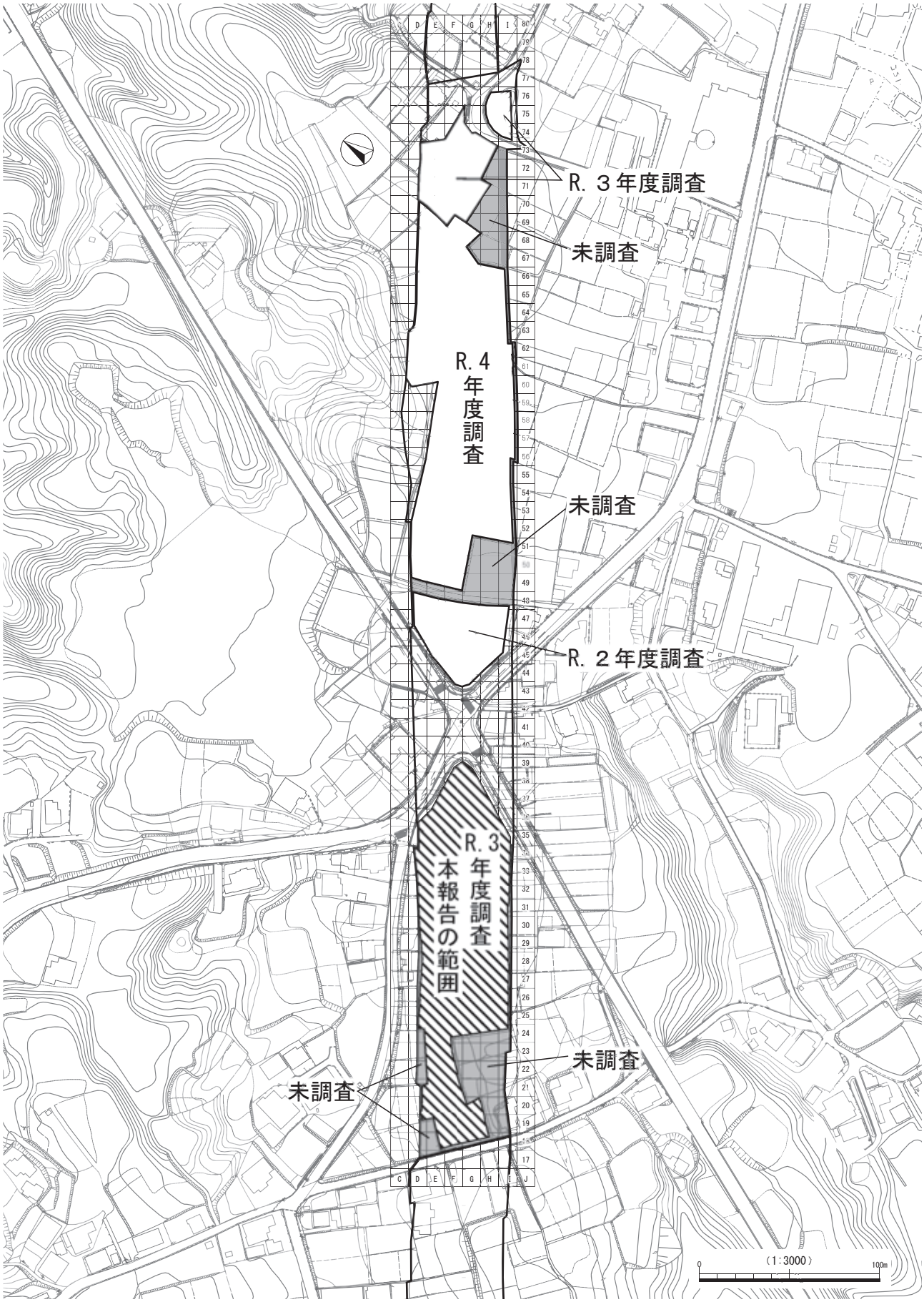
Ｄ～Ｇ－25 ～ 30区
Ⅱb層掘り下げ，遺構掘削
Ｇ～Ｉ－31 ～ 34区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構掘削
SD５，SP194，SP196調査，SB３～８写真撮影
8日　安全パトロール
監理業務　横手係長(文化財課)
監理業務　寺原調査課長(埋文センター)
現地視察　中村センター長

**12月**

Ｄ～Ｇ－25 ～ 30区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構掘削，写真撮影，
実測，掘り下げ
Ｇ～Ｉ－31 ～ 34区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構掘削，写真撮影，
実測，掘り下げ
4日　現地説明会
監理業務　立神文化財主事
現地視察　中村センター長
現場指導　福永調査課長　中島総務課長
現地調査　永濵係長　有馬係長　黒川係長
国土交通省来跡

**１月**

Ｄ～Ｇ－25 ～ 30区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構掘削，写真撮影，
地形測量，埋め戻し
Ｇ～Ｉ－31 ～ 34区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構掘削，写真撮影，
地形測量，埋め戻し
14日　空中写真撮影
埋め戻し
調査終了
現地視察　中村センター長
現場指導　福永調査課長
現地調査　永濵係長　有馬係長　黒川係長




第２図　発掘調査の進捗図

### ２　現地説明会について

北山遺跡では，調査成果の公表と文化財保護の意識向上を目的として，令和２年12月５日と令和３年12月４日に現地説明会を開催した。

**現地説明会の概要**

**令和２年度**

開催日時：令和２年12月５日（土）13:00 ～ 15:30
参加者数：約130人



主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
（古墳～中世の土器・陶磁器・石鍋等）

**令和３年度**

開催日時：令和３年12月４日（土）13:00 ～ 15:30
参加者数：約100人



主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
（古墳～中世の土器・土師器・陶磁器等）

## 第４節　整理作業の経過

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，調査センターで行った。

令和３年度は，出土遺物の水洗い，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業，及び遺構の図面チェック・配置図作成，原稿執筆等を行った。

令和４年度は，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業，遺物の実測及び拓本，トレース，遺構のトレース，レイアウト，写真撮影，原稿執筆等の報告書作成業務及び遺物収納を行った。

整理・報告書作成作業に関する調査組織及び整理作業の経過は以下のとおりである。

**令和３年度**

**調査組織**

| | | |
|---|---|---|
| 事業主体 | 国土交通省 | |
| | 九州地方整備局鹿児島国道事務所 | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 調査統括 | 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 | |
| | 埋蔵文化財調査センター | |
| | センター長 | 中村　和美 |
| 調査企画 | 総務課長兼総務係長 | 中島　　治 |
| | 調査課長 | 福永　修一 |
| | 調査第二係長 | 有馬　孝一 |
| 調査担当 | 文化財専門員 | 肥後　弘章 |
| | 文化財専門員 | 小田　裕人 |
| | 文化財調査員 | 池畑　耕一 |
| 事務担当 | 主事 | 上園　慶子 |
| | 事業推進員 | 市成　英加 |

**作業の経過**

遺構……図面チェック，遺構配置図作成
遺物……水洗い，注記，分類，接合
土層断面‥図面チェック
原稿執筆

報告書作成指導委員会　　調査課長ほか８名
10月５日・11月４日・２月１日
報告書作成検討委員会　　センター長ほか５名
10月13日・11月10日・２月９日

**令和４年度**

| | | |
|---|---|---|
| 調査組織 | | |
| 事業主体 | 国土交通省 | |
| | 九州地方整備局鹿児島国道事務所 | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 調査統括 | 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 | |
| | 埋蔵文化財調査センター | |
| | センター長 | 中村　和美 |

| | | |
|---|---|---|
| 調 査 企 画 | 総務課長兼総務係長 | 中島　　治 |
| | 調査課長 | 三垣　恵一 |
| | 調査第二係長 | 川口　雅之 |
| 調 査 担 当 | 文化財専門員 | 肥後　弘章 |
| 事 務 担 当 | 主事 | 上園　慶子 |
| | 事業推進員 | 市成　英加 |
| | 〃 | 今掛　美子 |

**作業の経過**

遺構……レイアウト，遺構配置図作成

遺物……注記，分類実測，拓本，復元，トレース，トレースチェック，レイアウト，遺物観察表作成

土層断面‥図面チェック，トレースチェック，レイアウト

図版……レイアウト(現場・遺物)，遺物写真撮影

原稿執筆・校正

遺物・写真・図面等の整理及び収納

自然科学分析委託…年代測定分析２件

遺物指導　佐藤　亜聖氏（滋賀県立大学）
　　永山　修一氏（ラ・サール学園）

報告書作成指導委員会　　調査課長ほか８名
　６月７日・８月３日・10月４日・11月９日・11月21日

報告書作成検討委員会　　センター長ほか５名
　６月10日・８月８日・11月24日











整理作業状況

# 第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

## 第１節　地理的環境

北山遺跡は，鹿児島県阿久根市山下・波留に所在する。本遺跡の所在する阿久根市は，1889（明治22）年に町村制の実施により阿久根村として誕生し，1952（昭和27）年４月に阿久根市となった。その後，1955（昭和30）年には，隣接の三笠町と合併した。市域は東西約11㎞，南北約22㎞で面積は135.89㎢ある。令和４年10月時点で世帯数9,841世帯，人口18,962人である。

阿久根市は，県の北西部に位置し，境界は北に日本三大潮流として名高い黒之瀬戸を隔てて長島町と相対し，東は出水市，南は薩摩川内市と接している。市の南東部には，北薩地域最高峰1066mの紫尾山を含む標高400mの山々からなる出水山地・紫尾山系が連なる。北部にも標高300mに達する笠山の山塊があり山地の多い地形である。

東部の出水山地は，四万十層からなり，これらを源に高松川・折口川・尻無川・大川川等，数本の川が東シナ海へと流れ込む。北部山地は，中新世～更新世火山性堆積物からなり，両者の山地をつなぐようにして，阿久根平野と折多平野の二つの平野がある。いずれも沖積作用と隆起作用によって形成された平野で，本来は湿地状であった場所が多い平野である。阿久根平野が，市の行政機関が集中する市街地であるのに対して，折多平野は，農業を中心とする市の穀倉地帯である。

一方，市の西部は，東シナ海に面しており，約40㎞に及ぶ海岸線は変化に富んでおり，美しい自然の景観を生んでいる。特に牛之浜海岸は，県の名勝に指定され，海岸に露出する岩石は，緑色凝灰岩や泥岩，砂岩の層がいくつも複雑にからみあったメランジ推積物として美しい文様が見られる。気候は，温暖で降雨量が多く全体的に降霜も少なく，ハマジンチョウ，ヘゴ等の亜熱帯性の植物も越冬している。沿岸は，漁業資源に富んでいる。

北山遺跡は，市街地より東方に1.5㎞入った愛宕山山麓に広がる地域にあり，紫尾山系から市の中心部へと流れる高松川左岸の標高30 ～ 35mに位置する。現在の地形は平坦で水平であるが，古い時代の地形には若干の起伏があり，全体として北～西側へ緩く傾斜する。遺跡周辺は地形的には古い扇状地が高松川の支流で開析され台地であり，それを覆って薄く入戸火砕流堆積物が堆積する。遺跡はこの入戸火砕流堆積物がつくる台地（シラス台地を含む）上に立地する（第３図）。

## 第２節　歴史的環境

阿久根市は，分布調査等により埋蔵文化財包蔵地として57箇所程が確認されている。特に，阿久根平野と折多平野周辺の台地及び丘陵に集中してみられる。

旧石器時代の遺跡は，折多平野最深部の微高地を中心に赤剥遺跡，日暗遺跡，陣之尾遺跡の３箇所が確認され，細石刃や細石刃核等が出土している。

縄文時代になると市内各所に確認される。旧石器時代と同様に平野周辺の微高地に遺跡が多くみられ，縄文時代前期や後期の土器が採集されている波留貝塚等，31遺跡が確認されている。阿久根大島では，曽畑式土器や阿高式土器が発見され，縄文時代前期から中期にかけて海を利用した交通が注目される。

弥生時代の遺跡は，現在のところ確実な例が少なく，脇本周辺の台地上等に，いくつかの遺跡で確認されるだけである。

古墳時代になると，４世紀代の竪穴式石室が発見された鳥越古墳，県指定史跡となっている脇本古墳群が築かれるようになり，県内でも有数の古墳築造地域として知られている。

古代では，波留・山下地区を中心とした台地上に諏訪ノ前遺跡のほか10遺跡が確認されている。この地域は，出水郡に属し，延喜式に記載されている薩摩路の重要な宿駅とされる英祢駅があった１つにあげられている。古代から中世には，阿久根の中心的な地域となる。

中世では，本遺跡等，合わせて26遺跡が確認されている。市街地東側に位置する愛宕山周辺に山城が築かれ，この中に通称「城山」と呼ばれる莫祢城も含まれる。この城は，平安時代末から阿久根地域を支配してきた莫祢氏が，三代成光の時（12世紀頃）に賀喜ヶ城から移り，その後，莫祢氏の居城となった山城である。本遺跡を含む出水郡は,15世紀後半から薩州島津氏の所領となった。莫祢城の山麓地区は，現在でも「麓」地区と呼ばれ，所々に石垣等が見られる。この麓付近は，中・近世を中心に多くの遺跡が，集中している地域である。

近世になると，地頭館が山下地区から波留，町地区に移り，集落もそれに伴い波留，町地区に移るが，現在残る遺跡としては大曲窯，脇本窯等，わずかな遺跡である。これらの遺跡は，ほとんどが分布調査によって把握され，複数の時代にわたって確認される場合が多い。

本遺跡は，昭和56年に広域営農団地農道整備事業（北薩オレンジロード建設），平成８年に宅地造成に伴い，阿久根市教育委員会による本調査と確認調査が行われている。その際，縄文時代早期，古代，中世，近世の遺構，遺物が発見されている。

**－引用・参考文献－**


阿久根市1974『阿久根市誌』

阿久根市教育委員会1982『北山遺跡』 阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

阿久根市教育委員会1992『鳥越古墳群』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

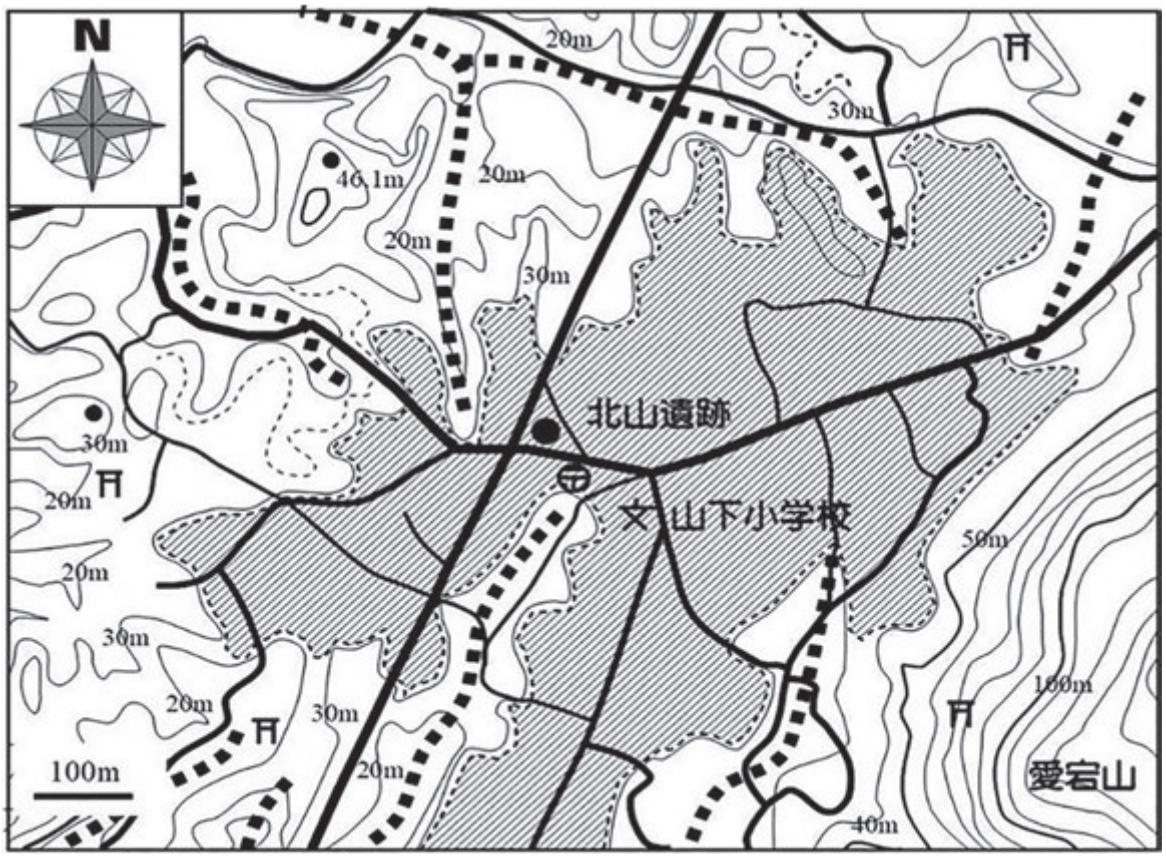
阿久根市教育委員会1997『鳥越古墳群　大蔵庵遺跡・北山遺跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

鹿児島県教育委員会1997『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅵ)』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(72)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『陣之尾遺跡・陣之尾塁跡　上野畑遺跡・広段遺跡　北山田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(167)

第１表　周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡台帳番号 | | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 主な時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 206 | 34 | 北山 | 鹿児島県阿久根市山下字北山 | 散布地 | 縄文，古墳，古代，中世，近世 |
| 2 | 206 | 21 | 新城跡 | 鹿児島県阿久根市山下新城 | 城館跡 | 中世 |
| 3 | 206 | 38 | 諏訪ノ前 | 鹿児島県阿久根市波留字諏訪ノ前 | 散布地 | 古代，中世 |
| 4 | 206 | 8 | 楞厳寺跡 | 鹿児島県阿久根市山下 | 社寺跡 | 中世，中世室町 |
| 5 | 206 | 39 | 下谷 | 鹿児島県阿久根市山下字下谷 | 散布地 | 縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世 |
| 6 | 206 | 9 | 阿久根城跡 | 鹿児島県阿久根市山下峰 | 城館跡 | 中世 |
| 7 | 206 | 22 | 中之城跡 | 鹿児島県阿久根市山下 | 城館跡 | 中世 |
| 8 | 206 | 40 | 萇野 | 鹿児島県阿久根市鶴川内萇野 | 散布地 | 縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世 |
| 9 | 206 | 43 | 奥 | 鹿児島県阿久根市山下 | 散布地 | 縄文時代 |
| 10 | 206 | 37 | 大蔵庵 | 鹿児島県阿久根市波留字大蔵庵 | 集落跡 | 縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世 |
| 11 | 206 | 11 | 大石城跡 | 鹿児島県阿久根市波留 | 城館跡 | 中世 |
| 12 | 206 | 57 | 上野畑 | 鹿児島県阿久根市鶴川内 | 散布地 | 縄文時代，古墳時代，古代，中世，近世 |
| 13 | 206 | 7 | 大曲窯跡 | 鹿児島県阿久根市高松町大曲 | 生産遺跡 | |
| 14 | 206 | 3 | 波留貝塚 | 鹿児島県阿久根市波留 1591 | 貝塚 | 縄文時代 |
| 15 | 206 | 20 | 小田城跡 | 鹿児島県阿久根市波留 | 城館跡 | 中世 |
| 16 | 206 | 15 | 賀喜城跡 | 鹿児島県阿久根市波留 | 城館跡 | 中世 |
| 17 | 206 | 36 | 鳥越古墳群 | 鹿児島県阿久根市潟字鳥越 | 地下式板石積石室墳丘墓（石室のみ残存） | 古墳時代 |




第３図　遺跡周辺の地形図（斜線部が台地の範囲）




第４図　北山遺跡周辺遺跡位置図（１：25,000）

## 第３節　野田ＩＣ周辺～阿久根ＩＣ間の遺跡

南九州西回り自動車道の野田ＩＣ周辺～阿久根ＩＣ間には，第２表に示すとおり７箇所の遺跡が存在する。ここでは，その遺跡の概要を記載する。

**第２表　野田ＩＣ周辺～阿久根ＩＣ間の遺跡**

| 番号 | 遺跡名 | 所在地･立地 | 調査面積<br>発掘調査 | 整理･報告書<br>作成作業 | 遺跡の概要 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 時代・時期 | 主な遺構 | 主な遺物 |
| 1 | 外畠 | 出水市境町関外<br>散布地 | 試掘調査<br>135.5㎡<br>本調査<br>10500㎡ | 報告書刊行<br>2012<br>県立埋文センター<br>発掘調査報告書<br>175 | 縄文時代<br>後期～晩期 | 土坑26基<br>配石状遺構４基 | 市来式土器，北久根山式土器，磨消縄文土器<br>三万田式土器，黒川式土器，入佐式土器<br>石鏃，磨製石斧，打製石斧，磨石，敲石，石皿，台石 |
| | | | | | 弥生時代 | － | 入来式土器，黒髪式土器 |
| | | | | | 古墳時代 | － | 成川式土器 |
| | | | 試掘調査<br>2010.05.06<br>～05.11<br>本調査<br>2010.05.10～<br>2011.01.28 | | 古代 | 掘立柱建物１棟<br>土坑６基<br>溝状遺構１条 | 土師器，内黒土師器，須恵器，刀子，青銅製品 |
| | | | | | 中世 | 掘立柱建物跡４棟<br>土師器埋納柱穴１基<br>方形竪穴建物１基<br>竪穴状遺構３基<br>土坑墓２基<br>土坑３基，焼土２基 | 土師器，瓦質土器，青磁，白磁，滑石製石鍋<br>洪武通寶，鉄釘 |
| | | | | | 近世 | 土坑墓15基<br>区画溝１条 | 陶磁器類，寛永通寶，鉄釘，人骨 |
| | | 外畠遺跡は，縄文時代後期を中心に，土器や石器と共に，石材を伴う土坑が多数検出されている。なかでも，小型壺形土器が納められているものや，２枚の石皿・台石が立位で配置されているものなど，特殊な事例も発見されている。後期の祭祀・精神活動を解明する上で貴重な資料となった。<br>古代の土坑群と掘立柱建物，自然流路を利用した溝状遺構が検出されており，土坑からは土師甕が出土しており，墓としての機能が想定される。中世の方形竪穴建物や掘立柱建物跡，土坑墓などが検出された。当遺跡の近辺が「荘」という地名であり，古代から中世にかけての調査成果は，当地域における土地利用の変遷過程を示す貴重な資料である。 | | | | | |
| 2 | 中郡遺跡群 | 出水市野田町<br>下名　集落<br>散布地 | 本調査<br>260㎡<br>16100㎡<br>4810㎡ | 報告書刊行<br>2016<br>(公財)埋文調査<br>センター<br>10 | 旧石器時代 | 礫群１基 | ナイフ形石器，台形石器，チップほか |
| | | | | | 縄文時代早期 | 土坑６基，集石11基<br>落とし穴状遺構５基<br>横転内礫集中３基 | 石坂式，中原式，押型文，塞ノ神式土器，石鏃，磨製石斧，打製石斧，石斧未製品，磨石，敲石，石皿 |
| | | | | | 縄文時代前期<br>～晩期 | － | 轟式，沈線文，入佐式，黒川式土器 |
| | | | 本調査<br>2013.05.13～<br>09.13<br>2014.07.01～<br>07.24<br>2009.05.08～<br>2010.03.19<br>2012.07.02～<br>12.21 | | 弥生時代 | － | 弥生土器 |
| | | | | | 古墳時代 | － | 成川式，古式土師器，須恵器 |
| | | | | | 古代 | 土坑１基 | 土師器，楠葉型黒色土器，須恵器，布目瓦 |
| | | | | | 中世 | 掘立柱建物跡５棟<br>竪穴建物跡５基<br>竪穴状遺構１基<br>土坑22基<br>土坑状遺構７基<br>大型土坑状遺構３基<br>堀跡２条<br>溝状遺構16条<br>杭列跡１条<br>道状遺構１条 | 土師器，須恵器，瓦質土器，瓦，白磁，青磁，青白磁<br>青白磁龍首水注，中国陶器，国産陶器，滑石製石鍋<br>滑石製品，鞴の羽口，砥石，鉄製品，木製品，杭 |
| | | | | | 近世 | 帯状硬化面２基<br>溝状遺構３条 | 陶磁器，寛永通寶 |
| | | 中郡遺跡郡は，中世には島津氏初代の居館跡「屋地の館跡」に比定される。<br>縄文時代は，主に八代海沿岸や中九州地域に分布圏をもつ中原式土器や押型文土器群など早期を中心とする。<br>弥生・古墳時代では，布地土器のほか，肥後地域の弥生終末期土器や古式土師器が出土している。古代では土師器を一括して埋納した土坑が検出され，楠葉型黒色土器や瓦等も出土している。中世では，堀跡や掘立柱建物跡，竪穴建物跡等の遺構が検出され，貿易陶磁器の中には青白磁の龍首水注等の稀少な資料もある。また，低湿地では，杭列が検出され，木製品も多く出土している。 | | | | | |
| 3 | 北山田 | 出水市野田町<br>下名<br>散布地 | 調査面積<br>5400㎡<br>調査期間<br>2009.05.08～<br>2010.10.27 | 報告書刊行<br>2012<br>県立埋文センター<br>発掘調査報告書<br>167 | 中世～近世 | 水田４面 | 青磁，土師器，染付，陶器 |
| | | 北山田遺跡は，４面の水田遺構が，中世の青磁，近世の薩摩焼等の遺物を伴い検出された。水田遺構は，湧水を利用し谷地形を改変して水田が設けられて以降，変遷を経ながら耕作されてきた経緯を窺い知ることができる貴重な資料である。 | | | | | |
| 4 | 陣之尾墾跡<br>陣之尾 | 阿久根市多田<br>陣之尾<br>散布地 | 調査面積<br>1655㎡<br>調査期間<br>2008.08.04<br>～<br>2008.09.27 | 報告書刊行<br>2012<br>県立埋文センター<br>発掘調査報告書<br>167 | 旧石器時代 | — | 細石刃，細石刃核，剥片 |
| | | | | | 縄文時代 | — | 縄文早期土器，黒川式土器，打製石斧，礫器，磨石，石皿 |
| | | | | | 古墳時代 | 土坑１基 | 成川式土器 |
| | | | | | 中世 | 古道跡１条<br>溝状遺構１条 | 土師器，内黒土師器，同安窯系青磁，滑石製製品 |
| | | | | | 近世 | ピット群１基 | 染付 |
| | | 陣之尾墾跡については，中世の城郭の可能性から頂上部･山腹の平坦地を曲輪，谷を掘と想定し調査を進めたが，遺構･遺物ともに確認できなかった。<br>陣之尾遺跡は，旧石器時代から中世までの遺物が出土した遺跡である。 | | | | | |
| 5 | 平田 | 阿久根市多田字<br>平田<br>散布値 | － | － | 縄文時代 | － | － |
| 6 | 多田山 | 阿久根市多田<br>多田山<br>散布値 | － | － | 古墳時代 | － | － |
| 7 | 上野畑 | 阿久根市鶴川内<br>散布地 | 調査面積<br>3900㎡<br>調査期間<br>2009.08.03～<br>2009.10.28 | 報告書刊行<br>2012<br>県立埋文センター<br>調査報告書<br>167 | 縄文時代<br>～近世 | 竪穴状遺構１基<br>掘立柱建物跡２棟<br>炉状遺構２基<br>柱穴28基<br>土坑１基 | 弥生土器，土師器，須恵器，瓦質土器，青磁<br>石鏃，削器，磨製石斧，磨石 |
| | | 上野畑遺跡は，縄文時代晩期から近世の遺構である。掘立柱建物跡や炉状遺構は当該期の生活の一端を知る資料となった。 | | | | | |




第５図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図（１:50,000）

# 第Ⅲ章　調査の方法と層序

本章では，本調査における発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理・報告書作成作業，層序について簡潔に述べる。

## 第１節　本調査

### １　発掘調査の方法

調査に先立ち，本遺跡の調査区割り(グリッド)の設定を行った（第６図)。鹿児島国道事務所が打設した道路建設用センター杭「STANo.290」と「STANo.293」を結ぶ線を基準に，調査区内に10m間隔の区画（以下，グリッドという）を設定し，この延長線を中心に北側から南側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ･･･列，西側から東側に向かって１・２・３・４･･･列とする調査区割を設定し，呼称することとした。Ｅ～H-37･38区については，すでに撹乱されていたため，調査範囲から除外した。

調査は，確認調査の結果に基づき，重機で表土を除去した後，遺物包含層については人力で掘り下げ（山鍬，鋤簾，ねじり鎌，手鍬等の発掘道具）を行った。出土した遺物については，必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後，実測が必要なものを除き，原則として層ごとに一括で取り上げた。さらに，遺物包含層の調査と並行して，下層確認用の先行トレンチを設定し，掘り下げを行った。検出遺構については，移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し，調査の進捗に応じて，検出状況，半截状況，完掘状況等の写真撮影を行い，図化作業等の記録保存を行った。さらに，無遺物層の一部を重機及び人力で除去し，基盤層が無遺物層であることを確認し調査を終了した。

調査が終了した調査区については，重機及び人力による埋め戻しを行った。

本遺跡に関する世界測地系座標は，Ｅ－18区とＦ－19区の接点が世界測地系座標Ｘ＝-109,560.271，Ｙ＝-74,653.637である。同じくＥ－24区とＦ－25区の接点は，世界測地系座標Ｘ＝-109,526.828，Ｙ＝-74,603.822である。またＦ－38区とＧ－39区の接点は，世界測地系座標Ｘ＝-109,457.096，Ｙ＝-74,482.013である。

### ２　遺構の検出方法

調査区周辺は，若干起伏のあった地形を耕作地等に整備するため，削平や造成による平坦化が行われている。遺構の検出については，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，包含層が良好に残存する場所が部分的な箇所もあったため，困難な区域もあった。

遺構の認定は，検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，担当職員で検討した上で行った。竪穴建物跡は，埋土や形状，床面の有無や構造，遺物の出土状況など総合的に判断した。土坑及びピットは，ほぼ円形で径30cm程度のものをピット，それ以上のものを土坑とした。溝は，筋状に細長く掘り込まれたものとした。掘立柱建物は，埋土ごとに分類したピットの配置等から，範囲を確定した。

## 第２節　整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は，令和３～４年度の２年にわたり，調査センター第一整理作業所で実施した。

### １　整理作業の方法と内容

図面整理は，遺構実測図，遺物出土分布図，土層断面図，地形図等に仕分けし，台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは，未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。

注記は，水洗いと並行して順次行った。その際，包含層遺物の摩耗が激しいものや小片のものは，注記対象から外した。記号については，これまで刊行された遺跡の記号と重複しないように確認をとり，遺跡名を表す記号を「ＫＹ」とした。

土器の分類・接合は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，遺構内遺物を中心に行った。包含層出土土器については，土器の胎土や器種，文様等で分類し接合した。その後，掲載遺物の抽出を行った。石器については，種類ごとに分類した。その後，掲載遺物の抽出を行った。脆弱な資料については，接合前段階で薬剤含浸による強化を行った。

本編の報告書作成作業も同時に行い，一部原稿執筆も開始した。

### ２　報告書作成作業の方法と内容

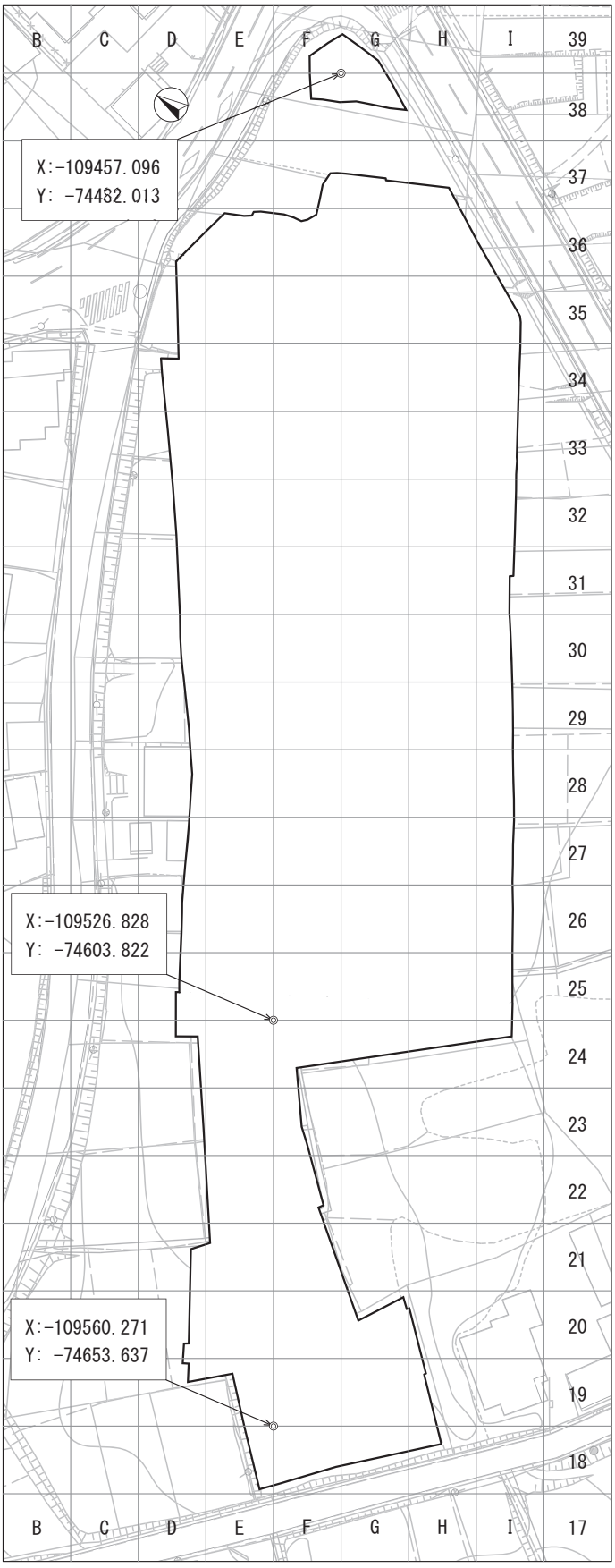
遺構図については，図面のチェックを行い，検討を重ねた上で，トレースを行った。

掲載遺物については，土器・陶磁器・石器の実測・トレースを行い，必要に応じて修正・再トレースを行った。

遺構内出土遺物については，埋土と出土位置を精査し，遺構ごとに掲載した。また，出土位置が確定できるものについては，遺構図内に明示した。

包含層出土の掲載土器については，時代別，器種別，部位別，特徴別の順番で分類した後，レイアウトを行った。土器ごとに残存状況が異なるため，特徴を考慮しながら１個体や接合資料を優先的に配置した。

石器については，器種別に分類した後，実測・トレー




第６図　北山遺跡グリッド配置図

ス，レイアウトを行い，遺構に伴う石器は，検討を行い掲載した。

鉄製品については，調査区内から数点出土しているが，石器同様時期判定が困難であった。時期不明遺物として一部掲載した。

写真図版については，現場写真のレイアウト，遺物写真のレイアウト・写真撮影を行った。その際，接合資料については，写真撮影用の復元を部分的に行った。

原稿執筆，観察表作成，写真撮影等終了後，印刷・製本を行った。

## 第３節　新旧遺構対応表

調査時の遺構名については，報告書作成段階で以下の通り名称変更を行った。

**第３表　新旧遺構対応表**

| 本調査（旧名称） | 報告書（新名称） | 本調査（旧名称） | 報告書（新名称） |
|---|---|---|---|
| ＳＩ３ | 竪穴建物跡１号 | ＳＫ 78 | 土坑３号 |
| ＳＩ１ | 竪穴建物跡２号 | ＳＫ 79 | 土坑４号 |
| ＳＩ２ | 竪穴建物跡３号 | ＳＫ 52 | 土坑５号 |
| ＳＩ４ | 竪穴建物跡４号 | ＳＫ 54 | 土坑６号 |
| ＳＩ５ | 竪穴建物跡５号 | ＳＸ 28 | 土坑７号 |
| ＳＩ６ | 竪穴建物跡６号 | ＳＸ 29 | 土坑８号 |
| ＳＢ９ | 掘立柱建物跡１号 | ＳＫ 51 | 土坑９号 |
| ＳＢ 11 | 掘立柱建物跡２号 | ＳＫ 55 | 土坑 10 号 |
| － | 掘立柱建物跡３号 | ＳＫ 56 | 土坑 11 号 |
| ＳＢ 10 | 掘立柱建物跡４号 | ＳＫ 58 | 土坑 12 号 |
| ＳＢ７ | 掘立柱建物跡５号 | ＳＫ 68 | 土坑 13 号 |
| ＳＢ３ | 掘立柱建物跡６号 | ＳＸ 31 | 土坑 14 号 |
| ＳＢ４ | 掘立柱建物跡７号 | ＳＸ 32 | 土坑 15 号 |
| ＳＢ５ | 掘立柱建物跡８号 | ＳＸ 30 | 焼土 |
| ＳＢ６ | 掘立柱建物跡９号 | ＳＤ７ | 溝跡１号 |
| ＳＢ 12 | 掘立柱建物跡 10 号 | ＳＤ１・５ | 溝跡２号 |
| ＳＢ 14 | 掘立柱建物跡 11 号 | ＳＤ２・10 | 溝跡３号 |
| ＳＢ 15 | 掘立柱建物跡 12 号 | ＳＤ９ | 溝跡４号 |
| － | 掘立柱建物跡 13 号 | ＳＤ３ | 溝跡５号 |
| ＳＢ 13 | 掘立柱建物跡 14 号 | ＳＤ６ | 溝跡６号 |
| ＳＫ 77 | 土坑墓１号 | ＳＤ８ | 溝跡７号 |
| ＳＫ 57 | 土坑墓２号 | ＳＤ４ | 溝跡８号 |
| ＳＫ 80 | 土坑１号 | － | 溝跡９号 |
| ＳＸ 33 | 土坑２号 | | |

## 第４節　層序

本遺跡は，阿久根市中央部を東から西へ流下する高松川左岸の台地上に立地する。現在は，耕作地または住宅地として使用されている。調査区は，東西に長く，現在の地形は平坦で水平であるが，近世・近代からの耕作，宅地造成，攪乱削平を受けた箇所が広範囲に認められた。古い時代の地形は，若干の起伏があり，全体として緩く傾斜していたと考えられる。そのため地層の堆積・残存状況は，好ましくない。

北山遺跡の層序は，地点により層の堆積状況に差があることが判明したため，昭和56年の阿久根市教育委員会の調査と平成30年の文化財課の試掘調査をもとにしつつ，基本層序の見直しを行った。また，層厚も地点により様々である。なお，Ⅲ～Ⅵa層内にはＡＴ火山灰由来と思われる火山ガラスが含まれている。また，Ⅶa・Ⅶb層については阿多カルデラを給源とする24万年前の阿多鳥浜テフラではないかと考えられる。

基本層序の特徴は以下の通りである。

Ⅰ 層：表土・耕作土である。（層厚：10 ～ 40cm）

Ⅱa層：暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）で，白色軽石含む。近世の包含層である。（層厚：0 ～ 50cm）

Ⅱb層：暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）で，赤色小石を含む。Ⅱa層より硬質である。古墳時代から中世の包含層である。（層厚：10 ～ 30cm）

Ⅱc層：黒褐色土（Hue10YR 2/3）で，粘性がある。Ｄ・Ｅ－31区付近に堆積する。古墳時代の遺物が多い。（層厚：10cm）

Ⅲ 層：褐色土（Hue7.5YR 3/4）で，粘性は，やや弱くからやや強い範囲である。縄文時代の包含層である。（層厚：10cm）

Ⅳ 層：黒褐色（Hue7.5YR 3/2）の粘質土で，1 ～ 3cm程度の黄色パミス含む。

Ⅴ 層：褐色（Hue7.5YR 4/6）の粘質土で，1 ～ 3cm程度の黄色パミス含む。

Ⅵa層：黄褐色（Hue10YR 5/8）の砂質土で，ＡＴ火山灰層である。

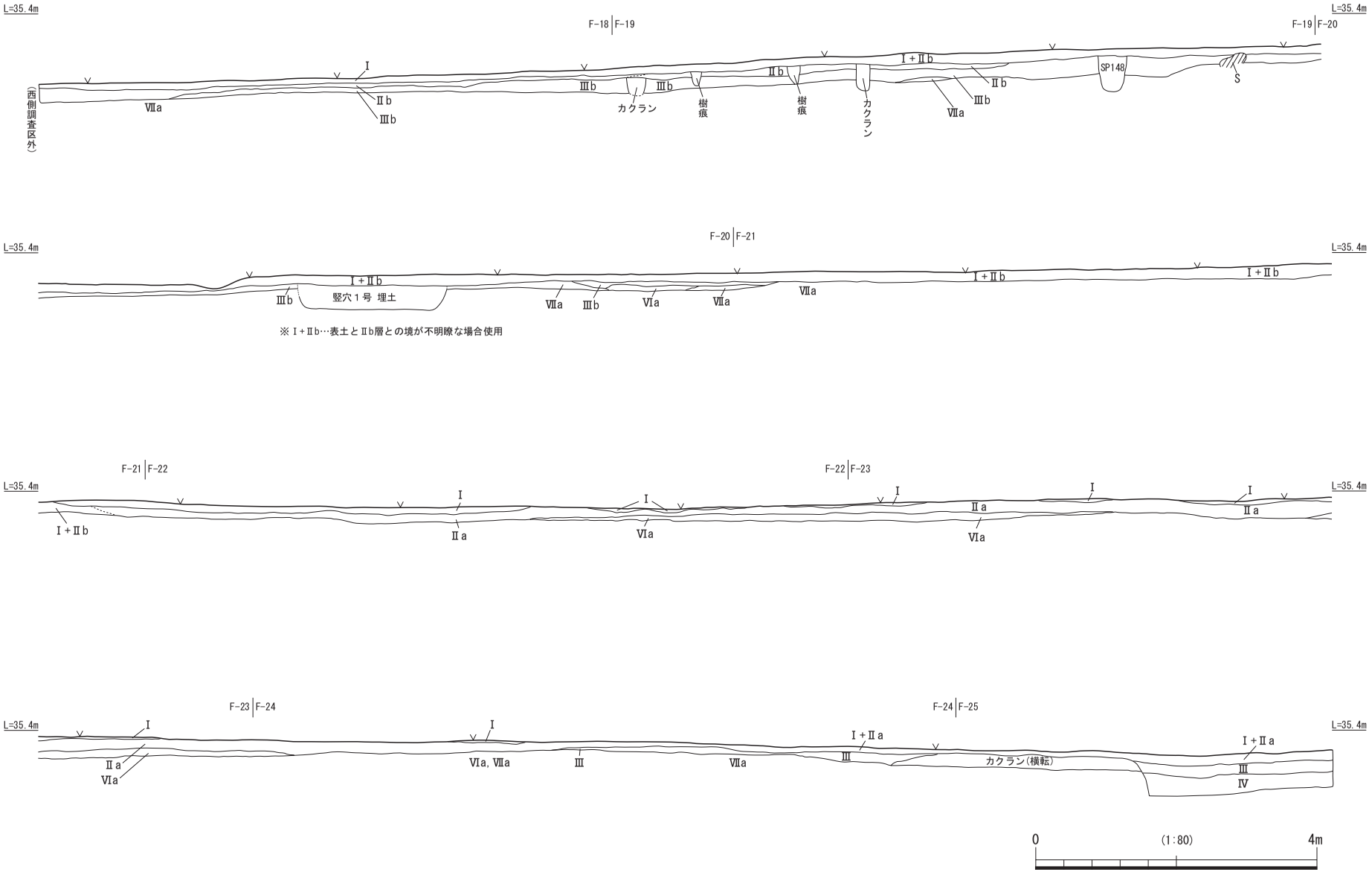
Ⅵb層：明黄褐色（Hue10YR 6/6）の砂質土で，黄色のシラスである。ＡＴ火山灰層である。

Ⅵd層：砂質土で，白色のシラスである。部分的にⅥb層とのマーブル堆積がある。白色粒子を30%含む。

Ⅶa層：明赤褐色（Hue5YR 5/8）の粘質土で，2 ～ 5cm程度の小石を含む。砂質土塊がマーブル状に堆積する。阿多鳥浜テフラと思われる。

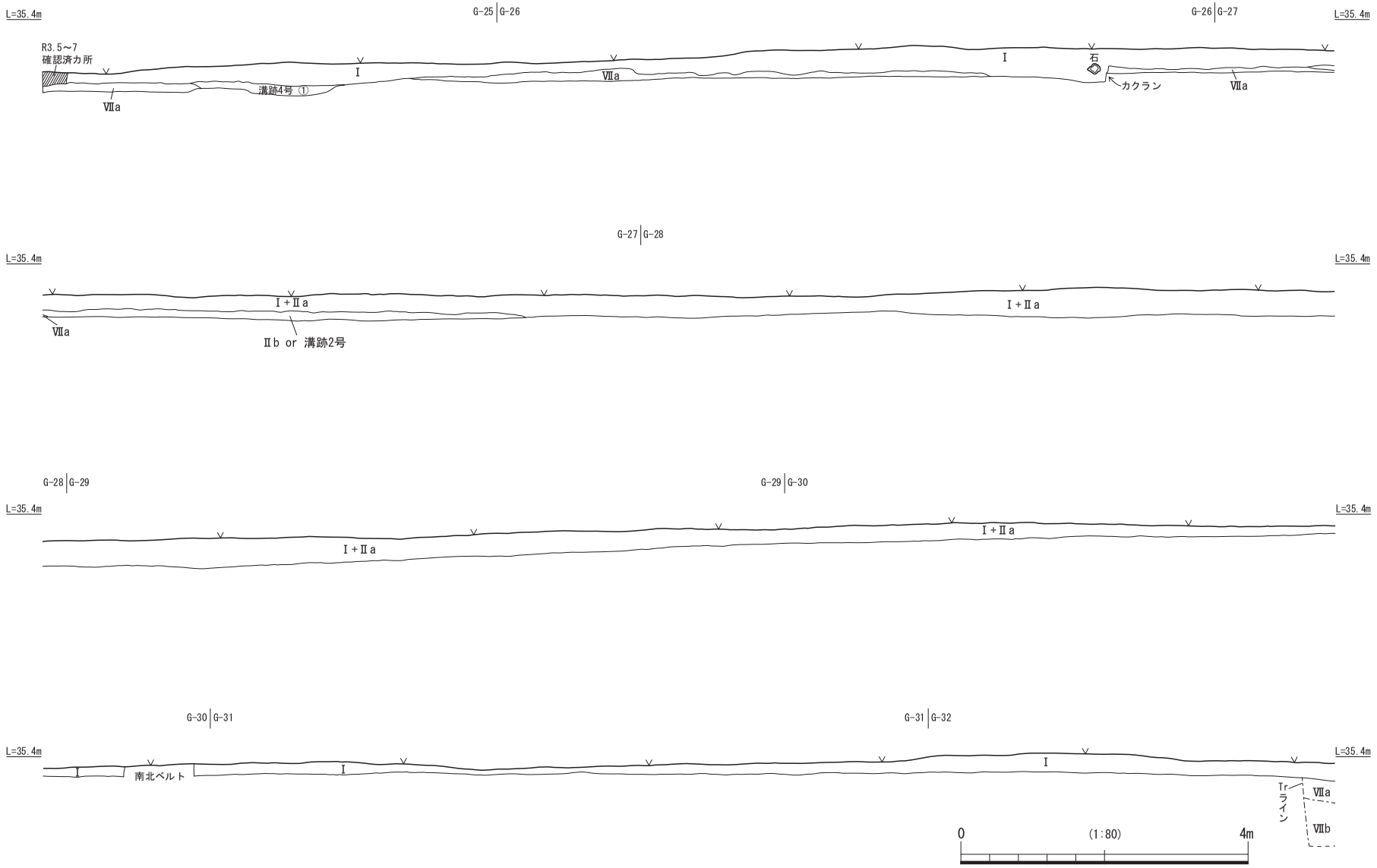
Ⅶb層：明赤褐色（Hue5YR 5/8）の粘質土で，Ⅶa層と同様だが大型の角礫が混入する。阿多鳥浜テフラと思われる。

E・F-18～25①



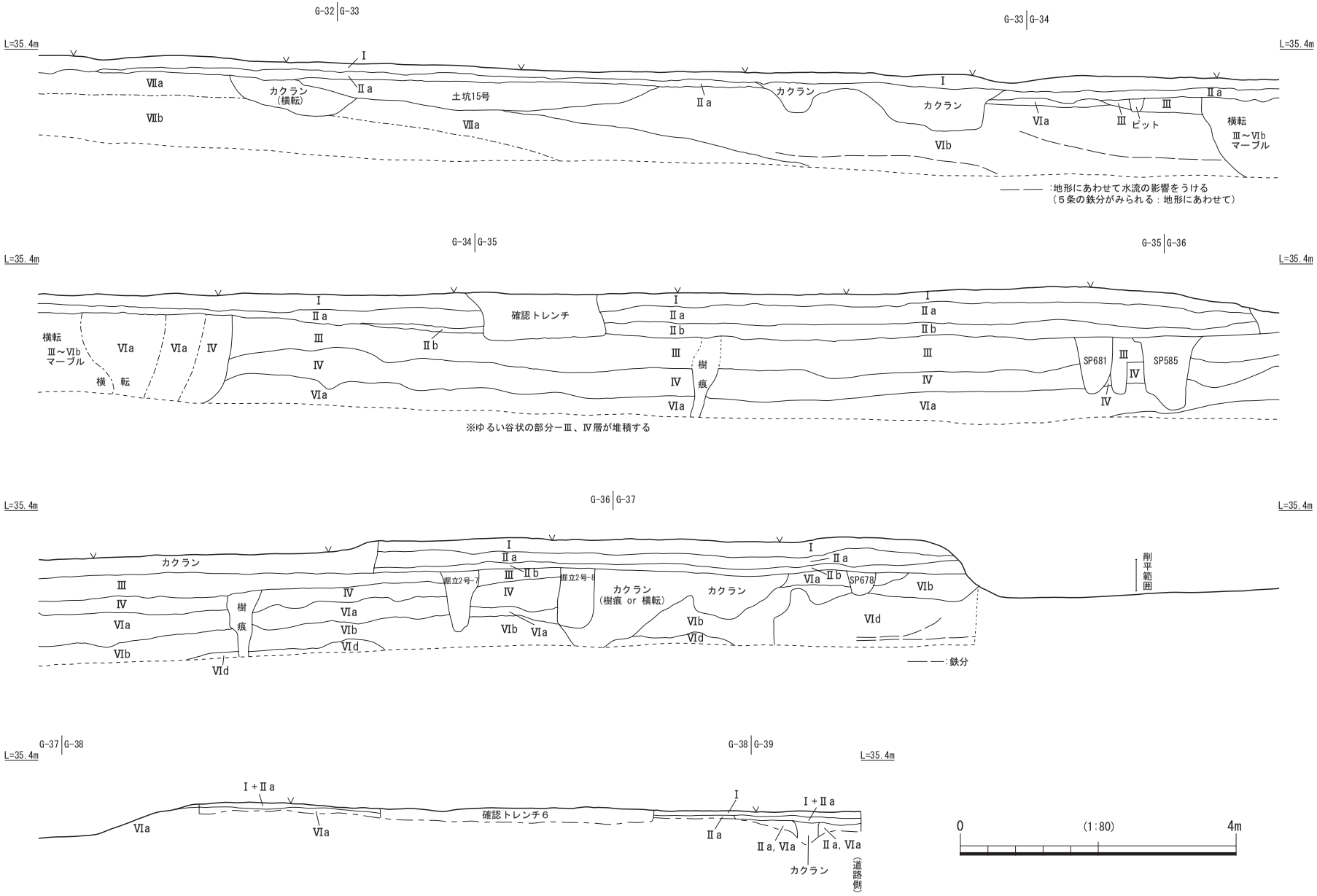

第７図　土層断面図①

## 東西ベルト②－１



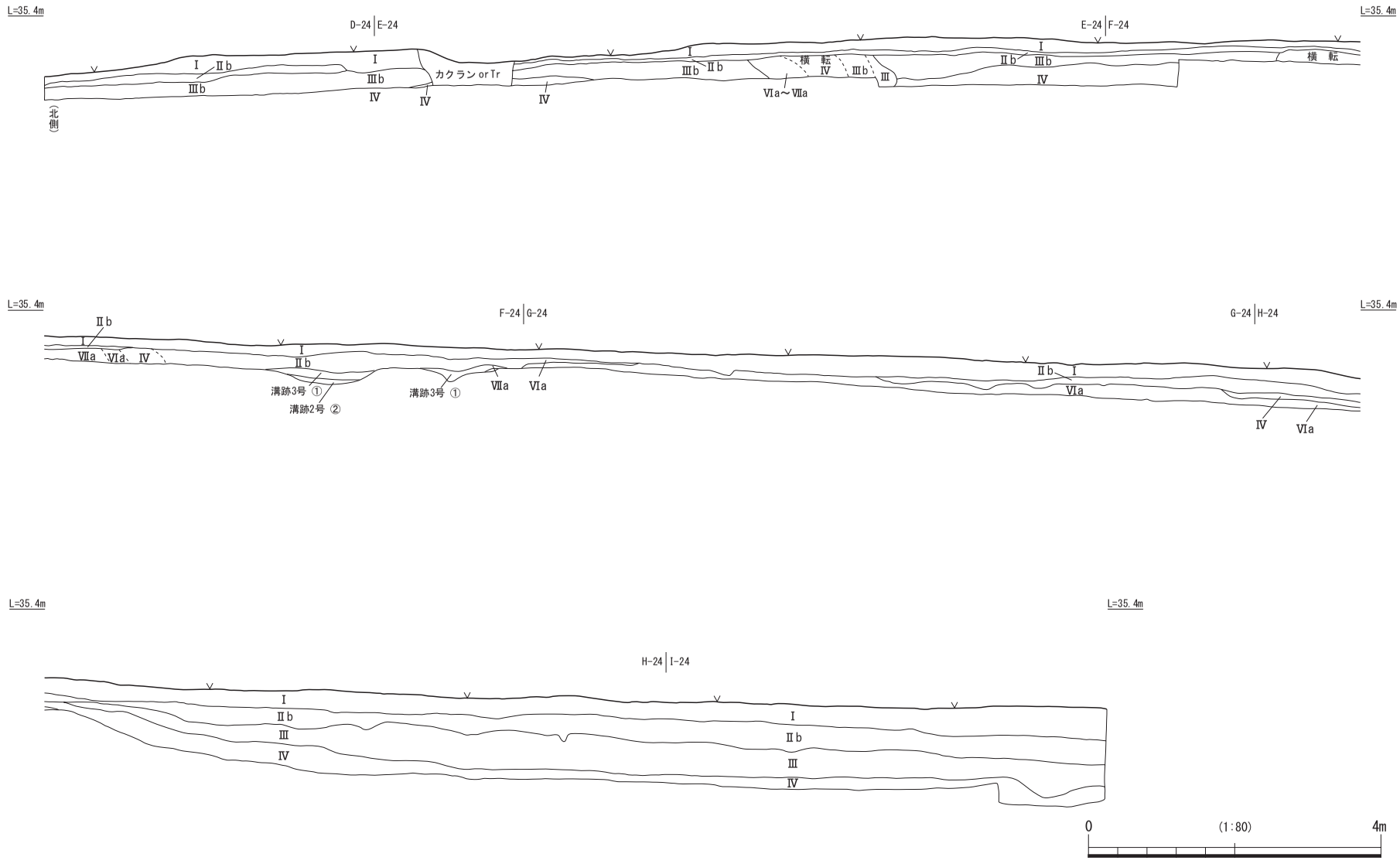

第８図　土層断面図②－１

# 東西ベルト②－２



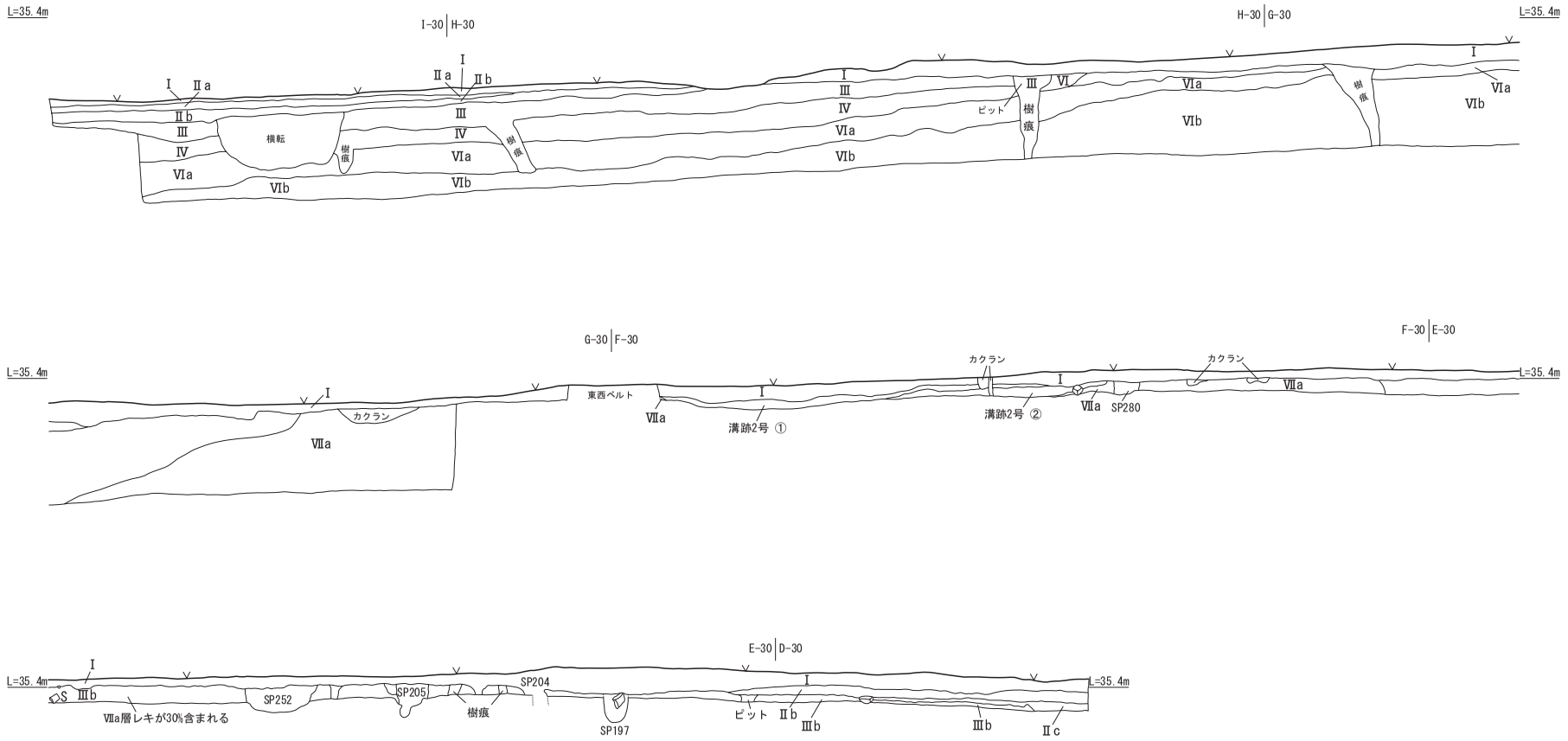

第９図　土層断面図②－２

東壁ベルト③




第10図　土層断面図③

# 南北ベルト④




第11図　土層断面図④

# 第Ⅳ章　調査の成果

## 第１節　縄文時代の調査成果

### １　調査の概要

縄文時代の遺物がⅢ層上面を中心に出土した。出土遺物には縄文時代早期から晩期の土器，石器がある。出土量はそれほど多くはない。

標高の高い地点は，後世の耕地開発によって，Ⅵ層まで削平されている。Ⅲ層は標高の低い緩斜面に残存しており，縄文時代の遺物はⅢ層の範囲と重複するように出土している。遺構は確認されなかった。

### ２　出土遺物

#### （１）縄文土器

出土地点は，Ｅ～Ｇ－18 ～ 22区，Ｈ・Ｉ－24 ～ 32区，Ｆ～Ｉ－34 ～ 36区の３地点に分かれている（第12図左）。縄文時代早期から晩期の土器が出土しているが，すべての地点で混在した状況である。

土器は小片で摩耗したものが多く，中世の遺物包含層であるⅡ層で出土した資料も多い。土器型式・部位の判別可能な34点を図化した。土器型式が判別できる資料は時代順に報告し，型式認定が困難な胴部，底部は最後にまとめて報告する。

#### ①　縄文時代早期（第13図　１～５）

１は口縁部外面に横位の貝殻刺突文，口唇部に刺突文を施す，吉田式土器と考えられる。２・３は同一個体である。外側に開く口縁部外面に，横位の貝殻押し引き文が３条残っている。塞ノ神式土器と考えられる。４・５は胴部片である。５は器壁が厚く外面に二枚貝による刺突文を施す。胎土は白色砂を含んでいる。

#### ②　縄文時代前期（第13図　６～ 10）

６・７は轟Ｂ式土器で，同一個体である。６の口縁部は端部と上胴部に断面三角形の隆帯文が施され，隆帯文にはつまみ上げによる指頭痕が残る。焼成は堅緻で色調は黒褐色である。内外面は条痕後ナデ調整である。７は胴部片で外面には２条の隆帯文が残っている。隆帯文には指頭痕が明瞭にみられる。胴部最大径は推定45.5㎝で，内外面に貝殻条痕を施す。

８～ 10は，尾田式土器と考えられる。８・９は同一個体である。８の外面施文は，①縦方向に11条の沈線文を施す→②沈線文の両側を縦方向の刺突文で区画する→③区画（刺突文）の外側に横位の沈線文を施す順番である。内面は縦方向の刺突文と波状の沈線を施す。砂粒の多い胎土を使用している。あまり見かけない土器ではあるが，伊佐市瀬ノ上遺跡に出土事例がある。９・10は外面に２条の刺突文と多条沈線文を施す。内面には波状の沈線文を施す。

#### ③　縄文時代後期（第13・14図　11 ～ 19）

11・12は南福寺式土器の口縁部と底部である。11は口縁部の肥厚帯に２条の凹線が巡る。12は浅い上げ底の底部である。

13 ～ 16は市来式土器である。口縁部に貝殻刺突文や沈線文を施す。摩耗のため文様が不明瞭となっている。14・16は同一個体と考えられる。

17・18は拡張した口縁部に２～３条の沈線文を施す。太郎迫式土器または西平系土器と呼ばれている一群である。

19は摩耗が著しいが，磨消縄文系土器と推測される。外面には沈線による区画文の他に縄文の痕跡が見られる。

#### ④　縄文時代晩期（第14図　20 ～ 23）

20 ～ 23は口縁部に粗い条痕，ケズリを施す。黒川式土器の深鉢または鉢と考えられる。

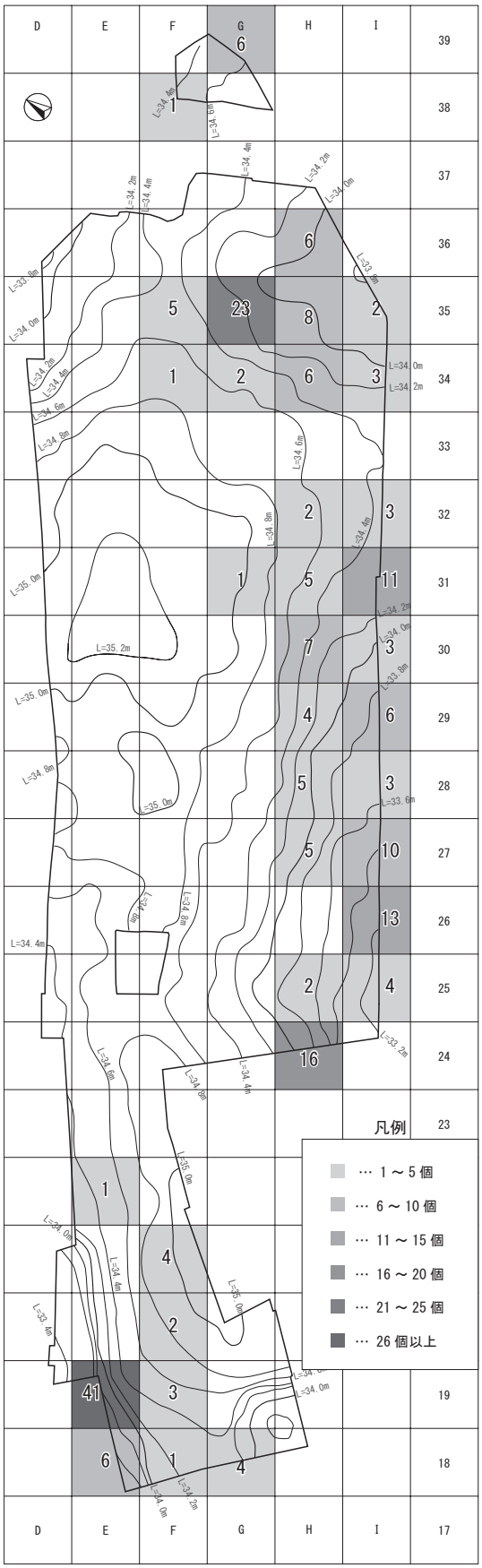
#### ⑤　胴部・底部（第14図　24 ～ 34）

24は外面に太めの沈線文が施されている。胎土に滑石が含まれており，曽畑式土器の可能性がある。25は内外面に粗いケズリ状の条痕を施す。器壁が薄く焼きが良い。轟式土器の可能性がある。26は胴部外面に押し引き文を格子目状に施す。27は外面に刺突文と沈線文が残っている。

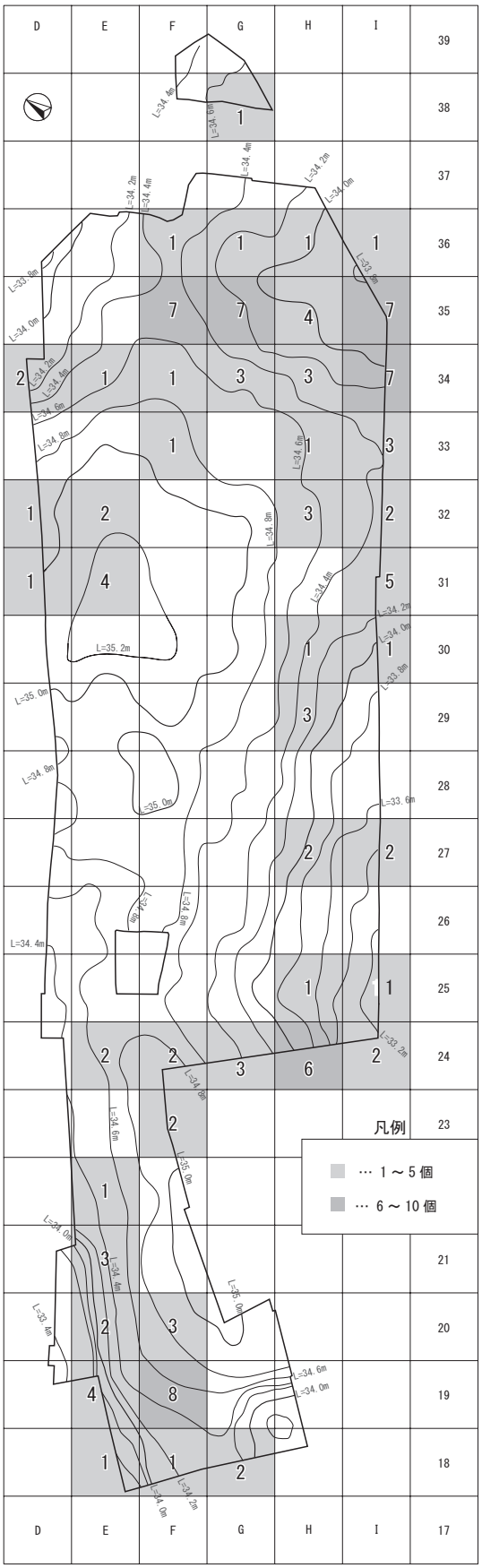
28 ～ 34は底部である。28は外面にケズリ調整，内面に条痕を施す。29は外面に貝殻刺突文がみられる，縄文時代早期の貝殻文系土器の可能性がある。34は底部が外側に張り出す。



Ⅲ層　出土石斧（第16図　49）




（縄文土器）




（石器）

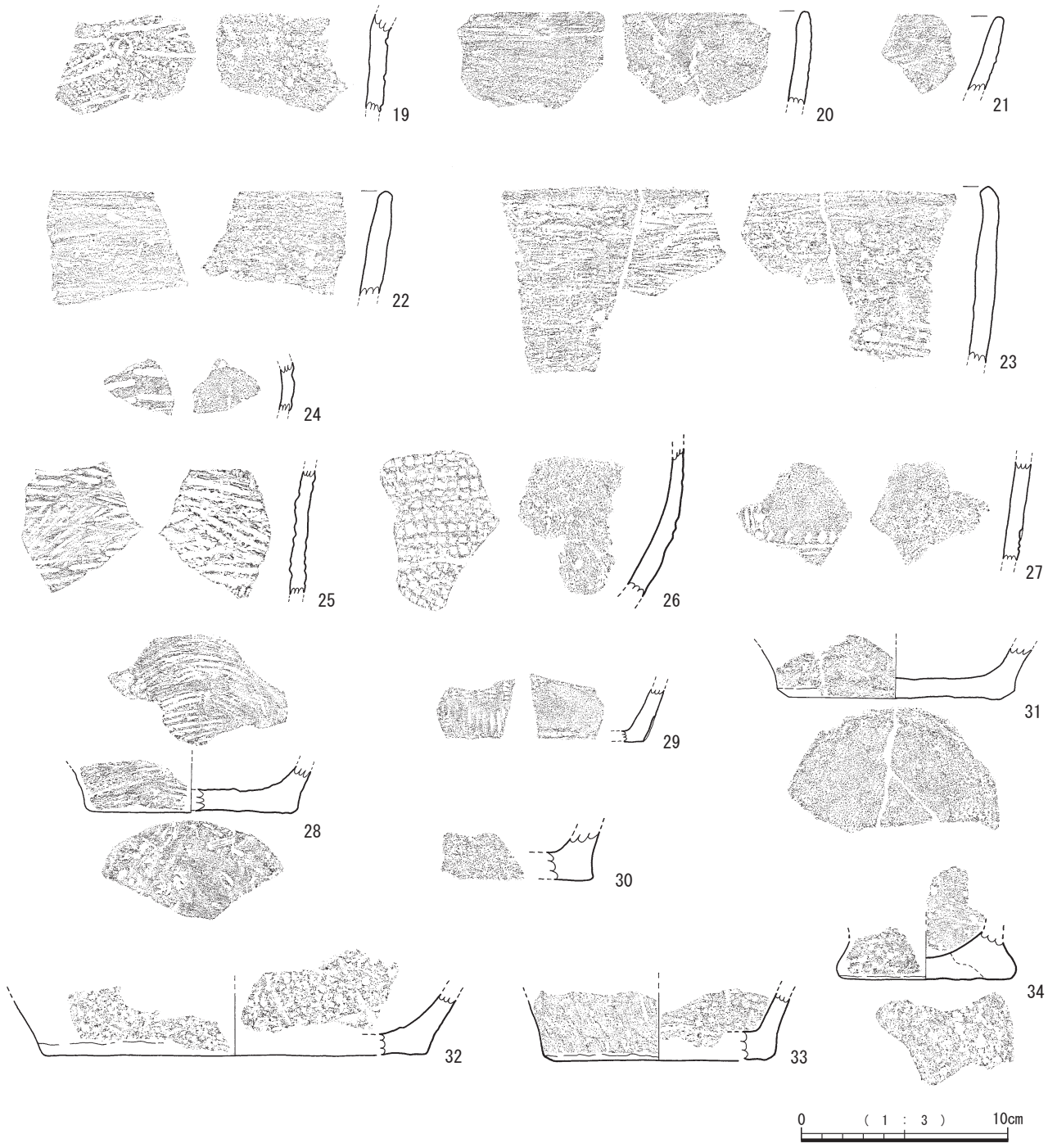
※　グリッド内の数字は出土個数

0　(1:1000)　20m

第12図　縄文時代遺物出土状況




第13図　縄文土器実測図１




第14図　縄文土器実測図２

### （２）石器

出土地点は，Ｅ～Ｉ－18～25区，Ｄ～Ｉ－29～36区の２か所を中心とし（第12図右），石鏃，石匙，石斧，礫石器が出土した。古墳時代から近世の遺物包含層（Ⅱ層）で出土した石器のうち，縄文時代と考えられる石器は本節で報告する。

#### ①　石鏃（第15図　35～42）

13点中８点を図化した。35は長身で基部の抉りが深い凹基無茎鏃（鍬形鏃）である。丁寧な二次加工によって全体の形を整え，側縁には微細な連続剥離を鋸歯状に施している。

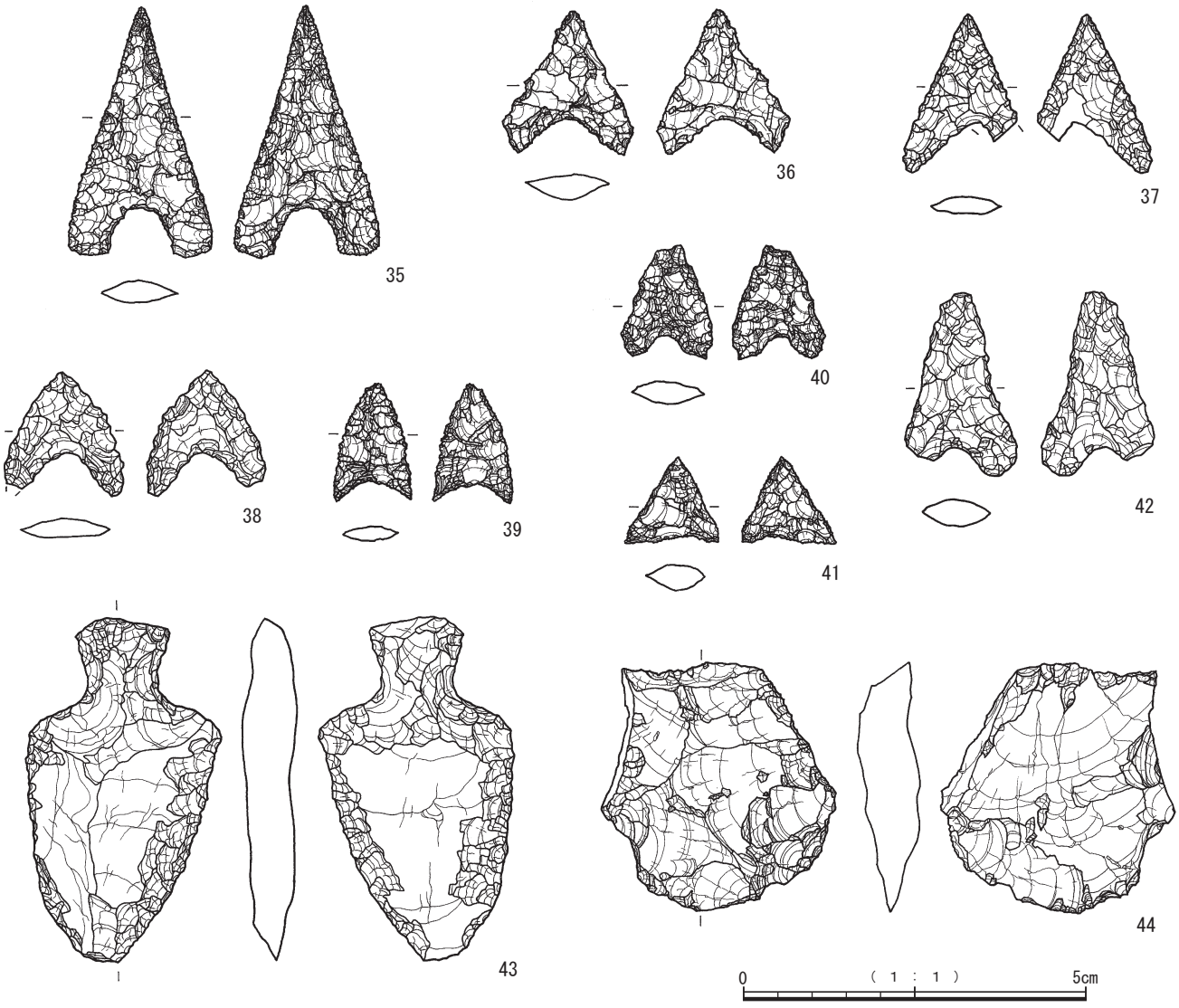
36～38は基部の抉りが浅く，平面が正三角形に近い凹基無茎鏃である。36・37は針尾産黒曜石，38は安山岩製である。39・40は小型の凹基無茎鏃である。平面形は二等辺三角形に近い。40は側縁に鋸歯状の剥離を施し，腰岳産黒曜石を使用している。

41は小型の平基無茎鏃である。42は脚部が欠損している。側縁部の剥離が粗いため未製品の可能性がある。

#### ②　石匙・剥片（第15図　43・44）

43はチャート製の縦長剥片を利用した石匙である。つまみ部は両側から剥片を打ち欠き作られている。刃部は左右両側に二次加工を施し，刃付けを行っている。44は上牛鼻産黒曜石の剥片である。

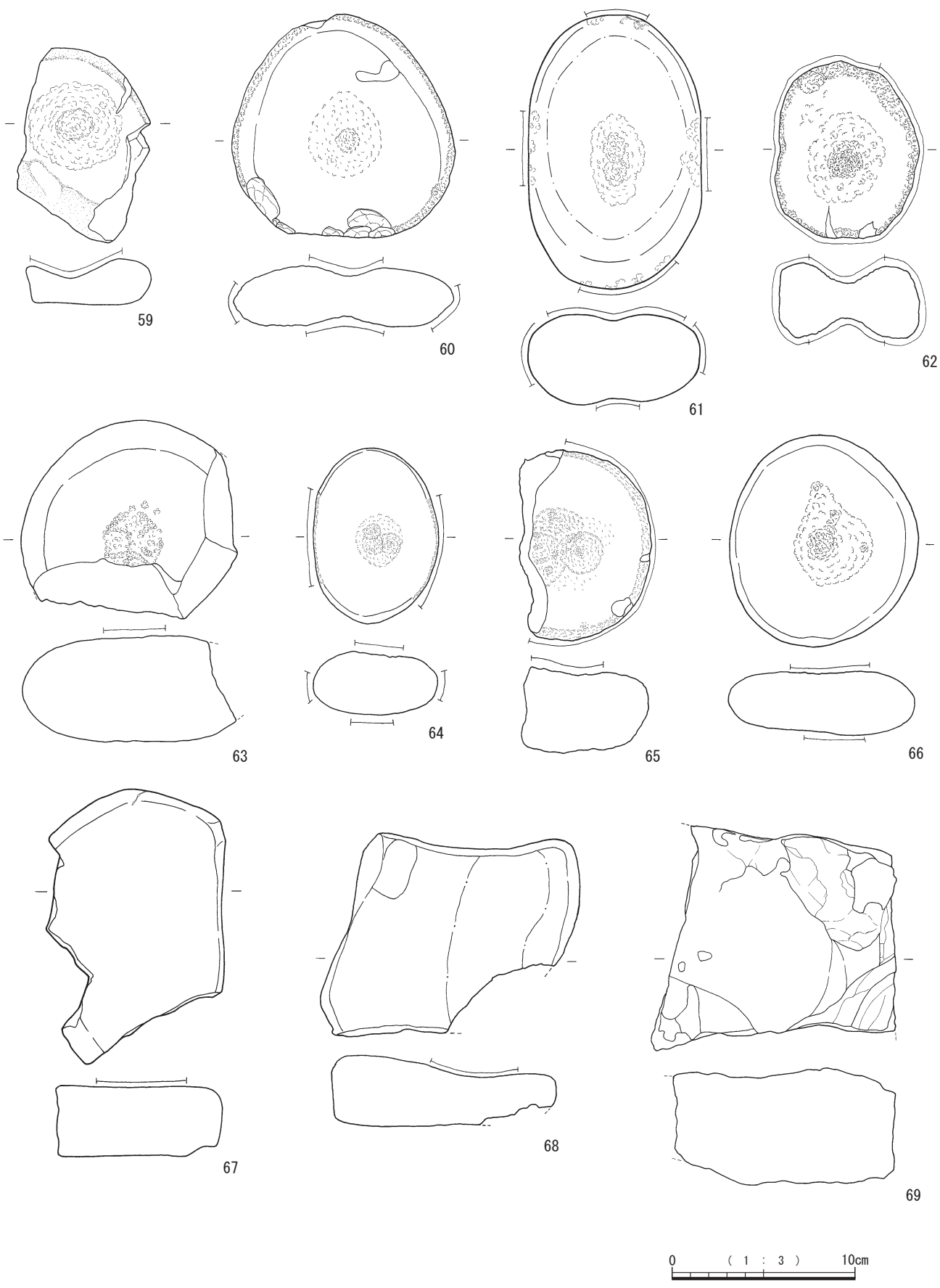
このほかに図示しなかった剥片は，チャート製46点，黒曜石製19点，頁岩製１点がある。また，チャート製石核４点，黒曜石製石核２点，二次加工のある剥片１点，チップ６点が出土している。




第15図　縄文時代の石器１




第16図　縄文時代の石器２




第17図　縄文時代の石器３

### ③　石斧（第16図　45 ～ 50）

45は乳棒状磨製石斧である。全面を丁寧に研磨している。46は重量感のある大型の磨製石斧である。敲打によって丁寧に形を整えた後，正面を研磨している。47は定角式磨製石斧である。正面の研磨面は凹んでおり，破損後に砥石として二次利用した可能性がある。48は打製石斧である。扁平で，粗い二次加工によって形を整えている。刃先は摩耗している。49は凝灰岩質の頁岩を用いた石斧である。素材はやや軟質で，刃部は研磨によって明瞭に研ぎ出されている。用途は土掘り具であろう。50は石斧の基部である。加工が粗く大型であることから，欠損した未製品の可能性がある。

### ④　二次加工のある石器（第16図　51）

51は縦長剥片の両側縁に二次加工を施した石器である。表裏面は風化が進んでいることから，石器製作前に形成された古い剥離面の可能性がある。

### ⑤　磨・敲石（第16図　52 ～ 58）

磨・敲石は17点中７点を図化した。

52 ～ 55は磨石である。52は扁平な安山岩を利用している。正面と裏面に磨面を形成している。53は硬質な細粒砂岩を素材とし，正面に磨面を形成している。54は砂岩製の小型品である。55は安山岩製の磨石である。

56 ～ 58は敲石である。56は棒状の安山岩を使用し，敲打痕が上下両端に形成されている。57は軟質な砂岩を素材とし，側縁に敲打痕が巡っている。58は下縁に剥離状の敲打痕が形成されている。

### ⑥　凹石（第17図　59 ～ 66）

凹石は14点中８点を図化した。59は敲打によって正面が深く凹んでいる。粗く軟質な砂岩を素材としている。60は打撃による剥離が下縁にみられる。62は正面と裏面が敲打によって深く凹む。63 ～ 66は正面と裏面が浅く凹む。

### ⑦　石皿（第17図　67 ～ 69）

石皿は８点中３点を図化した。67は扁平な安山岩製の石皿である。磨面が正面に形成されている。68は磨面が帯状に浅く凹んでいる。69は玉髄製の石皿と考えられる。

**第４表　縄文土器観察表**

| 挿図番号 | 掲載番号 | 器種 | 出土区 | 層 | 文様・器面調整等 | | 色調 | 胎土 | | | | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 石英 | 長石 | 角閃石 | その他 | | |
| 13 | 1 | 深鉢 | H-29 | Ⅲ | 貝殻刺突 | 摩滅 | 明黄褐 | △ | | | 白色砂 | 良好 | 口唇部に刺突 |
| | 2 | 深鉢 | H-35 | Ⅱb | 貝殻刺突 | 摩滅 | 外）にぶい橙 内）橙 | △ | △ | | | 良好 | |
| | 3 | 深鉢 | H-35 | Ⅲ | 貝殻刺突・ナデ | ケズリ | 外）にぶい橙 内）橙 | ○ | ○ | | | 良好 | |
| | 4 | 深鉢 | 7T | Ⅱb | 貝殻刺突 | ナデ・指圧痕 | 外）にぶい黄橙 | ○ | | | | 良好 | |
| | 5 | 深鉢 | H-27 | Ⅲ | 貝殻刺突 | 摩滅 | にぶい黄橙 | ○ | | | 白色砂 | 良好 | |
| | 6 | 深鉢 | H･I-24･25 | Ⅲ | 条痕・突帯・ナデ | 貝殻条痕・ナデ | 外）黒褐 内）黒 | △ | | △ | | 良好 | 胴部復元径 45.5 cm |
| | 7 | 深鉢 | H･I-23･24<br>H･I-24･25<br>H･I-25 | Ⅱb･Ⅱb下・Ⅲ | 貝殻条痕・突帯 | 貝殻条痕 | にぶい黄橙 | △ | | △ | | 良好 | |
| | 8 | 深鉢 | H-36 | Ⅱb | 沈線・刺突 | 沈線・刺突 | 外）黄褐 内）褐 | ◎ | △ | | | 良好 | |
| | 9 | 深鉢 | H･I-36 | Ⅱb | 沈線・刺突 | 沈線・刺突 | にぶい褐 | ◎ | △ | | | 良好 | |
| | 10 | 深鉢 | H-35 | Ⅲ | 沈線・刺突 | 沈線・刺突 | 橙 | ◎ | △ | | | 良好 | |
| | 11 | 深鉢 | H-32･I-34 | Ⅲ | 沈線・ナデ | ナデ | 橙 | △ | ○ | | | 良好 | |
| | 12 | 深鉢 | I-35 | Ⅱb | ミガキ | ナデ | 外）明赤褐 内）にぶい黄褐 | ○ | △ | △ | | 良好 | |
| | 13 | 深鉢 | I-25 | Ⅱb | 貝殻刺突 | 摩滅 | 明赤褐 | ◎ | | | 小石 | 良好 | |
| | 14 | 深鉢 | I-26 | Ⅲ | 貝殻刺突 | 摩滅 | 明赤褐 | ◎ | | | 小石 | 良好 | |
| | 15 | 深鉢 | I-29 | Ⅲ | 沈線・刺突 | 摩滅 | 明赤褐 | ○ | | △ | | 良好 | |
| | 16 | 深鉢 | I-26 | Ⅲ | 貝殻刺突 | 摩滅 | 明赤褐 | ◎ | | | 小石 | 良好 | |
| | 17 | 深鉢 | H-34 | Ⅱa | 沈線 | ミガキ | にぶい褐 | ○ | ○ | ○ | | 良好 | 口唇部に沈線 |
| | 18 | 深鉢 | I-34 | Ⅱb | 沈線 | 摩滅 | にぶい黄橙 | | | | | 良好 | 口唇部に２条沈線 |
| 14 | 19 | 鉢 | I-28 | Ⅲ | 沈線・磨消縄文 | 摩滅 | 浅黄 | △ | | ○ | | 良好 | |
| | 20 | 深鉢 | H･I-24･25 | Ⅲ | 条痕 | 摩滅 | にぶい黄褐 | △ | | | | 良好 | |
| | 21 | 深鉢 | H･I-24･25 | Ⅲ | 条痕 | 摩滅 | 外）灰黄 内）にぶい黄 | △ | | | | 良好 | スス付着 |
| | 22 | 深鉢 | I-31 | Ⅱb | ケズリ | ケズリ | 橙 | ○ | | | | 良好 | |
| | 23 | 深鉢 | I-31 | Ⅱb | ケズリ | ケズリ | にぶい黄橙 | △ | | | 小石 | 良好 | |
| | 24 | 深鉢 | F-38･39 | Ⅱa | ナデ・短沈線 | ナデ | 外）赤葛 内）明赤褐 | ○ | | | 滑石 | 良好 | |
| | 25 | 深鉢 | H-34 | Ⅲ | 条痕 | 条痕 | 外）にぶい黄橙 内）橙 | △ | | | | 良好 | |
| | 26 | 深鉢 | H･I-24･25 | Ⅱb | 押し引き文 | ケズリ後ナデ | 外）にぶい黄褐 内）にぶい褐 | ○ | ○ | | | 良好 | |
| | 27 | 深鉢 | H-35 | Ⅱb | ナデ・刺突・沈線 | 摩滅 | にぶい黄橙 | ◎ | △ | | | 良好 | |
| | 28 | 深鉢 | I-26 | Ⅲ | ケズリ | 条痕 | 明赤褐 | △ | △ | | | 良好 | |
| | 29 | 深鉢 | 9T | Ⅰ | 貝殻刺突・貝殻条痕 | ナデ | 外）にぶい橙 内）にぶい褐 | ○ | | | 赤色小石 | 良好 | |
| | 30 | 深鉢 | H-29 | Ⅱb | 摩滅 | 摩滅 | 橙 | ◎ | | | | 良好 | 31 と同一個体 |
| | 31 | 深鉢 | I-26 | Ⅲ | 摩滅 | ナデ | 外）にぶい橙 内）にぶい褐 | ◎ | | | | 良好 | 30 と同一個体 |
| | 32 | 深鉢 | 9T | Ⅱb | 摩滅 | 摩滅 | 外）橙 内）にぶい黄褐 | △ | | | | 良好 | |
| | 33 | 深鉢 | I-30 | Ⅲ | ケズリ | ナデ | 明赤褐 | ◎ | | △ | | 良好 | |
| | 34 | 深鉢 | H-35 | Ⅱb | 摩滅 | 摩滅 | 外）橙 内）明黄褐 | △ | | | 小石 | 良好 | |

凡例　胎土の鉱物量：◎多い　○普通　△少ない

第５表　縄文石器観察表

| 挿図番号 | 掲載番号 | 器種 | 出土区 | 層 | 法量（cm・g） | | | | 石材 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重量 | | |
| 15 | 35 | 石鏃 | E-19 | Ⅲb | 3.7 | 2.1 | 0.3 | 2.0 | 黒曜石 | 針尾産 |
| | 36 | 石鏃 | I-33 | Ⅲ | 2.1 | 2.0 | 0.3 | 1.0 | 黒曜石 | 針尾産 |
| | 37 | 石鏃 | I-31 | Ⅱb | 2.3 | 1.7 | 0.3 | 0.6 | 黒曜石 | 針尾産 |
| | 38 | 石鏃 | I-35 | Ⅱb | 1.9 | 1.7 | 0.3 | 0.6 | 安山岩 | |
| | 39 | 石鏃 | H-35 | Ⅱb | 1.7 | 1.1 | 0.2 | 0.4 | 黒曜石 | 桑ノ木津留産 |
| | 40 | 石鏃 | H-25 | Ⅱb | 1.7 | 1.3 | 0.3 | 0.6 | 黒曜石 | 腰岳産 |
| | 41 | 石鏃 | H-35 | Ⅱb | 1.2 | 1.4 | 0.4 | 0.4 | 黒曜石 | 桑ノ木津留産 |
| | 42 | 石鏃 | F-36 | Ⅱb | 2.7 | 1.7 | 0.4 | 1.5 | 珪質頁岩 | |
| | 43 | 石匙 | F-18 | Ⅲb | 5.0 | 2.9 | 0.8 | 10.6 | チャート | |
| | 44 | 剥片 | I-33 | Ⅲ | 3.7 | 3.4 | 0.8 | 11.7 | 黒曜石 | 上牛鼻産 |
| 16 | 45 | 磨製石斧 | G-35 | Ⅱb | 16.2 | 4.4 | 4.4 | 550.0 | 蛇紋岩 | |
| | 46 | 磨製石斧 | H-29 | Ⅱb | 12.1 | 7.2 | 4.4 | 605.0 | 緑色片岩 | |
| | 47 | 磨製石斧 | I-27 | Ⅲ | 12.7 | 5.7 | 3.0 | 385.0 | ホルンフェルス | |
| | 48 | 打製石斧 | H-27 | Ⅲ | 17.4 | 7.0 | 1.7 | 275.0 | 緑色片岩 | |
| | 49 | 石斧 | H-29 | Ⅲ | 10.2 | 7.3 | 2.1 | 230.0 | 頁岩（凝灰岩質） | |
| | 50 | 石斧 | H-29 | Ⅲ | 13.6 | 9.0 | 3.3 | 675.0 | ホルンフェルス | 未製品 |
| | 51 | 二次加工のある石器 | H-32 | Ⅱb | 5.4 | 3.4 | 1.1 | 25.1 | ホルンフェルス | |
| | 52 | 磨石 | H-35 | Ⅲ | 9.1 | 7.8 | 2.7 | 290.9 | 安山岩 | |
| | 53 | 磨石 | F-34 | Ⅱa | 6.2 | 5.5 | 2.3 | 127.0 | 砂岩 | |
| | 54 | 磨石 | T-06 | Ⅴ | 4.7 | 4.0 | 1.8 | 49.3 | 砂岩 | |
| | 55 | 磨石 | I-35 | Ⅱb | 11.5 | 8.6 | 5.2 | 680.0 | 安山岩 | |
| | 56 | 敲石 | G-35 | Ⅱb | 11.6 | 3.6 | 3.5 | 244.3 | 安山岩 | |
| | 57 | 敲石 | G-36 | Ⅱb | 6.4 | 6.5 | 2.5 | 139.7 | 砂岩 | |
| | 58 | 敲石 | I-34・35 | Ⅱb | 6.1 | 6.0 | 2.2 | 121.9 | 安山岩 | |
| 17 | 59 | 凹石 | E-31 | Ⅱb | 10.5 | 7.2 | 2.6 | 220.0 | 砂岩 | |
| | 60 | 凹石 | I-35 | Ⅱb | 12.1 | 12.0 | 3.3 | 700.0 | 砂岩 | |
| | 61 | 凹石 | H･I-23・24 | Ⅱb下 | 14.9 | 9.4 | 5.0 | 1400.0 | 安山岩 | |
| | 62 | 凹石 | G-34 | Ⅱb | 9.6 | 7.8 | 4.1 | 380.0 | 凝灰岩 | |
| | 63 | 凹石 | H-34 | Ⅱb | 10.8 | 11.6 | 5.7 | 1005.0 | 凝灰岩 | |
| | 64 | 凹石 | E-19 | Ⅱb | 9.7 | 6.9 | 3.4 | 329.0 | 砂岩 | |
| | 65 | 凹石 | I-35 | Ⅱb | 10.7 | 7.6 | 4.7 | 530.0 | 凝灰岩 | |
| | 66 | 凹石 | G-35 | Ⅲ | 11.5 | 10.3 | 3.5 | 610.0 | 砂岩 | |
| | 67 | 石皿 | H-35 | Ⅱb | 13.4 | 9.6 | 3.9 | 955.0 | 安山岩 | |
| | 68 | 石皿 | H-29 | Ⅲ | 11.1 | 14.1 | 3.9 | 800.0 | 砂岩 | |
| | 69 | 石皿 | I-32 | Ⅱb | 12.3 | 13.3 | 6.4 | 1470.0 | 玉髄 | |

## 第２節　古墳時代の調査成果

### １　調査の概要

古墳時代の遺構は，調査区南西側Ｄ～Ｆ－20区のⅢb層及びⅣa層上面で竪穴建物跡を３基検出した。遺構内では，古墳時代前期に比定される東原式段階を中心とした大量の土器破片が出土した。遺物に完形品は少ない。

遺物の組成は，土器が大部分を占めるが，摩耗しているものが多い。

古墳時代の土器のうち，主要な器種については，形態的な特徴から以下のとおり分類した。

【 甕形土器 】

甕Ａ類：口縁部が直口または，やや外反・外傾し，頸部で屈曲して胴部が膨らみ，底部に向かってすぼまる器形のもの。脚台を伴うものと想定される。（第21図　70）

甕Ｂ類：口縁部が「く」字状に外反し，胴部が膨らむもの。（第30図　141）

【 壺形土器 】

壺Ａ類：口縁部が直口または，わずかに外傾か内弯し，肩部が張るもの。（第23図　88）

壺Ｂ類：口縁部が頸部から広く外反しラッパ状に開く，いわゆる広口壺。（第23図　90）

壺Ｃ類：頸部及び口縁部下位に屈曲を有する，いわゆる二重口縁壺。（第23図　92）

### ２　遺構

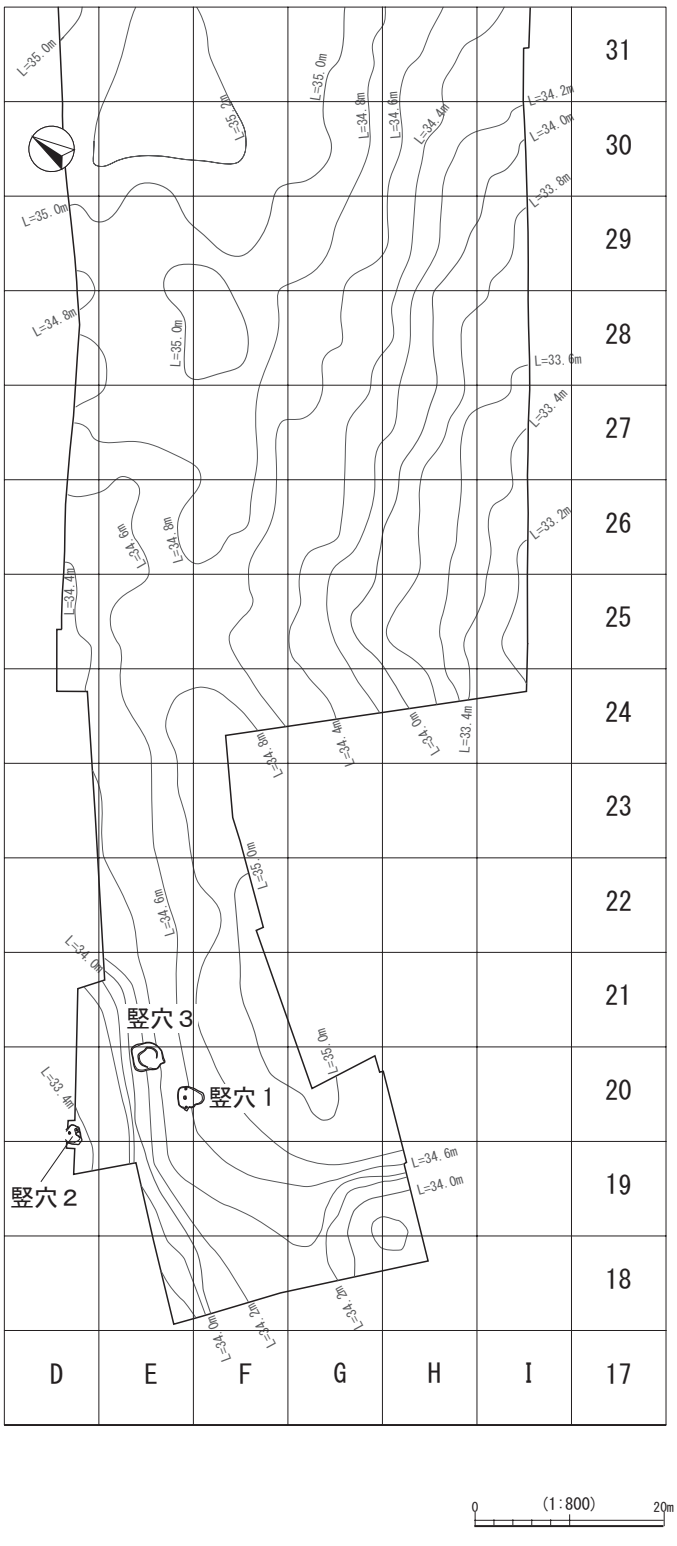
#### （１）竪穴建物跡１号（第19・20図）

Ｅ・Ｆ－20区，Ⅲb層及びⅣa層上面で検出された。平面形は，長軸233.7㎝×短軸231.4㎝の形を呈する。深さは，約40㎝である。遺構内からは，柱穴や炉が検出された。プランは，北側は広く，南側は狭い構造である。南側半分には，人頭大から拳大の礫が集中しており，礫の下からも遺物が出土する。北側底面に焼土の広がりが確認でき，周辺に炭化物が出土した。埋土は，２層に分層できた。それぞれ15～20㎝程度の厚さである。

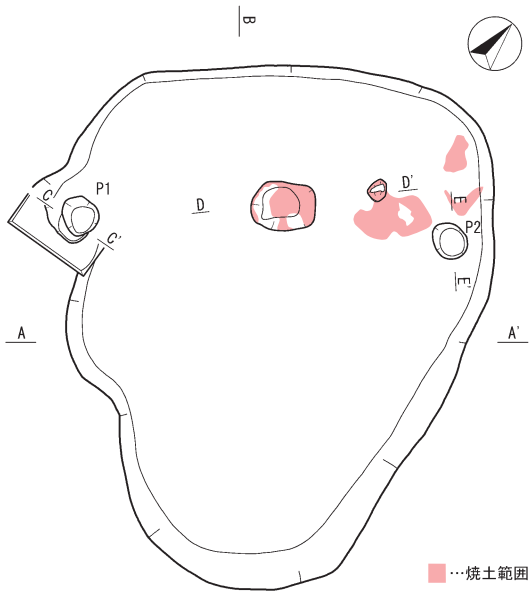
①層からは，小片を中心に多くの土器片が出土した。②層との境目付近からは，大きめの破片が集中して出土した。遺構の中央部付近にまとまって出土した状況から，建物が埋没途中で遺物が廃棄され堆積したと想定される。

大きめの土器破片が集中して出土した付近から炭化材が出土したため，そのうち２点の放射性炭化年代測定を実施した。年代値は，炭①から出土した炭化材の年代は，275calAD－346calAD(70.81％)，炭②から出土した炭化材の年代は，156calAD－255calAD(70.81％)弥生時代後期から古墳時代前期に相当する結果となった。

（詳細については第Ⅴ章を参照）



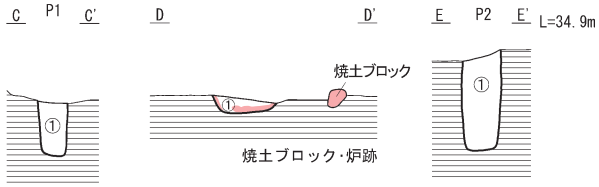

第18図　古墳時代遺構配置図

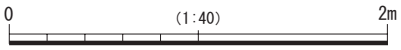



P１　埋土注記
①黒褐色粘質土（10YR3/2）
　しまり強く粘性強い
　白色粒５％,炭化物わずかに含む

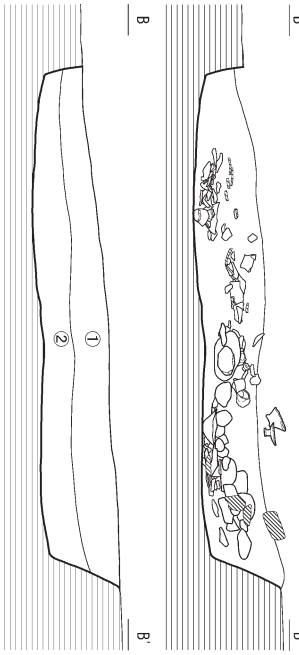
P２　埋土注記
①黒褐色粘質土（10YR3/2）
　しまりやや強く粘性強い
　シラスブロック(10㎝大）５％
　赤色ブロック・白色粒わずかに含む

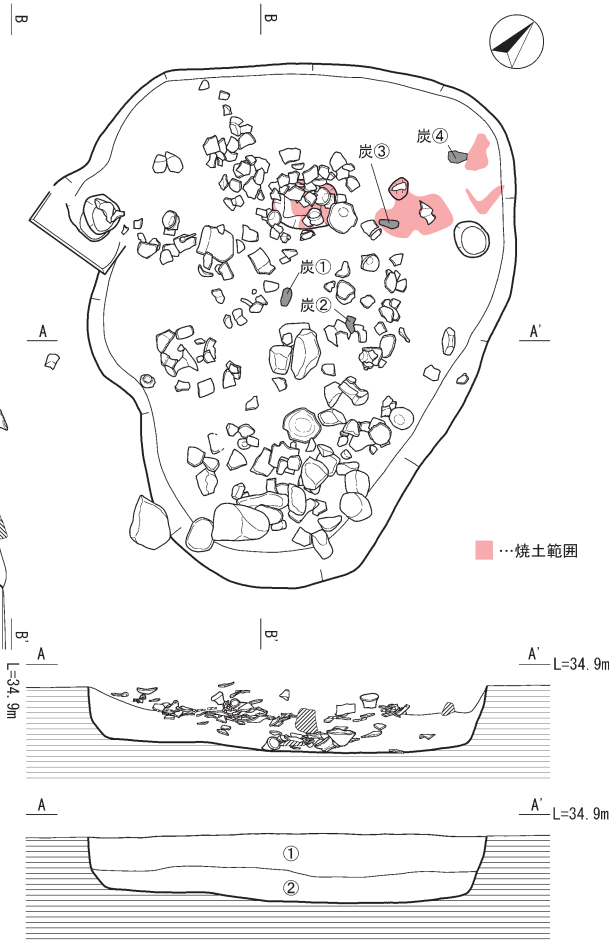
焼土ブロック・炉跡　埋土注記
①黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　しまり強く粘性強い
　１㎝大炭５％,焼土粒10％含む
②黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　しまり強く粘性強い
　Ⅶa層礫50％,炭化物わずかに含む



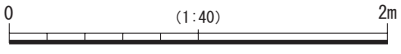




第19図　竪穴建物跡１号

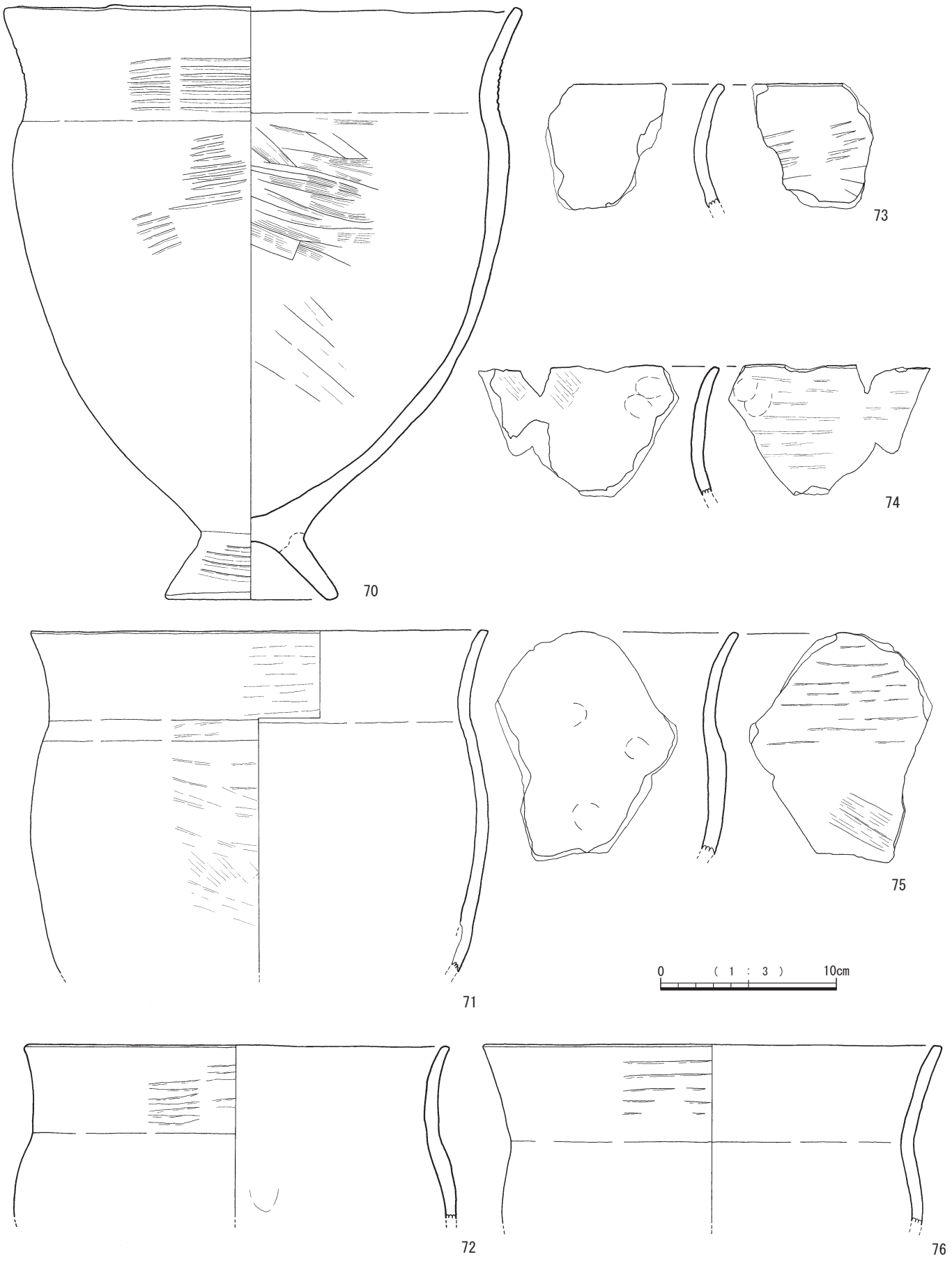


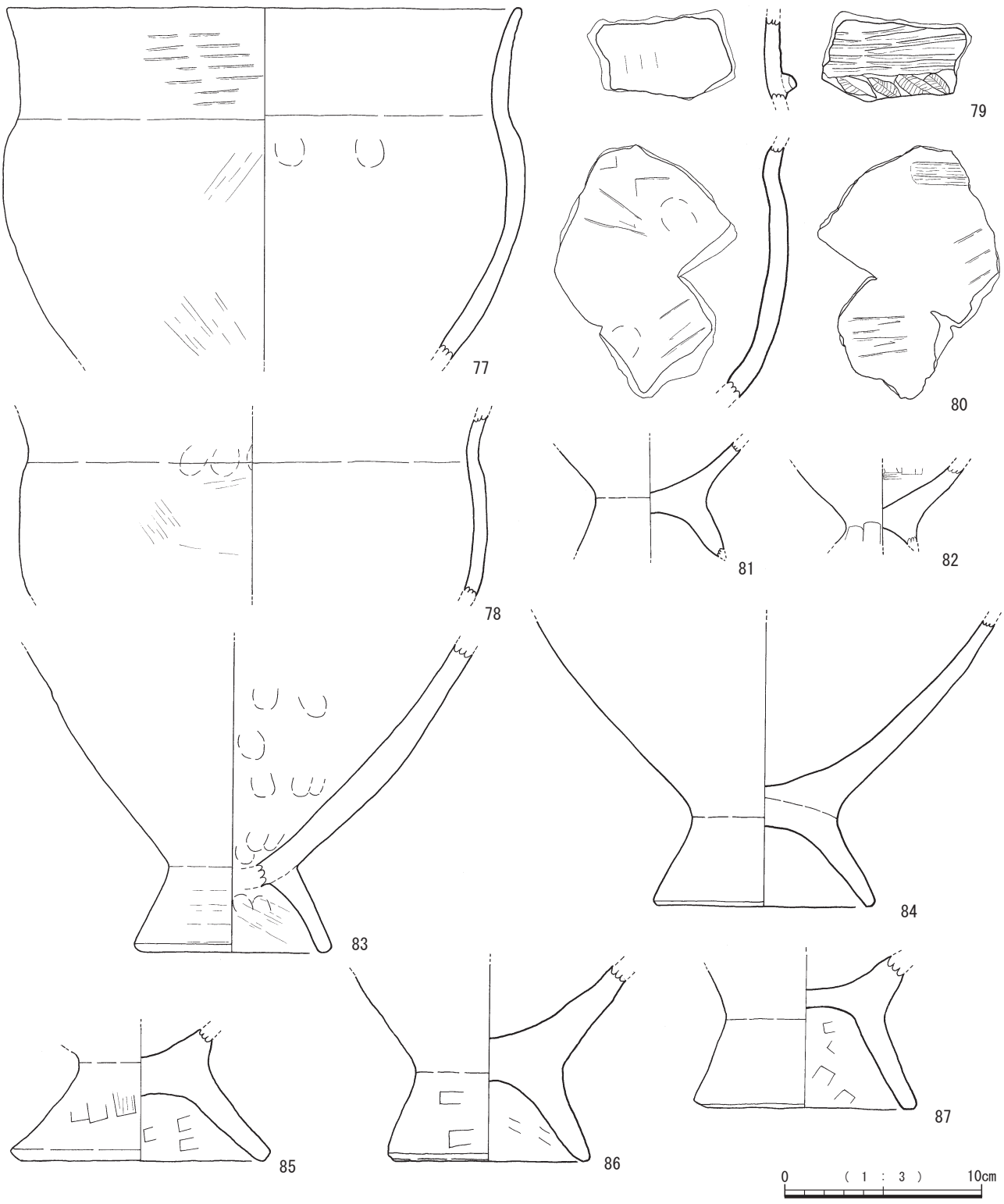

竪穴埋土注記
①にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　しまり強く粘性なし
　白色粒10％,Ⅶa層礫（１～３㎝大）・赤色粒５％含む
②暗褐色粘質土（10YR3/3）
　しまり強く粘性強い
　Ⅶa層礫（１～３㎝大）20％,白色粒５％含む




第20図　竪穴建物跡１号遺物出土状況




第21図　竪穴建物跡１号出土遺物１



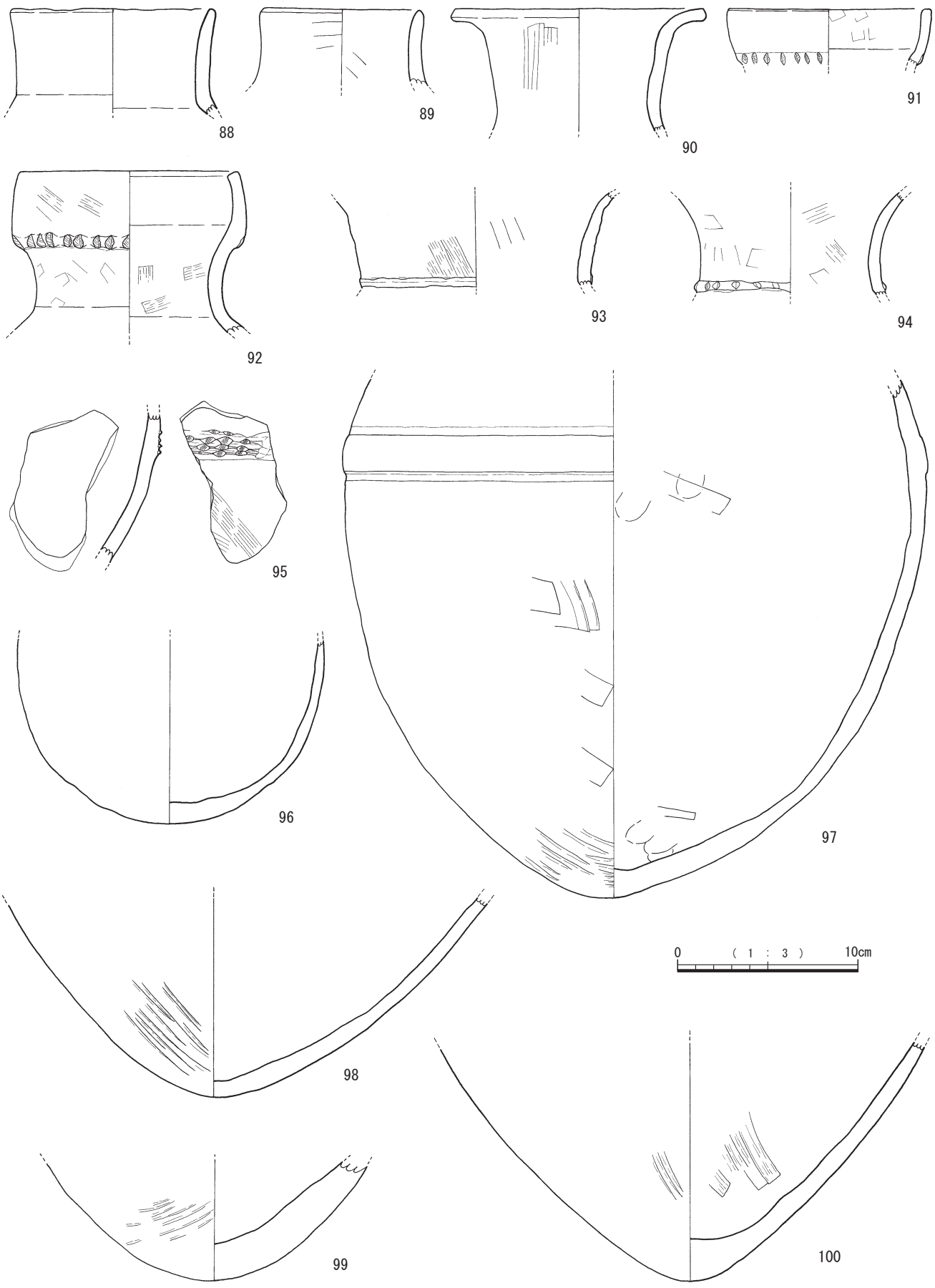

第22図　竪穴建物跡１号出土遺物２

**出土遺物（第21 ～ 25図　70 ～ 122）**

遺物は，約300点以上の土器片が出土した。主体は，在地系の東原式段階の土器片である。摩耗した小片のものが多いが，甕・高坏の脚部や杓子形土製品など，当時の形を良好に残した土器片も出土した。甕形土器の中には，タタキ痕を有するものが多くあり，六反ヶ丸遺跡（出水市）や山門野遺跡（長島町），堀之内遺跡（薩摩川内市）など北薩地方を中心に類例がみられる。

**甕形土器（第21・22図　70 ～ 87）**

出土した甕形土器は，ほとんどが甕Ａ類の脚台付甕と考えられる。




第23図　竪穴建物跡１号出土遺物３

70はほぼ完形である。口縁部は，直線的でわずかに外反する。頸部は緩く屈曲し，底部付近ですぼまる器形で小さい脚台が付く。全体的に摩滅しており，調整痕は不明瞭であるが，口縁部に横位のタタキ，胴部外側に右上がりのタタキが見られる。内部には，ハケ目調整後ナデ調整が加えられた痕跡が見られる。

71 ～ 80は口縁部から胴部である。71は口縁部が直線状で緩やかに外傾する。口径26㎝である。摩滅しているが，外面にタタキ後ナデ調整を施した痕跡が見られる。72は口縁部がやや外反し，横位のタタキが施されている。胴部と内面は，摩滅している。76は口縁部が直線状にやや外傾している。内外面共に摩滅しているが，外面に横位のタタキ痕がわずかに残る。73 ～ 75は口縁部片である。73の表面は，摩滅しているが外面に一部右上がりのタタキ痕が見られる。74の外面は横位のタタキが施されている。内面にはナデ調整が見られる。内外面の一部に指頭圧痕が見られる。75は肩部が若干短く張る。外面は，タタキ後にナデ調整が施されている。内面は，指頭圧痕が見られる。77の口縁部は，やや外反し，肩部から底部に向けてすぼまる器形と考えられる。口縁部は摩滅しているが，一部に横位のタタキ後にナデ調整を施した部分が見られる。胎土は，やや粒の大きい白い砂を多く含む。78は頸部から胴部である。頸部は，緩く屈曲している。内外面共に摩滅が著しいが，外面に一部ナデ調整と指頭圧痕が見られる。79は胴部に突帯を貼り付けたものである。帯状の粘土紐を横位に貼り付け，斜位に刻目を施したものである。80は頸部である。屈曲は緩く，口縁部は，直線状にやや外傾するものと考えられる。胎土に石英の微粒を多く含む。外面はタタキ後にナデ調整が施されている。内面は指頭圧痕・タタキ痕が見られる。

81 ～ 87は脚台付甕の胴部から底部である。81は内外面共に摩滅している。82は摩滅しているが，一部ナデ調整の痕跡が見られる。83 ～ 87は低い脚部である。脚部は，85が緩やかに開き広がるものの，他は開きが小さく直線状である。83は底径10㎝である。外面は，一部ナデ調整が見られるが摩滅している。内面に指頭圧痕が見られる。84は底径11.2㎝である。摩滅が著しい。85は底径13㎝である。内外面とも工具によるナデ調整によって整形され，その後外面はハケ目調整，内面はナデ調整が見られる。86は底径10.2㎝である。外面は工具ナデ後，ハケ目調整，内面はナデ調整が見られる。87は底径11.2㎝である。外面は，摩滅しているが内面に工具ナデの痕跡が見られる。

**壺形土器（第23図　88 ～ 100）**

88・89は壺Ａ類の口縁部である。頸部から口唇部に向かって直線的にやや外傾する。口唇部は舌状で端部が丸い。88は口径10.4㎝である。内外面共に摩滅している。89は口径９㎝である。大半は，摩滅しているがナデ調整が残る。胎土に２㎜大の白色小石を多く含む。

90・93・94は壺Ｂ類である。90は口径14㎝である。口唇部に向かって大きく外反し，端部がほぼ水平になる角度で開く。摩滅が著しいが，外面の頸部付近に縦位のナデ調整が見られる。93・94は口縁から頸部である。93は摩滅が著しく，残存状況がよくないが，頸部に突帯が見られ一部ナデ調整が見られる。胎土に２㎜大の白色小石を多く含む。94は頸部に帯状の突帯が１条巡り，押圧状の刻みが施されている。外面は，ナデ調整が見られ，内面は，ハケ目調整後にナデ調整が施されている。

91・92は壺Ｃ類の口縁部である。91は口径11㎝である。外面は摩滅が著しい。口縁下部に刺突文が連続して施されている。胎土に２㎜大の白色小石を多く含む。92は口径12㎝である。口縁はわずかに内傾し，やや器壁が厚く，口唇部は明瞭な平坦面をなす。口縁部の屈曲部に浅い押圧状の刻みが施されている。外面はハケ目調整後にナデ調整が施されている。内面はナデ調整である。

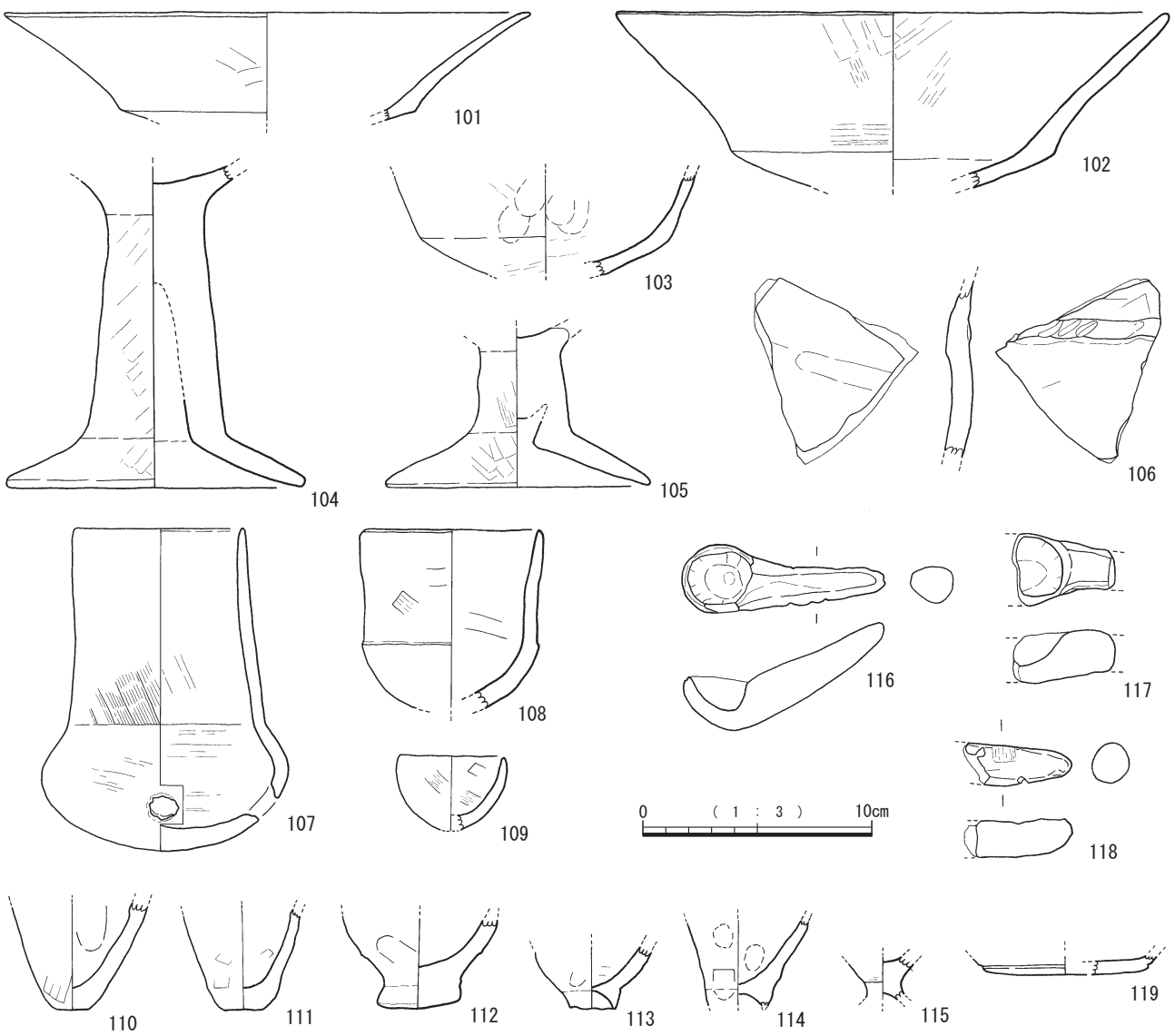
95は胴部である。幅広の粘土突帯を貼り付け，横位に３条の凹線を巡らせて４条の突帯を作っている。その後，押圧状の刻みを斜位に施している。外面は，ハケ目調整後にナデ調整が施されている。

96 ～ 100は底部である。96は丸底の底部である。摩滅が著しい。胎土に白色や灰色の２～５㎜の小石を多く含み，数は少ないが，同程度の大きさの赤色小石も見られる。97は胴部から底部である。摩滅している部分が多いが，胴部に削り出しの突帯が施されている。突帯裏の内面には，指頭圧痕が見られる。外面は，タタキ後にナデ調整が施されている。内面は，指頭圧痕・ナデ調整が見られる。98 ～ 100は尖底に近い底部である。98は胎土に白色の２～５㎜の小石を多く含む。外面に，タタキ痕が明瞭に残っている。内面は，工具ナデ調整が見られる。99は摩滅のため調整痕がほとんど残っていないが，外面に一部タタキ痕が見られる。厚みがある胎土で，白色の２～５㎜の小石を多く含む。100の外面は，摩滅しているが一部タタキ痕が見られる。内面は，工具ナデが施されている。

**高坏形土器（第24図　101 ～ 105）**

101・102は高坏の屈曲部から口縁部へ広く開くタイプである。101は口径23㎝である。外面は，ナデ調整が施されている。胎土は，石英が少なく，２㎜大の白色小石がやや多く含まれている。102は口径24㎝である。口縁部付近は，ほぼ直線的になる。内外面共に，ハケ目調整後，ナデ調整が加えられている。屈曲部外面は，横位のナデ調整がされている。103は坏部である。内外面ナデ調整を施す。

104・105は高坏の脚部である。104は脚部上半が中実になる。内外面共に，ハケ目調整が加えられている。105の脚柱部はやや台形状に開き，屈曲して底部に向か




**第24図　竪穴建物跡１号出土遺物４**

って裾部が広がる。内外面共にハケ目調整後，ナデ調整が加えられている。

**鉢型土器（第24図　106）**

106は鉢の胴部である。摩滅しているが，突帯に刻目が見られる。胎土にやや大粒の灰色小石が含まれる。

**小型丸底壺（第24図　107 ～ 108）**

107・108は小型丸底壺である。107はほぼ完形で口径7.2cm，底径6.5cm，器高14cmである。口縁部が長く直線状に立ち上がり，胴部下半が楕円状に膨らむ。底部は，レンズ状の丸底である。底部に焼成後の穿孔が１か所ある。外面は，ハケ目調整後にナデ調整が施されている。内面はナデ調整を施す。108は器高のやや低い小型丸底壺の口縁から底部である。口径7.6cmである。多くの部分が摩滅しているが，一部ナデ調整が見られる。

**小型土器（第24図　109 ～ 115）**

109 ～ 115は小型土器である。109は丸底のミニチュア鉢である。内外面共にナデ調整が見られる。110 ～ 112は平底を呈するミニチュア鉢である。110は底径1.4cmである。外面はナデ調整が施されている。内面は，指頭圧痕が見られる。111は底径1.6cmである。内外面共にナデ調整が施されている。112は底径3.6cmである。内面に指頭圧痕が見られる。胎土は，色調が灰黄色で他のミニチュア鉢と比較すると石英が少ない。113 ～ 115は脚部を有するミニチュア鉢である。113は底径２cmである。外面に指頭圧痕が見られる。114は底径2.6cmである。内外面共に指頭圧痕が見られる。115は外面にナデ調整が見られる。

### 杓子形土製品・器種不明品（第24図　116 ～ 119）

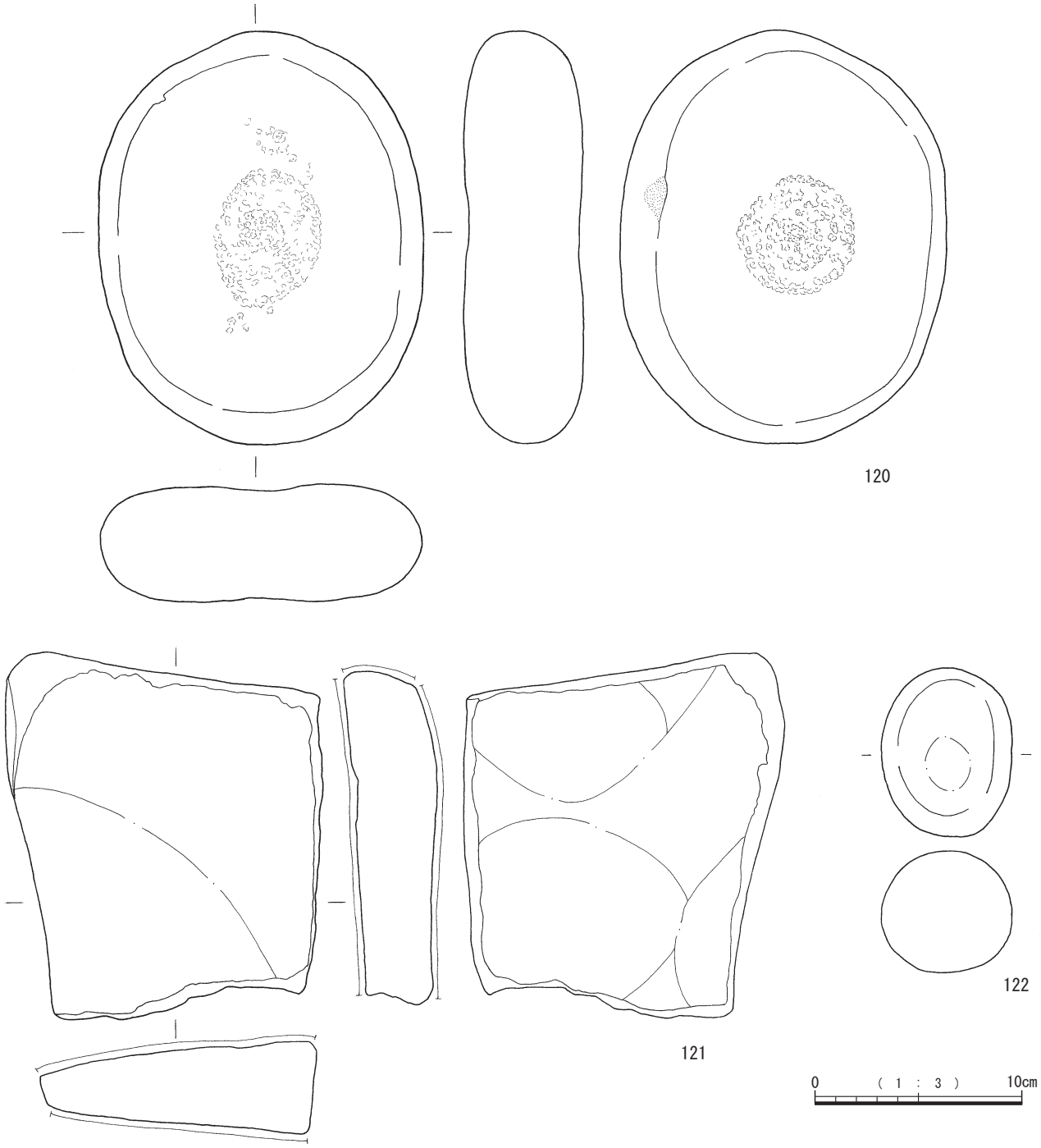
116はほぼ完形の杓子形土製品である。最大長8.7㎝，最大高4.7㎝である。身の部分は円形を呈している。117は杓子形土製品の身部と柄部の接合部分と思われ，116より直線的な形状が考えられる。118は杓子形土製品の柄部と想定される。他の土製品と比較して混和材が少ない。119は器種不明のもので沈線が一条施された底部と考えられる。

### 石製品（第25図　120 ～ 122）

120は安山岩の凹み石である。楕円形を呈し，最大長19.9㎝，最大幅15.6㎝，最大厚5.5㎝，重量は，3020ｇである。中央に打痕による凹みが見られる。121は砂岩の砥石である。表裏と側面の三面において使用した痕跡が見られる。最大長17.8㎝，最大幅15.2㎝，最大厚4.5㎝，重量は，1845ｇである。122は安山岩の磨石である。楕円形を呈し，最大長8.2㎝，最大幅6.3㎝，最大厚5.9㎝，重量は,400ｇである。両面共に使用した痕跡が見られる。

**第６表　竪穴建物跡１号出土遺物　観察表１**

| 挿図番号 | 掲載番号 | 遺構 | 区 | 層 | 種別 | 器種 | 部位 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | 色調 | 胎土 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | | | 石英 | 角閃石 | 灰色礫 | 赤褐色礫 | 白色礫 | |
| 21 | 70 | 竪穴建物跡１号 | E･F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 完形 | 28.6 | 9.8 | 33.6 | 外）タタキ・ナデ<br>内）ハケ目後ナデ | 外）にぶい黄橙<br>内）橙 | △ | △ | ○ | | ○ | |
| | 71 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | 26.0 | － | － | 外）タタキ・ナデ<br>内）摩滅 | 外）にぶい黄橙<br>内）橙 | △ | | △ | ○ | ◎ | 大粒小石 |
| | 72 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | 24.0 | － | － | 外）タタキ<br>内）摩滅 | にぶい黄橙 | △ | △ | | | ○ | |
| | 73 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 口縁 | － | － | － | 外）タタキ<br>内）摩滅 | 外）にぶい褐<br>内）にぶい橙 | ○ | △ | | | ◎ | |
| | 74 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 口縁 | － | － | － | 外）タタキ<br>内）ナデ・指頭圧痕 | にぶい黄褐 | ○ | | | ○ | ◎ | |
| | 75 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 口縁～頸部 | － | － | － | 外）タタキ・ナデ<br>内）指頭圧痕 | 外）灰黄<br>内）暗灰黄 | ○ | | △ | ○ | ○ | |
| | 76 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | 26.0 | － | － | 外）タタキ<br>内）摩滅 | 外）にぶい黄橙<br>内）橙 | △ | △ | | | ○ | |
| 22 | 77 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | 26.0 | － | － | 外）タタキ後ナデ<br>内）指頭圧痕 | 外）橙<br>内）にぶい黄褐 | ○ | △ | ○ | | ◎ | 大粒小石 |
| | 78 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 頸部～胴部 | － | － | － | 外）指頭圧痕<br>内）摩滅 | にぶい黄褐 | ○ | | | ○ | ◎ | |
| | 79 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 外）タタキ・ナデ<br>内）ナデ | 外）赤褐<br>内）明赤褐 | ○ | △ | | △ | ○ | |
| | 80 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 頸部 | － | － | － | 外）タタキ・ナデ<br>内）指頭圧痕・タタキ | 外）にぶい黄褐<br>内）灰黄褐 | ◎ | △ | | ○ | ○ | |
| | 81 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 底部 | － | － | － | 摩滅 | 橙 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 82 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 胴部～底部 | － | － | － | ナデ | 橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 83 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 胴部～底部 | － | 10.0 | － | 外）ナデ<br>内）指頭圧痕 | 外）橙<br>内）黄褐 | ○ | △ | | ○ | ◎ | 大粒小石 |
| | 84 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 胴部～底部 | － | 11.2 | － | 摩滅 | 外）橙<br>内）にぶい褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 85 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 底部 | － | 13.0 | － | 外）工具ナデ<br>内）工具ナデ・ナデ | 橙 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 86 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 底部 | － | 10.2 | － | 外）工具ナデ<br>内）ナデ | 外）橙<br>内）にぶい橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 87 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 甕 | 底部 | － | 11.2 | － | 外）摩滅<br>内）工具ナデ | 外）橙<br>内）浅黄橙 | ○ | △ | | ○ | ○ | |
| 23 | 88 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 口縁 | 10.4 | － | － | 摩滅 | 橙 | ○ | △ | ○ | | ◎ | |
| | 89 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 口縁～頸部 | 9.0 | － | － | ナデ | 橙 | ○ | △ | ○ | | ◎ | 大粒小石 |
| | 90 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 口縁 | 14.0 | － | － | 外）ナデ<br>内）摩滅 | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 91 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 口縁 | 11.0 | － | － | 外）摩滅<br>内）ナデ | 橙 | ○ | △ | | | ◎ | 大粒小石 |
| | 92 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 口縁～頸部 | 12.0 | － | － | ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 93 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 頸部 | － | － | － | ナデ | 橙 | ○ | | ○ | | ◎ | 大粒小石 |
| | 94 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 頸部 | － | － | － | 外）ナデ<br>内）ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ○ | | | | ○ | |
| | 95 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 胴部 | － | － | － | 外）ハケ目後ナデ<br>内）摩滅 | 橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 96 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 底部 | － | － | － | 摩滅 | 橙 | ○ | △ | ○ | ○ | ◎ | 大粒小石 |
| | 97 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 胴部～底部 | － | － | － | 外）タタキ・ナデ<br>内）ナデ・指頭圧痕 | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 98 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 底部 | － | － | － | 外）タタキ<br>内）ナデ | 外）明赤褐<br>内）橙 | ○ | △ | ○ | | ◎ | 大粒小石 |
| | 99 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 底部 | － | － | － | 外）タタキ・ナデ<br>内）摩滅 | 橙 | ○ | △ | | | ◎ | 大粒小石 |
| | 100 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 壺 | 底部 | － | － | － | 外）タタキ<br>内）工具ナデ | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | 大粒小石 |




第25図　竪穴建物跡１号出土遺物５

第７表　竪穴建物跡１号出土遺物　観察表２

| 挿図番号 | 掲載番号 | 遺構 | 区 | 層 | 種別 | 器種 | 部位 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | 色調 | 胎土 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | | | 石英 | 角閃石 | 灰色礫 | 赤褐色礫 | 白色礫 | |
| 24 | 101 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 高坏 | 坏部 | 23.0 | — | — | 外）ナデ<br>内）摩滅 | 橙 | △ | | | | ◎ | |
| | 102 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 高坏 | 坏部 | 24.0 | — | — | ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 103 | 竪穴建物跡１号 | E・F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 高坏 | 坏部 | — | — | — | ナデ・指頭圧痕 | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 104 | 竪穴建物跡１号 | E・F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 高坏 | 脚部 | — | 13.1 | — | ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 105 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 高坏 | 脚部 | — | 11.6 | — | ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 106 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 鉢 | 胴部 | — | — | — | 外）ナデ<br>内）指ナデ | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | 大粒小石 |

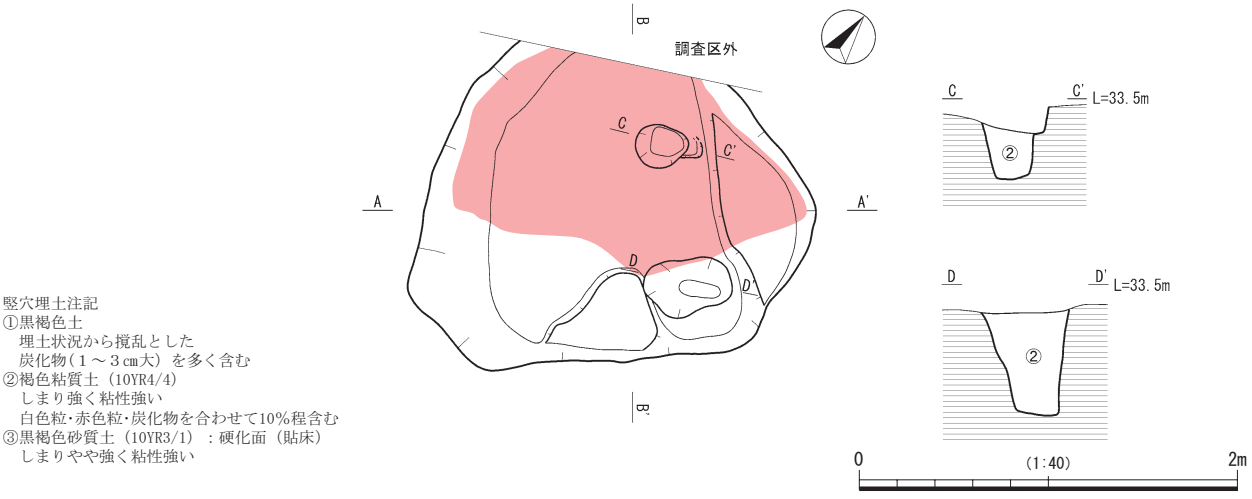
第８表　竪穴建物跡１号出土遺物　観察表３

| 挿図番号 | 掲載番号 | 遺構 | 区 | 層 | 種別 | 器種 | 部位 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | 色調 | 胎土 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | | | 石英 | 角閃石 | 灰色礫 | 赤褐色礫 | 白色礫 | |
| 24 | 107 | 竪穴建物跡１号 | E･F-20 | Ⅲｂ | 土器 | 小型丸底壺 | 完形 | 7.2 | 6.5 | 14.0 | 外）ハケ目後ナデ<br>内）ナデ | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 108 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 小型丸底壺 | 口縁～底部 | 7.6 | － | － | ナデ | 外）明赤褐<br>内）橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 109 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | ミニ鉢 | 口縁～底部 | 4.6 | － | － | ナデ | 外）橙<br>内）にぶい橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 110 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | － | 1.4 | － | 外）ナデ<br>内）指頭圧痕 | 橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 111 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | － | 1.6 | － | 外）ナデ<br>内）摩滅 | 明赤褐 | ○ | △ | △ | | ◎ | |
| | 112 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | － | 3.6 | － | 外）指頭圧痕・摩滅<br>内）指頭圧痕 | 灰黄 | △ | △ | | | ○ | |
| | 113 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | － | 2.0 | － | 外）摩滅<br>内）ナデ | 外）橙<br>内）明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 114 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | － | 2.6 | － | 外）ナデ・指頭圧痕<br>内）指頭圧痕 | 褐灰 | ○ | △ | | | △ | |
| | 115 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 土器 | ミニ鉢 | 底部 | － | － | － | 外）ナデ<br>内）摩滅 | にぶい黄橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 116 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 杓子 | 完形 | 最大幅 3.0 cm<br>最大長 8.8 cm | | 4.7 | 摩滅 | 橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 117 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 杓子 | 身 | － | － | － | 摩滅 | 橙 | ○ | | ○ | | ○ | |
| | 118 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 杓子 | 柄 | － | － | － | 外）摩滅 | にぶい赤褐 | △ | | | | △ | |
| | 119 | 竪穴建物跡１号 | E-20 | Ⅲｂ | 土器 | 不明 | 底部 | － | － | 7.2 | 摩滅 | 褐灰 | ○ | | | | ○ | |
| 25 | 120 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 石器 | 凹石 | 最大長 19.9 cm，最大幅 15.6 cm，最大厚 5.5 cm，重量 3020.0 ｇ，安山岩 | | | | | | | | | | | |
| | 121 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 石器 | 砥石 | 最大長 17.8 cm，最大幅 15.2 cm，最大厚 4.5 cm，重量 1845.0 ｇ，砂岩 | | | | | | | | | | | |
| | 122 | 竪穴建物跡１号 | F-20 | Ⅲｂ | 石器 | 磨石 | 最大長 8.2 cm，最大幅 6.3 cm，最大厚 5.9 cm，重量 400.0 ｇ，安山岩 | | | | | | | | | | | |

（２）竪穴建物跡２号（第26・27図）

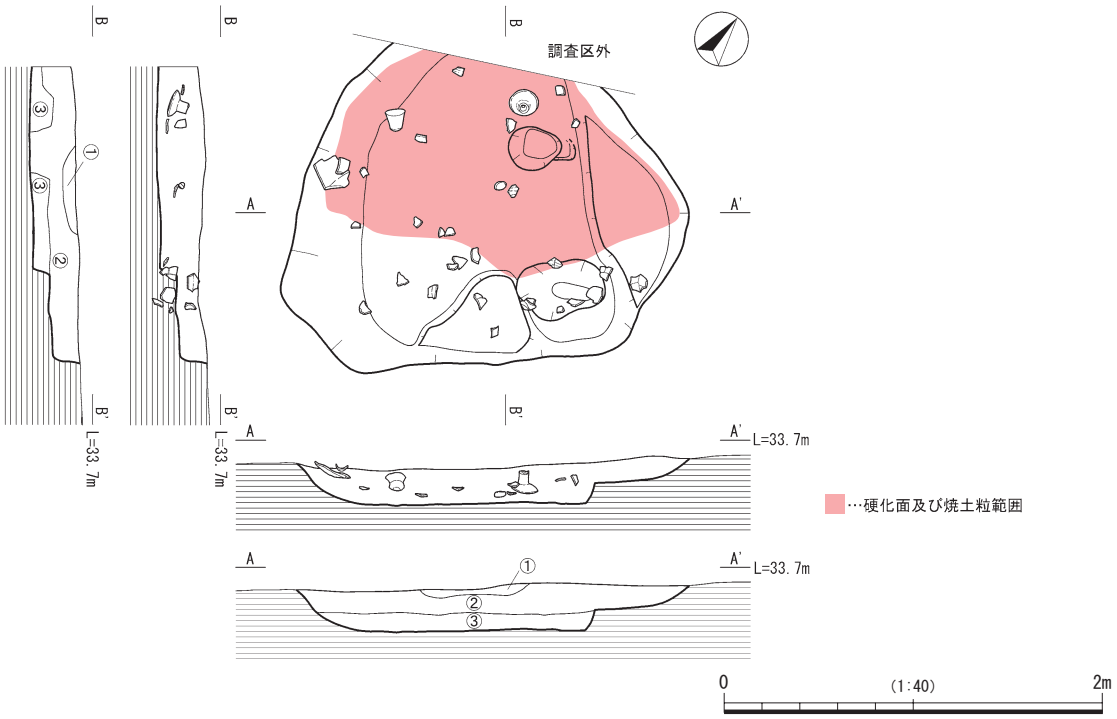
Ｄ－20区，Ⅵa層上面で検出した。平面形は，不定形で長軸210㎝×短軸163㎝を測る。深さは約30㎝で二段構造をもつ。柱穴は，北側に２基検出した。竪穴建物跡１号と同様に，上段部分が削平され，中・下段部分が残存した可能性がある。北西側は，調査区外であり確認できなかったが，平面形が狭くなる構造が想定される。床面に近いと考えられる下段の北西側を中心に，硬化面（③層）が広がり焼土粒が出土した。③層は貼床の可能性がある。炉の可能性がある場所は，明確に確認できなかった。

埋土は，計３層に分層できた。床面まで土器片が複数




竪穴埋土注記
①黒褐色土
　埋土状況から撹乱とした
　炭化物（１～３㎝大）を多く含む
②褐色粘質土（10YR4/4）
　しまり強く粘性強い
　白色粒・赤色粒・炭化物を合わせて10％程含む
③黒褐色砂質土（10YR3/1）：硬化面（貼床）
　しまりやや強く粘性強い

第26図　竪穴建物跡２号




第27図　竪穴建物跡２号遺物出土状況

枚の埋土で堆積している状況から，①②層は自然埋没と想定される。柱穴の平面形は20 ～ 50cmの楕円形，深さは30 ～ 60cmである。埋土は単層であった。

### 出土遺物

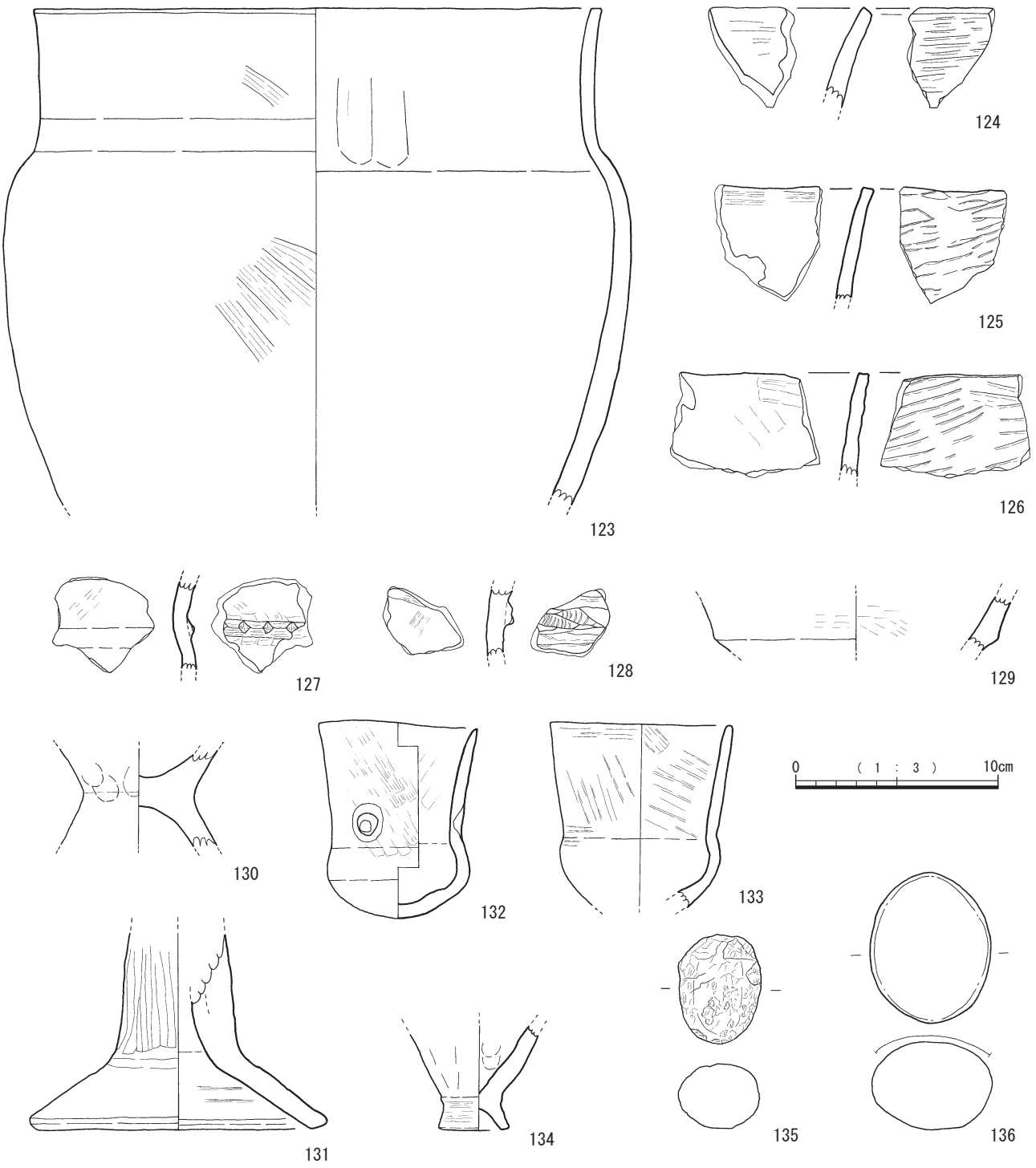
遺物は，小型丸底壺が完形に近い状態で出土した。形の特徴から，東原式段階のものと考えられる。その他にも高坏の脚部や甕の破片などが出土した。

### 甕形土器（第28図　123 ～ 128）

123は甕Ａ類の口縁部から胴部である。口縁部は，直線的でわずかに外傾する。頸部は，緩く屈曲し，底部に向けてすぼまる器形である。口径28cmである。外面は，ハケ目調整後，ナデ調整が加えられている。内面は，指

第９表　竪穴建物跡２号出土遺物　観察表

| 挿図番号 | 掲載番号 | 遺構 | 区 | 層 | 種別 | 器種 | 部位 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | 色調 | 胎土 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | | | 石英 | 角閃石 | 灰色礫 | 赤褐色礫 | 白色礫 | |
| 28 | 123 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | 28.0 | — | — | 外）ハケ目後ナデ<br>内）指ナデ | 橙 | ○ | △ | ○ | ○ | ○ | |
| | 124 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 甕 | 口縁 | — | — | — | 外）タタキ<br>内）ナデ | 外）にぶい黄褐<br>内）にぶい黄橙 | ○ | △ | △ | | | |
| | 125 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 甕 | 口縁 | — | — | — | 工具ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 126 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 甕 | 口縁 | — | — | — | 外）タタキ<br>内）ナデ | 外）赤褐<br>内）明赤褐 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 127 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 甕 | 頸部 | — | — | — | ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | 刻目突帯 |
| | 128 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 甕 | 頸部 | — | — | — | 外）タタキ<br>内）ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 129 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | カクラン | 土器 | 壺 | 口縁 | 14.0 | — | — | ナデ | 橙 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 130 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 小型甕 | 脚部 | — | — | — | 指頭圧痕・ナデ | 橙 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 131 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | カクラン | 土器 | 高坏 | 脚部 | — | 14.5 | — | 外）ミガキ・ナデ<br>内）ナデ | 明赤褐 | ◎ | | ○ | | ○ | |
| | 132 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 小型丸底壺 | 完形 | 7.8 | 4.0 | 9.8 | ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | △ | | ○ | 穿孔未完成 |
| | 133 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 土器 | 小型丸底壺 | 口縁～底部 | 9.0 | — | — | ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ◎ | △ | | | ○ | |
| | 134 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | カクラン | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | — | 3.5 | — | 外）ナデ<br>内）指頭圧痕 | 明赤褐 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 135 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 石器 | 軽石 | 最大長 5.4 cm，最大幅 4.1 cm，最大厚 3.2 cm，重量 12.3 g，軽石 | | | | | | | | | | | | |
| | 136 | 竪穴建物跡２号 | D-20 | — | 石器 | 磨石 | 最大長 7.4 cm，最大幅 5.9 cm，最大厚 4.3 cm，重量 247.2 g，安山岩 | | | | | | | | | | | | |




**第28図　竪穴建物跡２号出土遺物**

ナデ調整が施されている。胎土には，赤色小石を含む。124～126は口縁部片である。124は外面に横位のタタキ，内面はナデ調整が施されている。胎土は，石英の微粒が見られ，他と比較して砂礫が極めて少ない。125は直線的にやや外反する。内外面ともに，工具ナデ調整が施されている。126は直線的に外傾する。外面は，タタキが施されている。内面は，ナデ調整が施されている。

127・128は頸部である。127は断面が三角形の突帯を１条巡らせ，刻目を施している。内外面ともに，ナデ調整が施されている。128は帯状の突帯が１条巡らされてあり，斜位刻みが押圧状に施されている。外面に横位のタタキ，内面はナデ調整が施されている。

**その他の土器（第28図　129 ～ 134）**

129は壺Ｃ類の頸部と考えられる。内外面共に，ナデ調整である。130は小型甕の底部である。外面に指頭圧痕が見られる。131は高坏の脚部である。底径14.5㎝である。脚部は，中空でやや台形状に開き，縦位のケズリ状のミガキ調整が施されている。裾部は屈曲してゆるやかに広がる。胎土には，石英の微小粒を多く含む。

132・133は小型丸底壺である。132はほぼ完形である。口径7.8㎝，底径4.0㎝，器高9.8㎝である。胴部に未貫通の穿孔が見られる。内外面共に，ハケ目調整後，ナデ調整である。133の胎土は，石英の微粒が多く見られる。外面は，ハケ目調整が施されている。内面は，ハケ目で調整後にナデ調整である。134は脚部を有するミニチュア鉢の胴部から底部である。底径は，3.5㎝である。胎土は石英の微粒を多く含む。外面は，ナデ調整が施され，内面には指頭圧痕が見られる。

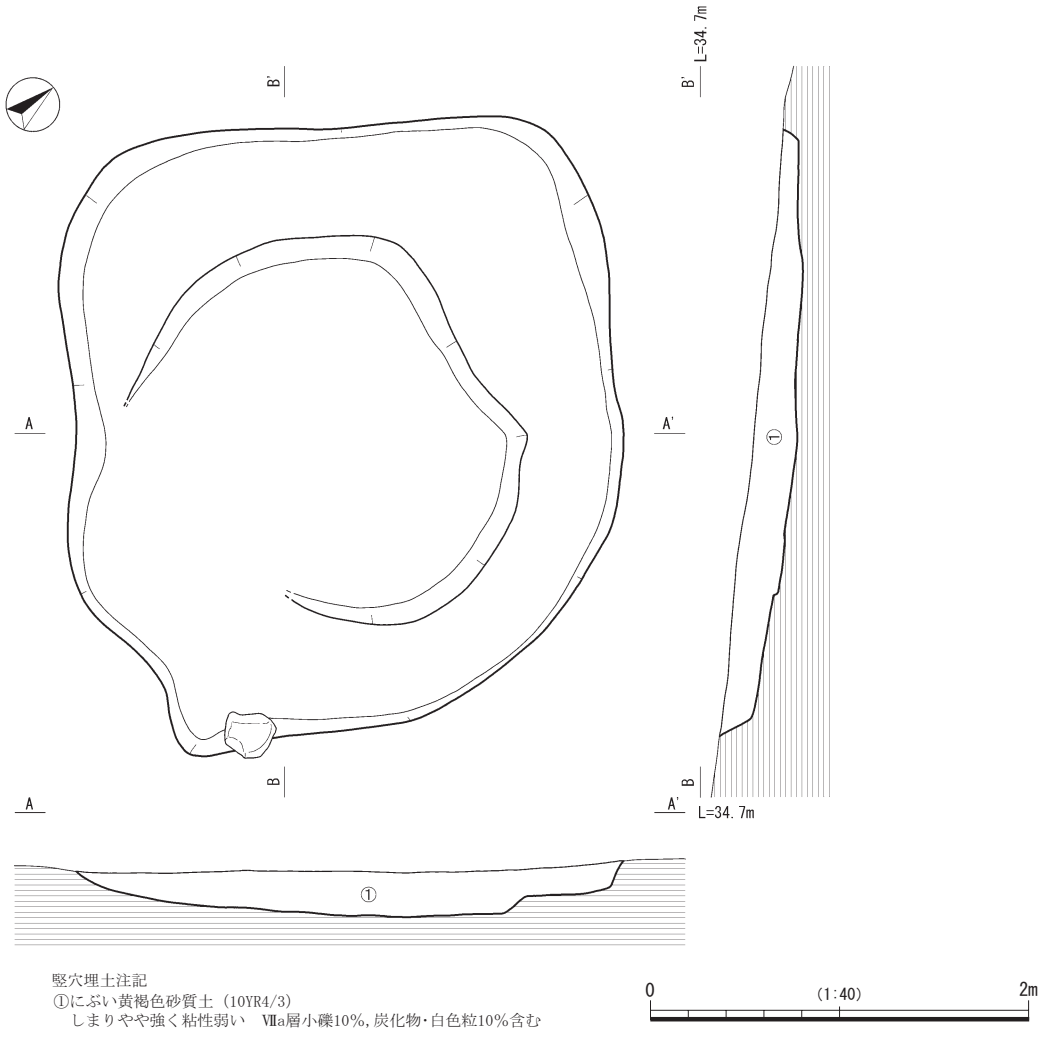
**石製品（第28図　135・136）**

135は軽石製品である。明瞭に擦った形跡は認められないが，形を整えてある。最大長5.4㎝，最大幅4.1㎝，最大厚3.2㎝，重量12.3ｇである。136は安山岩の磨石である。やや楕円形を呈し，使用した痕跡が両面に見られる。最大長7.4㎝，最大幅5.9㎝，最大厚4.3㎝，重量247.2ｇである。

### （３）竪穴建物跡３号

Ｅ－20・21区の傾斜地で検出した。検出面はⅥaからⅦa層である。不定形な隅丸方形で，長軸160㎝×短軸146㎝を測る。深さは約15㎝である。検出面は北側に傾斜し，床面も同様に傾斜する。中央南寄りが１段下がる。炉・柱穴共に確認できていない。他の竪穴建物跡と同様に，上段部分が削平され最下段部分が残存した可能性がある。

出土遺物は確認されなかった。




第29図　竪穴建物跡３号

### ３　包含層出土遺物（第30・31図　137 ～ 172）

古墳時代の遺物は，Ⅱａ～Ⅲ層で多数出土している。基本的な器種組成は，遺構内出土資料とほぼ同じである。接合作業を経て，特徴的なものを図化したが，破片資料が多く完形復元できた資料はなかった。時期は，竪穴建物跡と同じく古墳時代前期に比定されるものがほとんどである。ここでは，その中の主要な遺物を紹介する。

#### 甕形土器（第30図　137 ～ 152）

137 ～ 140・143は甕Ａ類に該当する口縁部である。137は口径25.4㎝である。口縁端部に沈線があり，頸部から口縁にかけてハケで掻き上げた形跡が残る。胎土は，小さな石英の粒を多く含み，１㎜大の白色砂や灰色砂を含む。外面は，赤みの強い色調を呈している。138は口径23.2㎝である。外面は，左上がりのタタキ痕が見られる。内面は，ナデ調整が施されている。胎土は，小さな石英を含み，わずかに灰色小石や角閃石を含む。139・140は口縁部が，直線状に外傾する。139は口径22.0㎝である。口縁は，直線状で大きく外傾する。内面の頸部から口縁部にかけてハケで掻き上げた形跡が残る。胎土は，小さな石英の粒を多く含み，１㎜大の白色砂や灰色砂を含む。外面は，摩滅が著しくやや赤みの強い色調を呈している。140の外面は，摩滅しているが一部ハケ目調整後にナデ調整を施した痕跡が残る。内面は，ハケ目で調整後にナデ調整である。143の内面は，ハケ目調整後に，ナデ調整が施されている。胎土は，小さな石英の粒を含み，小さな赤色小石・灰色小石・角閃石を少量含む。浅黄橙の色調を呈している。

141・142は甕Ｂ類に該当する口縁部である。141は口縁部から胴部である。口径21.8㎝である。口縁は，短く外反する。外面は，胴部にタタキ痕が見られる。胎土は，１～３㎜の赤色砂礫が見られ，小さな石英・灰色小石・角閃石を含む。142は口径22.7㎝である。口縁は，短く外反する。内外面は，ナデ調整が施されている。胎土は，やや大きめの灰色小石が見られ，小さな石英・角閃石を含む。

144 ～ 149は甕の頸部から胴部である。144・146は胎土が141とよく似ている。内外面共にハケ目調整後に，ナデ調整が施されている。１条の突帯が巡り，刻目が施されている。144は胎土に赤色小石が見られ小さな石英を含む。146は胎土に灰色小石が見られ小さな石英を含む。145の外面は，摩滅しているがタタキ痕が見られる。147は綾杉状のタタキ痕が明瞭に残る。胎土は，石英や白色小石を含み，明黄褐色調を呈している。148はタタキ痕が格子状に見られる。胎土に赤色小石を多く含み，浅黄橙色調を呈している。149は甕の頸部から胴部である。頸部に横位の凹線が入る。胴部には，煤が残る。外面は，摩滅するが一部タタキとナデ調整した痕跡が残る。内面は，ナデ調整が見られる。胎土にやや多めの小さな石英の粒や１㎜大の白色及び灰色小石を含み，赤みの強い色調を呈している。

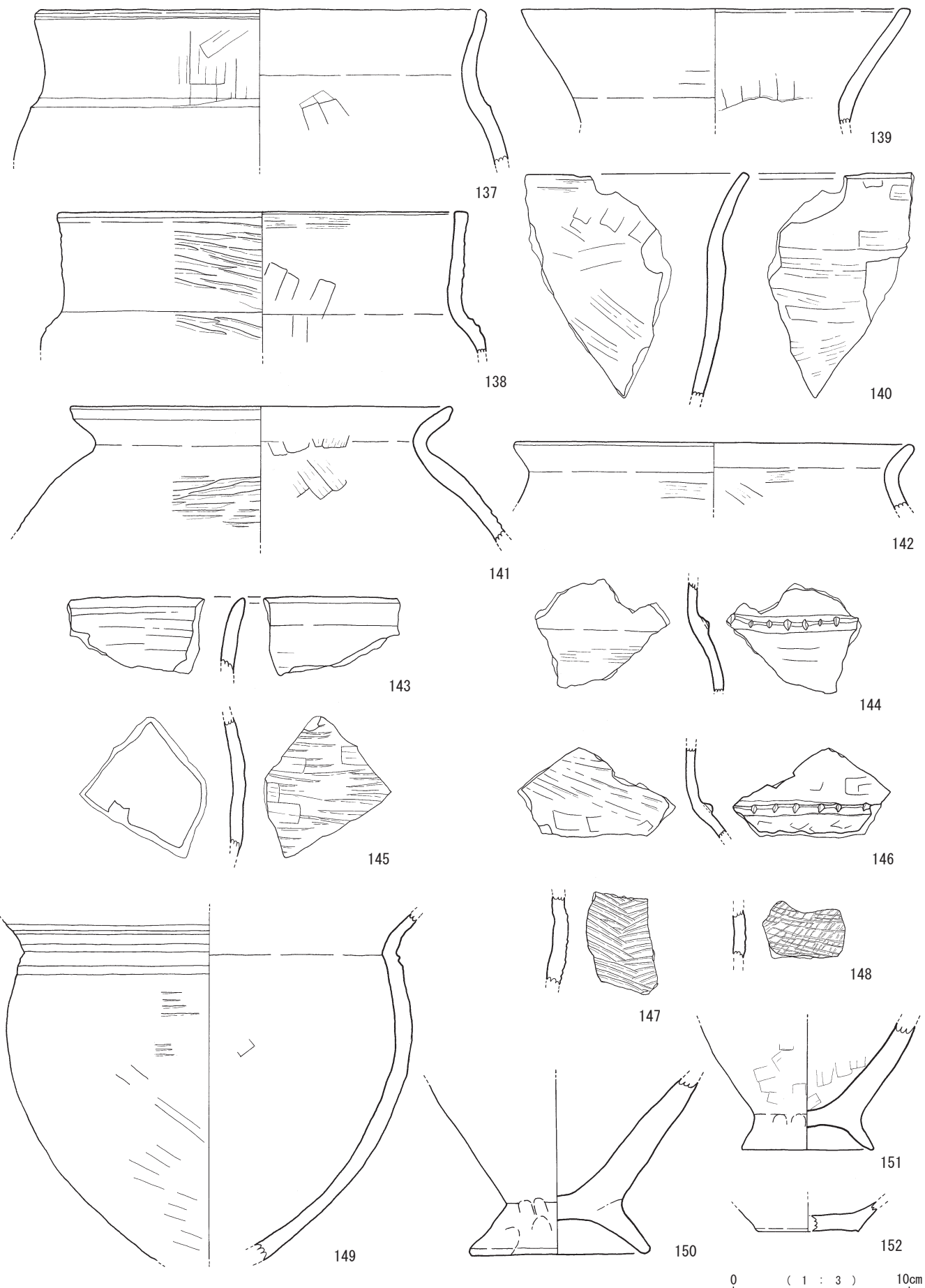
150・151は甕の底部である。150は底径10.2㎝である。内外面共に，摩滅が著しいが，脚台との境界部分は指頭圧痕が見られる。151は底径7.4㎝である。150と同じく内外面共に，摩滅が著しいが，脚台との境界部分は指頭圧痕が見られる。152は器種不明の底部である。底径は6.0㎝である。胎土は，石英・白色小石と角閃石をわずかに含む。

#### 壺形土器（第31図　153 ～ 164）

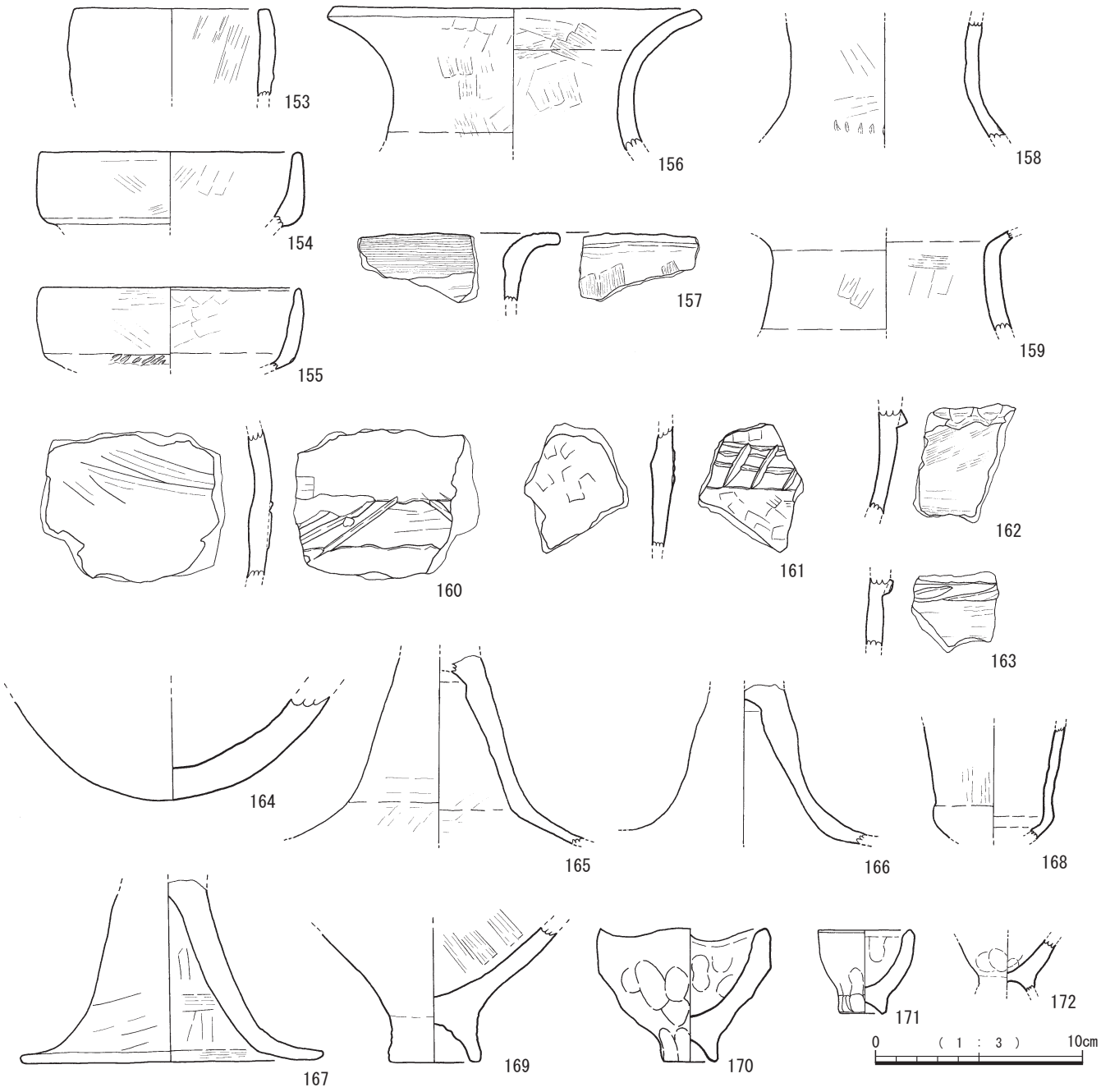
153 ～ 157は壺の口縁部である。153は壺Ａ類に該当する口縁部である。わずかに内湾している。口径8.4㎝である。内外面共に，摩滅が著しい。胎土にやや多めの小さな石英の粒や１㎜大の白色及び灰色小石を含み，赤みの強い色調を呈している。154・155は壺Ｃ類に該当する口縁部と考えられる。154の口唇部は，やや丸みを帯びている。内外面共に，ハケ目で調整されている。155は頸部に刻目が施されている。内外面共に，ハケ目で調整後，ナデ調整が加えられている。156・157は壺Ｂ類に該当する口縁部である。156は口縁部がラッパ状に開く。口径18.0㎝である。内外面共に，ハケ目で調整後，ナデ調整が加えられている。胎土に石英や白色小石の小さな粒を多く含み，黄褐色調を呈している。157は口縁部が大きく外反する。口唇部は，平坦面をなし筋状の調整がある。外面は，ミガキ調整が施されている。内面は，工具でナデ調整が加えられている。胎土に石英や白色小石の小さな粒を含み，褐色調を呈している。

158・159は壺の頸部である。158は摩滅によって一部しか残存していないが，下部に刻目が施されている。外面は，ナデ調整がされている。159は内外面共に，摩滅によりやや荒れているが，部分的に横位のハケ目調整が残存している。その後，ナデ調整が加えられている。胎土にやや多めの小さな石英の粒や１㎜大の白色小石及び灰色小石を含み，赤みの強い色調を呈している。

160・161は壺の胴部と考えられる。160は帯状の突帯に「ハ」字状に刻目を施す。胎土は，小さな石英の粒を多く含み，白色小石・角閃石を含むが少ない。やや赤みの強い色調を呈している。161は突帯に２条の横沈線を引いた後，斜位の刻みを施している。胎土は，小さな石英の粒を多く含み，白色小石・角閃石を含むが少ない。赤みの強い色調を呈している。162は丸みを帯びた粘土紐を１条貼り付け，その上に押圧状の刻みを施している。外面は，斜位のハケ目が残っている。胎土は，大粒の白色小石や灰色小石が見られる。163は貼り付けた粘土紐に右上がりの棒状の押圧刻みを施している。外面は，ナデ調整がされている。胎土にやや多めの小さな石英の粒や１㎜大の白色及び灰色小石を含み，赤みの強い




第30図　古墳時代包含層出土遺物１




**第31図　古墳時代包含層出土遺物２**

色調を呈している。

164は壺の底部である。ほぼ丸底に近い。内外面共に摩滅している。胎土にやや多めの小さな石英の粒や１㎜大の白色及び灰色小石を含み，赤みの強い色調を呈している。

**高坏形土器（第31図　165 ～ 167）**

165 ～ 167は高坏の脚部である。脚柱部から端部にむかって緩やかに開く。165は内外面共に摩滅している。胎土に３～４㎜大の白色や赤色の礫を含む。166は内外面共に摩滅している。胎土に３～４㎜大の白色小石を含む。167は底径14.6㎝ある。内外面共にナデ調整が施されている。

**その他の土器（第31図　168 ～ 172）**

168は小型丸底壺の胴部である。内外面にナデ調整が施されている。胎土は石英が少なく２㎜大の白色小石が多く混ざる。169 ～ 172はミニチュア鉢である。169は底径4.4㎝である。外面は摩滅している。内面にハケ目調整が見られる。胎土には，石英の微粒が多く見られる。170は口径8.0㎝，底径2.6㎝，器高6.4㎝である。摩滅が著しく指頭圧痕が一部残る。胎土には５㎜大の灰色小石が混ざる。171は口径4.6㎝，底径2.2㎝，器高4.0㎝ある。外面にナデ調整，内面にナデ調整が施されている。172は内外面にナデ調整が施されている。胎土に２㎜大の赤色小石がわずかに混ざる。

## 第 10 表　包含層出土遺物　観察表

| 挿図番号 | 掲載番号 | 遺構 | 区 | 層 | 種別 | 器種 | 部位 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | 色調 | 胎土 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | | | 石英 | 角閃石 | 灰色礫 | 赤褐色礫 | 白色礫 | |
| 30 | 137 | 包含層 | H・I-23・24 | Ⅱb下 | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | 25.4 | — | — | 外）ハケ目後ナデ<br>内）ナデ | 橙 | ◎ | △ | | | ○ | |
| | 138 | 包含層 | G-35 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 口縁 | 23.2 | — | — | 外）タタキ<br>内）ナデ | 外）にぶい黄橙<br>内）にぶい黄橙 | ○ | △ | ○ | | | |
| | 139 | 包含層 | H・I-24・25 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 口縁 | 22.0 | — | — | 外）摩滅<br>内）ナデ | 外）橙<br>内）明黄褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 140 | 包含層 | I-32 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | — | — | — | ハケ目後ナデ | にぶい橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 141 | 包含層 | H-33 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 口縁～胴部 | 21.8 | — | — | 外）タタキ<br>内）ハケ目後ナデ | にぶい黄橙 | ○ | △ | ○ | ○ | | |
| | 142 | 包含層 | I-26 | Ⅲ | 土器 | 甕 | 口縁 | 22.7 | — | — | 外）ハケ目後ナデ<br>内）ナデ | 浅黄橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 143 | 包含層 | I-25 | Ⅱb下 | 土器 | 甕 | 口縁 | — | — | — | 外）ナデ<br>内）ハケ目後ナデ | 浅黄橙 | ○ | △ | ○ | ○ | | |
| | 144 | 包含層 | I-33 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 頸部 | — | — | — | ハケ目後ナデ | にぶい黄褐 | △ | △ | | △ | △ | 突帯 |
| | 145 | 包含層 | E-18・19 | Ⅲb | 土器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 外）タタキ・ナデ<br>内）摩滅 | 橙 | ○ | | | | ○ | |
| | 146 | 包含層 | I-32 | Ⅲ | 土器 | 甕 | 頸部 | — | — | — | ハケ目後ナデ | 浅黄橙 | ○ | | ○ | | ○ | 突帯 |
| | 147 | 包含層 | H・I-23・24 | Ⅱb下 | 土器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 外）タタキ<br>内）摩滅 | 外）明黄褐<br>内）黄灰 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 148 | 包含層 | I-31 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 外）タタキ<br>内）摩滅 | 浅黄橙 | ○ | △ | ○ | ○ | | |
| | 149 | 包含層 | I-32 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 頸部～胴部 | — | — | — | 外）タタキ・ナデ<br>内）ナデ | 橙 | ◎ | △ | ○ | | ○ | 煤あり |
| | 150 | 包含層 | G-35 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 底部 | — | 10.2 | — | 外）摩滅・指頭圧痕<br>内）摩滅 | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 151 | 包含層 | I-31 | Ⅱb | 土器 | 甕 | 底部 | — | 7.4 | — | 外）ナデ・指頭圧痕<br>内）工具ナデ・ナデ | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 152 | 包含層 | H・I-25 | Ⅱb下 | 土器 | 不明 | 底部 | — | 6.0 | — | 外）工具ナデ<br>内）ナデ | 外）にぶい黄橙<br>内）褐灰 | ○ | | | | ○ | |
| 31 | 153 | 包含層 | I-31 | Ⅱb | 土器 | 壺 | 口縁 | 8.4 | — | — | 摩滅 | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 154 | 包含層 | F-19 | Ⅲb | 土器 | 壺 | 口縁 | 12.6 | — | — | ハケ目 | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 155 | 包含層 | F-19・20 | Ⅲb | 土器 | 壺 | 口縁 | 12.6 | — | — | ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | 刻目突帯 |
| | 156 | 包含層 | H・I-24・25 | Ⅲ | 土器 | 壺 | 口縁 | 18.0 | — | — | ハケ目後ナデ | 明黄褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 157 | 包含層 | I-26 | Ⅲ | 土器 | 壺 | 口縁 | — | — | — | 外）ミガキ<br>内）工具ナデ | 外）にぶい赤褐<br>内）にぶい黄褐 | ○ | △ | | | ○ | |
| | 158 | 包含層 | E-18・19 | Ⅲb | 土器 | 壺 | 頸部 | — | — | — | 外）ナデ<br>内）摩滅 | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | 刻目突帯 |
| | 159 | 包含層 | F-19・20 | Ⅲb | 土器 | 壺 | 頸部 | — | — | — | ハケ目後ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 160 | 包含層 | I-32 | Ⅱb | 土器 | 壺 | 胴部 | — | — | — | 外）ナデ<br>内）ハケ目 | 橙 | ○ | △ | | | △ | 突帯 |
| | 161 | 包含層 | F-18・19 | Ⅲb | 土器 | 壺 | 胴部 | — | — | — | ハケ目後ナデ | 橙 | ○ | △ | | | ○ | 突帯 |
| | 162 | 包含層 | I-29 | Ⅲ | 土器 | 壺 | 胴部 | — | — | — | 外）ハケ目<br>内）摩滅 | 外）橙<br>内）明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | 突帯 |
| | 163 | 包含層 | I-32 | Ⅱb | 土器 | 壺 | 頸部 | — | — | — | 外）ナデ<br>内）摩滅 | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | 突帯 |
| | 164 | 包含層 | E-18 | Ⅲb | 土器 | 壺 | 底部 | — | — | — | 摩滅 | 明赤褐 | △ | △ | ○ | | ○ | |
| | 165 | 包含層 | E-18 | Ⅲb | 土器 | 高坏 | 脚部 | — | — | — | 摩滅 | 明赤褐 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 大粒小石 |
| | 166 | 包含層 | G-35 | Ⅱb | 土器 | 高坏 | 脚部 | — | — | — | 摩滅 | 明赤褐 | △ | △ | △ | | ◎ | 大粒小石 |
| | 167 | 包含層 | G-35 | Ⅱb | 土器 | 高坏 | 脚部 | — | 14.6 | — | ナデ | 明赤褐 | ○ | △ | ○ | | ○ | |
| | 168 | 包含層 | F-19・20 | Ⅲb | 土器 | 小型丸底壺 | 胴部～底部 | — | — | — | ナデ | 橙 | △ | | △ | | ◎ | |
| | 169 | 包含層 | 9T | Ⅱb | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | — | 4.4 | — | 外）摩滅<br>内）ハケ目 | 黄橙 | ◎ | △ | △ | | ○ | |
| | 170 | 包含層 | H-34 | Ⅱb | 土器 | ミニ鉢 | 胴部～底部 | 8.0 | 2.6 | 6.4 | 摩滅・指頭圧痕 | 橙 | ○ | △ | ○ | | ○ | 大粒小石 |
| | 171 | 包含層 | I-31 | Ⅱb | 土器 | ミニ鉢 | 完形 | 4.6 | 2.2 | 4.0 | ナデ | 橙 | ○ | △ | | | △ | |
| | 172 | 包含層 | G -35 | Ⅱb | 土器 | ミニ鉢 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 橙 | ○ | △ | | △ | △ | 大粒小石 |

## 第３節　古代の調査成果

### １　調査の概要

古代の遺物包含層はⅡb層である。古代の遺物は，小片で摩耗したものが多く，中世の遺物と混在した状態で出土している。遺構はⅢ層上面で土坑１基を検出した。出土遺物は，土師器，須恵器，越州窯系青磁がある。

### ２　遺構

#### （１）土坑１号（第33図）

Ⅰ－26区Ⅲ層上面で検出した。南側半分は調査区外に延びるため，全形及び規模は不明である。深さは40㎝程で，掘り込みはⅥ層まで達している。須恵器の甕（176）が埋土①層で，土師器の甕(173)が②層で出土している。

**出土遺物（第33図　173 ～ 177）**

173は埋土②層で出土した土師器の甕である。内面を丁寧に削っているため，器壁が薄い。胎土に角閃石と大粒の長石を含む。製作技法や胎土が他の甕と異なるため搬入品と考えられる。

174は須恵器の甕の胴部片である。175は須恵器の壺の胴部片である。内外面ナデ調整を施す。176は埋土①層で出土した須恵器の甕である。底部は上げ底で，内外面に平行タタキを施す。外面はタタキ後ナデ消しを行い，タタキの痕跡を格子目状に際立たせている。

177は山形に成形された軽石製品である。

### ３　包含層出土遺物

#### （１）土師器（第34 ～ 36図　178 ～ 245）

**①黒色土器（第34図　178 ～ 189）**

小片で摩耗しているため，器種を特定できない資料が多い。

178 ～ 185は黒色土器Ａ類と呼ばれる埦・坏である。内面は黒色を呈しミガキを施す。底部が残存しているものは，すべてヘラによって切り離されている。摩滅，欠損が著しい。

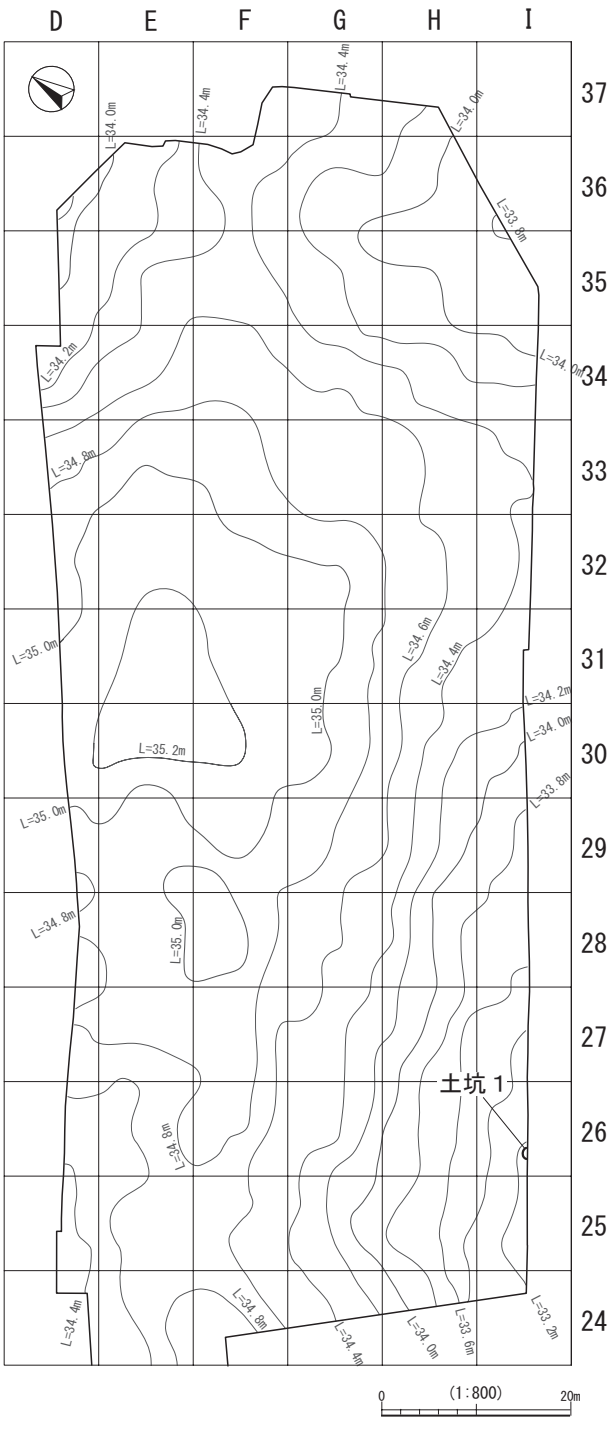
186 ～ 189は黒色土器Ｂ類と呼ばれる埦・坏である。内外面に黒色ミガキを施す。表面の調整は摩耗のため剥げ落ちている。

**②埦・坏（第34図　190 ～ 217，219 ～ 223）**

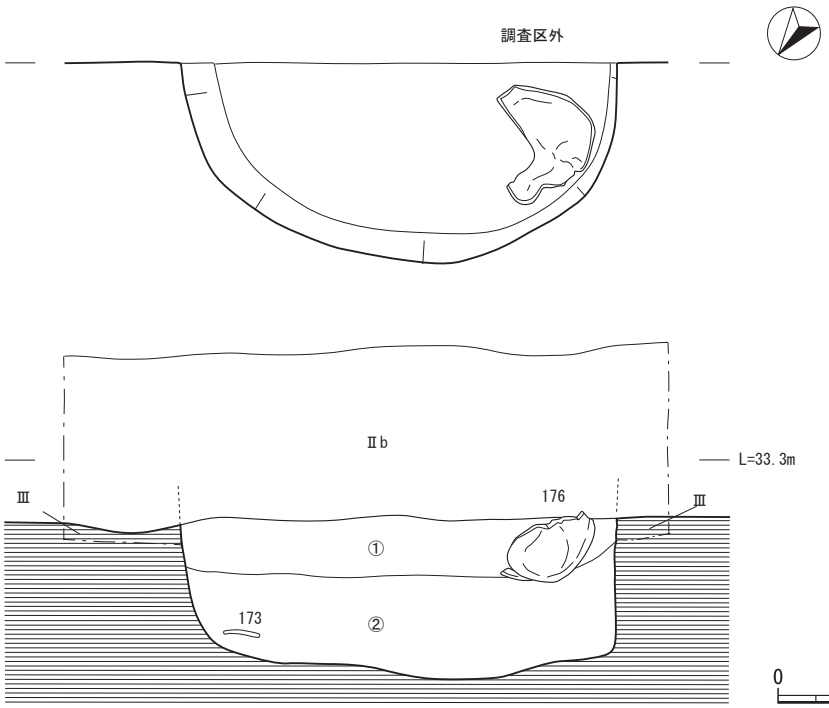
190 ～ 196は埦の底部である。低い高台が外側に向かって開く。191のみ灰白色の胎土を使用している。

197 ～ 217は坏である。器壁の厚さによって２種類に分類できる。197・198は器壁の薄い坏である。体部と底部の厚さがほぼ均一で，全体的に丁寧な調整が施されている。200 ～ 203は，器壁の薄い坏の底部と考えられる。

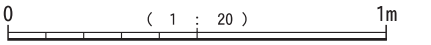
199は器壁の厚い坏である。小型で口縁部は緩やかに外反している。204 ～ 216は，器壁の厚い坏の底部と考




第32図　古代の遺構配置図

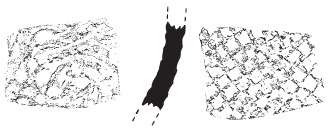



埋土注記
①灰褐色(7.5YR 4/2)砂質土
しまりやや強く,粘性有
炭化物,赤色・白色粒10%含む
Ⅱb層由来の土
②黒褐色(7.5YR 3/2)粘質土
しまりやや強く,粘性有
炭化物,赤色・白色粒10%含む
Ⅲ, Ⅳ層が混在しているような土





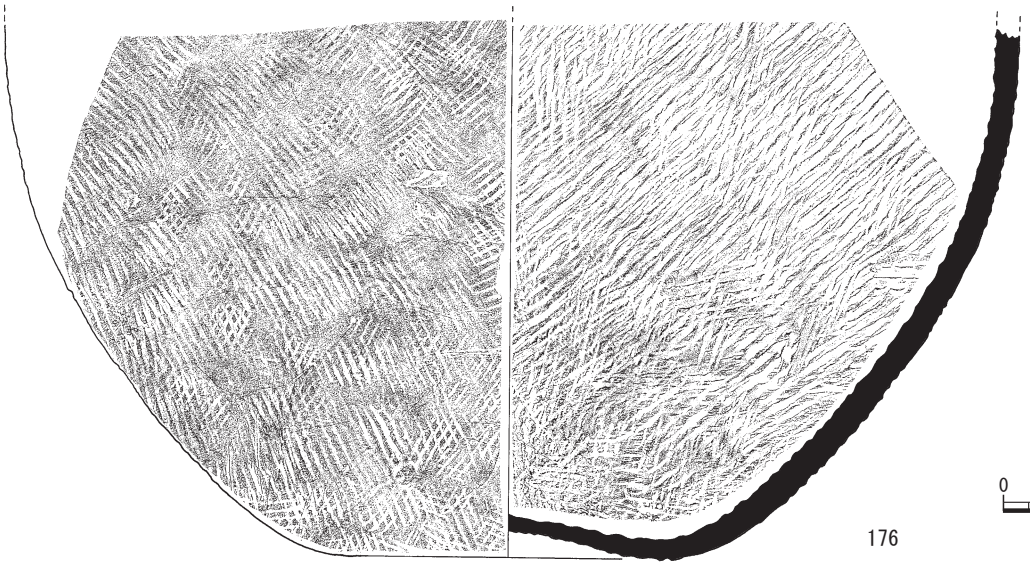

173



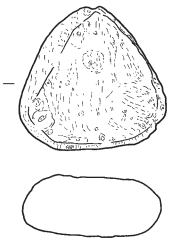
174



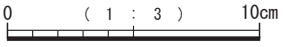
175



176



177




第33図　土坑１号　実測図及び出土遺物

えられる。底が厚く，内面の見込みが凹んでいる。ヘラ切り後の仕上げ調整は雑である。

217は充実高台をもつ坏である。

219 ～ 223は，埦もしくは坏の口縁部である。

### ③ヘラ書き土師器（第34図　218）

218は坏の底部内面にヘラ書きがみられる。書かれている文字は「金」である。文字の書かれた底部は，体部を打ち欠き円形に成形している。外面には煤の付着と籾痕が残る。

### ④甕（第35図　224 ～ 238）

224は口径23.8㎝，器高19.6㎝の甕である。器壁が薄く丁寧な作りで，精良な胎土を使用している。外面はナデ調整，内面は下から上にケズリ調整を施す。製作技法と胎土が他の甕と異なるため搬入品と考えられる。

225～230は口縁部と胴部の境が有段となる甕である。内面にケズリを施しているが，器壁は厚い。外面は粗い横方向のハケ目を施す。胎土に赤色小石，石英，角閃石を含む。

231 ～ 238は口縁部が緩やかに外反する甕である。胴部外面にハケ目，内面にケズリ調整を施している。胎土に赤色小石を含むものがほとんどである。

232は口縁部が短く，内外面ケズリ調整を施す。緻密な胎土を使用している。234は口縁端部に線状の工具痕が残る。233と同一個体の可能性がある。238は太く短い口縁部である。胎土には砂粒を多く含む。

### ⑤皿（第36図　239 ～ 242）

239は高台をもつ皿である。体部は直線的に開く。

240は全形が不明であるが，底径や体部の開きから皿と判断した。241は復元口径14.0㎝，底径9.6㎝，器高2.2㎝の皿である。口縁部は外反し，底部はヘラ切りである。242は復元口径15.3㎝，底径13.0㎝，器高2.5㎝の大型品である。底部の接地面が突出しているため不安定であるが，法量，形態から皿に含めた。

### ⑥鉢，蓋，その他（第36図　243 ～ 245）

243は復元口径22.8㎝，器高7.8㎝の鉢である。底部はヘラ切りで，外面は回転ヨコナデ，内面はハケ目後ナデ調整を施す。胎土は精良である。

244は蓋のつまみである。

245は平底の底部である。端部は工具によって平坦に成形されている。器種の判別は困難である。

## （２）須恵器（第37・38図　246 ～ 267）

246・247は坏である。底部はヘラ切りで内外面に回転ヨコナデ調整を施す。

248は器種不明品である。口縁部外面が浅く凹み，体部下半にケズリ調整を施す。器壁が薄く焼成は堅緻で，色調は明るい青灰色である。古代より古い須恵器の可能性もある。

249 ～ 251は蓋である。内面に磨面が形成されており，硯に転用されている。249は宝珠形のつまみをもち，端部に小さな反りを作っている。250，251はつまみがない蓋である。端部に小さな反りをもつ。

252は径の大きさから高坏の脚部の可能性を考えた。裾の端部が小さく突出している。

253，254は壺の胴部である。253は内外面ナデ調整である。254は外面に平行タタキ，内面にナデ調整を施す。

255 ～ 267は甕の胴部で，外面はタタキ調整，内面に同心円状の当具痕が残る。色調は還元炎焼成特有の青白色が多いが，赤味を帯びた焼成不良品も混じっている。

255は焼成不良のため，胎土の色調が橙色を呈する。外面には褐色の釉がかかっている。258は焼成が悪いため，質感は土師器に近い。261・262は外面にタタキ調整を施した後，一部ナデ消している。

## （３）紡錘車，越州窯系青磁，把手（第38図　268 ～ 270）

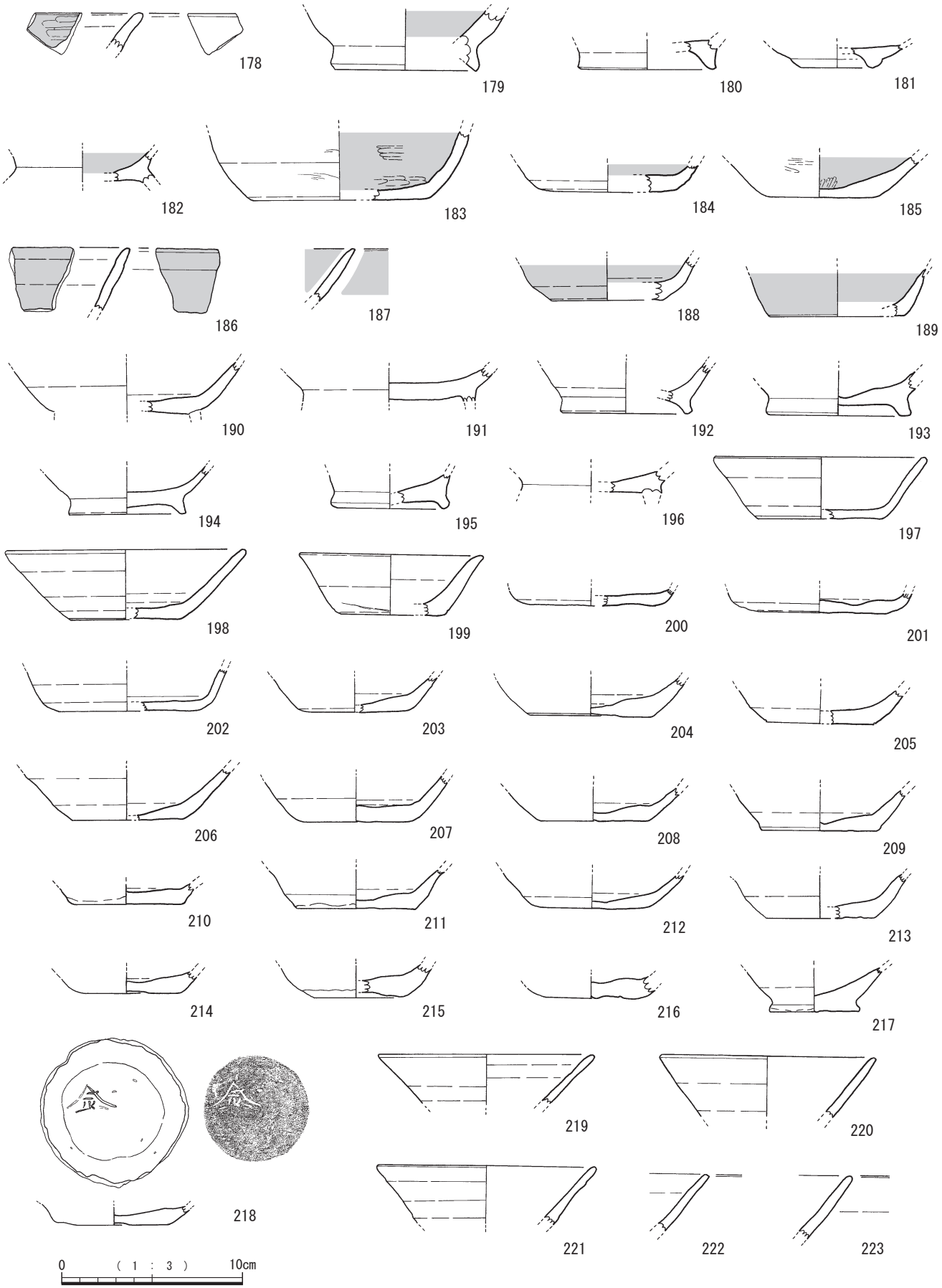
268は土製紡錘車と考えられる。表面は橙色で，精良な胎土を使用している。

269は越州窯系青磁の坏である。復元口径14.0㎝で，口縁部に輪花が１か所残っている。外面には縦方向に刻線がみられ，内面は見込と体部の境に圏線が１条引かれている。表面の釉薬は剥げ落ちている。

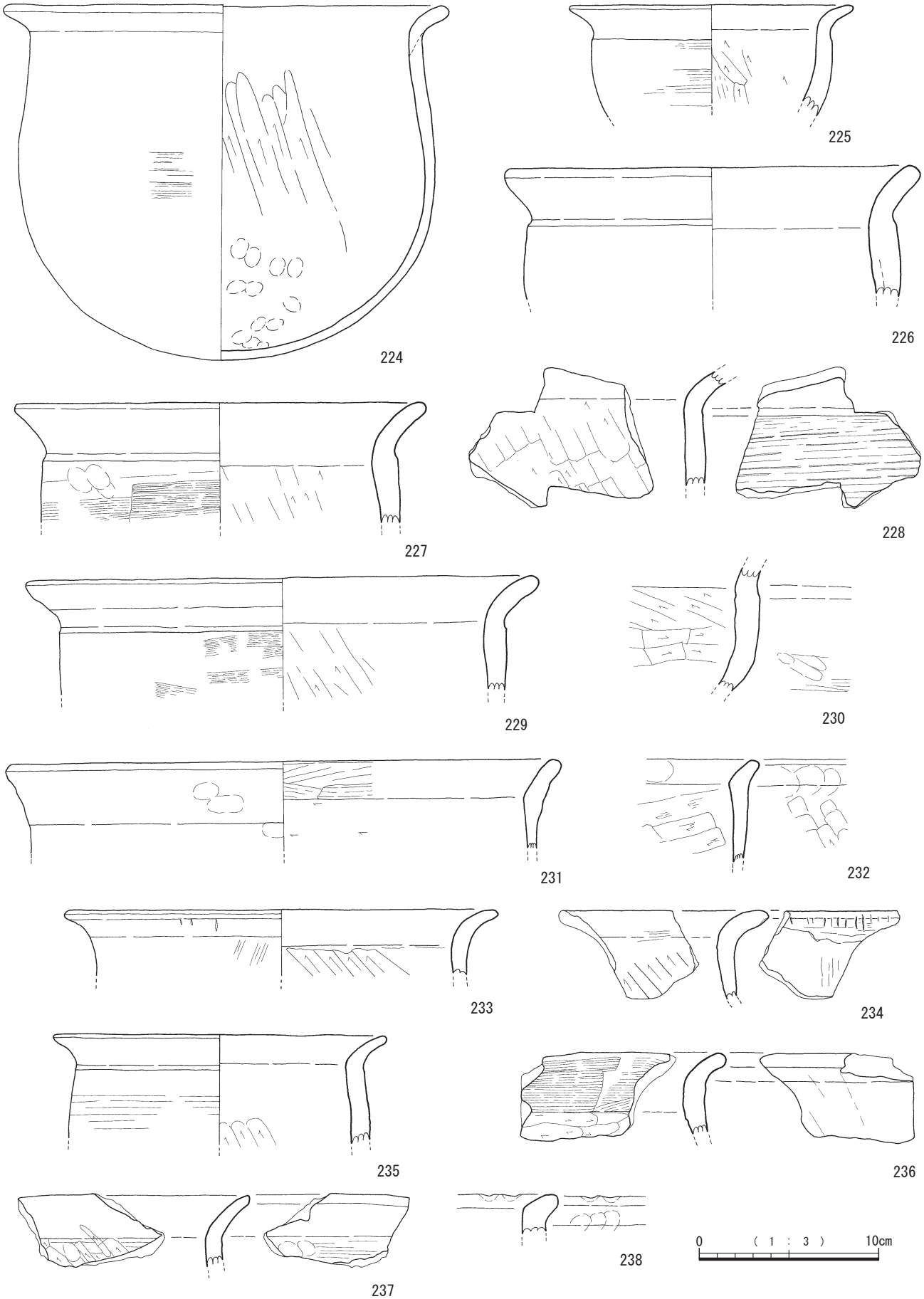
270は土師器の把手である。

**第 11 表　土坑１号出土遺物観察表**

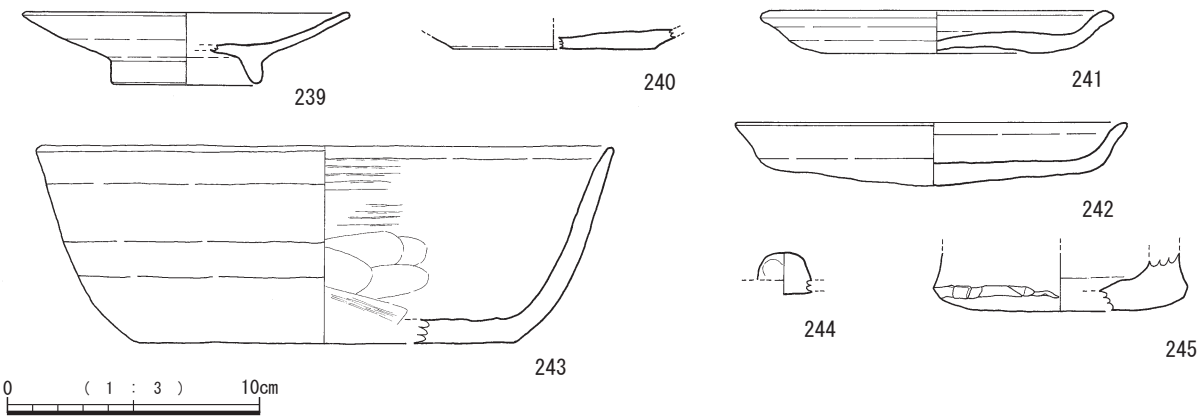
| 挿図番号 | 掲載番号 | 種別 | 器種 | 遺構 | 出土区 | 層 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 33 | 173 | 土師器 | 甕 | 土坑１ | I-26 | Ⅱ | － | － | － | ナデ | ケズリ後ナデ・指頭圧痕 | 明黄褐 | 精良 | |
| | 174 | 須恵器 | 甕 | 土坑１ | I-26 | Ⅱ | － | － | － | 格子目タタキ | 同心円状当具痕 | 黄灰 | 精良 | |
| | 175 | 須恵器 | 壺 | 土坑１ | I-26 | Ⅱ | － | － | － | ヨコナデ | ヨコナデ | 灰白 | 精良 | |
| | 176 | 須恵器 | 甕 | 土坑１ | I-26 | Ⅱb下 | － | － | － | 平行タタキ（一部ナデ消し） | 平行タタキ | 黄灰 | 精良 | |
| | 177 | 石器 | 軽石製品 | 土坑１ | I-26 | Ⅱ | 長さ 5.5 ㎝，幅 3.4 ㎝，厚さ 2.2 ㎝，重量 25 ｇ | | | | | | | |


178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
0 ( 1 : 3 ) 10cm

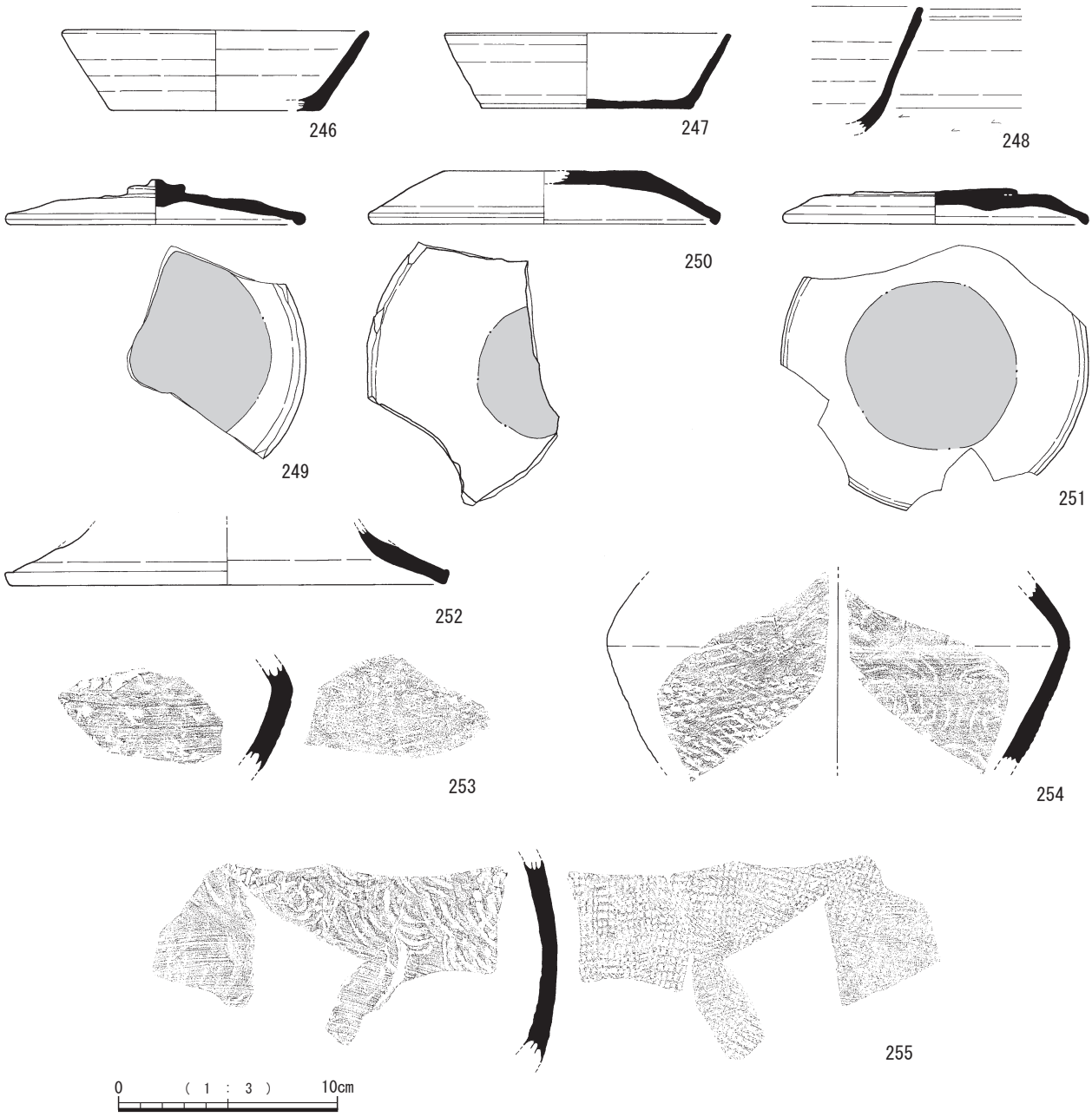
第34図　土師器（埦・坏）


224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
0 ( 1 : 3 ) 10cm

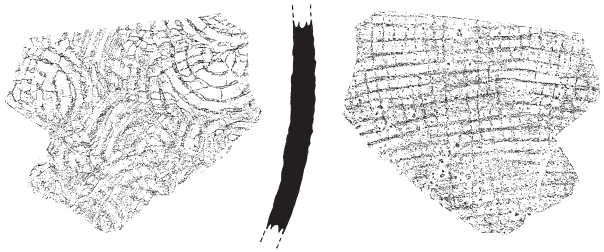
第35図　土師器（甕）

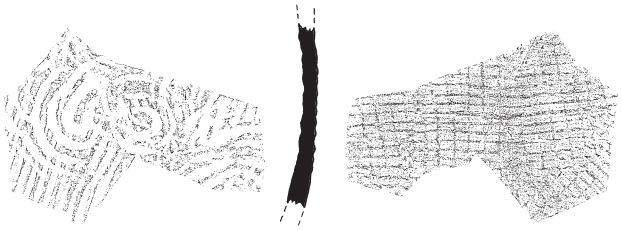


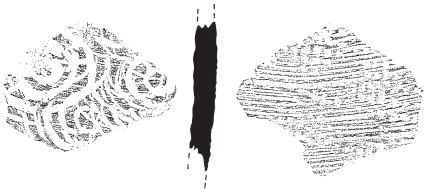

第36図　土師器（皿・鉢・蓋）

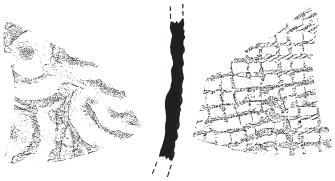


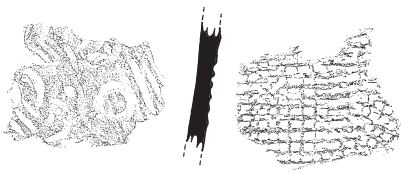

第37図　須恵器


256

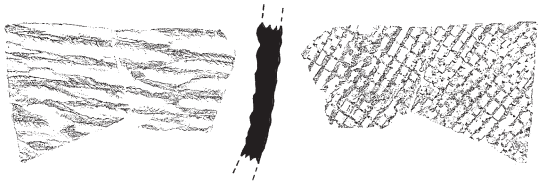

257

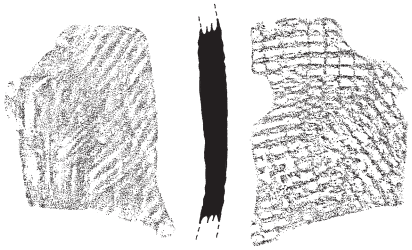

258

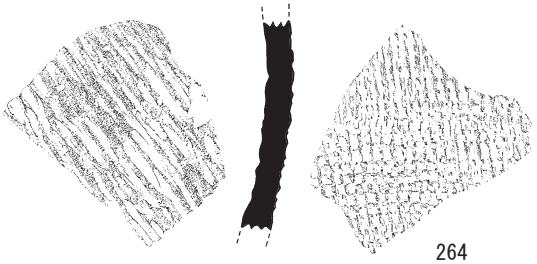

259

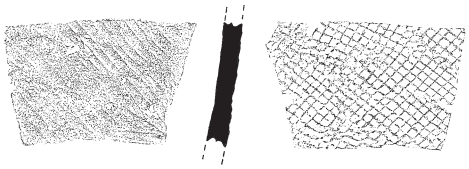

260

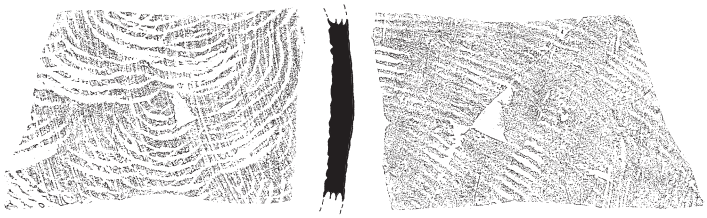

261


262

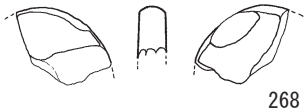

263

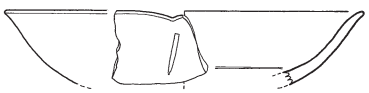

264

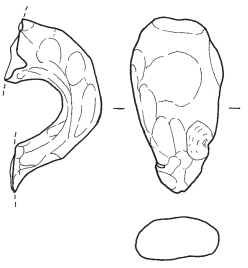

265


266


267


268


269


270

0 ( 1 : 3 ) 10cm

第38図　須恵器・紡錘車・越州窯系青磁

## 第 12 表　土師器観察表

| 挿図番号 | 番号 | 器種 | 出土区 | 層 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 34 | 178 | 坏・埦 | H･I-23･24<br>H･I-24･25 | Ⅱb | － | － | － | 摩滅 | ミガキ | 外）黄橙　内）黒 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 179 | 埦 | H･I-23 | Ⅱb | － | 7.6 | － | 摩滅 | ミガキ | 外）浅黄橙　内）黒 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 180 | 埦 | H-28 | Ⅱb | － | 7.6 | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）淡橙　内）褐灰 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 181 | 埦 | 14T | Ⅱa | － | 4.0 | － | ナデ | ミガキ | 外）にぶい黄橙　内）黒 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 182 | 埦 | 14T | Ⅱa | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）浅黄橙　内）オリーブ黒 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 183 | 坏 | H-35 | Ⅱb | － | 10.0 | － | 摩滅 | ミガキ | 外）浅黄橙　内）黒 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 184 | 坏 | I-35 | Ⅱb | － | 7.6 | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）にぶい黄橙　内）褐灰 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 185 | 坏 | H･I-23･24<br>H･I-24･25 | Ⅱb・<br>Ⅱb下・Ⅲ | － | 5.6 | － | ミガキ | ミガキ | 外）浅黄橙　内）黒 | 精良 | 黒色土器 A |
| | 186 | 坏・埦 | H-34 | 表土 | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 外）浅黄橙　内）黒 | 精良 | 黒色土器 B |
| | 187 | 坏・埦 | H-34 | 表土 | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）にぶい黄橙　内）黒褐 | 精良 | 黒色土器 B |
| | 188 | 坏 | G-35 | Ⅱb | － | 6.0 | － | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 外）浅黄橙　内）黒褐 | 精良 | 黒色土器 B |
| | 189 | 坏 | I-35 | Ⅱb | － | 7.6 | － | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 外）浅黄橙　内）褐灰 | 精良 | 黒色土器 B |
| | 190 | 埦 | H-26 | Ⅲ | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 外）明黄褐　内）橙 | 精良 | |
| | 191 | 埦 | I-27 | Ⅲ | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 灰白 | 精良 | |
| | 192 | 埦 | H･I-23･24<br>H･I-24･25 | Ⅱb下<br>Ⅱb | － | 7.2 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 193 | 埦 | I-24 | Ⅱb下 | － | 8.0 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 194 | 埦 | H-26 | Ⅱb | － | 6.4 | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）浅黄橙　内）橙 | 精良 | |
| | 195 | 埦 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | － | 6.5 | － | 摩滅 | 摩滅 | にぶい黄橙 | 精良 | |
| | 196 | 埦 | 7T | Ⅱb | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 197 | 坏 | G-36 | Ⅱb | 11.8 | 7.2 | 3.4 | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 橙 | 精良 | 薄手の作り |
| | 198 | 坏 | H･I-24･25 | Ⅲ | 13.2 | 6.4 | 3.9 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰白 | 精良 | 薄手の作り |
| | 199 | 坏 | F-34 | Ⅲ | 10.0 | 5.6 | 3.3 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 厚手の作り |
| | 200 | 坏 | G-35 | Ⅱb | － | 7.4 | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）灰黄褐　内）にぶい黄橙 | 精良 | 薄手の作り |
| | 201 | 坏 | I-31 | Ⅱb | － | 7.6 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | 薄手の作り |
| | 202 | 坏 | G-35 | Ⅱb | － | 7.6 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | 薄手の作り |
| | 203 | 坏 | E･F-19～22 | Ⅱb | － | 6.2 | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）浅黄橙　内）にぶい橙 | 精良 | 薄手の作り |
| | 204 | 坏 | H･I-23･24<br>H･I-24･25 | Ⅱb | － | 7.0 | － | 摩滅 | 摩滅 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 205 | 坏 | H･I-25 | Ⅱb | － | 6.0 | － | 摩滅 | 摩滅 | にぶい橙 | 精良 | |
| | 206 | 坏 | H-29 | Ⅱb | － | 6.0 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 207 | 坏 | I-25 | Ⅱb下 | － | 6.4 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい黄橙 | 精良 | |
| | 208 | 坏 | H-26 | Ⅲ | － | 6.0 | － | 摩滅 | 摩滅 | 橙 | 精良 | |
| | 209 | 坏 | H･I-24 | Ⅱb | － | 6.8 | － | 回転ヨコナデ | 摩滅 | にぶい橙 | 精良 | |
| | 210 | 坏 | H-26 | Ⅱb | － | 6.4 | － | 摩滅 | 摩滅 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 211 | 坏 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | － | 6.8 | － | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 212 | 坏 | H･I-24･25 | Ⅱb | － | 6.5 | － | 回転ナデ | 回転ナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 213 | 坏 | H･I-24･25 | Ⅱb | － | 6.2 | － | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 橙 | 精良 | |
| | 214 | 坏 | H-27 | Ⅱb | － | 5.9 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 215 | 坏 | H･I-23･24 | Ⅱb | － | 6.2 | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）橙　内）浅黄橙 | 精良 | 厚手の作り |
| | 216 | 坏 | H-30 | Ⅲ | － | 6.3 | － | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 外）灰白　内）褐灰 | 精良 | |
| | 217 | 坏 | 9T | Ⅱb | － | 5.0 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | 充実高台 |
| | 218 | 坏 | I-27 | Ⅲ | － | 6.6 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 外）にぶい黄橙 内）浅黄橙 | 精良 | ヘラ書き，刻痕有，ススあり，「金」文字あり |
| | 219 | 坏・埦 | H･I-25 | Ⅱb下 | 12.0 | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 220 | 坏・埦 | H･I-25 | Ⅱb下 | 12.0 | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 221 | 坏・埦 | H･I-25 | Ⅲ上 | 12.0 | － | － | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 222 | 坏・埦 | H･I-23･24 | Ⅱb | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 223 | 坏・埦 | I-26 | Ⅲ | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | |
| 35 | 224 | 甕 | H-35<br>9T | Ⅱb・Ⅲ<br>Ⅱb | 23.8 | － | 19.6 | ハケ目・ナデ | ケズリ・ナデ・指頭圧痕 | 浅黄橙 | 精良 | 搬入品の可能性 |
| | 225 | 甕 | H･I-24･25 | Ⅱb | 15.7 | － | － | ナデ・ハケ目 | ナデ・ケズリ後ナデ | 外）にぶい橙　内）浅黄橙 | 赤色小石，石英，砂 | |
| | 226 | 甕 | H-29 | Ⅱb | 22.2 | － | － | 摩滅 | 摩滅 | にぶい橙 | 赤色小石，石英，砂 | |
| | 227 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb | 22.3 | － | － | ナデ・ハケ目・指頭圧痕 | ナデ・ケズリ後ナデ | 外）黄橙　内）橙 | 赤色小石，石英，砂 | |
| | 228 | 甕 | H･I-24･25<br>H･I-25 | Ⅱb<br>Ⅱb下 | － | － | － | ヨコナデ・ハケ目 | ナデ・ケズリ | 外）にぶい黄橙 内）にぶい橙 | 赤色小石，石英，砂 | |
| | 229 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | 27.6 | － | － | ナデ・ハケ目 | 摩滅・ケズリ後ナデ | 外）橙　内）浅黄橙 | 赤色小石，石英，砂 | |
| | 230 | 甕 | I-31 | Ⅱb | － | － | － | ナデ・ハケ目・指頭圧痕 | ナデ・ケズリ | 外）橙　内）にぶい橙 | 赤色小石，石英，砂 | |
| | 231 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | 30.0 | － | － | 摩滅・指頭圧痕 | ハケ目・ケズリ後ナデ | 橙 | 赤色小石，石英，砂 | |
| | 232 | 甕 | H･I-23･24<br>H･I-24 | Ⅱb | － | － | － | ヨコナデ・ケズリ | ヨコナデ・ケズリ | にぶい黄橙 | 赤色小石，砂 | |
| | 233 | 甕 | H･I-24･25<br>H･I-25 | Ⅱb | 23.4 | － | － | ナデ | ナデ・ケズリ | にぶい黄橙 | 石英，角閃石 | |
| | 234 | 甕 | H･I-24･25 | Ⅲ | － | － | － | ナデ | ナデ・ケズリ | 外）明黄褐　内）にぶい黄橙 | 石英，角閃石 | 口縁に刻目 |
| | 235 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | 18.2 | － | － | ナデ・ハケ目 | ナデ・ケズリ | 外）灰白　内）浅黄橙 | 赤色小石，砂 | |
| | 236 | 甕 | E-31･E-32 | Ⅱb | － | － | － | ナデ | 上面ハケ目・下面ケズリ | 外）にぶい黄橙 内）浅黄橙 | 赤色小石，石英 | |
| | 237 | 甕 | G-26 | Ⅲ | － | － | － | ナデ・ヨコナデ・指頭圧痕 | ナデ・ハケ目後ケズリ | にぶい橙 | 赤色小石 | |

| 挿図番号 | 番号 | 器種 | 出土区 | 層 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 35 | 238 | 甕 | G-34 | Ⅱb | − | − | − | ナデ・指頭圧痕 | ナデ | にぶい黄褐 | 赤色小石，石英，砂 | |
| 36 | 239 | 皿 | H-27 | Ⅱb | 13.0 | 5.8 | 2.9 | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 橙 | 精良 | |
| | 240 | 皿 | H-29 | Ⅲ | − | 8.0 | − | 回転ヨコナデ | 摩滅 | 外）明赤褐　内）橙 | 精良 | ヘラ切り |
| | 241 | 皿 | H-34 | Ⅱb | 14.0 | 9.6 | 2.2 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | ヘラ切り |
| | 242 | 皿 | H-34 | Ⅱb | 15.3 | 13.0 | 2.5 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | ヘラ切り |
| | 243 | 鉢 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | 22.8 | 14.8 | 7.8 | 回転ヨコナデ | ナデ（一部ハケ目残る） | 浅黄橙 | 精良 | 胎土は坏と同じ |
| | 244 | 蓋 | 11T | − | − | − | − | ナデ・指頭圧痕 | ナデ | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 245 | 底部 | I-30 | Ⅲ | − | 10.0 | − | ナデ | ナデ・指頭圧痕 | にぶい橙 | 精良 | |

## 第 13 表　須恵器観察表

| 挿図番号 | 番号 | 器種 | 出土区 | 層 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | |
| 37 | 246 | 坏 | H-35 | Ⅱb | 13.8 | 9.6 | 3.6 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰黄 | ヘラ切り |
| | 247 | 坏 | H-34･35 | Ⅱb | 13.0 | 9.6 | 3.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰白 | ヘラ切り |
| | 248 | 不明 | I-29 | Ⅱa | − | − | − | 回転ヨコナデ・回転ケズリ | 回転ヨコナデ | 外）灰白　内）青褐灰 | |
| | 249 | 蓋 | 9T中央・H-35 | Ⅱb | 13.2 | − | 2.0 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰白 | 硯に転用 |
| | 250 | 蓋 | G-34 | Ⅱb | 15.6 | − | 2.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰 | 硯に転用 |
| | 251 | 蓋 | G-34･35 | Ⅱb | 13.6 | − | 2.1 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 外）灰　内）灰白 | 硯に転用 |
| | 252 | 高坏 | G-35 | Ⅱb | − | 20.2 | − | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 外）褐灰　内）灰白 | |
| | 253 | 壺 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | − | − | − | ナデ・タタキ後ナデ | ヨコナデ | 外）明黄褐　内）灰黄褐 | |
| | 254 | 壺 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | − | − | − | ナデ・平行タタキ | ナデ・同心円状当具痕 | 褐灰 | |
| | 255 | 甕 | I-31 | Ⅱb・Ⅲ | − | − | − | 格子目タタキ | 同心円状当具痕・ナデ | 外）にぶい橙　内）橙 | 外面に褐色の釉あり |
| 38 | 256 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | − | − | − | 格子目タタキ | 同心円状当具痕 | 外）黒褐　内）灰黄褐 | 外面の一部に自然釉あり |
| | 257 | 甕 | I-31 | Ⅱb | − | − | − | 平行タタキ | 同心円状当具痕・平行タタキ | にぶい黄橙 | |
| | 258 | 甕 | I-25 | Ⅱb下 | − | − | − | 節目状文様後タタキ | 同心円状当具痕 | にぶい黄橙 | |
| | 259 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | − | − | − | 格子目タタキ | 同心円状当具痕 | にぶい褐 | |
| | 260 | 甕 | I-33 | 表土 | − | − | − | 格子目タタキ | 同心円状当具痕 | 外）極暗赤褐　内）褐 | |
| | 261 | 甕 | H-29 | Ⅱb | − | − | − | 平行タタキ | 同心円状当具痕 | 外）灰黄　内）浅黄橙 | |
| | 262 | 甕 | H-30<br>I-31 | Ⅲ<br>Ⅱb | − | − | − | 格子目タタキ | 平行タタキ | 褐灰 | |
| | 263 | 甕 | I-30 | Ⅲ | − | − | − | 格子目タタキ | 平行タタキ | 外）浅黄橙　内）灰白 | 焼成軟質（土師質） |
| | 264 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | − | − | − | 格子目タタキ | 平行タタキ | 灰白 | |
| | 265 | 甕 | H･I-23･24 | Ⅱb | − | − | − | 格子目タタキ | 平行タタキ | 灰 | |
| | 266 | 甕 | I-25 | Ⅱb | − | − | − | 平行タタキ | 同心円状当具痕 | 灰 | |
| | 267 | 甕 | H･I-25 | Ⅱb下 | − | − | − | 平行タタキ | 同心円状当具痕（一部ナデ） | 灰 | |

## 第 14 表　紡錘車・越州窯系青磁・把手観察表

| 挿図番号 | 番号 | 器種 | 出土区 | 層 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | |
| 38 | 268 | 紡錘車 | H･I-24･25 | Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 橙 | |
| | 269 | 坏 | H-34 | Ⅱb | 14.0 | − | − | − | − | 浅黄 | 越州窯系青磁 |
| | 270 | 把手 | H･I-23･24 | Ⅱb下 | − | − | − | ナデ | ナデ | にぶい橙 | |

## 第４節　中世の調査成果

### １　調査の概要

中世の遺物包含層はⅡb層である。遺構検出面はⅢ層上面であるが，場所によっては地形が削平されているため，Ⅲ層より下位のⅣ～Ⅶ層で遺構を検出している。

遺構は掘立柱建物跡13棟，竪穴建物跡３棟，土坑墓２基，土坑15基，溝跡９条，ピット402基を検出した。遺物は龍泉窯系青磁，白磁，青花，土師器皿，中世須恵器，陶器，擂鉢，仏具，鉄器，銅銭，羽口，金床石，鉄滓などが出土した。遺構・遺物の年代は13世紀から16世紀である。

なお，遺物の分類，年代については，以下の文献を参考にした。分類名・年代については，本文及び観察表に記載している。


上田秀夫　1982「14 ～ 16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第２号

小野正敏　1982「15，16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』第２号

太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ』

續伸一郎　2022「第７章　貿易陶磁器　第２節中世後期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会

森田勉　1982「14 ～ 16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第２号

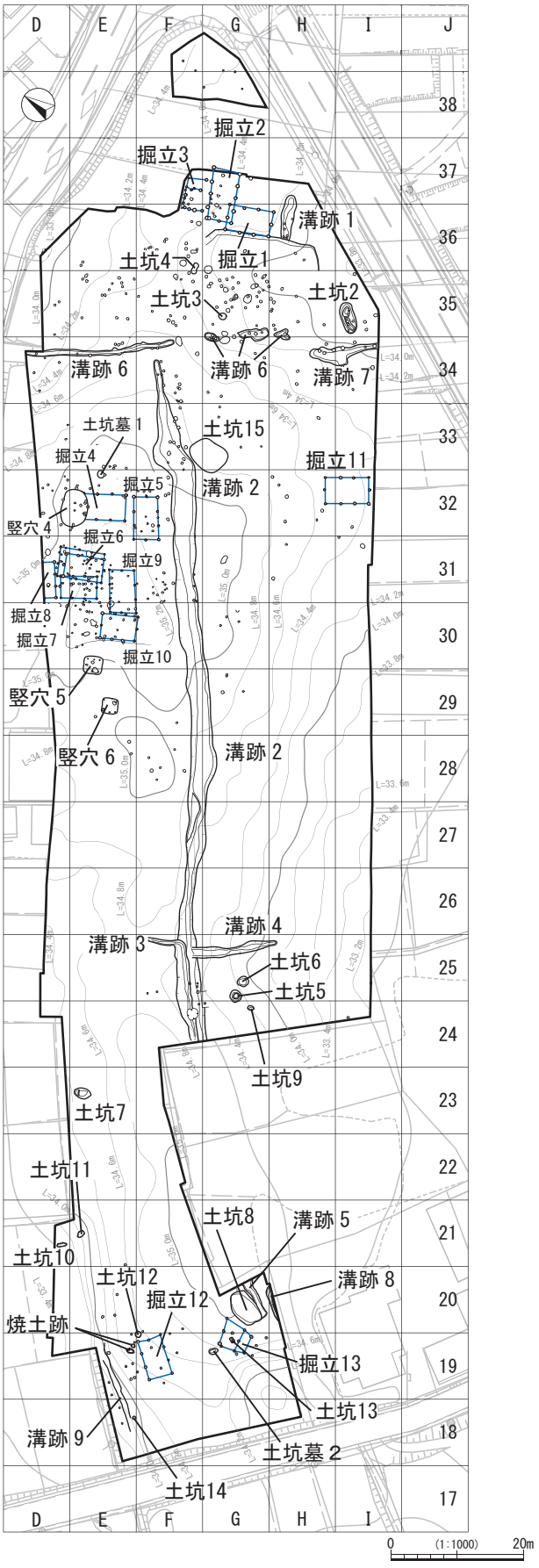
山本信夫　2022「第７章　貿易陶磁器　第２節中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会


### ２　遺構

遺構は13 ～ 14世紀代と15 ～ 16世紀代のものがある。13 ～ 14世紀の遺構は掘立柱建物跡，竪穴建物跡，15 ～ 16世紀の遺構は溝跡，土坑墓，土坑が中心となっている。溝跡は，近世まで使用されているが，構築された時代が中世であるため本節で報告する。また，本節では種類別に遺構の報告を行い，年代別の変遷については総括に記載する。

#### （１）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は４つのエリアで検出した。１～３号がＦ～Ｈ－36・37区，４～10号がＤ～Ｆ－30 ～ 32区，11号がＨ・Ｉ－32区，12号がＦ－19区に分布している。建物跡は柱筋の通ったものが多く，主軸の向きが溝跡と一致し，規模に統一性がみられる。また，梁行中央の柱穴が軸線上からずれている建物（５～７，10 ～ 12号）が存在する。




第39図　中世の遺構配置図

### ①　掘立柱建物跡１号（第40図）

Ｇ・Ｈ－36区，Ⅲ層上面で検出した。掘立柱建物跡２号と重複しているが，前後関係は不明である。また，南側にある溝跡１は，出土遺物や長軸方向が掘立柱建物跡１号と一致することから同時期の可能性が高い。

本建物跡は，梁行２間×桁行３間の長方形を呈する10本柱の側柱建物跡である。梁行の長さ2.5m，桁行の長さ4.5mで，総面積11.3㎡である。主軸は磁北から西に30°傾いている。

柱間寸法は梁行1.2m，桁行1.5mである。柱穴は直径0.3m前後で，深さは0.1～0.4mである。柱痕跡が９か所の柱穴で確認されている。

出土遺物はＰ１で青磁１点，陶器２点，Ｐ２で土師器７点，Ｐ５で白磁１点，陶器１点，Ｐ７で敲石１点，Ｐ９で青磁１点，土師器１点，Ｐ10で青磁１点が出土している。

**出土遺物（第41図　271～279）**

271・272は龍泉窯系青磁碗で大宰府分類Ⅱb類である。外面に鎬連弁文を描き，弁の中央は稜をなす。271の口縁部内面には一条の浅い沈線を施している。

273・274は口禿の白磁皿で，大宰府分類Ⅸ類である。273は復元口径10.8㎝，器高2.8㎝で，法量から大宰府分類Ⅸ１ｃ類に相当する。

275は土師器の埦か坏の口縁部である。所属時期は古代である。276～278は瓦質焼成の鉢である。焼きが甘く，胎土は泥質である。277・278は内面にハケ目を施す。

279は棒状の敲石である。表裏及び側面に敲打痕が形成されている。

### ②　掘立柱建物跡２号（第42図）

Ｇ－36・37区，Ⅲ層上面で検出した。掘立柱建物跡１号と直交する配置で重複するが，前後関係は不明である。東側梁行２間×桁行４間の長方形を呈する12本柱の側柱建物跡である。西側の梁行は１間である。梁行の長さ2.7m，桁行の長さ５mで，総面積13.5㎡である。主軸は磁北から東に60°傾いている。

柱間寸法は梁行1.2～1.5m，桁行が1.2mである。柱穴は直径0.4m前後で，深さは0.5mである。柱痕跡が８か所の柱穴で確認されている。

出土遺物はＰ２で土師器１点，Ｐ３で土師器１点，Ｐ６で白磁１点，土師器５点，土器１点，Ｐ７で土師器６点，粘土塊１点，Ｐ８で土師器２点，Ｐ10で土師器１点が出土している。

**出土遺物（第41図　280～292）**

280～284は土師器の坏である。内外面回転ヨコナデを施し，底部は糸切り底である。280は復元口径10.6㎝の小型品である。281～284は復元口径12.5㎝程で，280より一回り大きい。285は土師器の皿である。内外面回転ヨコナデを施す。286～290は土師器の坏か小皿である。

291は白磁の壺である。把手とみられる痕跡が体部外面に残っている。内面の一部は露胎である。292は瓦質焼成の壺と推測される。外面調整は摩滅のために不明，内面調整はハケ目である。

### ③　掘立柱建物跡３号（第43図）

ＦＧ－36・37区，Ⅲ層上面で検出した廂付きの建物跡である。整理作業段階で図上復元を行った建物である。身舎は梁行３間×北側桁行５間で平面プランは正方形に近い。廂が身舎の東側に１間延びている。柱筋の通りが悪く，南側桁行の柱穴は確認されていない。東側梁行の長さ2.7m，廂を含めた桁行の長さ4.5mで，総面積12.15㎡である。主軸は磁北から東に60°傾いている。

身舎の柱間寸法は梁行0.7～1.1m，北側桁行が0.5～0.7mである。柱穴は直径0.2～0.5m前後で，深さは0.2～0.9mとばらつきがある。

柱穴で土師器小片が４点出土した。

### ④　掘立柱建物跡４号（第44図）

Ｅ－32区，Ⅲ層上面で検出した。竪穴建物跡４号を切っている。梁行１間×桁行３間の長方形を呈する８本柱の側柱建物跡である。梁行の長さ2.6m，桁行の長さ4.3mで，総面積11.2㎡である。主軸は磁北から西に32°傾いている。

柱間寸法は梁行2.1m，桁行1.4mである。柱穴は直径0.4m前後で，深さ0.45m前後である。柱痕跡がＰ８を除く全ての柱穴で確認されている。なお，Ｐ５，Ｐ10は建物に関連する柱穴の可能性があるため掲載している。

出土遺物は確認されていない。

### ⑤　掘立柱建物跡５号（第45図）

Ｅ・Ｆ－31・32区，Ⅲ層上面で検出した。掘立柱建物跡４号の南側にあり，主軸が４号に対して直交している。

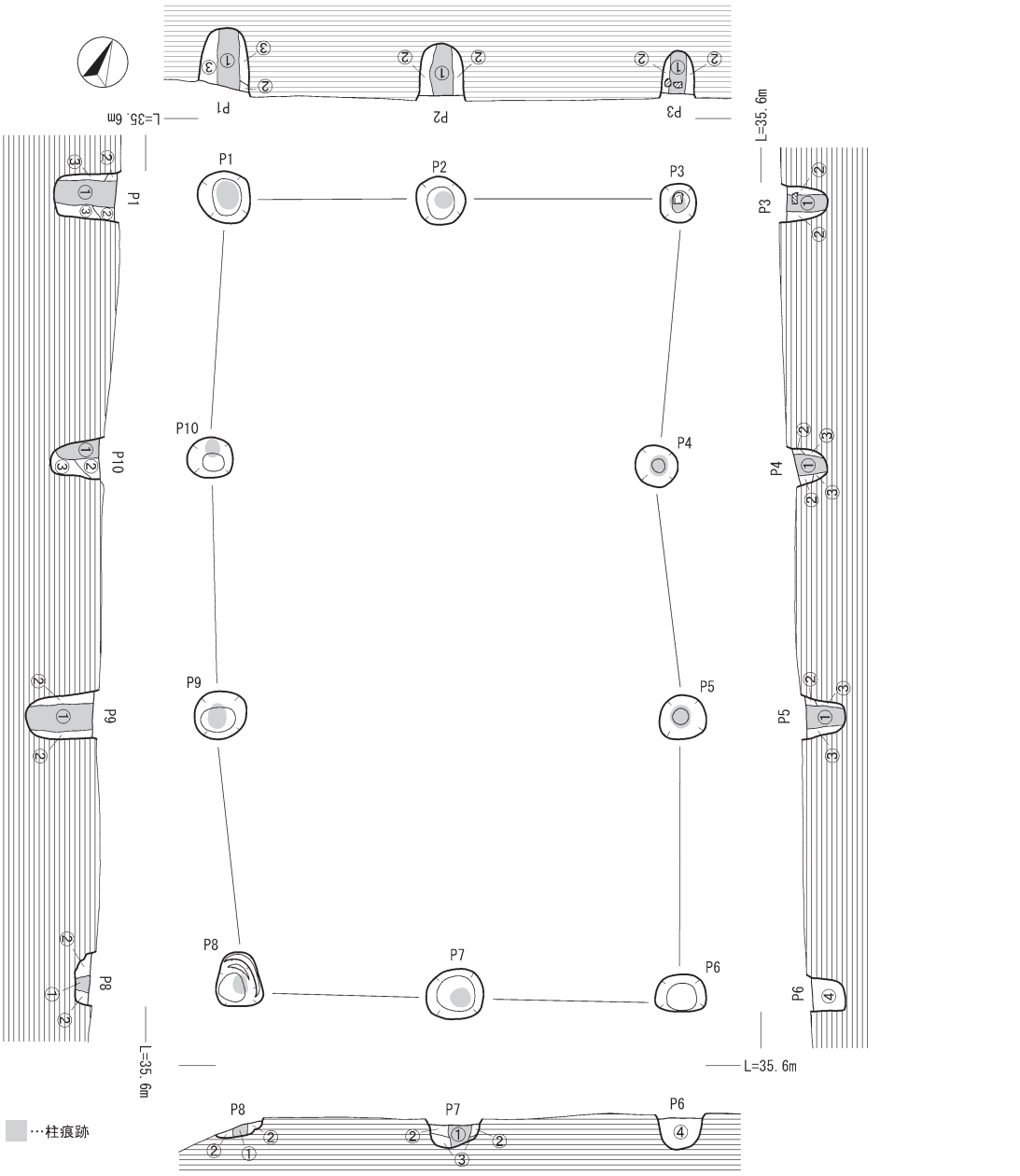
梁行２間×北側桁行３間の長方形を呈する９本柱の側柱建物跡である。西側梁行のＰ６は，軸線上から少し外側にずれている。梁行の長さ2.4m，桁行の長さ4.3mで，総面積9.63㎡である。主軸は磁北から東に58°傾いている。

柱間寸法は梁行1.2m，桁行1.4mである。柱穴は直径0.3m前後で，深さ0.2m前後である。柱穴が周辺の建物に比べ浅い。柱痕跡が２か所の柱穴で確認されている。

出土遺物はＰ５で須恵器１点，Ｐ９で土師器３点，黒曜石剥片が出土している。

**出土遺物（第45図　293）**

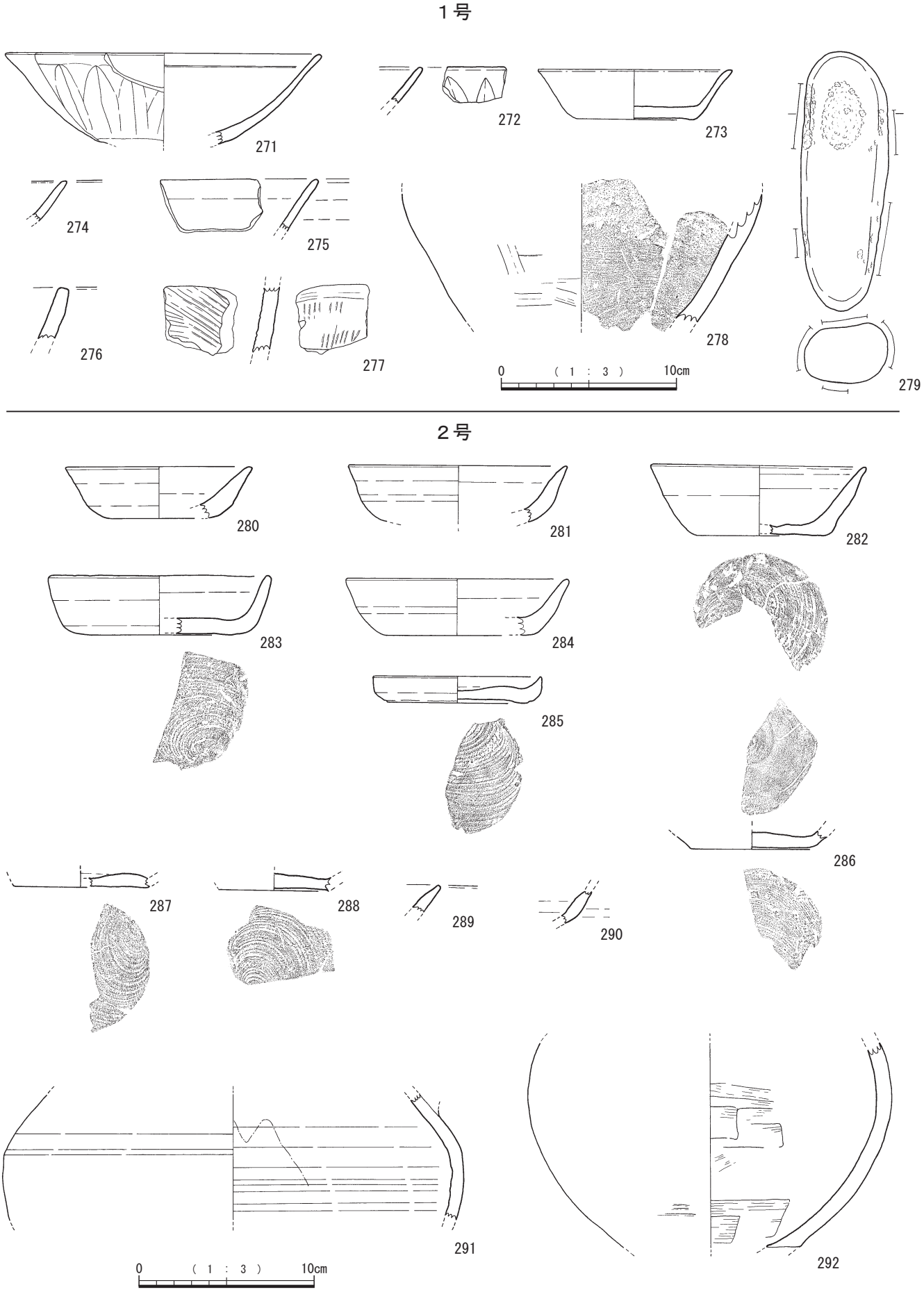
293は瓦質焼成の鉢である。口縁部には注口が１か所残っている。内面に粗いハケ目を施す。



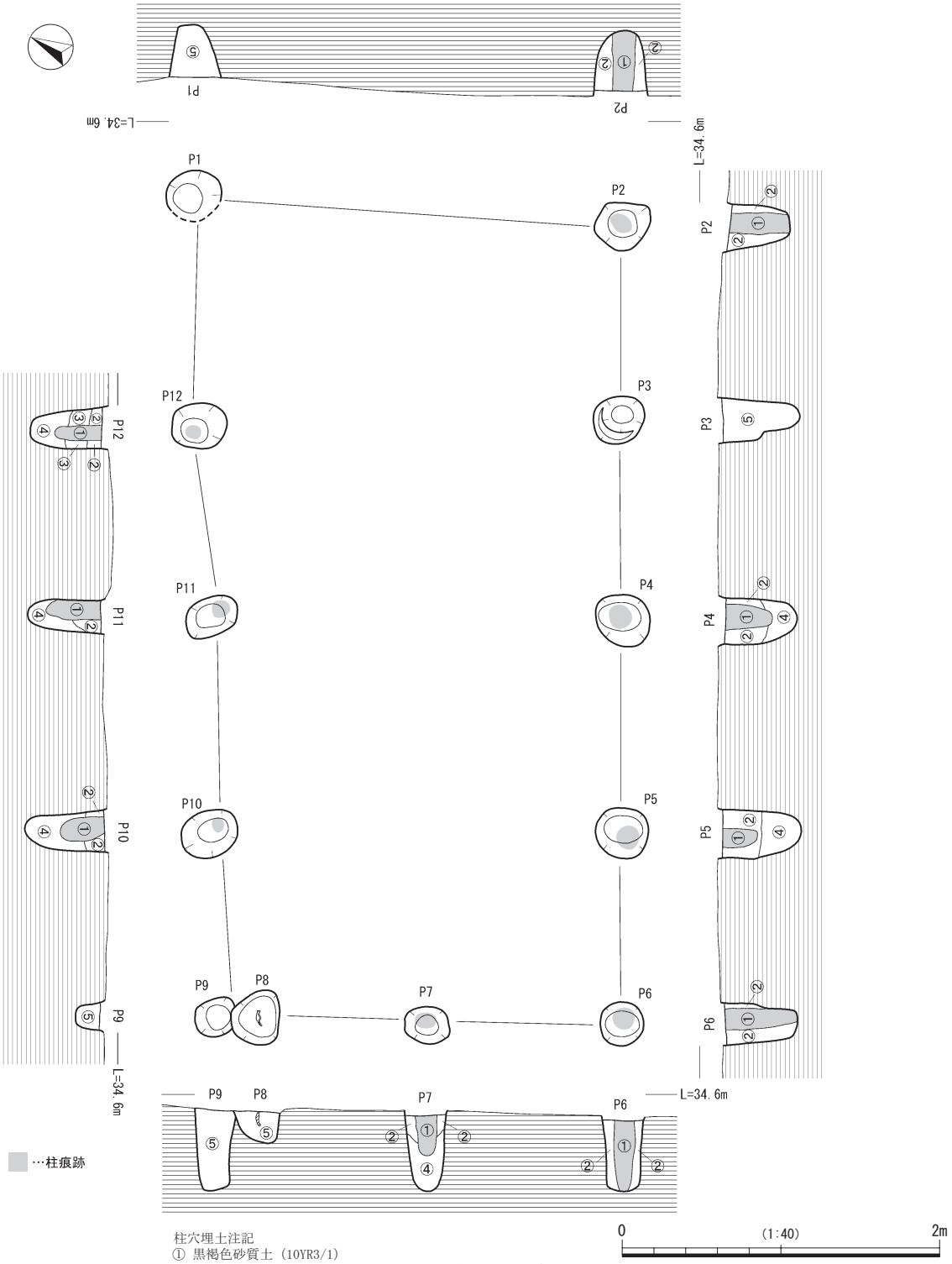

0 (1:40) 2m

柱穴埋土注記
①黒褐色砂質土（10YR3/2）
　柱痕跡　しまり強く粘性なし　炭化物　白色粒を10%含む
②灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
　柱の埋め土　しまりやや強く粘性なし　炭化物　白色粒を10%含む
③明黄褐色砂質土（10YR1/6）
　柱の埋め土　しまりやや強く粘性やや弱い
④黒褐色砂質土（10YR3/1）
　しまり強く粘性あり　シラスが30%程度含まれる

**第40図　掘立柱建物跡１号**

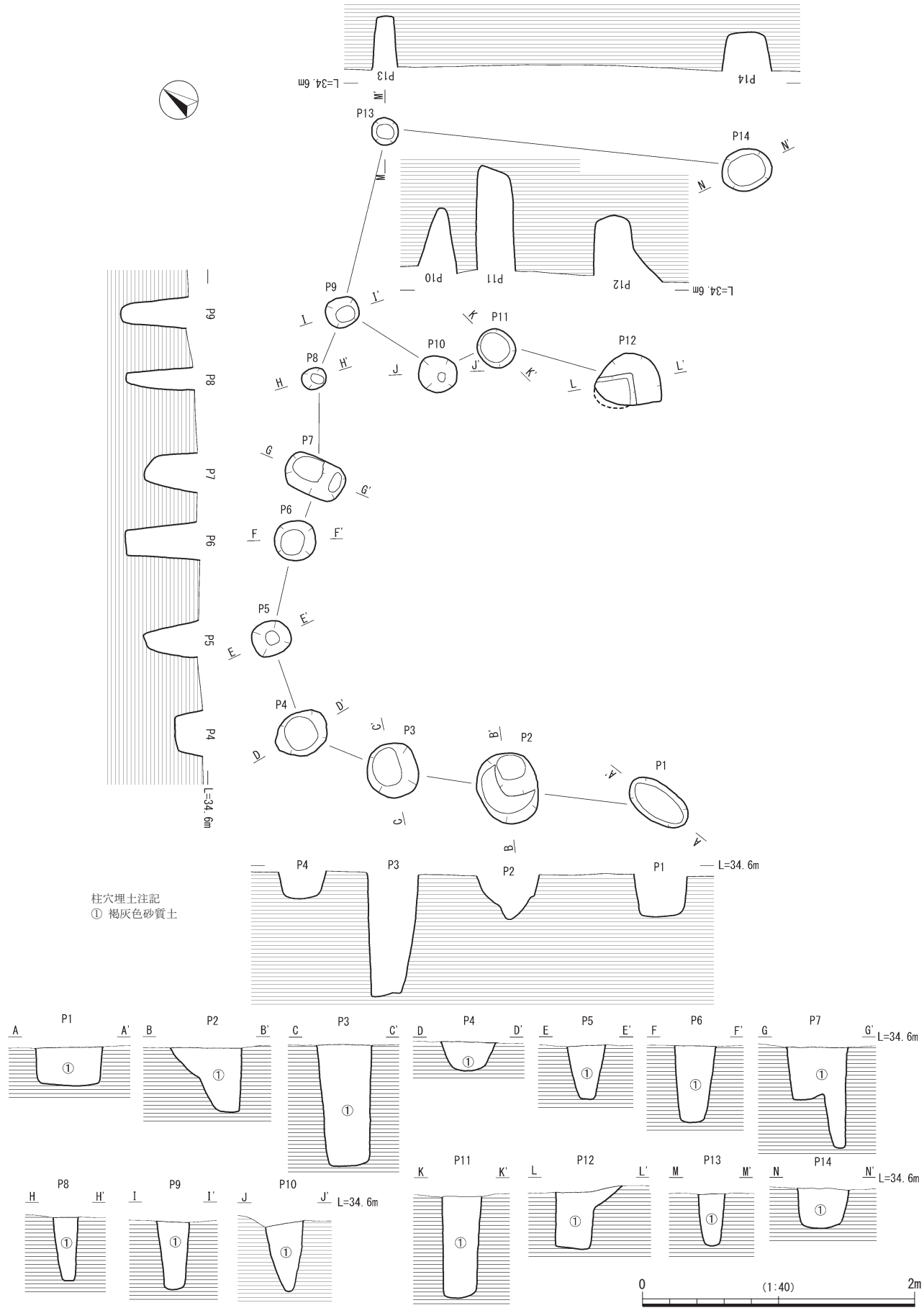



第41図　掘立柱建物跡１・２号出土遺物

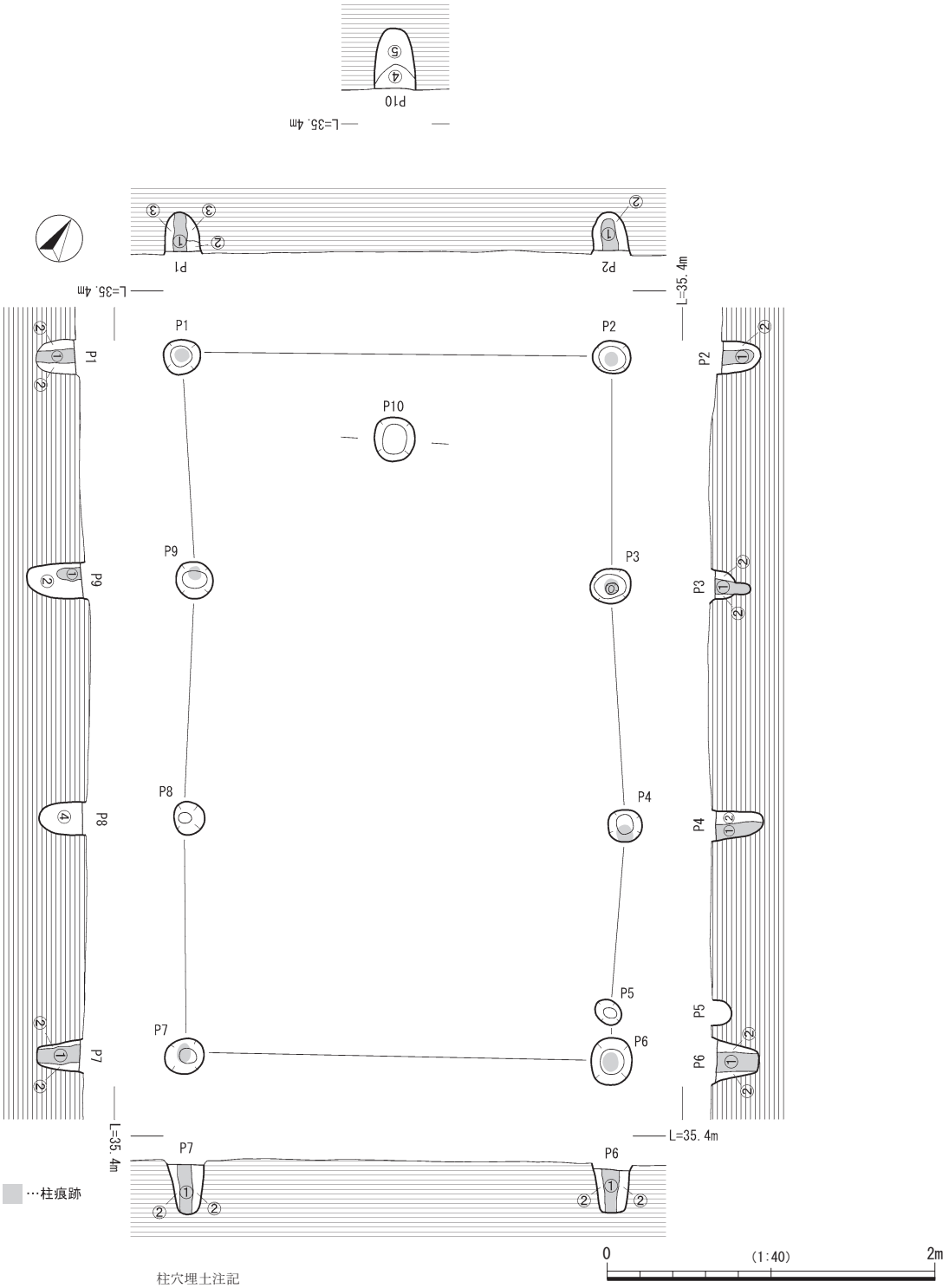



柱穴埋土注記
① 黒褐色砂質土（10YR3/1）
　柱痕跡　しまり強く粘性やや弱い　シラス,炭化物を10%含む
② にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　柱の埋め土　しまり弱く粘性やや弱い　シラスを10%含む
③ 灰褐色砂質土（10YR4/1）
　柱の埋め土　しまり有粘性やや弱い　シラスを10%含む
④ 黒褐色砂質土（10YR3/2）
　柱の埋め土　しまりやや強く粘性なし　シラスを10%含む
⑤ 灰褐色砂質土（7.5YR4/2）
　しまり,粘性弱い　シラス（0.3～3㎝）を10%含む,炭化物をわずかに含む

**第42図　掘立柱建物跡２号**

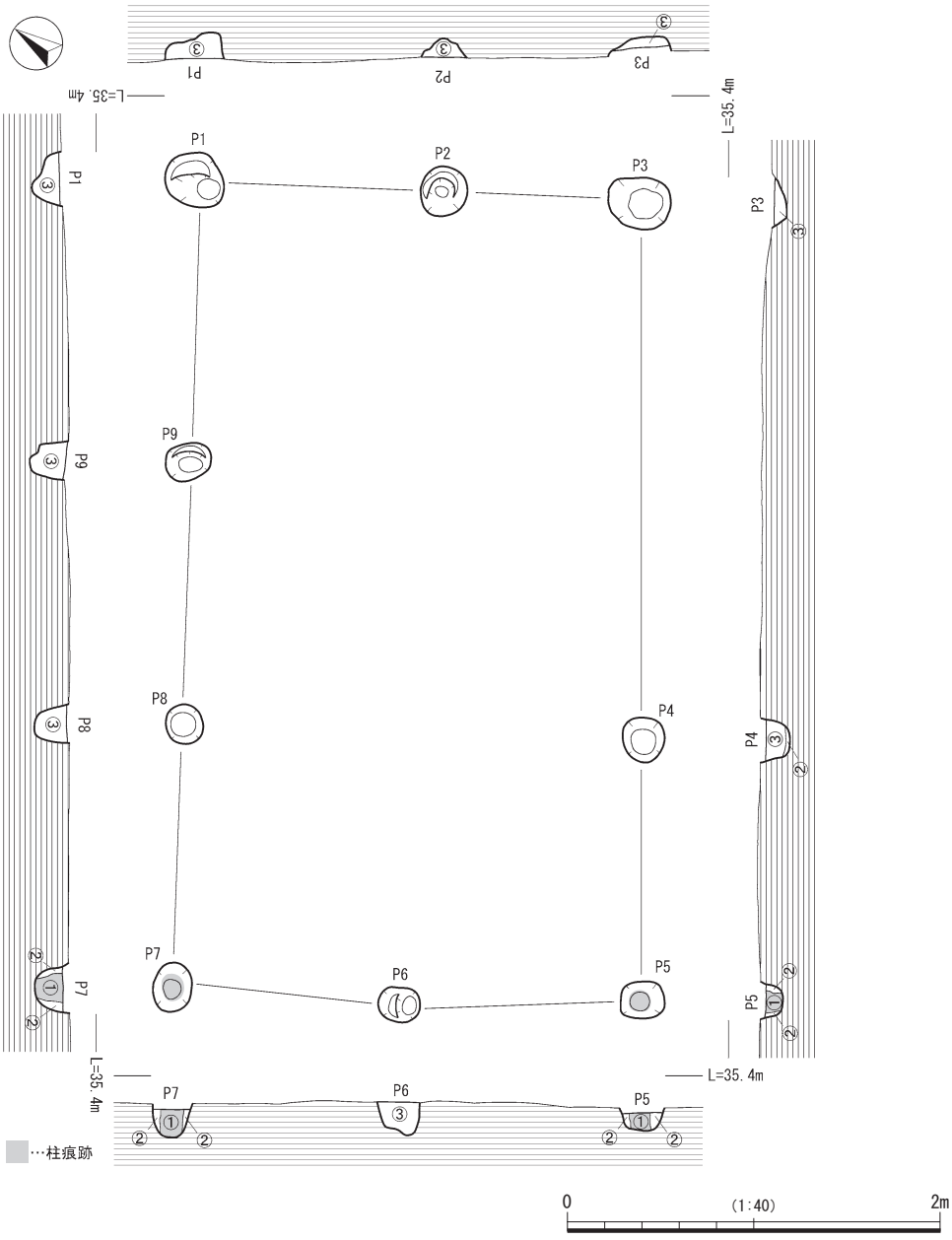



第43図　掘立柱建物跡３号

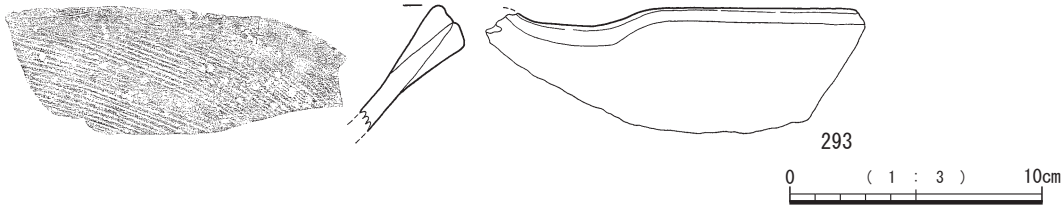



柱穴埋土注記
①黒褐色砂質土（10YR3/1）
　柱痕跡　しまり強く粘性やや有　炭化物，Ⅶa層の礫10％含む
②灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　柱の埋め土　しまり強く粘性やや有　Ⅶa層の礫10％含む
③黒褐色砂質土（10YR3/1）
　柱の埋め土　しまり強く粘性やや強い
④黒褐色砂質土（10YR3/2）
　しまり強く粘性有　炭化物，白粒子を10％含む
　Ⅶa層の礫10％含む　Ⅲ層ブロックが混入
⑤Ⅲb層に類似する土
　しまり，粘性弱い　シラス（0.3～3㎝）を10％含む　炭化物をわずかに含む

**第44図　掘立柱建物跡４号**




柱穴埋土注記
①黒褐色砂質土（10YR3/2）
　柱痕跡　しまり強く粘性なし　Ⅶａ層の礫わずかに含む
②灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　柱の埋め土　しまり，粘性強い　Ⅶａ層の礫30％含む
③黒褐色粘質土（10YR3/2）
　しまり強く，粘性やや強い　炭化物が10％，Ⅶａ層の礫をわずかに含む




第45図　掘立柱建物跡５号・出土遺物

### ⑥　掘立柱建物跡６号（第46図）

Ｄ・Ｅ－31区，Ⅲ層上面で検出した二面廂の建物跡である。柱穴Ｐ９が掘立柱建物跡７号の柱穴に切られているため，７号より古い。身舎は梁行２間×東側桁行３間で，北側と東側に廂が１間延びる。東側の桁付は４間である。廂を含めた梁行の長さ3.0m，桁行の長さ4.5mで，総面積13.5㎡である。身舎の梁行柱穴Ｐ10・Ｐ16は，軸線上から少し外にずれている。主軸は磁北から西に30°傾いている。

身舎の柱間寸法は梁行1.2m，桁行が1.3mである。柱穴の直径は身舎が0.3～0.4m，廂が0.2～0.3mで，身舎の柱穴が一回り大きい。深さは0.15～0.65mとばらつきがある。柱痕跡は身舎で７か所，廂で５か所確認されている。Ｐ11とＰ12の重複は，建て替えに起因する可能性がある。

出土遺物はＰ５で土器１点，Ｐ６で青磁２点，Ｐ８で白磁１点，Ｐ12で土器１点，Ｐ17で土器１点，凹石１点が出土している。

**出土遺物（第46図　294～297）**

294は龍泉窯系青磁碗である。体部外面に縦方向の櫛目を入れ，幅広の鎬連弁文を描いている。内面は無文である。大宰府分類Ⅰｂ類に相当する。295は龍泉窯系青磁碗Ⅱｂ類である。

296は口禿の白磁皿で，大宰府分類Ⅸ類である。

297は凝灰岩製の磨石である。表裏両面に磨面が形成されている。

### ⑦　掘立柱建物跡７号（第47図）

Ｄ・Ｅ－31区，Ⅲ層上面で検出した。柱穴Ｐ３が掘立柱建物跡６号の柱穴を切っているため，６号より新しい。梁行２間×西側桁行３間の長方形を呈する13本柱の側柱建物跡である。北側梁行のＰ２は軸線上から少し外側にずれている。Ｐ６，Ｐ７，Ｐ９は，出土位置から建物に関連する柱穴と判断した。梁行の長さ2.2m，桁行の長さ3.8mで，総面積8.4㎡である。主軸は磁北から西に32°傾いている。

柱間寸法は梁行1.1m，桁行1.2mである。柱穴は直径0.2m前後で，深さ0.45m前後である。柱痕跡が10か所の柱穴で確認されている。

出土遺物はＰ９で土器３点，Ｐ12は土器１点，Ｐ14は陶器１点，土器２点が出土している。

**出土遺物（第47図　298）**

298は東播磨系須恵器の鉢である。口縁部は断面三角形で，内側に傾く。内外面ヨコナデを施す。年代は13世紀後半である。

### ⑧　掘立柱建物跡８号（第48図）

Ｄ－31区，Ⅲ層上面で検出した。建物北側が調査区外に延びるため構造は不明であるが，梁行１間以上，桁行３間の長方形を呈する側柱建物跡と推測される。主軸は磁北から東に40°傾いている。

柱間寸法は梁行1.2m，桁行1.2mである。柱穴は直径0.2m前後で，深さ0.2m前後である。柱痕跡が４か所の柱穴で確認されている。

Ｐ４で土器片が１点出土した。

### ⑨　掘立柱建物跡９号（第49図）

Ｅ－30・31区，Ⅲ層上面で検出した。掘立柱建物跡10号に隣接し，主軸が10号に対して直交している。

西側梁行２間×桁行４間の長方形を呈する11本柱の側柱建物跡である。東側の梁行は１間である。梁行の長さ2.6m，桁行の長さ4.3mで，総面積11.18㎡である。主軸は磁北から東に52°傾いている。

柱間寸法は西側梁行1.1～1.5m，桁行0.4～1.5mと不揃いである。柱穴の直径は0.1～0.2m前後で，深さは0.2～0.35mである。

Ｐ４で土器片が１点出土した。

### ⑩　掘立柱建物跡10号（第50図）

Ｅ－30区，Ⅲ層上面で検出した。掘立柱建物跡９号に隣接し，主軸が９号に対し直交している。梁行２間×桁行３間の長方形を呈する11本柱の側柱建物跡である。南側梁行のＰ８は軸線上から少し外側にずれている。Ｐ６は，出土位置から建物に関連する柱穴と判断した。梁行の長さ2.5m，桁行の長さ3.5mで，総面積8.75㎡である。主軸は磁北から西に35°傾いている。

柱間寸法は梁行1.2m，桁行1.2mである。柱穴は直径0.3m前後で，深さ0.2～0.3m前後である。柱痕跡が３基の柱穴で確認されている。

出土遺物は確認されていない。

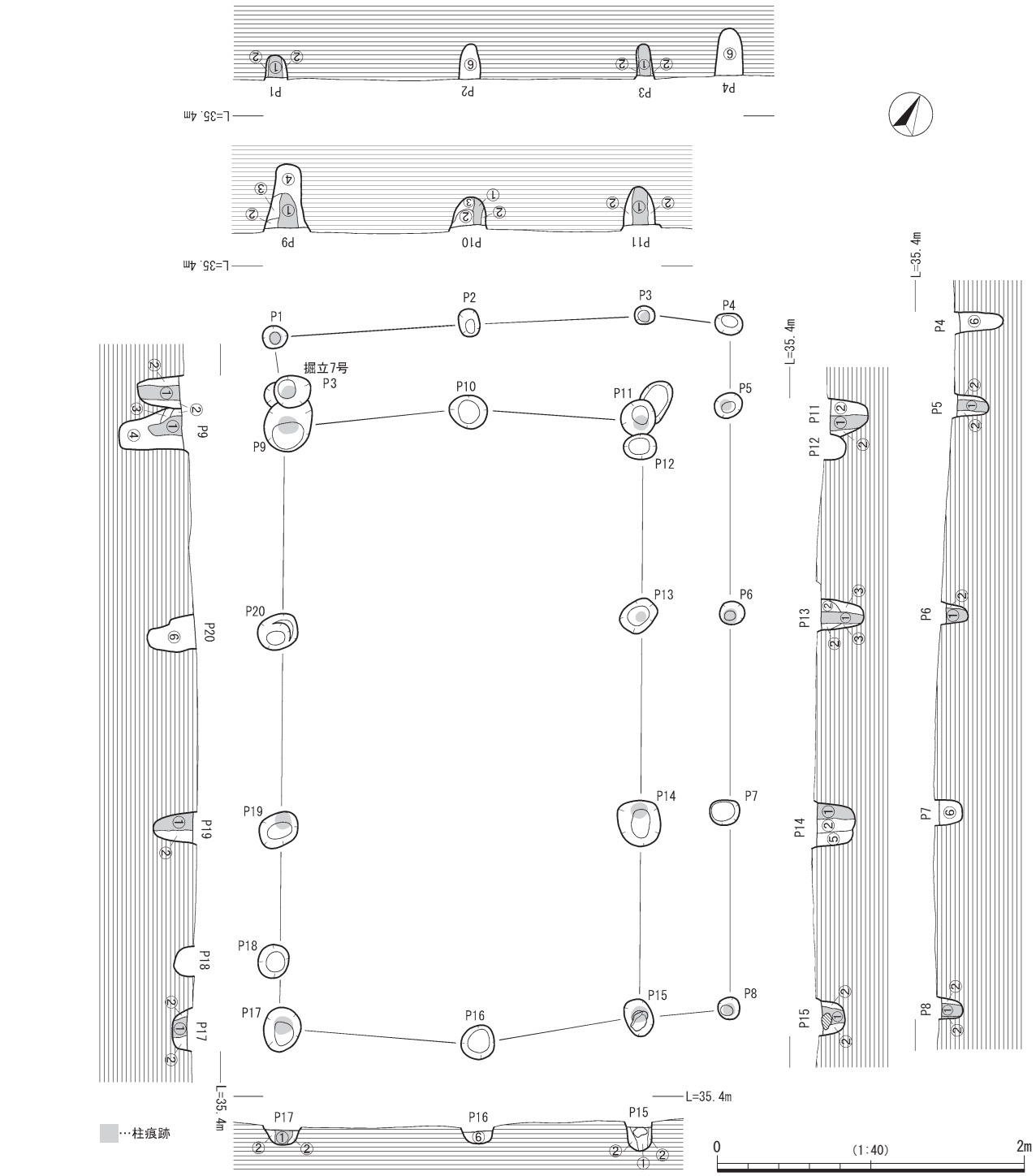
### ⑪　掘立柱建物跡11号（第51図）

Ｈ・Ｉ－32区，Ⅵａ層上面で検出した。梁行２間×桁行３間の長方形を呈する10本柱の側柱建物跡である。梁行のＰ２・Ｐ７は軸線上から少し外側にずれている。梁行の長さ2.6m，桁行の長さ4.4mで，総面積11.44㎡である。主軸は磁北から西に38°傾いている。

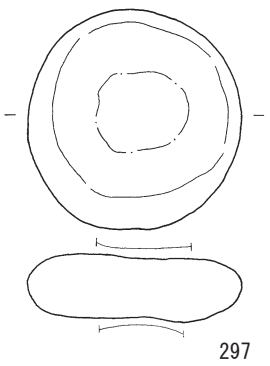
柱間寸法は梁行1.2～1.4m，桁行1.3～1.5mである。柱穴は直径0.2～0.3m前後で，深さ0.2～0.3m前後である。遺物はＰ６で土器１点，Ｐ８で須恵器１点，土器１点，Ｐ９で土器３点が出土している。

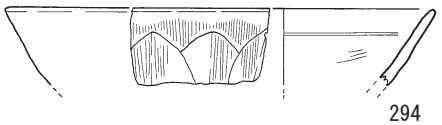
**出土遺物（第51図　299）**

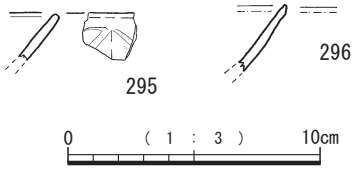
299は瓦質焼成の鉢である。内外面摩滅のため調整は不明である。



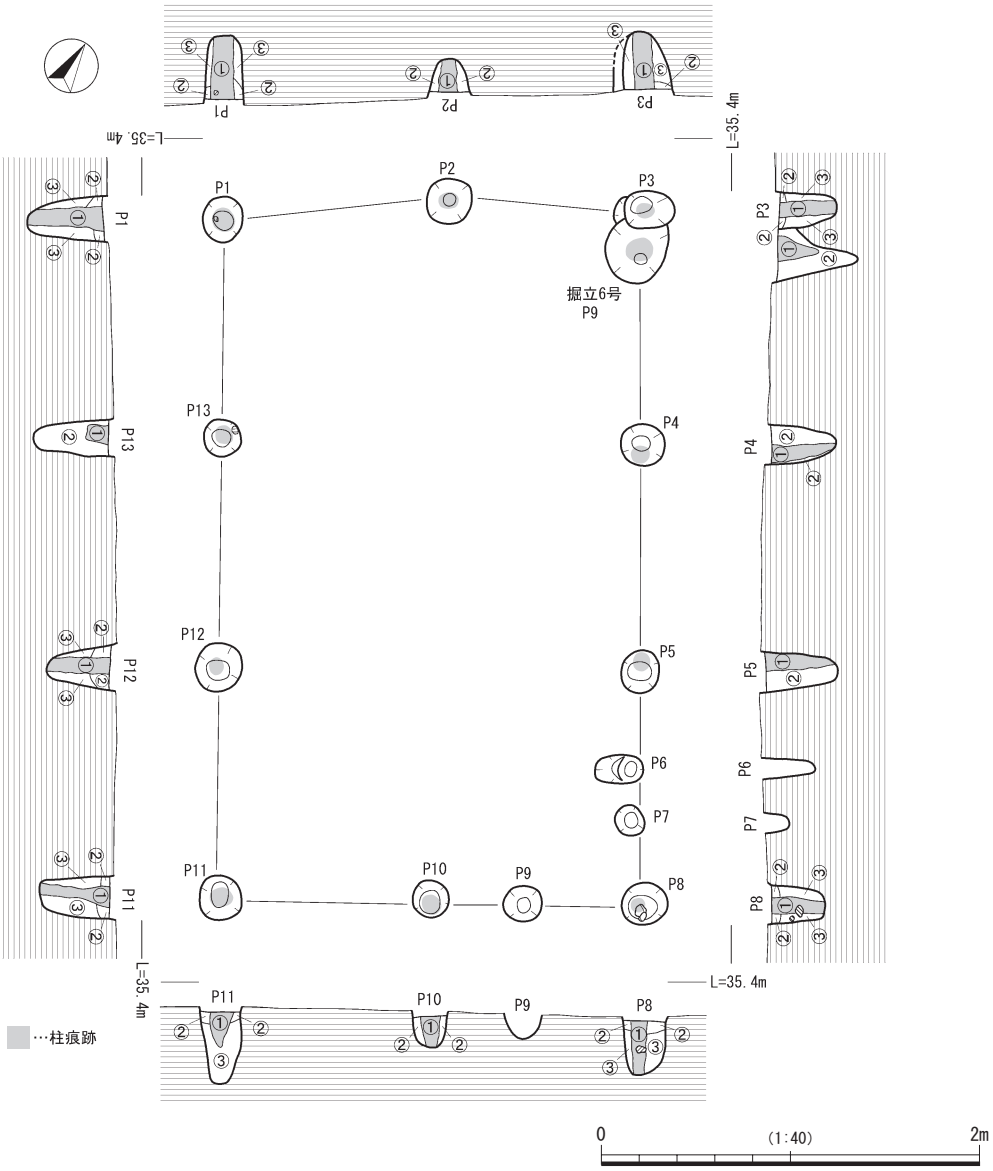

柱穴埋土注記
①黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　柱痕跡　しまり，粘性強い　Ⅶａ層の礫10%含む
②黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
　柱の埋め土　しまり，粘性強い　Ⅶａ層の礫10%含む
③黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
　柱の埋め土　土質は②と同じ　混入物なし
④黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　混入物なし
⑤Ⅲｂ層に類似する柱の埋め土
⑥黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
　しまり，粘性強　Ⅶａ層の礫10%含む


297

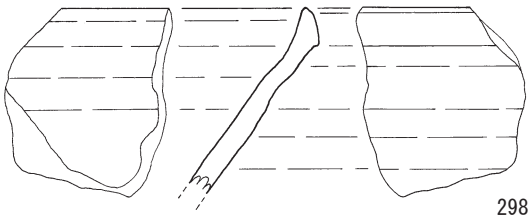

294



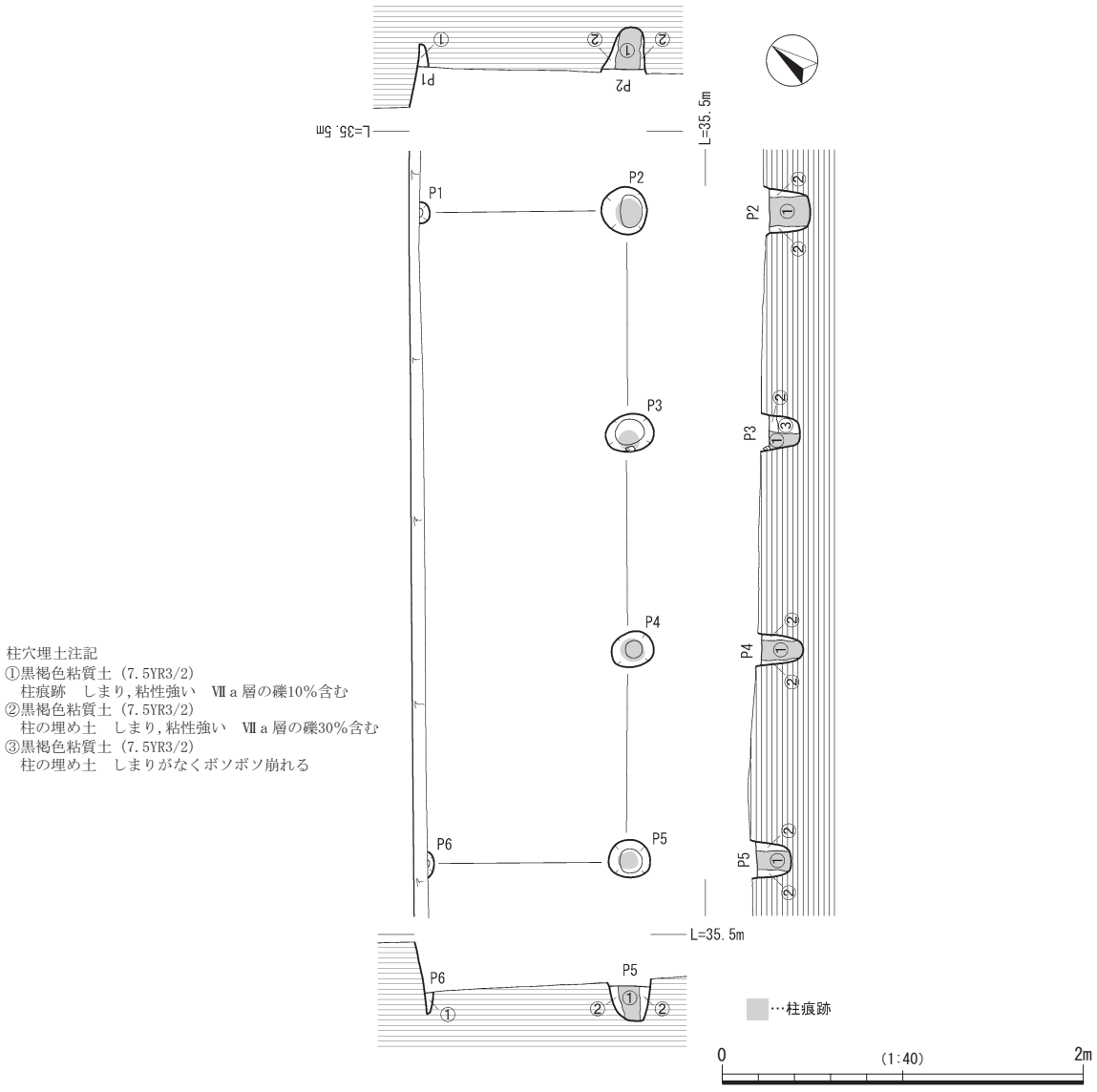

第46図　掘立柱建物跡６号・出土遺物



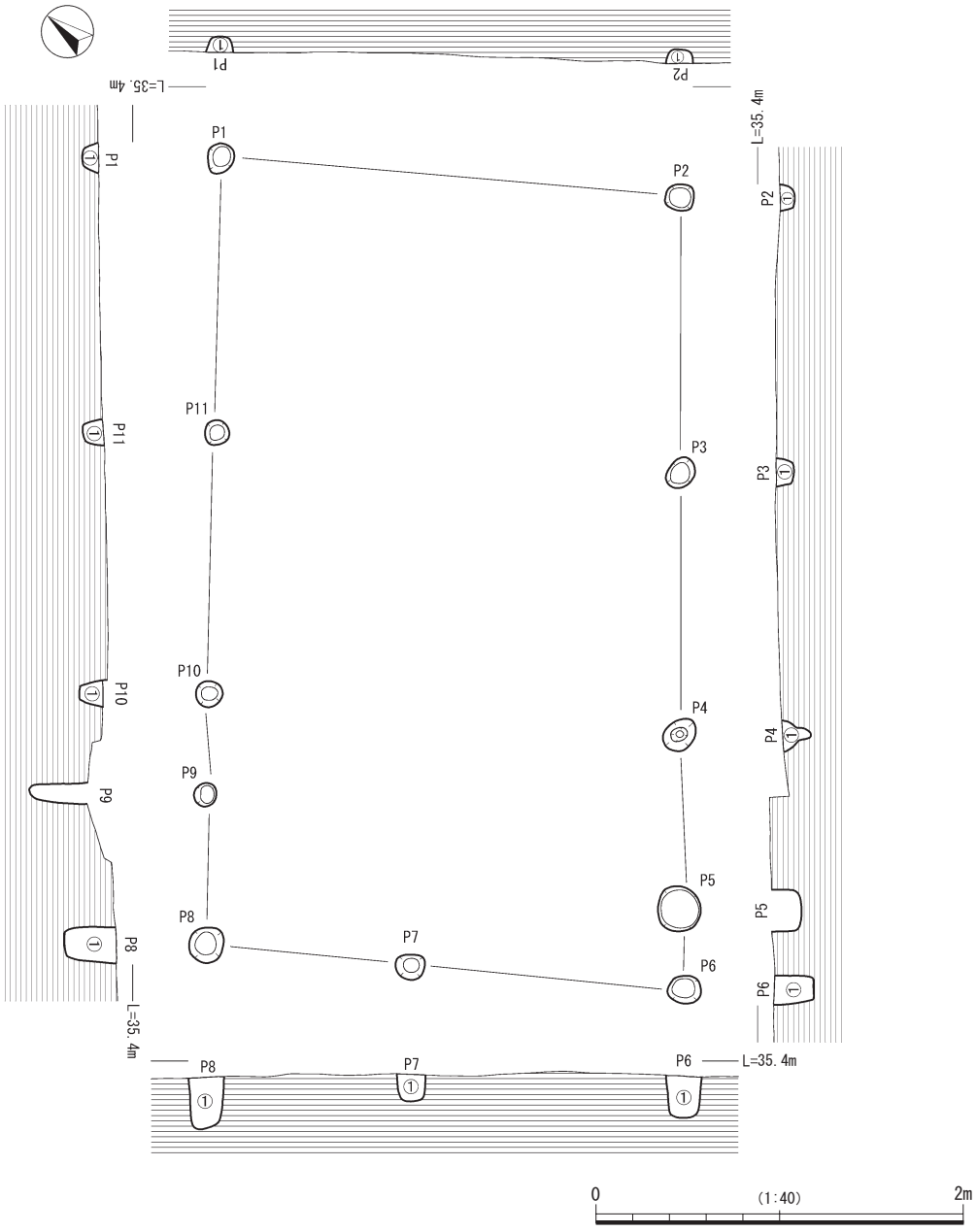

柱穴埋土注記
①黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
　柱痕跡　しまりやや強く，粘性強い　Ⅶａ層の礫10％含む
②黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　柱の埋め土　硬質でしまり，粘性強い　Ⅶａ層の礫10％含む
③黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　柱の埋め土　しまりがなくボソボソ崩れる




**第47図　掘立柱建物跡７号・出土遺物**

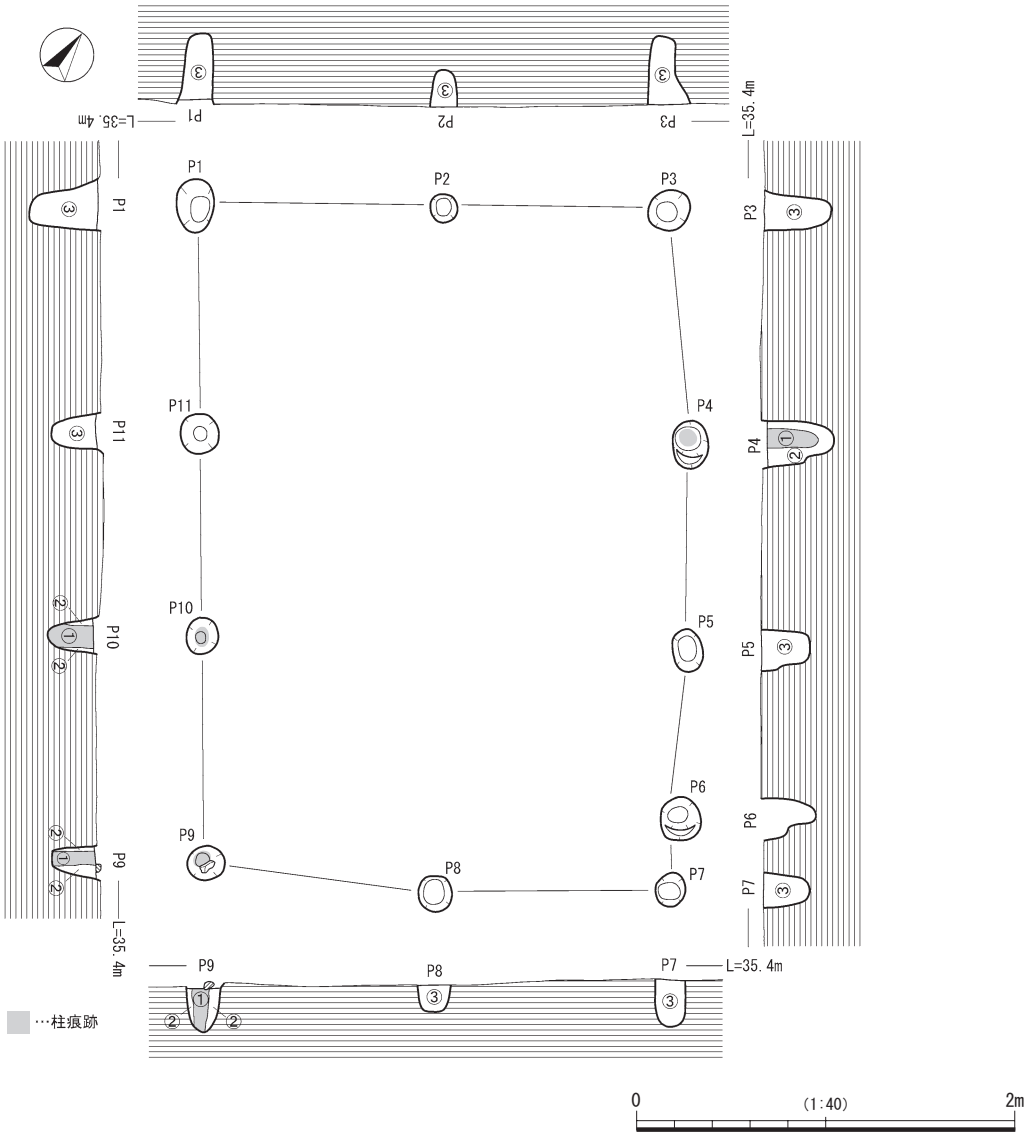



第48図　掘立柱建物跡８号



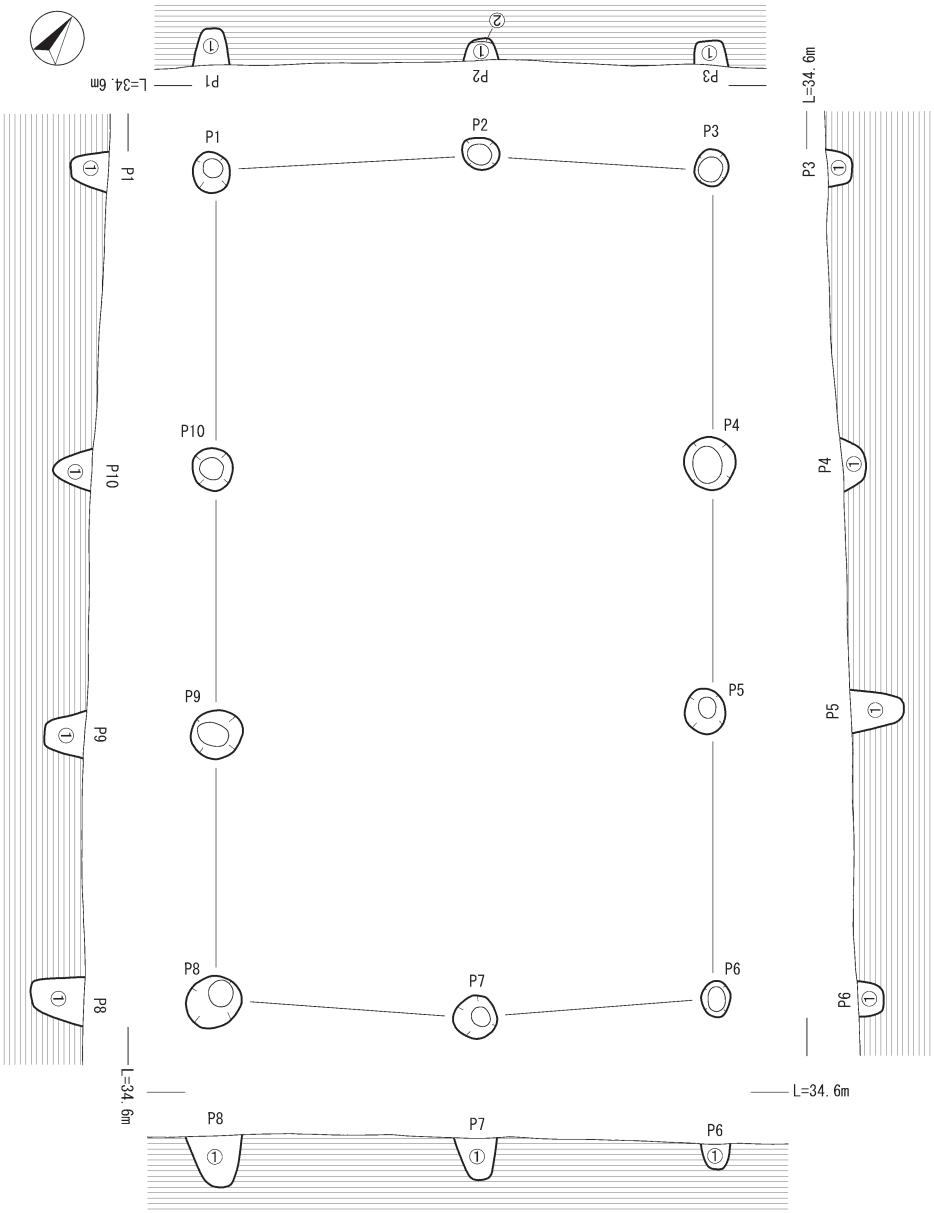

柱穴埋土注記
①黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
　粘性強い　Ⅶａ層の礫10%含む

第49図　掘立柱建物跡９号

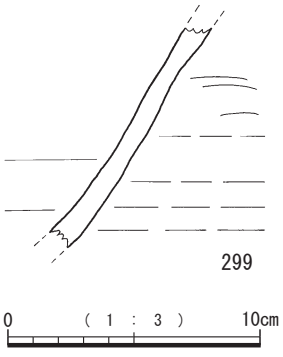



柱穴埋土注記
①黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　柱痕跡　しまり，粘性強い　炭化物，Ⅶａ層の礫10％含む
②黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　柱の埋め土　しまり，粘性強い　炭化物，Ⅶａ層の礫10％含む　Ⅲｂ層のブロック含む
③黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　しまり，粘性強い　炭化物を10％，Ⅶａ層の礫を30％含む

第50図　掘立柱建物跡10号




柱穴埋土注記
①黒褐色砂質土（7.5YR3/2）
　しまりやや強く粘性有　シラスを10%含む
②黒褐色粘質土（10YR3/1）
　しまり弱く粘性強い　炭化物わずかに含む




第51図　掘立柱建物跡11号・出土遺物

### ⑫　掘立柱建物跡12号（第52図）

Ｆ－19区，Ⅲ層上面で検出した。北側梁行２間×桁行３間の長方形を呈する９本柱の側柱建物跡である。南側梁行は１間である。梁行のＰ２は軸線上から内側にずれている。また，Ｐ10，Ｐ11は建物に関連する可能性があるため掲載した。梁行の長さ2.4m，桁行の長さ4.0mで，総面積9.6㎡である。主軸は磁北から東に35°傾いている。

柱間寸法は梁行1.0～1.3m，桁行1.3mである。柱穴は直径0.2～0.3m前後で，深さ0.4m前後である。柱痕跡が５か所の柱穴で確認された。

出土遺物は確認されていない。

### ⑬　掘立柱建物跡13号（第53図）

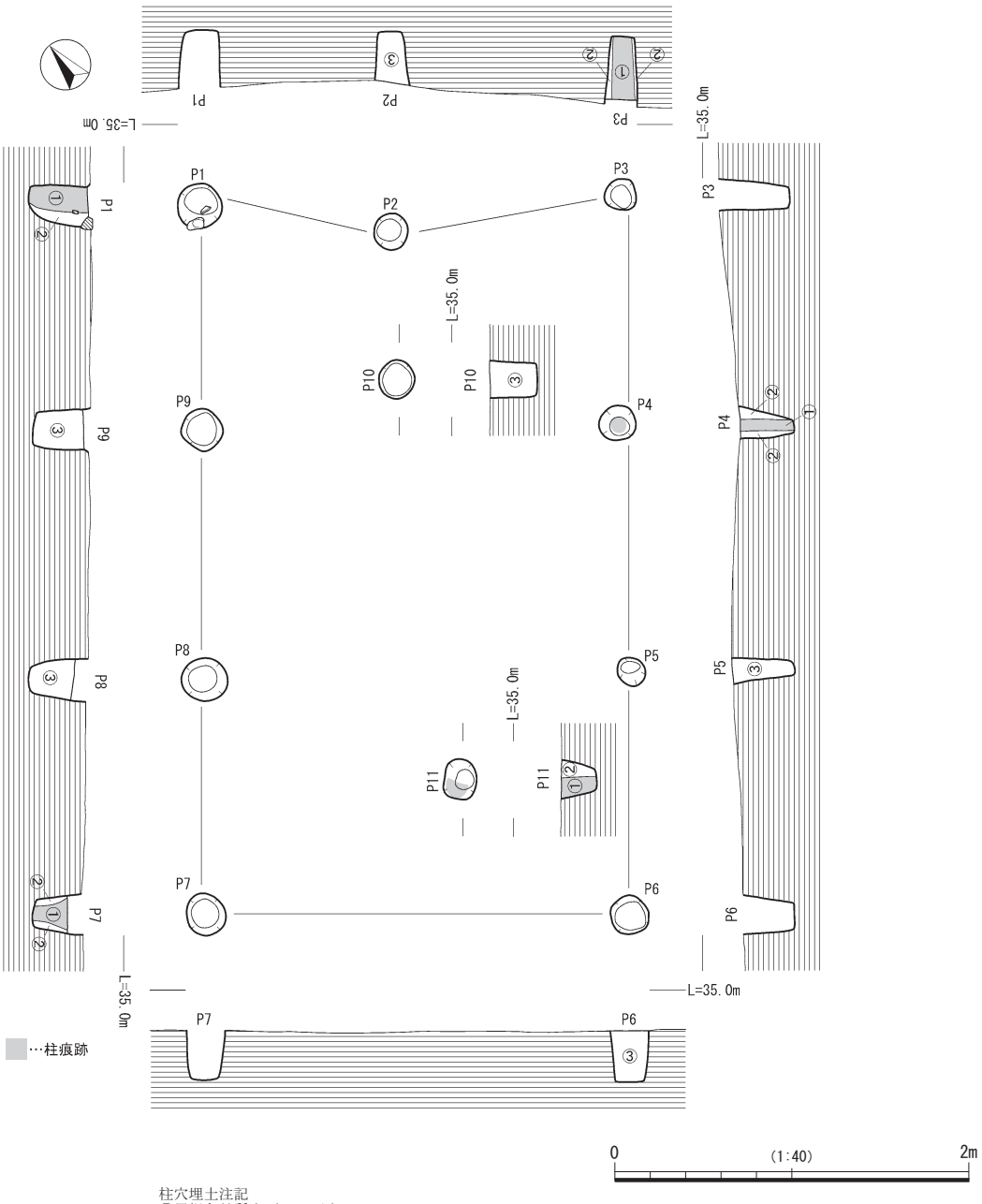
Ｇ－19・20区，Ⅲ層上面で検出した廂付きの建物跡である。出土遺物はないが，埋土の状況や主軸の向きが土坑８号に近いことから中世後期の建物と推測される。身舎は梁行１間×桁行２間で，南側に廂が１間延びる。建物全体の平面形は，南側桁行の柱間寸法が狭いため台形に近い。廂を含めた梁行の長さ4.0m，桁行の長さ4.6mで，総面積13.4㎡である。主軸は磁北から西に10°傾いている。

身舎の柱間寸法は梁行2.3～3.0m，桁行が1.5～2.0mである。柱穴の直径は0.3～0.5m，深さは0.3～0.5mである。柱痕跡は身舎で３か所，廂で１か所確認されている。Ｐ２，Ｐ４，Ｐ６では柱を固定する礫を検出した。建物の南側で検出したＰ７，Ｐ８は，建物に関連する施設を想定して掲載した。

**第 15 表　掘立柱建物跡出土遺物観察表**

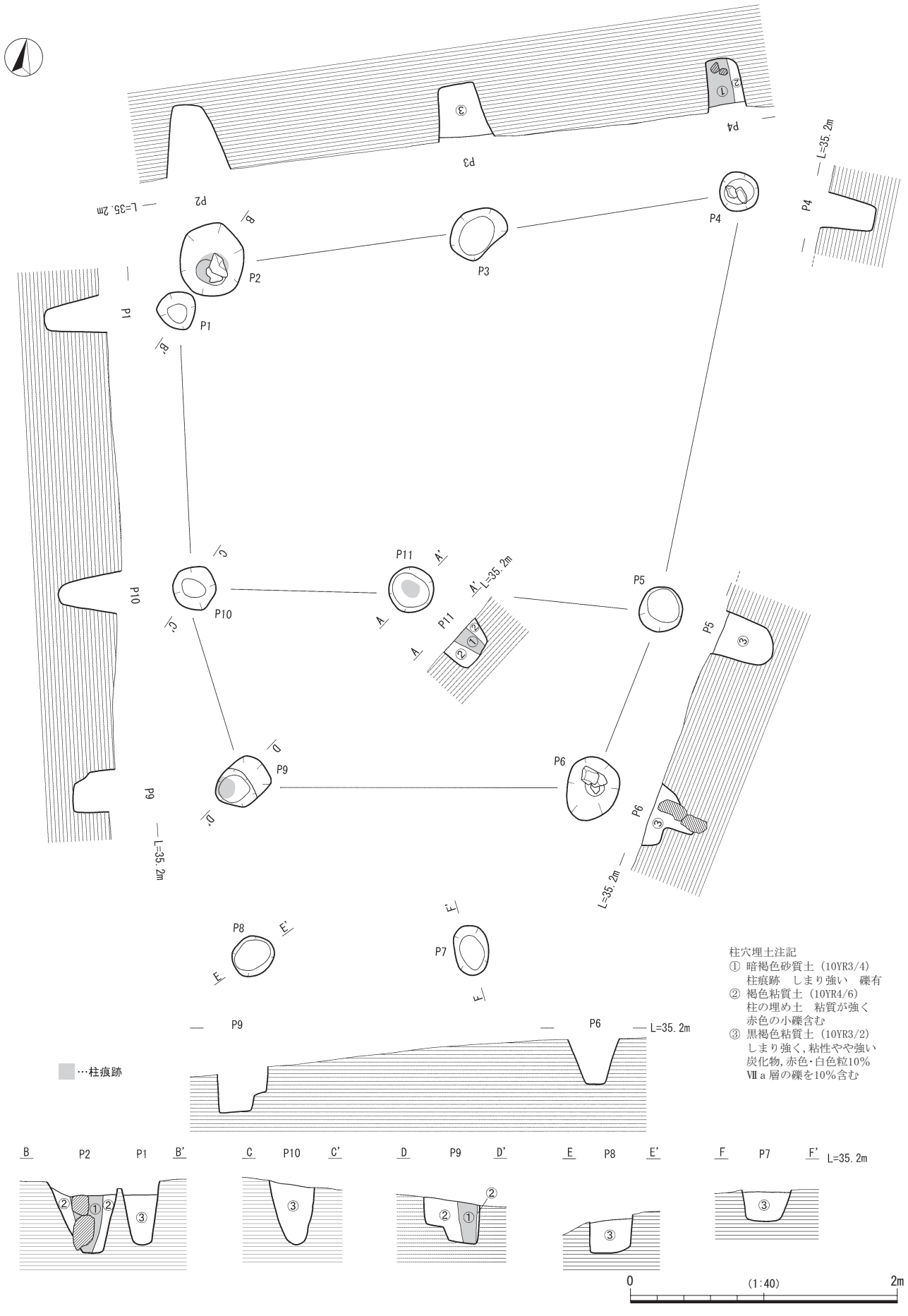
| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 遺構名 | 出土地点 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 41 | 271 | 青磁 | 碗 | １号 | ＳＢ９－Ｐ１・1層 | 18.0 | － | － | － | － | 灰黄 | 精良 | 大宰府分類Ⅱｂ |
| | 272 | 青磁 | 碗 | １号 | ＳＢ９－Ｐ２・２層 | － | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅱｂ |
| | 273 | 白磁 | 皿 | １号 | ＳＢ９－Ｐ３・1層 | 10.8 | 7.0 | 2.8 | － | － | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅸ 1c |
| | 274 | 白磁 | 皿 | １号 | ＳＢ９－Ｐ７・２層 | － | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅸ |
| | 275 | 土師器 | 埦・坏 | １号 | ＳＢ９－Ｐ９・1層 | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 古代 |
| | 276 | 須恵器 | 鉢 | １号 | ＳＢ９－Ｐ３・1層 | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 黄灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 277 | 須恵器 | 鉢 | １号 | ＳＢ９－Ｐ７・２層 | － | － | － | 粗いハケ目 | ハケ目 | 暗灰黄 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 278 | 須恵器 | 鉢 | １号 | ＳＢ９－Ｐ3・1層 Ⅰ－35Ⅱb | － | － | － | ナデ | ハケ目 | 黄灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 279 | 石器 | 敲石 | １号 | ＳＢ９－Ｐ９・1層 | 長さ 14.6 cm，幅 5.0 cm，厚さ 3.4 cm，重量 462.8 ｇ　凝灰岩 | | | | | | | |
| | 280 | 土師器 | 坏 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ７・1層 | 10.6 | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 281 | 土師器 | 坏 | ２号 | （ＳＢ11内） ＳＰ377・1層 | 12.4 | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい黄橙 | 精良 | |
| | 282 | 土師器 | 坏 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ9・1層 ＳＰ391・1層 | 12.0 | 7.8 | 4.1 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | 糸切り |
| | 283 | 土師器 | 坏 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ１・1層 | 12.4 | 8.2 | 3.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 284 | 土師器 | 坏 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ9・1層 ＳＰ391・1層 | 12.6 | 8.8 | 3.2 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 285 | 土師器 | 皿 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ７・1層 | 9.6 | 7.8 | 1.5 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 明黄褐 | 精良 | 糸切り |
| | 286 | 土師器 | 坏・皿 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ４・２層 | － | 7.0 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい橙 | 精良 | 糸切り |
| | 287 | 土師器 | 坏・皿 | ２号 | （ＳＢ11内） ＳＰ391・1層 | － | － | － | 摩滅 | ナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 288 | 土師器 | 坏・皿 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ３・1層 | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 289 | 土師器 | 坏・皿 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ１・２層 | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | |
| | 290 | 土師器 | 坏・皿 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ１・２層 | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい橙 | 精良 | |
| | 291 | 白磁 | 壺 | ２号 | ＳＢ11－Ｐ７・1層 | － | － | － | ヨコナデ | ヨコナデ | 灰白 | 精良 | |
| | 292 | 須恵器 | 壺 | ２号 | （ＳＢ11内） ＳＰ391・1層 | － | － | － | タタキ・摩滅 | ハケ目 | 褐灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| 45 | 293 | 須恵器 | 鉢 | ５号 | ＳＢ７－Ｐ５・1層 | － | － | － | － | ハケ目 | 黄灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| 46 | 294 | 青磁 | 碗 | ６号 | ＳＢ３－Ｐ18・1層 | 16.8 | － | － | － | － | 灰黄 | 精良 | 大宰府分類Ⅰｂ |
| | 295 | 青磁 | 碗 | ６号 | ＳＢ３－Ｐ18・1層 | － | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅱｂ |
| | 296 | 白磁 | 皿 | ６号 | ＳＢ３－Ｐ21・1層 | － | － | － | － | － | 灰黄 | 精良 | 大宰府分類Ⅸ |
| | 297 | 石器 | 磨石 | ６号 | ＳＢ３－Ｐ７・1層 | 長さ 8.6 cm，幅 8.4 cm，厚さ 2.8 cm，重量 301.2 ｇ　凝灰岩 | | | | | | | |
| 47 | 298 | 須恵器 | 鉢 | ７号 | ＳＢ４－Ｐ12・1層 | － | － | － | ヨコナデ | ヨコナデ | 灰白 | 精良 | 東播磨系 |
| 51 | 299 | 須恵器 | 鉢 | １１号 | ＳＢ14－Ｐ８・1層 | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |

※　法量は復元値




柱穴埋土注記
①黒褐色粘質土（10YR3/1）
　柱痕跡　しまり強く，粘性やや強い　赤色粒，Ⅶａ層の礫10％含む
②黒褐色粘質土（10YR3/2）
　柱の埋め土　土質は①に近い　Ⅶａ層の礫30％含む
③黒褐色粘質土（10YR3/2）
　しまり強く，粘性やや強い　炭化物，赤色・白色粒10％，Ⅶａ層の礫を10％含む

第52図　掘立柱建物跡12号




第53図　掘立柱建物跡13号

（２）竪穴建物跡

① 竪穴建物跡４号（第55図）

Ｄ・Ｅ－32区，Ⅲ層上面で検出した。遺構の年代は，出土遺物から判断すると13世紀後半～ 14世紀である。平面形は5.5ｍ×3.9ｍの長方形で，深さは0.4ｍ程である。掘立柱建物跡４号に切られている。竪穴の堀り方は２段堀りで，床面直上では厚さ10㎝程の貼床（②層）を確認した。

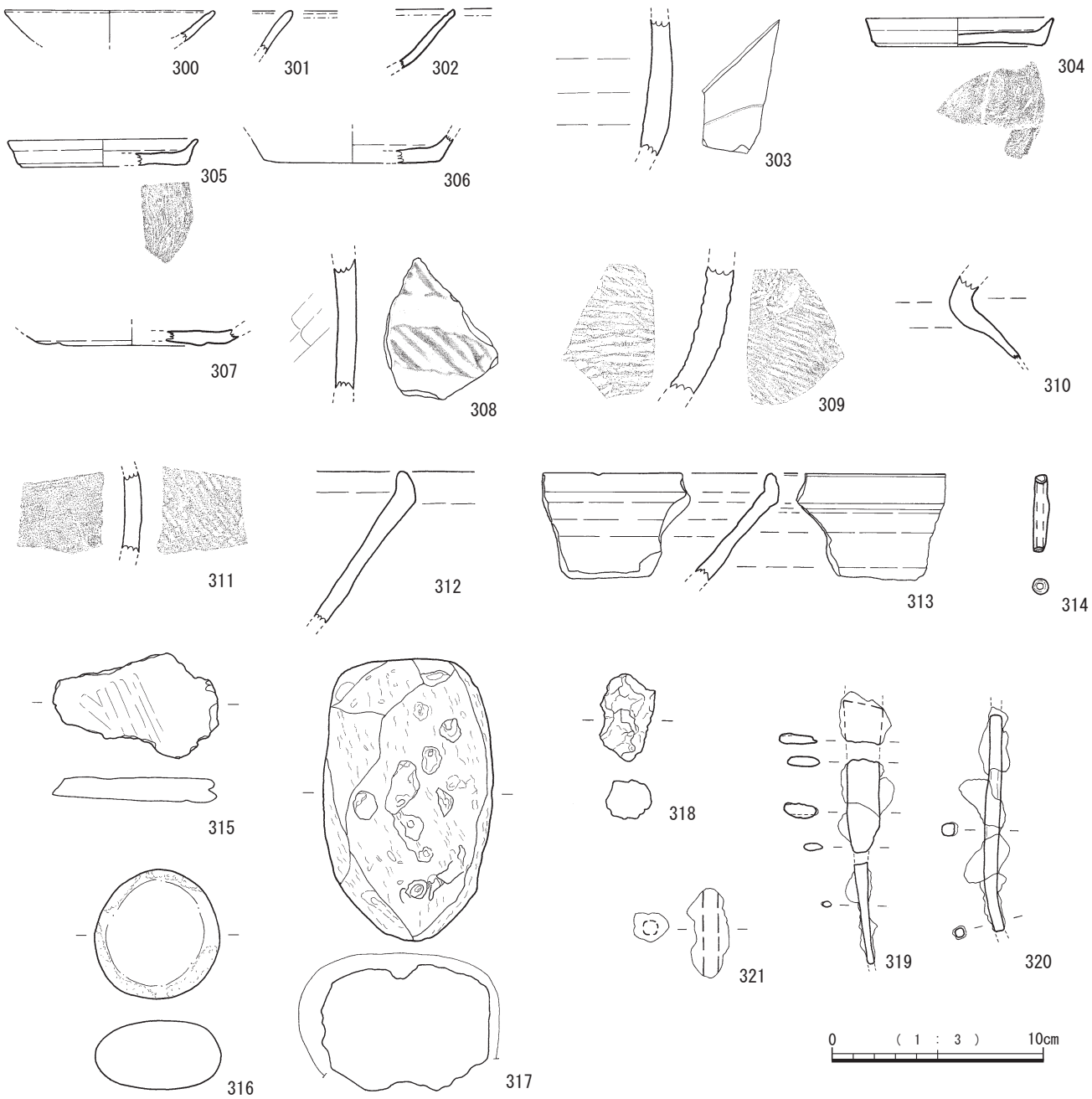
柱穴は中央で２基，壁際で６基確認した。柱穴は直径・深さともに30㎝前後である。

遺物は土器104点，土師器53点，陶器５点，擂鉢３点，滑石１点，青磁３点，白磁４点，土製管玉１点，石器４点，鉄滓２点，軽石製品１点，剥片６点が出土している。

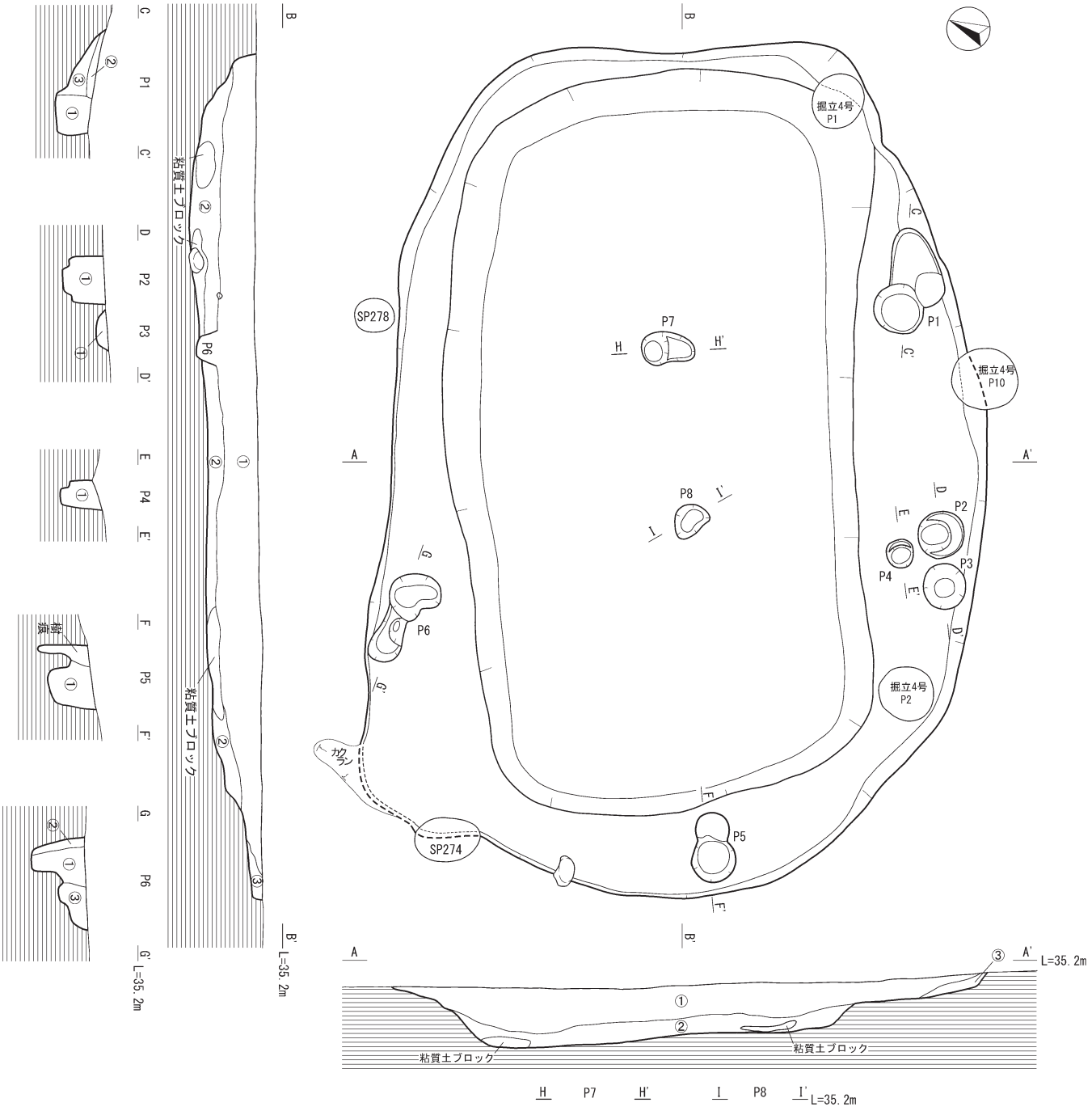
**出土遺物（第54図　300 ～ 321）**

300 ～ 302は口禿の白磁皿で，大宰府分類Ⅸ類である。表面に小さな気泡があり，品質はよくない。300は復元口径10㎝である。303は白磁壺の胴部である。外面に浅い沈線が残っている。

304 ～ 307は土師器の皿である。底部は糸切り底である。308は須恵器の甕である。褐色の帯状痕跡が外面に




第54図　竪穴建物跡４号出土遺物




竪穴埋土注記
①黒褐色砂質土（10YR3/2）
　しまり強く粘性有　炭化物,白色粒を５％含む　Ⅶａ層礫10％含む
②黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
　貼床　炭化物,Ⅶａ層の礫10％含む　明黄褐色粘質土ブロックが混在
③Ⅲｂ層に類似する埋土

Ｐ１・６埋土注記
①黒褐色粘質土（10YR3/1）
　柱痕跡の可能性　しまり,粘性強い　Ⅲｂ層を50％,Ⅶａ層を10％含む
②黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
　しまり,粘性強い　Ⅶａ層礫を10％含む
③黄褐色砂質土（10YR5/6）
　Ⅲｂ層由来の埋土

Ｐ２～５・７・８埋土注記
①黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
　しまり,粘性強い　Ⅲｂ層を30％,Ⅶａ層礫10％含む






## 第55図　竪穴建物跡４号

みられる。309は古代の須恵器の胴部片である。310は須恵器の壺である。胎土は泥質で焼成は土師器に近い。内外面摩滅している。311は須恵器の甕である。外面に格子目タタキを施す。焼成が悪い。

312は須恵器の鉢である。内外面摩滅している。313は東播系須恵器の鉢である。直立する口縁部が内側に傾く。所属時期は13世紀後半である。

314は土製の管玉で，古墳時代の可能性もある。315は滑石製石鍋の底部片である。ノミの痕跡が外面にみられる。

316は砂岩製の磨石である。317は軽石製品である。研磨による平坦面が，正面と両側面に形成されている。

318は鉄滓である。磁力がなく，表面は錆びている。

319は鉄鏃で，刃部先端は欠損している可能性がある。

320･321は棒状の鉄製品で，同一個体の可能性がある。

### （３）竪穴建物跡５号（第56図）

Ｅ－29･30区，Ⅶa層上面で検出した。遺構の年代は，放射性炭素年代から判断すると12世紀後半～ 13世紀中頃である。平面形は2.66m×2.72mの方形で，深さは0.3m程である。竪穴の埋土を掘り下げる途中で壁際に幅15cmほどの溝が巡ることを確認した（第56図上）。断面で確認したところ，溝は壁面に沿って垂直に掘られており，壁板の痕跡と考えられる（断面図①層）。

床面直上では，炭化物の集中域を２か所確認した。採取した炭化物の放射性年代は，集中域１が1,167calAD － 1,261calAD（95.4%），集中域２が1,160calAD － 1,233calAD（90.3%）である。柱穴は８基確認した。柱穴は直径0.2～ 0.4m前後，深さ0.4m前後である。

遺物は土器７点，土師器１点が出土した。

**出土遺物（第56図　322）**

322は黒色土器Ａ類と呼ばれる古代の土師器埦である。内外面摩滅のため調整は不明である。

### （４）竪穴建物跡６号（第57図）

Ｅ－29区，Ⅶａ層上面で検出した。遺構の年代は，放射性炭素年代から判断すると12世紀後半～ 13世紀前半である。平面形は2.3m×2.28mの方形で，深さは0.3m程である。竪穴の埋土を掘り下げる途中で壁際に幅20cm程の溝が巡ることを確認した（第57図上）。断面で確認したところ，溝は壁面に沿って垂直に掘られており，壁板の痕跡と考えられる（断面図②層）。

床面直上では，炭化物の集中域を１か所確認した。採取した炭化物の放射性年代は，1,156calAD － 1,225calAD（91.1%）である。

柱穴は壁に沿って７基確認した。柱穴は直径0.15～ 0.25m前後，深さ0.2～ 0.45m前後である。

遺物は土器２点，磨敲石１点が出土した。

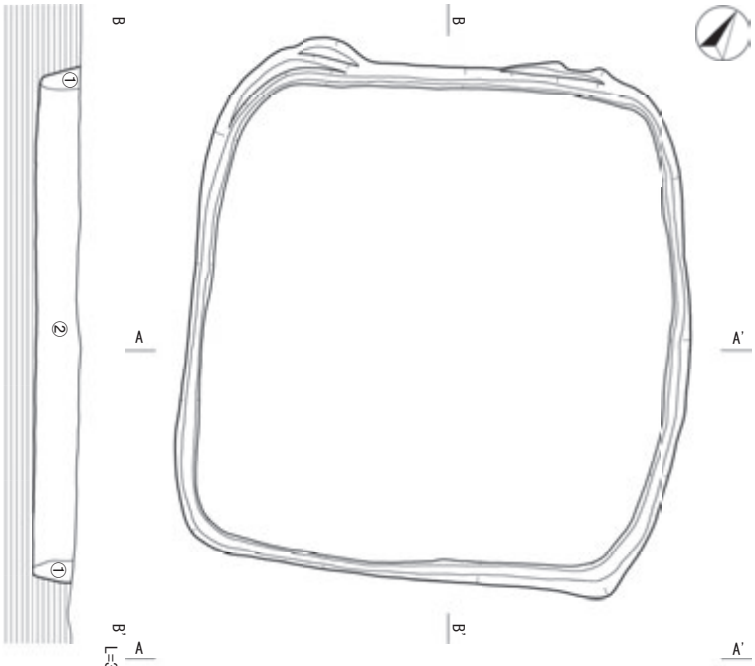
**出土遺物（第57図　323）**

323は砂岩製の磨敲石である。正面には敲打痕と磨面，裏面には敲打痕が形成されている。

**第 16 表　竪穴建物跡出土遺物観察表**

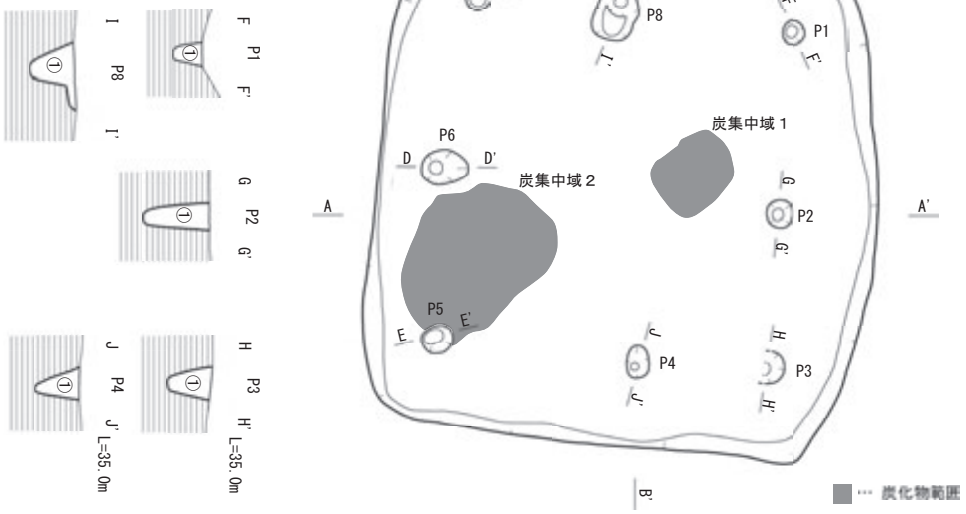
| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 遺構名 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 調整 外面 | 調整 内面 | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 54 | 300 | 白磁 | 皿 | ４号 | ＳＩ４・３・１層 | 10.0 | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅸ |
| | 301 | 白磁 | 皿 | ４号 | ＳＩ４･ＳＰ８・１層 | － | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅸ |
| | 302 | 白磁 | 皿 | ４号 | ＳＩ４・３・１層 | － | － | － | － | － | にぶい橙 | 精良 | 大宰府分類Ⅸ |
| | 303 | 白磁 | 壺 | ４号 | ＳＩ４・３・１層 | － | － | － | － | － | にぶい橙 | 精良 | 外面に浅い沈線 |
| | 304 | 土師器 | 皿 | ４号 | ＳＩ４・１・１層 | 8.8 | 8.2 | 1.4 | 摩滅 | 摩滅 | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 305 | 土師器 | 皿 | ４号 | ＳＩ４・２ | 8.8 | 8.2 | 1.3 | 摩滅 | 摩滅 | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 306 | 土師器 | 皿・坏 | ４号 | ＳＩ４・３・１層 | － | 8.2 | － | 摩滅 | 摩滅 | 明赤褐 | 精良 | 糸切り |
| | 307 | 土師器 | 皿・坏 | ４号 | ＳＩ４・４・１層 | － | 9.0 | － | 摩滅 | 摩滅 | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 308 | 須恵器 | 甕 | ４号 | ＳＩ４・４・１層 | － | － | － | ナデ | ナデ | 灰 | 白色砂 | |
| | 309 | 須恵器 | 甕 | ４号 | ＳＩ４・４・１層 | － | － | － | 平行タタキ | 平行タタキ | 黄灰 | 精良 | 古代 |
| | 310 | 須恵器 | 壺 | ４号 | ＳＩ４・１・１層 | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 橙 | 泥質 | |
| | 311 | 須恵器 | 甕 | ４号 | ＳＩ４・１層 | － | － | － | 格子目タタキ | 摩滅 | 暗緑灰 | 泥質 | |
| | 312 | 須恵器 | 鉢 | ４号 | ＳＩ４・２<br>ＳＩ４･３・１層 | － | － | － | 摩滅 | 摩滅 | 浅黄 | 精良 | |
| | 313 | 須恵器 | 鉢 | ４号 | ＳＩ４・２層 | － | － | － | ヨコナデ | ヨコナデ | 灰 | 精良 | 東播系須恵器 13c 後半 |
| | 314 | 土製品 | 管玉 | ４号 | ＳＩ４・２ | － | － | － | 摩滅 | － | 明赤褐 | 精良 | |
| | 315 | 石器 | 鍋 | ４号 | ＳＩ４・１層 | 長さ 7.8 cm，幅 4.9 cm，厚さ 1.1 cm，重量 60.4 ｇ　滑石 | | | | | | | |
| | 316 | 石器 | 磨石 | ４号 | ＳＩ４・１・１層 | 長さ 6.1 cm，幅 5.9 cm，　厚さ 3.2 cm，　重量 173.7g，　砂岩 | | | | | | | |
| | 317 | 石器 | 軽石製品 | ４号 | ＳＩ４・３・１層 | 長さ 13.3 cm，幅 8.0 cm，厚さ 5.7 cm，重量 159.6g | | | | | | | |
| | 318 | 鉄製品 | 鉄滓 | ４号 | ＳＩ４・３・１層 | 長さ 4.2 cm，幅 2.6 cm，厚さ 1.9 cm，重量 29.8g | | | | | | | 鍛冶滓 |
| | 319 | 鉄製品 | 鉄鏃 | ４号 | ＳＩ４・２層 | （長さ 12.8 cm），幅 2.7 cm，厚さ 1.4 cm，重量 25.0 ｇ | | | | | | | |
| | 320 | 鉄製品 | 棒状鉄器 | ４号 | ＳＩ４・１層 | （長さ 10.6 cm），幅 2.4 cm，厚さ 1.9 cm，重量 24.2 ｇ | | | | | | | |
| | 321 | 鉄製品 | 棒状鉄器 | ４号 | ＳＩ４・１層 | 長さ 4.3 cm，幅 2.0 cm，厚さ 1.4 cm，重量 11.9 ｇ | | | | | | | |
| 56 | 322 | 土師器 | 埦 | ５号 | ＳＩ５・４ | － | 6.6 | － | 摩滅 | 摩滅 | 外）明黄褐　内）黒 | 精良 | 黒色土器Ａ類 |
| 57 | 323 | 石器 | 磨敲石 | ６号 | ＳＩ６・４ | 長さ 8.5 cm，幅 7.8 cm，厚さ 3.5 cm，重量 319.4 ｇ，砂岩 | | | | | | | |

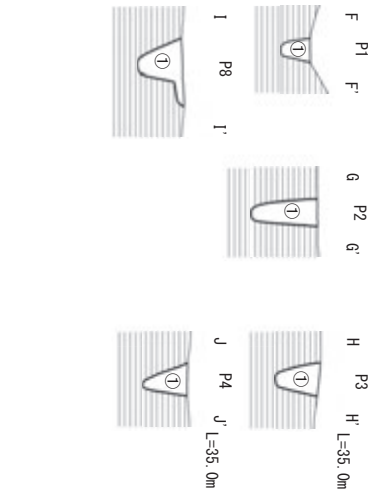
※　法量は復元値

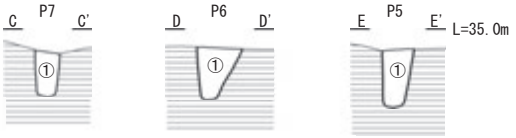


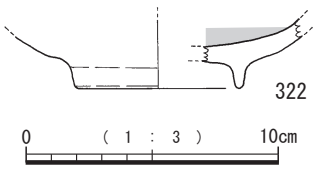

竪穴埋土注記
①暗褐色(7.5YR 3/3)　粘質土,しまり強く,粘性有り
　黒褐色(7.5YR 3/1)とマーブル状に堆積する
　Ⅲb層由来の埋土で,Ⅶa層由来のレキを10%含む
②灰褐色(7.5YR 4/2)　粘質土,しまり強く,粘性有り
　Ⅲb層由来で,Ⅶa層由来のレキを30%含む
　炭化物もわずかにみられる

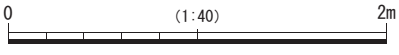
柱穴埋土注記
①灰褐色粘質土 (7.5YR4/2)
　しまり,粘性ともに強い
　Ⅶa層の礫を30%含む



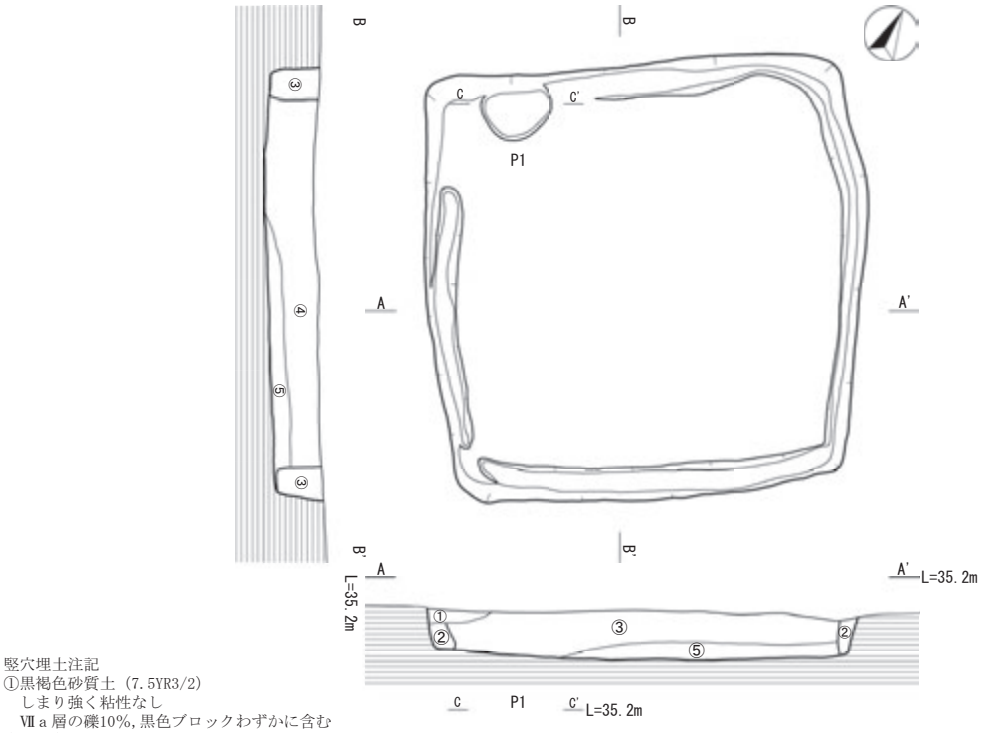



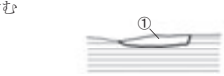



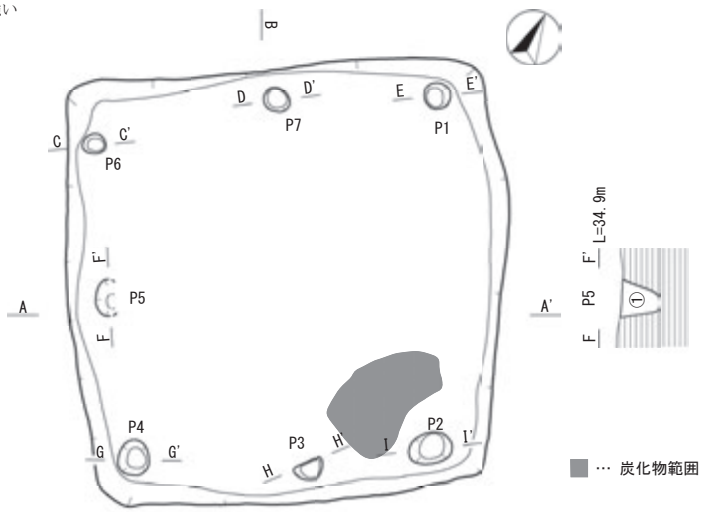




第56図　竪穴建物跡５号・出土遺物

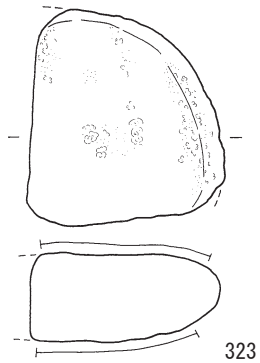


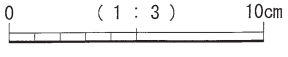

竪穴埋土注記
①黒褐色砂質土（7.5YR3/2）
　しまり強く粘性なし
　Ⅶa層の礫10%,黒色ブロックわずかに含む
②暗褐色粘質土（7.5YR3/3）
　しまり強く粘性なし　5～10㎜のⅦa層礫10%含む
③暗褐色砂質土（7.5YR3/3）
　しまり,粘性強い　5～10㎜のⅦa層礫10%含む
④灰黄褐色粘質土（7.5YR3/3）
　しまり強い　Ⅶa層の礫が多いところは砂質が強い
　Ⅶa層の礫50%含む
⑤灰褐色粘質土（7.5YR4/2）
　しまり,粘性強い　Ⅶa層礫を10%含む
　下層で炭化物集中域を検出

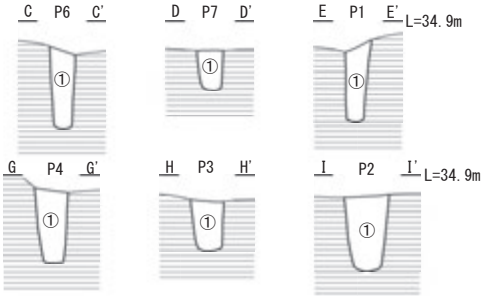


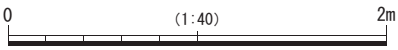




柱穴埋土注記
①黒褐色砂質土（7.5YR3/1）
　しまり強く粘性なし
　Ⅶa層礫を30%含む




第57図　竪穴建物跡６号・出土遺物

### （３）土坑墓

#### ①　土坑墓１号（第58図）

Ｅ－32区，Ⅲ層上面で検出した。規模は1.2×0.85ｍで平面形は楕円形である。床面は北から南に向かって緩やかに傾斜している。③層上面付近で銅銭１枚，②層で30㎝程の角礫が出土した。銅銭は床面に近いレベルで出土していることから，副葬品と判断した。埋土は複数に分層でき人為的な埋め戻しによる堆積と考えられる。

遺物は土器１点，土師器２点，粘土塊１点，銅銭１枚が出土した。

**出土遺物（第58図　324 ～ 326）**

324は土師器の坏の口縁部である。小片のため時代の判別が難しく，古代の土師器の可能性がある。325は銅銭である。Ｘ線写真で文字は確認できなかった。326は重量15.3ｇの小さな粘土塊である。形が不定形で，調整の痕跡は認められない。

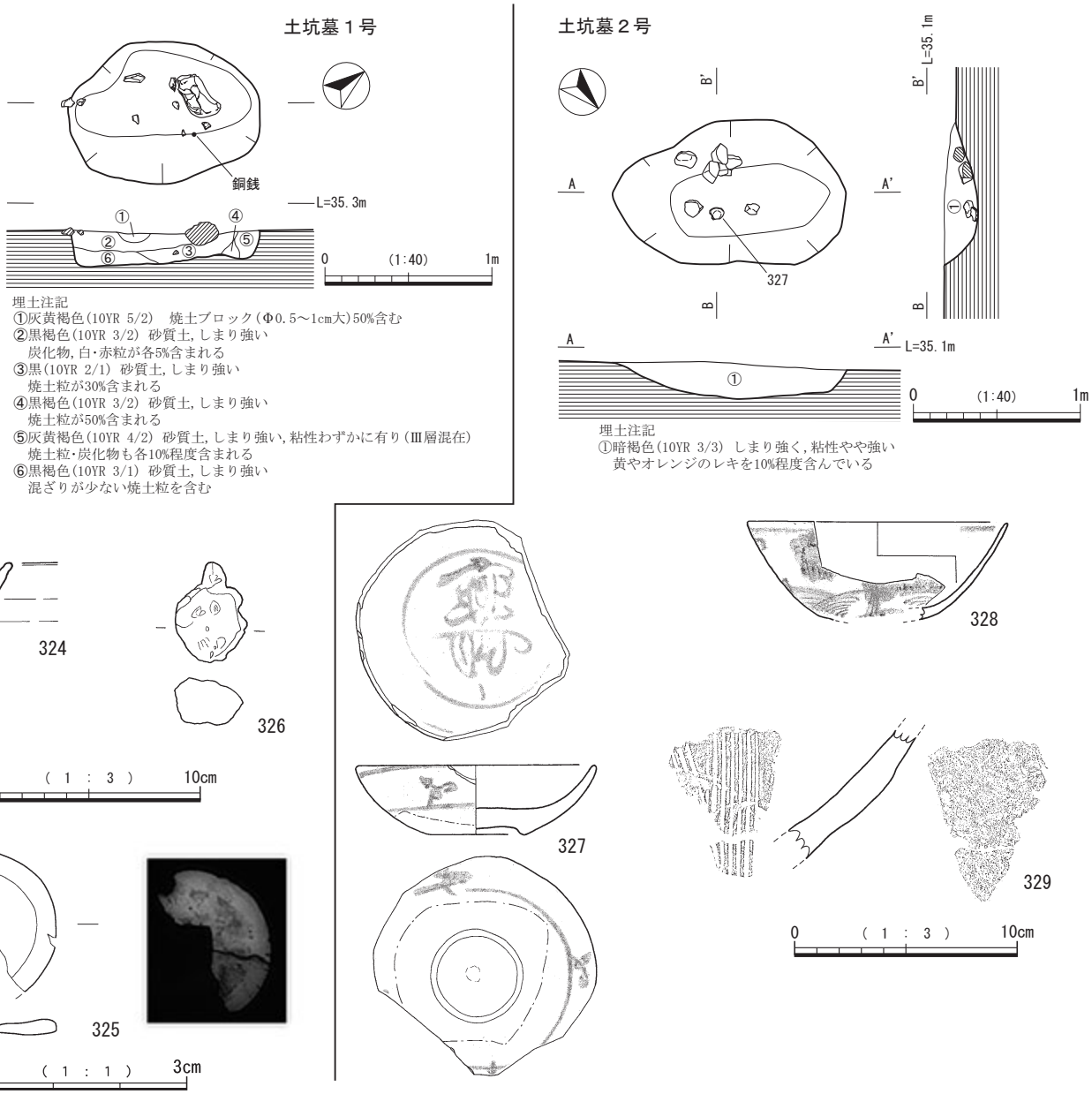
#### ②　土坑墓２（第58図）

Ｇ－19区，Ⅲ層上面で検出した楕円形の土坑墓である。年代は副葬品から16世紀中頃から後半と考えられる。規模は1.4×0.85ｍで土坑墓１号とほぼ同じ大きさである。床面直上で青花１点，礫７点が出土した。副葬品と考えられる青花（327）は，体部を打ち欠き，口縁部を上に向けて置かれていた。埋土は黄色土ブロックを含み人為的な埋め戻しによる堆積と考えられる。

**出土遺物（第58図　327 ～ 329）**

327は碁笥底をもつ青花で，体部を打ち欠き副葬品としている。見込には吉祥文字である「寿」「福」のいずれかを人形化した文様が描かれている。外面は略化した文字のような文様を描く。体部下半から底部にかけては露胎である。小野分類のＣⅢ類に相当し，年代は16世紀中頃から後半である。328は広く開いた胴部をもつ青花の碗である。外面には樹木（風景画）が描かれている。

329は須恵器の擂鉢である。内面に櫛目が残っている。




第58図　土坑墓１・２号・出土遺物

### （４）土坑

土坑は総数15基検出した。土坑の中には，平面プランや埋土の状況から土坑墓の可能性があるものが含まれている。

#### ①　土坑２号（第59図）

Ⅰ－35区，Ⅲ層上面で検出した長楕円形の大型土坑である。地形の低い場所で確認された。年代は出土遺物から14世紀中頃から後半と考えられる。規模は4.5×2.0ｍで，８基のピットと重複しているが前後関係は不明である。床面は溝状または土坑状に一段下がっている部分がある。遺物は土器７点，土師器２点，須恵器１点，青磁１点，石器１点，鉄滓１点，剥片が出土した。

**出土遺物（第59図　330 ～ 334）**

330は龍泉窯系青磁碗で連弁文が外面に確認できる。大宰府分類Ⅱ類に相当する。331は常滑焼の甕の胴部片と推測される。332は瓦質焼成の擂鉢である。内面はヨコナデ後，櫛目を施す。333は扁平な自然礫の下端を打ち欠いた石器である。剥離部分に使用の痕跡は認められない。334は常滑焼の大甕である。破片の一部は包含層出土のものと接合している。頸部を短く折り曲げ，口縁端部の平坦面に２条の浅い凹線を施す。肩部は強く張り出し，帯状に連続して押印を施している。常滑焼８型式に相当し，年代は14世紀中頃から後半である。

#### ②　土坑３号（第60図）

Ｇ－35区，Ⅲ層上面で検出した楕円形の土坑である。規模は1.04×0.86ｍである。床面はフラットで，掘り込みの下端は方形に整えられている。埋土はⅢ層のブロックが混在し，埋め戻しによる堆積と考えられ，土坑墓の可能性がある。遺物は土師器片１点，土器片１点，粘土塊３点，黒曜石剥片１点がある。

#### ③　土坑４号（第60図）

Ｆ－35・36区，Ⅲ層上面で検出した。年代は16世紀と考えられる。２基の土坑が重複しており，東側の土坑が西側の土坑を切っている。東側の土坑は，掘削深度が深くなったため，安全面を考慮して掘り下げを断念した。

**出土遺物**

土器４点，青磁１点が出土した。

335は龍泉窯系青磁碗の底部である。高台が短く，黄色に近い釉調で貫入が目立つ。16世紀代の青磁と考えられる。

#### ④　土坑５号（第60図）

Ｇ－25区，Ⅲ層上面で検出した円形の土坑である。年代は出土遺物から15世紀末から16世紀前半と考えられる。規模は1.85×1.75ｍで，断面形は皿状である。埋土はシラスのブロックが混在し，埋め戻しによる堆積と考えられる。土坑墓の可能性がある。

**出土遺物（第60図　336）**

青磁１点，鉄滓１点が出土した。

336は龍泉窯系青磁碗の胴部である。外面には細連弁文が確認できる。上田分類のＢ類に相当し，15世紀末から16世紀前半の青磁と考えられる。

#### ⑤　土坑６号（第61図）

Ｇ－25区，Ⅲ層上面で検出した円形の土坑である。年代は出土遺物から16世紀と考えられる。規模は1.7×1.55ｍである。断面は皿状で，土坑５に類似している。埋土はシラスのブロックが混在し，埋め戻しによる堆積と考えられる。土坑墓の可能性がある。

**出土遺物（第61図　337 ～ 339）**

白磁１点，陶器１点，擂鉢１点，土器１点が出土した。

337は白磁の端反り皿である。釉の色調は乳白色に近い。森田分類Ｅ群に相当し，16世紀代の白磁と考えられる。338は須恵器の擂鉢である。外面には格子目タタキ，内面には櫛目が施されている。色調は灰色である。

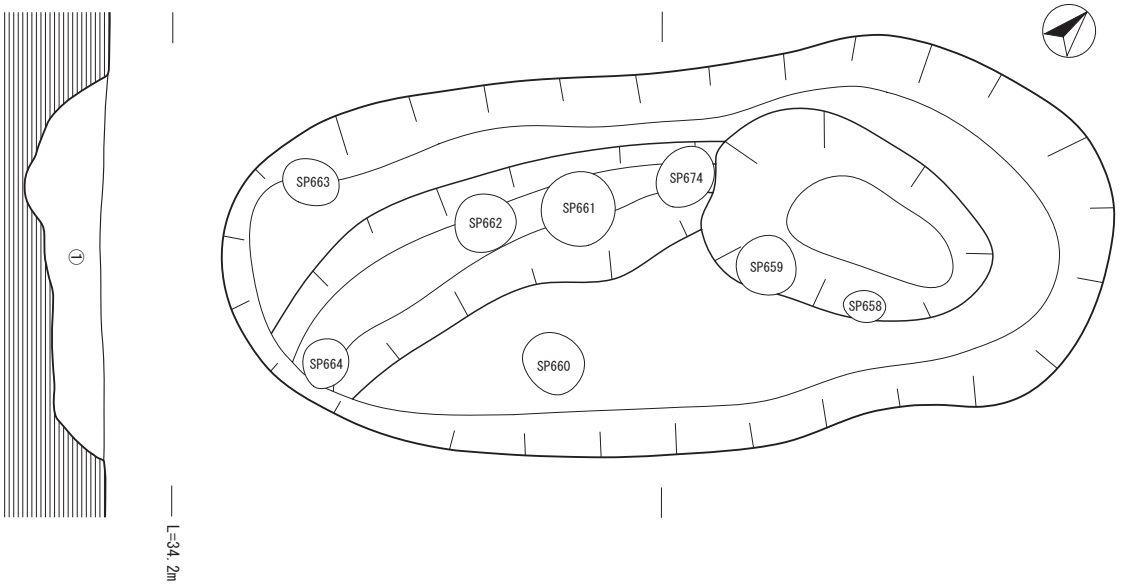
#### ⑥　土坑７号（第61図）

Ｅ－23区，Ⅲ層上面で検出した楕円形の土坑である。規模は2.56×1.58ｍである。土坑内部は東から西に傾斜し，西壁近くが一段高くなっている。埋土は砂質土に黒色土が混在し，埋め戻しによる堆積と考えられる。土坑墓の可能性がある。

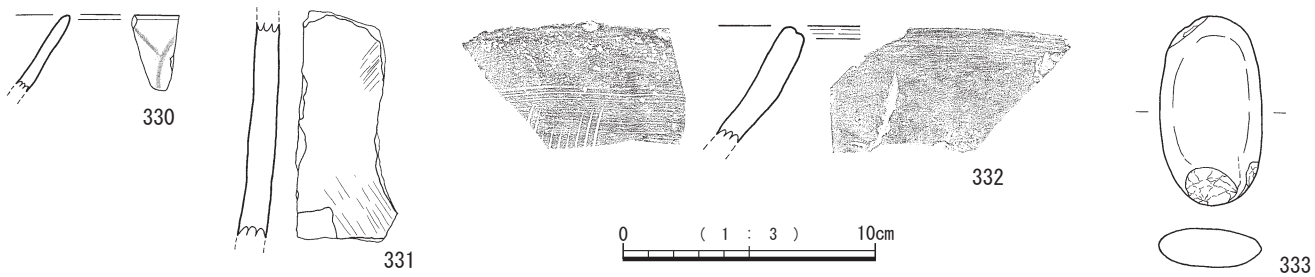
**第 17 表　土坑墓出土遺物観察表**

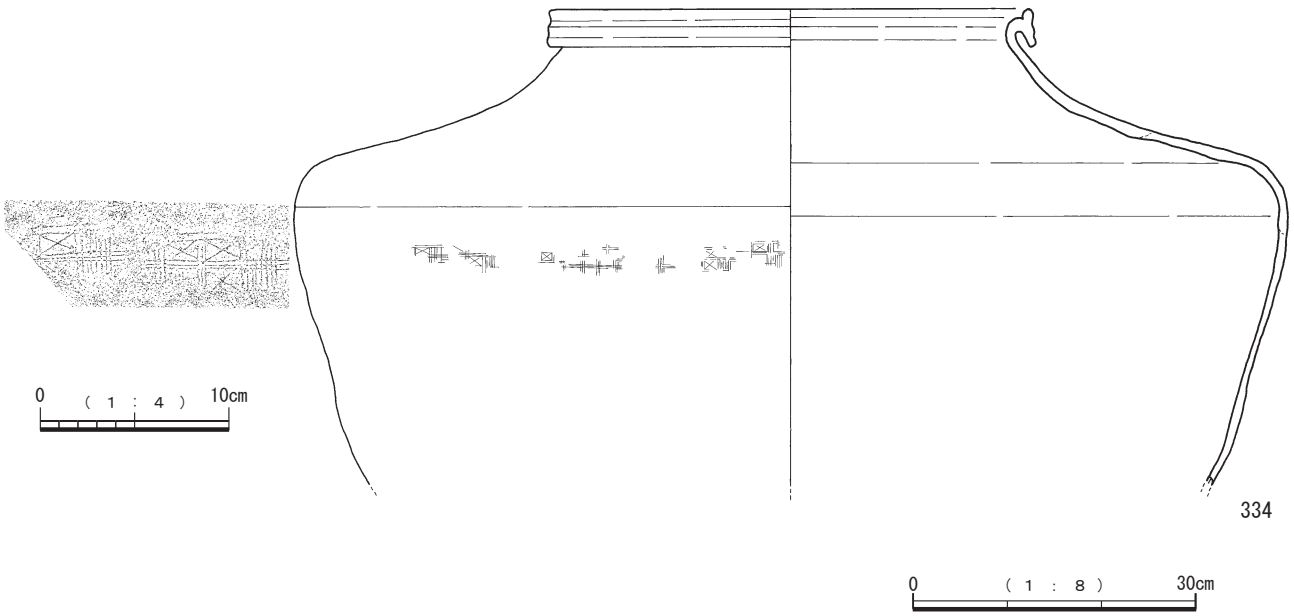
| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 遺構名 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 58 | 324 | 土師器 | 坏 | １号 | ＳＫ 77・７・１層 | － | － | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | |
| | 325 | 銅製品 | 銭貨 | １号 | ＳＫ 77・２・１層 | 厚さ 0.2cm，重量 1.2 ｇ | | | － | － | － | － | |
| | 326 | 土製品 | 粘土塊 | １号 | ＳＫ 77・４・１層 | 高さ 4.5 cm，幅３cm，厚み２cm，重量 15.3 ｇ | | | | | 橙 | 石英，赤白小石 | |
| | 327 | 青花 | 皿 | ２号 | ＳＫ 57・１層 | 10.6 | 4.2 | 3.1 | － | － | 淡黄 | 精良 | 小野分類ＣⅢ類 |
| | 328 | 青花 | 碗 | ２号 | ＳＫ 57 | 11.6 | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | |
| | 329 | 須恵器 | 擂鉢 | ２号 | ＳＫ 57 Ⅱｂ | － | － | － | ナデ | ナデ | 黄橙 | 白色砂 | |

※　法量は復元値



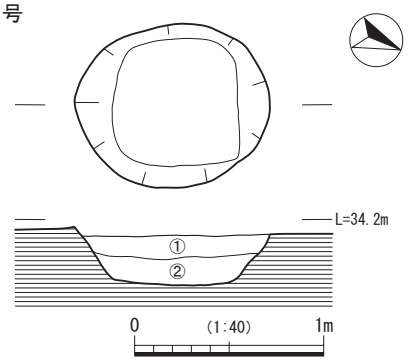

埋土注記
①黒褐色(10YR 3/1) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
白色粒子5%, Ⅲ層ブロック5%含む



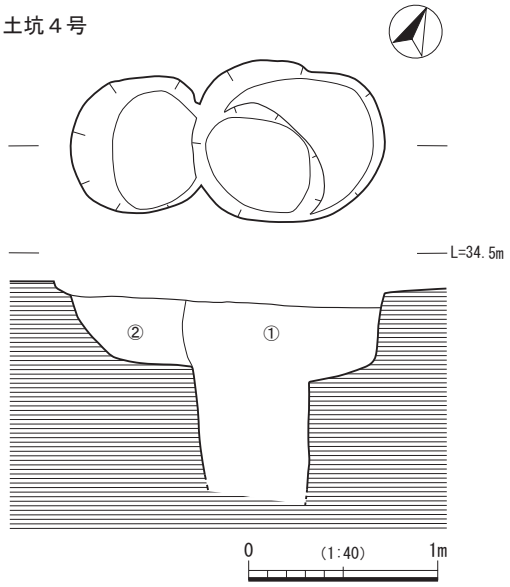

第59図　土坑２号・出土遺物

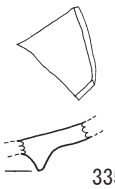
土坑３号

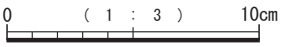



埋土注記
①黒褐色(7.5YR 3/2) 砂質土, しまりやや強く, 粘性やや有り
炭化物・赤粒子各5%含む
②黒褐色(7.5YR 3/2) 砂質土, しまりやや強く, 粘性やや有り
ブロック状にⅢ層が含まれる

土坑４号

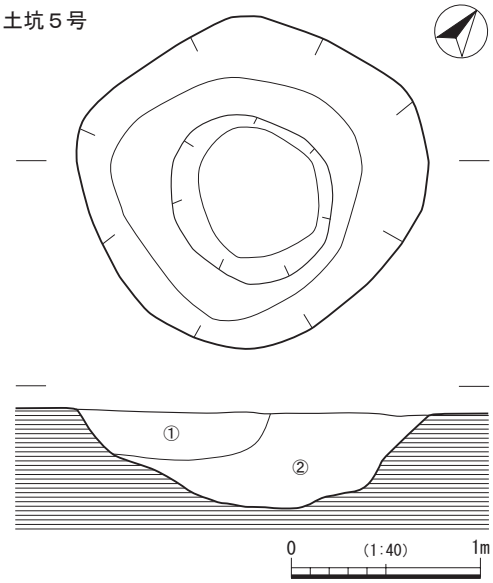


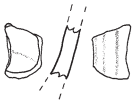


335

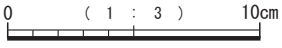



埋土注記
①黒褐色(75YR 3/2) 粘質土, しまり強く, 粘性やや強い
Ⅲ層・炭化物が各10%, 赤色粒子・シラスがわずかに含まれる
焼けたレキも含む
②灰褐色(75YR 4/2) 粘質土, しまり強く, 粘性強い
Ⅲ層が30%程度ブロック状に含まれる
炭化物・シラス(Φ2cm大)がわずかに含まれる

土坑５号

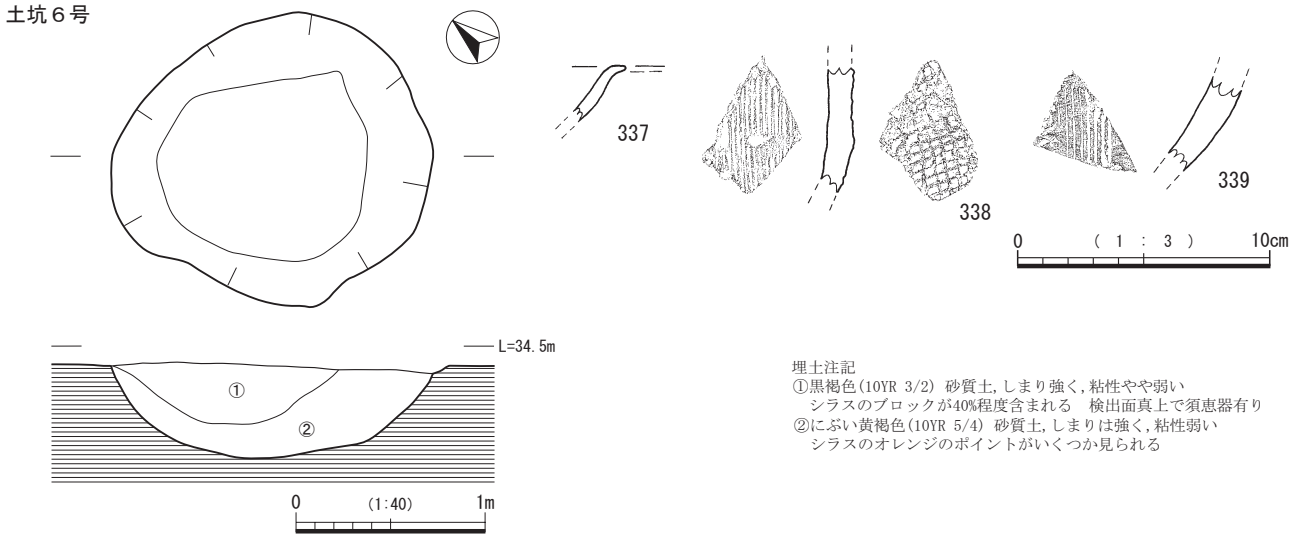


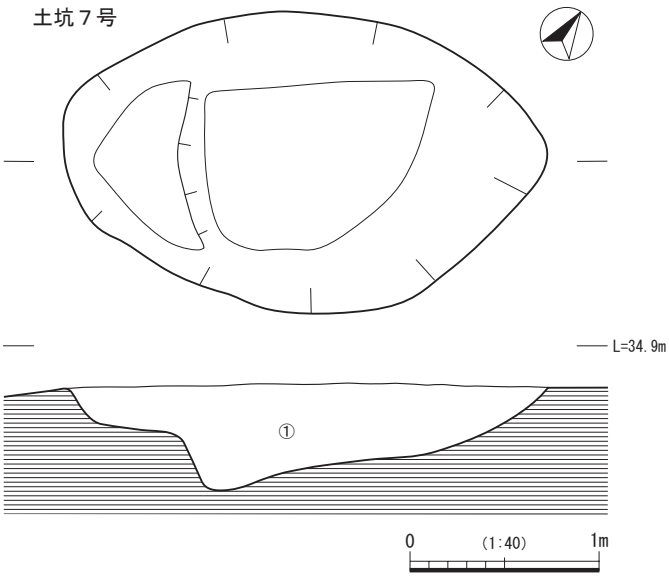


336




埋土注記
①黒褐色(10YR 3/2) 砂質土, しまり強く, 粘性弱い
白色粒, シラス粒合わせて10%含む　赤色粒・小レキ(5cm大)は微量
②黒褐色(10YR 3/2) 砂質土, しまり強く, 粘性弱い
シラスブロックが混在, マーブル状に堆積, 50%程度含まれる

第60図　土坑３・４・５号・出土遺物




第61図　土坑６・７号・出土遺物

第 18 表　土坑出土遺物観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 遺構名 | 出土地点 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 外面 | 調整 内面 | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 59 | 330 | 青磁 | 碗 | ２号 | ＳＸ 33・下層 | － | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅱ類 |
| | 331 | 須恵器 | 甕 | ２号 | ＳＸ 33・１層 H-35 Ⅱ b | － | － | － | ナデ | ナデ | 灰黄 | 白色砂 | 常滑焼８型式 |
| | 332 | 須恵器 | 擂鉢 | ２号 | ＳＸ 33・１層 | － | － | － | ヨコナデ | ヨコナデ・櫛目 | 灰黄 | 精良 | |
| | 333 | 石器 | 磨石 | ２号 | ＳＸ 33・１層 | 長さ７．５cm，幅４．０cm，厚さ１．５cm，重量７３．６ｇ | | | | | | | 頁岩 |
| | 334 | 須恵器 | 甕 | ２号 | ＳＸ 33・１層 F-36 Ⅱ b・H-35 Ⅱ b | 51.0 | － | － | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 白色砂 | 常滑焼 |
| 60 | 335 | 青磁 | 碗 | ４号 | ＳＫ 79・１層 | － | － | － | － | － | 明緑灰 | 精良 | 16c |
| | 336 | 青磁 | 碗 | ５号 | ＳＫ 52 G-24・25 | － | － | － | － | － | 灰白 | 精良 | 上田分類Ｂ類 |
| 61 | 337 | 白磁 | 皿 | ６号 | ＳＫ 54 | － | － | － | － | － | 灰 | 精良 | 森田分類Ｅ群 |
| | 338 | 須恵器 | 擂鉢 | ６号 | ＳＫ 54 | － | － | － | タタキ | 櫛目 | 灰 | 精良 | |
| | 339 | 須恵器 | 擂鉢 | ６号 | ＳＫ 54 | － | － | － | ナデ | ナデ | にぶい黄 | 精良 | |
| 62 | 340 | 青磁 | 碗 | ８号 | ＳＸ 29 G-20 | 7.2 | 5.0 | 5.9 | － | － | 灰白 | 精良 | 續分類Ⅳ類新相 |
| | 341 | 白磁 | 皿 | ８号 | ＳＸ 29 G-20 | 11.0 | 5.6 | 3.1 | － | － | 灰白 | 精良 | |
| | 342 | 青花 | 碗 | ８号 | ＳＸ 29 G-20 | － | 5.4 | － | － | － | 灰白 | 精良 | |
| | 343 | 青花 | 碗 | ８号 | ＳＸ 29 G-20 | － | 6.0 | － | － | － | 灰白 | 精良 | 小野分類Ｃ類 |
| | 344 | 須恵器 | 甕 | ８号 | ＳＸ 29 G-20 | － | － | － | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 泥質 | |
| | 345 | 土師器 | 坏 | ８号 | ＳＸ 29 G-20 | － | － | － | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 精良 | |

※　法量は復元値

### ⑦　土坑８号（第63図）

Ｇ－20区，Ⅶa層上面で検出した隅丸長方形の大型土坑である。年代は出土遺物から15世紀後半から16世紀と考えられる。規模は5.4×3.52ｍで，東壁は溝跡５号に接している。周辺がⅦ層まで削平されているため深さが浅い。

**出土遺物（第62図　340 ～ 345）**

土器１点，土師器１点，青磁１点，白磁１点，青花３点，黒曜石剥片７点，敲石１点が出土した。

340は口縁部が外反する龍泉窯系青磁碗である。高台は低く厚みのあるつくりで，高台外面まで釉がかかる。見込みと畳付，高台内面は釉剥ぎが行われている。續分類Ⅳ類新相に相当し，14世紀中頃から15世紀前半頃と考えられる。

341は白磁の皿と考えられる。口縁部は外反し，低い高台をもつ。釉は乳白色で高台内面までかかり，底部外面は釉剥ぎが行われている。貫入が目立ち，丁寧なつくりではない。見込みに青色の顔料で文様のような図柄を描いている。

342は青花の碗である。高台内面には「宣徳年製」と描かれている。内面は山水や流雲が描かれている。高台内に字款を描く特徴から16世紀代の青花と考えられる。343は外面に唐草状の文様が残っている。小野分類のＣ類に相当し，年代は15世紀後半から16世紀中頃と考えられる。

344は須恵器の甕である。焼成が悪く，質感は土師器に近い。内外面ナデ調整を施し，胎土は泥質である。

345は土師器の坏と考えられる。厚みがあり，内外面ヨコナデ調整を施す。

### ⑧　土坑９号（第63図）

Ｇ－24区，Ⅵａ層上面で検出した楕円形の土坑である。規模は0.96×0.75ｍで，断面は皿状である。埋土は土坑５・６号と類似する。

### ⑨　土坑10号（第63図）

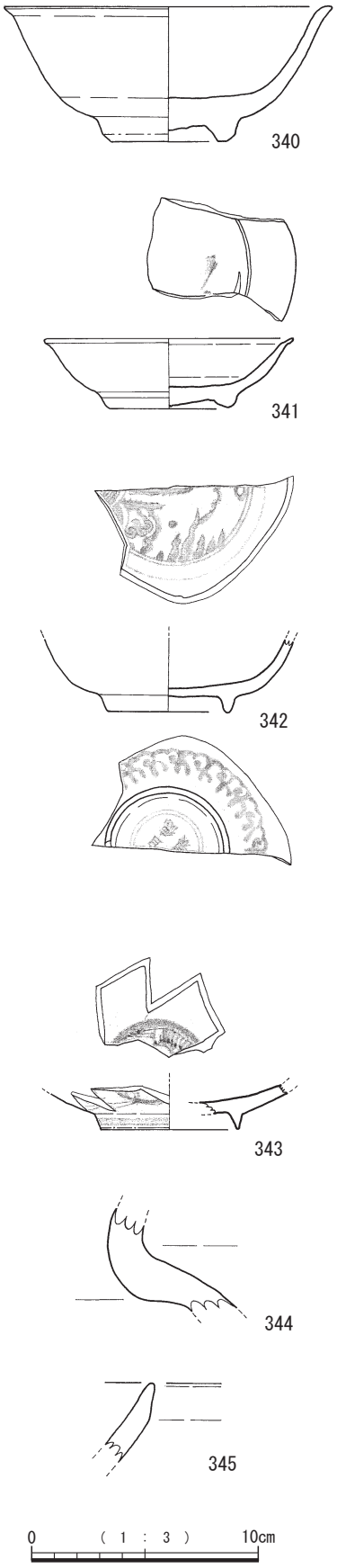
Ｄ－21区，Ⅵａ層上面で検出した長楕円形の土坑である。規模は1.48×0.58ｍである。埋土は土坑９号と類似する。

### ⑩　土坑11号（第63図）

Ｅ－21区，Ⅵａ層上面で検出した楕円形の土坑である。規模は1.2×0.84ｍである。床面は東から西に向かって傾斜している。②層は大小の礫を含んでいる埋土で，上部付近で平らな礫が一枚，置かれたように出土した。礫の出土は土坑墓２にもみられ，土坑墓の可能性がある。

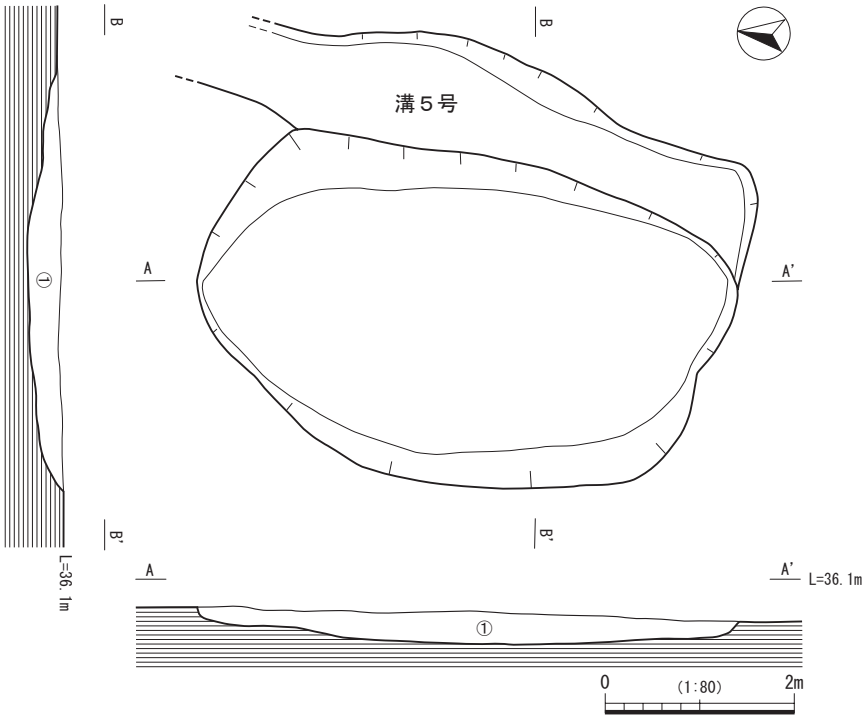
### ⑪　土坑12号（第63図）

Ｆ－19区，Ⅲ層上面で検出した円形の土坑である。規模は0.96×0.9ｍである。床面は平坦である。



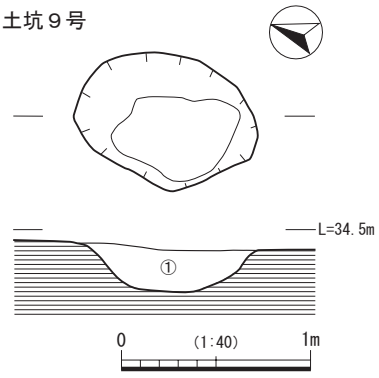

**第62図　土坑８号出土遺物**

土坑８号



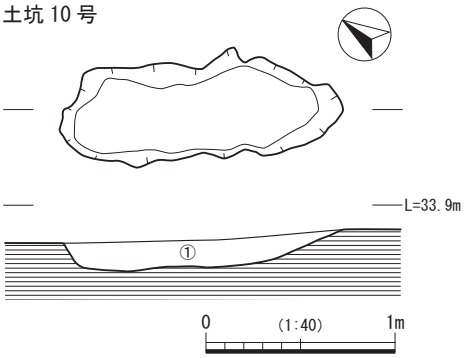

埋土注記
①暗褐色(10YR 3/3) 砂質土,しまり強く,粘性弱い
10CM程度まで白色粒が多く,その下位からⅦa層レキをまだらに20%含む

土坑９号



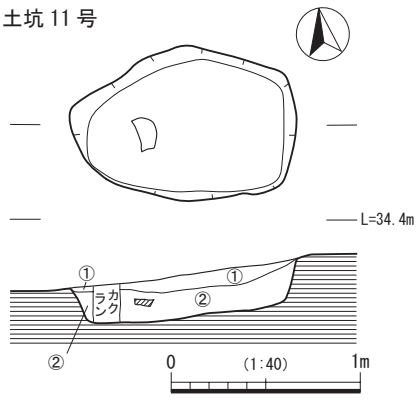

埋土注記
①にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土,しまりはとても強く,粘性弱い
シラス,赤色粒,白色粒,炭化物の入込が20%程度みられる

土坑 10 号



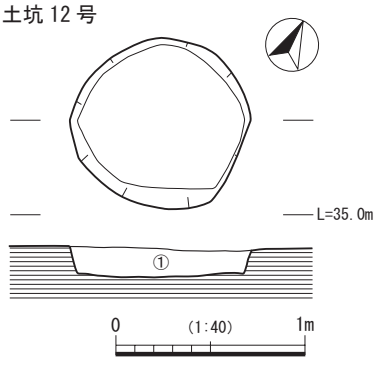

埋土注記
①にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土,しまりは強く,粘性弱い
シラスのブロックが20%程度含まれている

土坑 11 号




埋土注記
①にぶい黄橙色(10YR 6/4) しまりはとても強く,粘性弱い
②褐色(7.5YR 4/6) しまりはやや強く,粘性弱い
大小の礫を20%程度含んでいる

土坑 12 号




埋土注記
①黒褐色(10YR 3/2) 粘質土,しまり強く,粘性なし
白色粒を20%,炭化物・Ⅶa層レキを微量含む

第63図　土坑８・９・10・11・12号

### ⑫　土坑13号（第64図）

Ｇ－19区，Ⅲ層上面で検出した。土坑内で礫が２個検出され，礫を取り除くとピット状に深くなっている。柱穴の可能性もある。

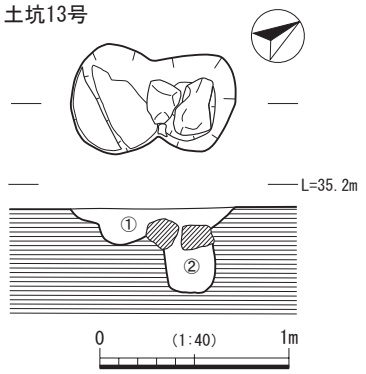
### ⑬　土坑14号（第64図）

Ｅ－18区，Ⅲ層上面で検出した円形の土坑である。規模は0.48×0.5ｍである。鉄滓，鉄器片が出土した。

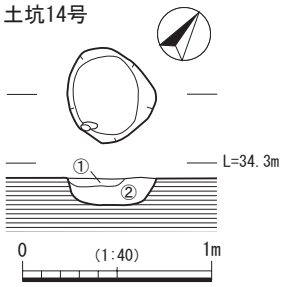
### ⑭　土坑15号（第64図）

ＦＧ－32・33区，Ⅵａ層上面で検出した隅丸長方形の土坑である。規模は5.28×4.1ｍで深さ0.36ｍである。断面は浅い皿状となる。土坑の西側には溝跡２号が隣接している。溝跡２号は土坑15号を避けるように曲がっているので，両遺構は同時併存した可能性がある。

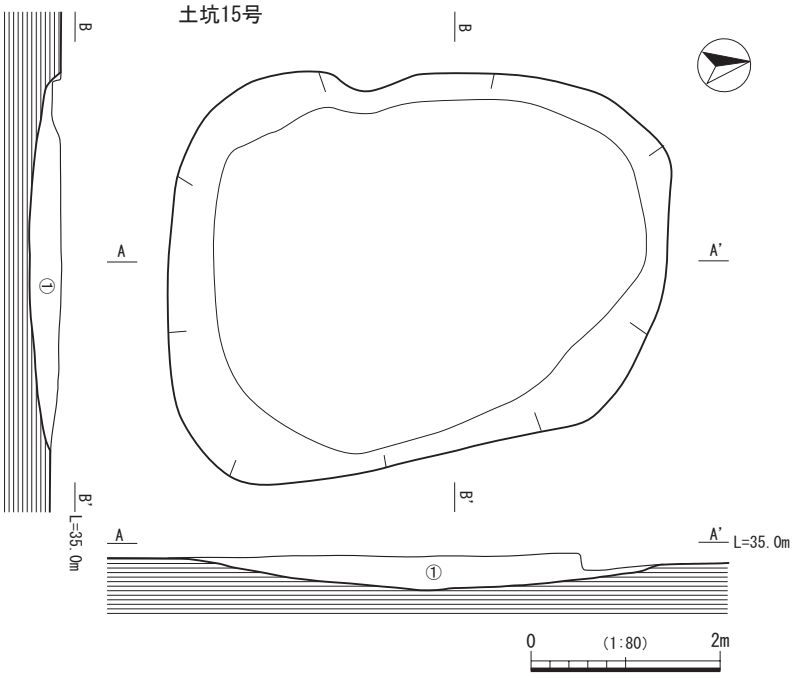
遺物は土器片が１点出土した。




埋土注記
①暗褐色(10YR 3/3) しまりはとても強く,粘性やや強い
　黄のレキを20%含む
②褐色(10YR 4/4) 砂質土,しまりはとても強く,粘性は弱い
　黄のレキを30%含む




埋土注記
①にぶい橙(5YR 6/4) 粘質土,しまり強く,粘性強い
　炭化粒,赤色粒が合わせて5%うすく堆積する
②にぶい黄橙色(10YR 6/4) しまりとても強く,粘性弱い
　Ⅶa層由来のレキ(Φ1cm大)を5%含む




埋土注記
①灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土,しまり強く,粘性なし
　シラスを10%含む　炭化物,赤・白色粒を合わせて10%含む
　B-B'の面にⅦaのブロックが帯状に入る

第64図　土坑13・14・15号

### （５）焼土跡（第65図）

Ｅ－19区，Ⅲ層上面で検出した。広がりは不定形で，南側をピットに切られている。焼土跡の西側で検出されたピットの中には焼土の塊が入っていた。

遺物は土器片７点が出土した。

### （６）溝跡

溝跡は９条検出した。年代は，溝跡１号が13世紀後半から14世紀，その他の溝跡は15世紀から16世紀と考えられる。15世紀以降の溝跡は，区画溝として近世に引き継がれ使用されている。溝跡の方位は，掘立柱建物跡の主軸とよく一致している。

#### ①　溝跡１号（第67・68図）

Ｈ－36・37区Ⅵａ層上面で検出した。掘立柱建物跡１号の南側にあり，長軸方向が建物跡１号の主軸に直交している。年代は建物跡１号と同じ13世紀後半から14世紀である。規模は長さ6.7m，幅1.9m，深さ0.5mで，断面はU字形である。遺物は土器６点，土師器14点，須恵器２点，擂鉢１点，青磁１点，白磁１点，黒曜石剥片２点が出土した。

**出土遺物（第66図　346 ～ 349）**

346は大宰府分類Ⅸ類に相当する口禿げ白磁皿の底部である。347は土師器の坏の底部である。348は擂鉢である。焼成は硬質であり，内面に櫛目が残っている。349は鞴の羽口である。復元内径は1.8cmである。

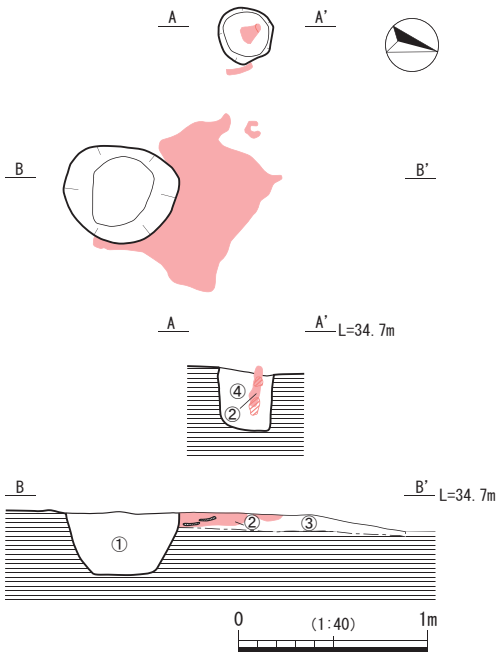
#### ②　溝跡２号（第67・68図）

Ｆ・Ｇ－24 ～ 34区，Ⅲ層上面で検出した。溝跡３・４号に切られている。長さが112.8mあり，標高の高い地点を東西に横断している。検出された溝跡の中で最も長く，未調査区を挟んで溝跡５号に繋がると想定される。出土遺物から15世紀末頃に構築され，17世紀後半以降まで使用されている。幅は２～３m，深さは0.1 ～ 0.4mである。断面は浅い皿状である。

遺物は土師器７点，青磁10点，白磁７点，擂鉢14点，須恵器19点，瓦質土器10点，土器６点，瓦１点，甕１点，薩摩焼６点，近世陶器１点，染付５点，羽口１点，鉄滓１点，石器５点，敲石10点，剥片２点が出土した。

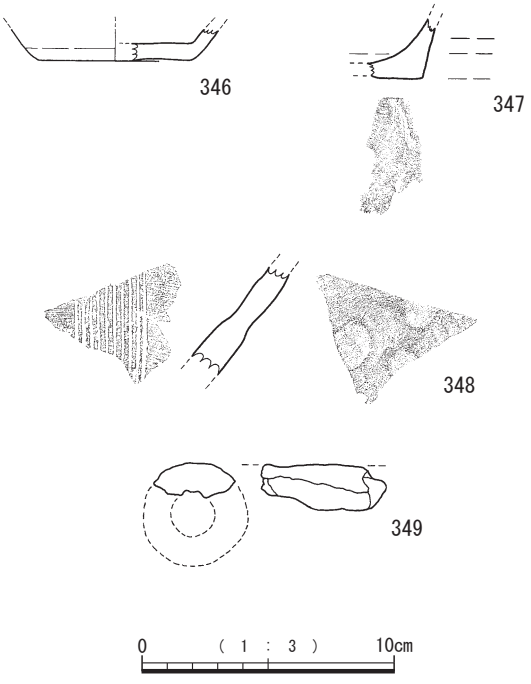
**出土遺物（第70・71図　350 ～ 381）**

350 ～ 352は龍泉窯系青磁碗である。350は外面に片彫連弁文を施す。大宰府分類Ⅱａ類に相当する。351は外面にヘラ先による線描連弁文を施す。上田分類ＢⅣ類に相当し，年代は15世紀末から16世紀前半である。352は高台が細く短い。外面は畳付き近くまで釉がかかり，高台内面は釉剥ぎを行っている。色調はガラス質の薄い緑色であるが，均一ではなく斑がある。貫入が目立ち，見込みには目跡が残っている。續分類のⅦ類に相当し，年代は16世紀中頃から後半と考えられる。353は青磁の壺と考え

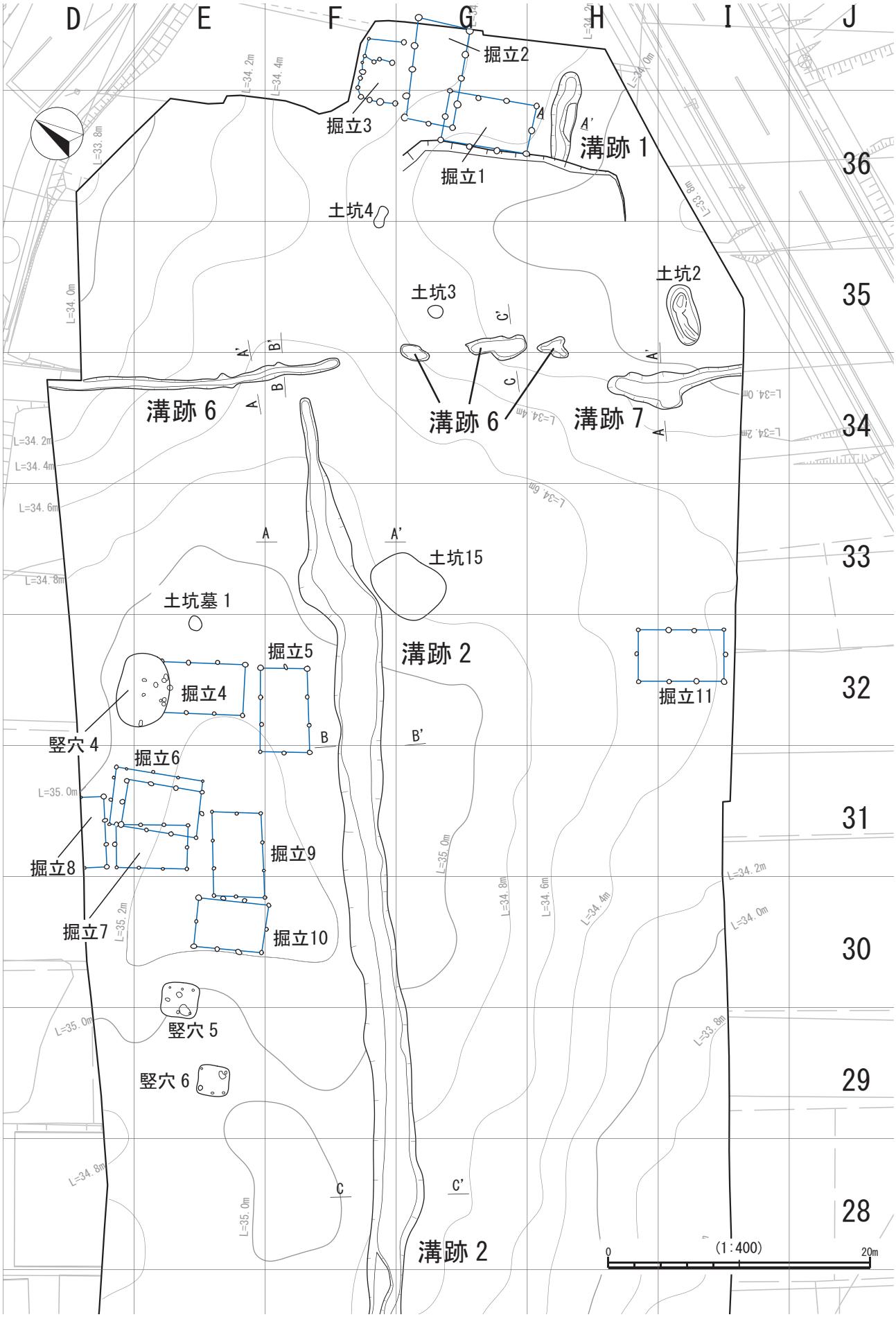



埋土注記
①暗褐色(10YR 3/3) 粘質土，しまり強く，粘性強い
白色粒10%，Ⅶa層レキ(Φ1cm大)を10%含む
②橙色(5YR 6/8) 焼土塊
Ⅲ層にのっている状態で１のピットに切られる
下位は赤黒or淡赤橙が帯状に堆積する
③Ⅲ層
④暗褐色(10YR 3/3) 粘質土，しまり強く，粘性強い
白色粒が10%，炭化物がわずかに含まれる
⑤黒褐色(10YR 3/2) 砂質土
Ⅱb層由来と思われる

第65図　焼土跡

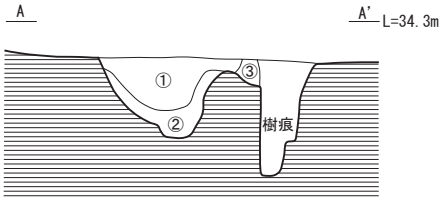



第66図　溝跡１号出土遺物



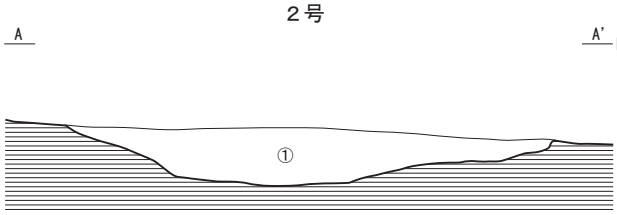

第67図　溝跡（28 ～ 37区）

## 1号

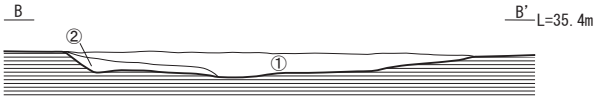



埋土注記
①灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土, しまり強く, 粘性有り
　白色粒・シラス粒(Φ5mm大)5%含む
②黒褐色(10YR 3/1) 粘質土, しまり強く, 粘性やや強い
　シラス(Φ5mm～10mm)10%, 右肩はシラスが崩落?
③にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土, しまりやや強く, 粘性有
　①とⅢ層が混ざったような土

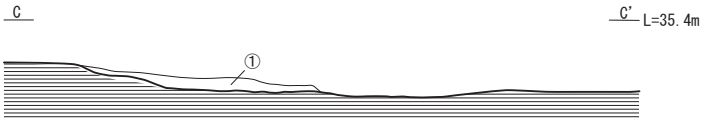
## 2号



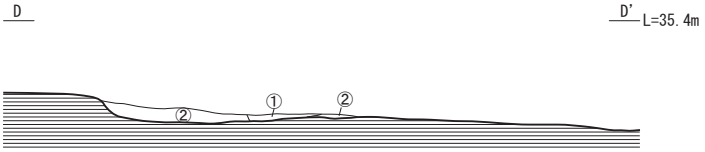

埋土注記
①黒褐色(7.5YR 3/1) 砂質土, しまり強い
　白色粒子20%, Ⅶa層由来レキ10%含む




埋土注記
①にぶい黄褐色(10YR 5/4) 砂質土
　混ざりが少なくサクサク
②灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土
　①に比べてわずかに粘性をもち, Ⅶa層レキが20%含まれる

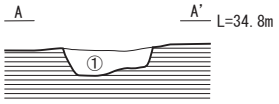



埋土注記
①褐灰色(10YR 6/1) 砂質土, しまり強く, 粘性なし

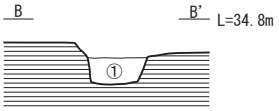



埋土注記
①褐灰色(10YR 6/1)砂質土, 粘性なし
　Ⅶa層レキ10%含む　カクラン?
②灰黄褐色(10YR 5/2)砂質土, しまり強く, 粘性なし
　白色粒, Ⅶa層レキ各10%含む

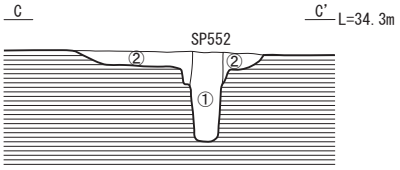
## 6号




埋土注記
①黒褐色(7.5YR 3/2) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
　周辺に広がる灰白色(7.5YR 8/1)硬化面のブロック(Φ1～10cm大)
　が30%含まれる

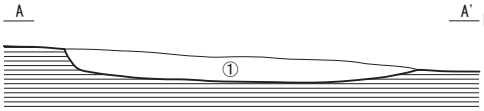



埋土注記
①黒褐色(10YR 3/3) 砂質土, しまりやや強く, 粘性なし
　Ⅵaブロック(Φ1cm大)が5%含まれる, 人頭大レキが周辺に点在する

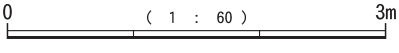



埋土注記
①黒褐色(10YR 3/3) 砂質土, しまりやや強く, 粘性なし
　Ⅵaブロック(Φ1cm大)が5%含まれる, 人頭大レキが周辺に点在する
②灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
　炭化物, 白色粒10%含む
　Ⅲ層と混ざったような埋土

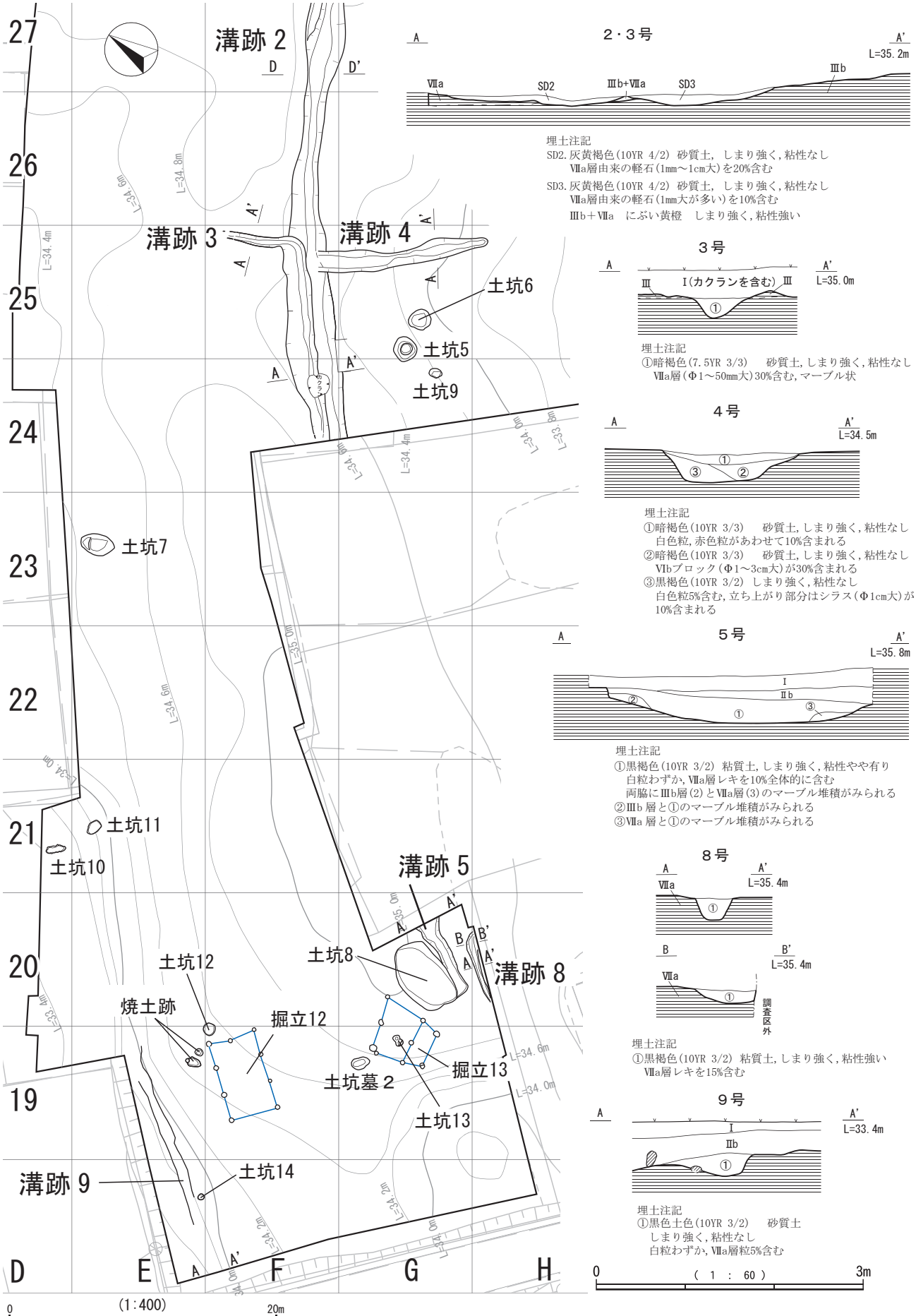
## 7号




埋土注記
①にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
　白色粒子・炭化物が5%含まれる
　下から3cm程度の所にⅢ層が100%含まれる




第68図　溝跡１・２・６・７号断面図




２・３号




埋土注記
SD2. 灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
Ⅶa層由来の軽石(1mm～1cm大)を20%含む
SD3. 灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
Ⅶa層由来の軽石(1mm大が多い)を10%含む
Ⅲb＋Ⅶa にぶい黄橙 しまり強く, 粘性強い

３号




埋土注記
①暗褐色(7.5YR 3/3) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
Ⅶa層(Φ1～50mm大)30%含む, マーブル状

４号




埋土注記
①暗褐色(10YR 3/3) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
白色粒, 赤色粒があわせて10%含まれる
②暗褐色(10YR 3/3) 砂質土, しまり強く, 粘性なし
Ⅵbブロック(Φ1～3cm大)が30%含まれる
③黒褐色(10YR 3/2) しまり強く, 粘性なし
白色粒5%含む, 立ち上がり部分はシラス(Φ1cm大)が10%含まれる

５号




埋土注記
①黒褐色(10YR 3/2) 粘質土, しまり強く, 粘性やや有り
白粒わずか, Ⅶa層レキを10%全体的に含む
両脇にⅢb層(2)とⅦa層(3)のマーブル堆積がみられる
②Ⅲb層と①のマーブル堆積がみられる
③Ⅶa層と①のマーブル堆積がみられる

８号




埋土注記
①黒褐色(10YR 3/2) 粘質土, しまり強く, 粘性強い
Ⅶa層レキを15%含む

９号




埋土注記
①黒色土色(10YR 3/2) 砂質土
しまり強く, 粘性なし
白粒わずか, Ⅶa層粒5%含む




第69図　溝跡（18～27区）・断面図

られる。外面には花文と把手の接合部と推測される痕跡が残っている。

354 ～ 356は白磁の端反り皿である。356は口径14.4㎝，器高3.1㎝で全面に釉が施されている。上田分類Ｅ－２群に相当し，年代は16世紀である。357は小型坏である。近世に類似する遺物もあるが，白磁の範疇としてここに掲載する。器壁は非常に薄く，見込みの釉を輪状に掻き取っている。

358は青花の碗で，外面には草花が描かれている。359は薩摩焼の片口鉢である。口縁部上面の釉剥ぎを行っている。

360は薩摩焼の擂鉢で，内面に櫛目が残る。櫛目が細く，間隔が広いことから堂平窯Ⅱ期以降（17世紀後半以降）の製品と考えられる。

361は須恵器の壺の頸部である。362は須恵器の甕の胴部で，外面に綾杉状のタタキが残る。古代の須恵器である。363 ～ 366は擂鉢である。363 ～ 365は土師器に近い焼成で，内面に櫛目が残っている。内外黄橙色である。366は底面に半円状の櫛目が残っている。

367 ～ 376は須恵器及び陶器の甕である。367は瓦質焼成の甕である。復元口径34.4㎝で，胴部外面に格子目タタキを施す。368は常滑焼の頸部である。外面には釉を掻き取ったような線状痕跡が４条みられる。369は大甕の胴部で外面に工具ナデを施す。370は外面に綾杉状のタタキがみられるため，362と同一個体の可能性が高い。371は他と焼成が異なるため，国外産か近世の可能性がある。372は瓦質焼成の甕で，外面に格子目タタキを施す。367と同一個体の可能性がある。374は器壁が薄く，外面に煤と思われる付着物がみられる。375・376は甕の底部で，内外面ナデ調整を施す。

377は風炉である。口縁部外面には梅花を簡略したようなスタンプが施されている。378は青銅製の簪である。装飾部分が欠損している。379は鞴の羽口の先端部である。表面が溶解しており，復元内径2.5㎝，外径10㎝である。380は扁平礫の下端を打ち欠いた石器である。頁岩製で使用の痕跡は認められない。381は碁石と考えられる。

### ③　溝跡３号（第69図）

Ｆ－24・25区，Ⅲ層上面で検出した。溝跡２号を切っていることから，16世紀以降に構築されたと考えられる。長さ21ｍで，東端がＬ字状に曲がっている。幅は0.65 ～ 1.8ｍ，深さは0.1 ～ 0.24ｍと浅い。

遺物は擂鉢１点，須恵器４点，瓦質土器３点，石器２点が出土した。

**出土遺物（第72図　382 ～ 390）**

382，384，385は同一個体の擂鉢である。内面に櫛目が残り，土師器に近い焼成である。386の擂鉢は使用のために内面が擦り減っている。387・388は須恵器の甕の胴部である。389は瓦質焼成の火鉢である。帯文の上下に菊花と竹管状のスタンプが施されている。390は瓦質焼成の土器である。胎土・焼成が389と似ており，火鉢の可能性がある。

### ④　溝跡４号（第69図）

Ｆ～Ｈ－25区，Ⅵａ層上面で検出した。溝跡２号を切っていることから，16世紀以降に構築されたと考えられる。方向は溝跡２号に直交している。長さ12.8ｍで，幅1.5ｍ，深さは0.3ｍである。

遺物は陶器２点，白磁２点，薩摩焼１点，染付３点が出土した。

**出土遺物（第73図　391）**

391は近世の染付碗である。見込みに菊花文が描かれている。

### ⑤　溝跡５号（第69図）

Ｇ－20区，Ⅶａ層上面で検出した。年代は出土遺物から15世紀末から16世紀と考えられる。規模，方向から溝跡２号と同一の遺構と想定される。西壁は土坑８号に接している。長さ６ｍで，幅は1.8ｍ，深さは0.5ｍである。遺物は青磁１点，須恵器１点，土器１点が出土した。

**出土遺物（第73図　392・393）**

392は須恵器の甕である。内外面に平行タタキが施されている。393は龍泉窯系青磁碗で，外面にヘラ先による線描連弁文を施す。上田分類ＢⅣ類に相当し，年代は15世紀末から16世紀前半である。

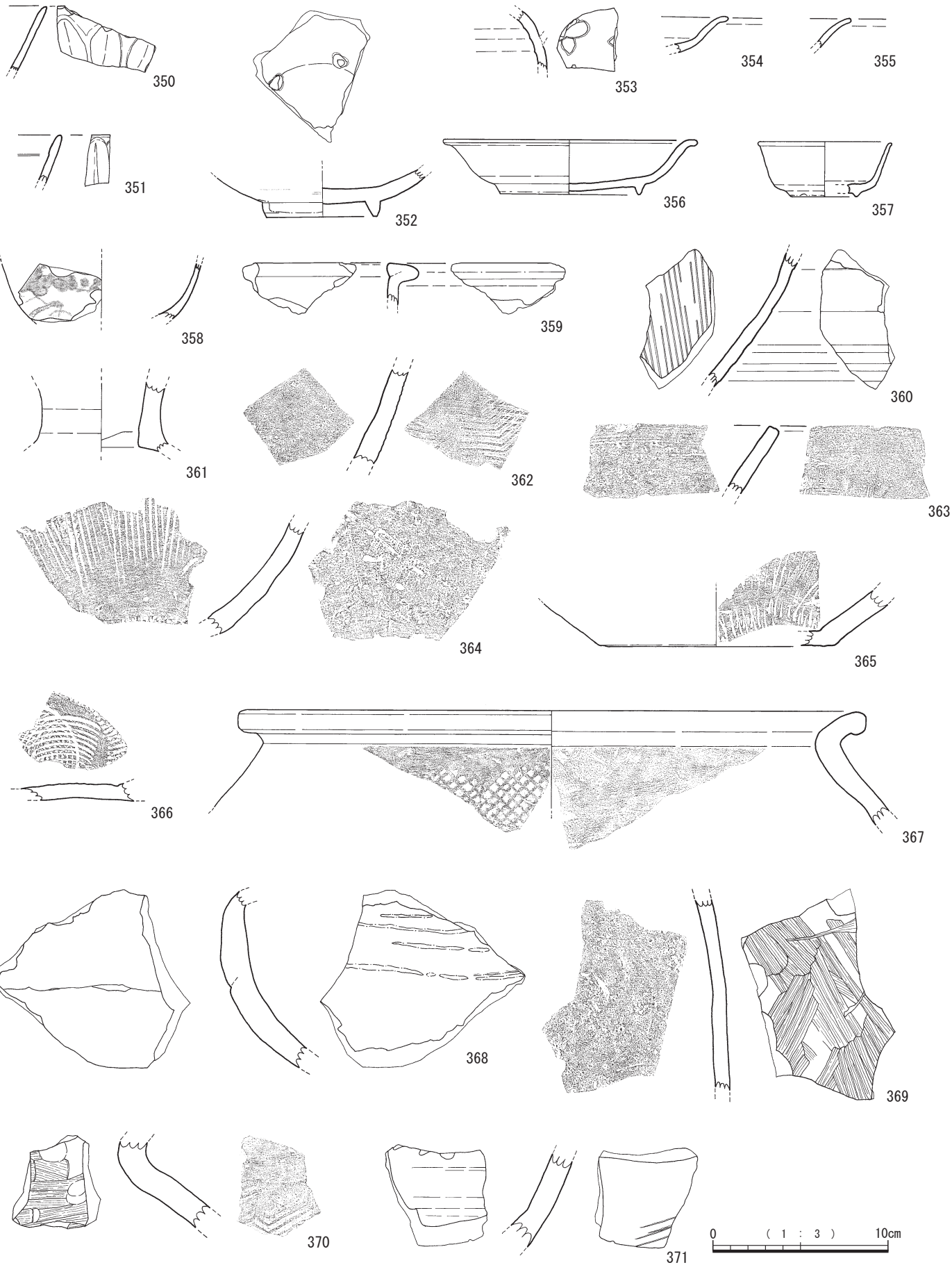
### ⑥　溝跡６号（第67・68図）

Ｄ～Ｈ－34・35区，Ⅲ層上面で検出した。溝跡は４か所に分かれているが，規模や長軸方向の類似性から，同一の溝跡として取り扱った。溝跡２号の東端に直交して構築されている。４つの溝跡の始点から終点までは，長さ39.4ｍで，幅は0.55 ～ 1.4ｍ，深さは0.2ｍである。溝跡には礫が廃棄されていた。年代は出土遺物から16世紀頃と考えられる。

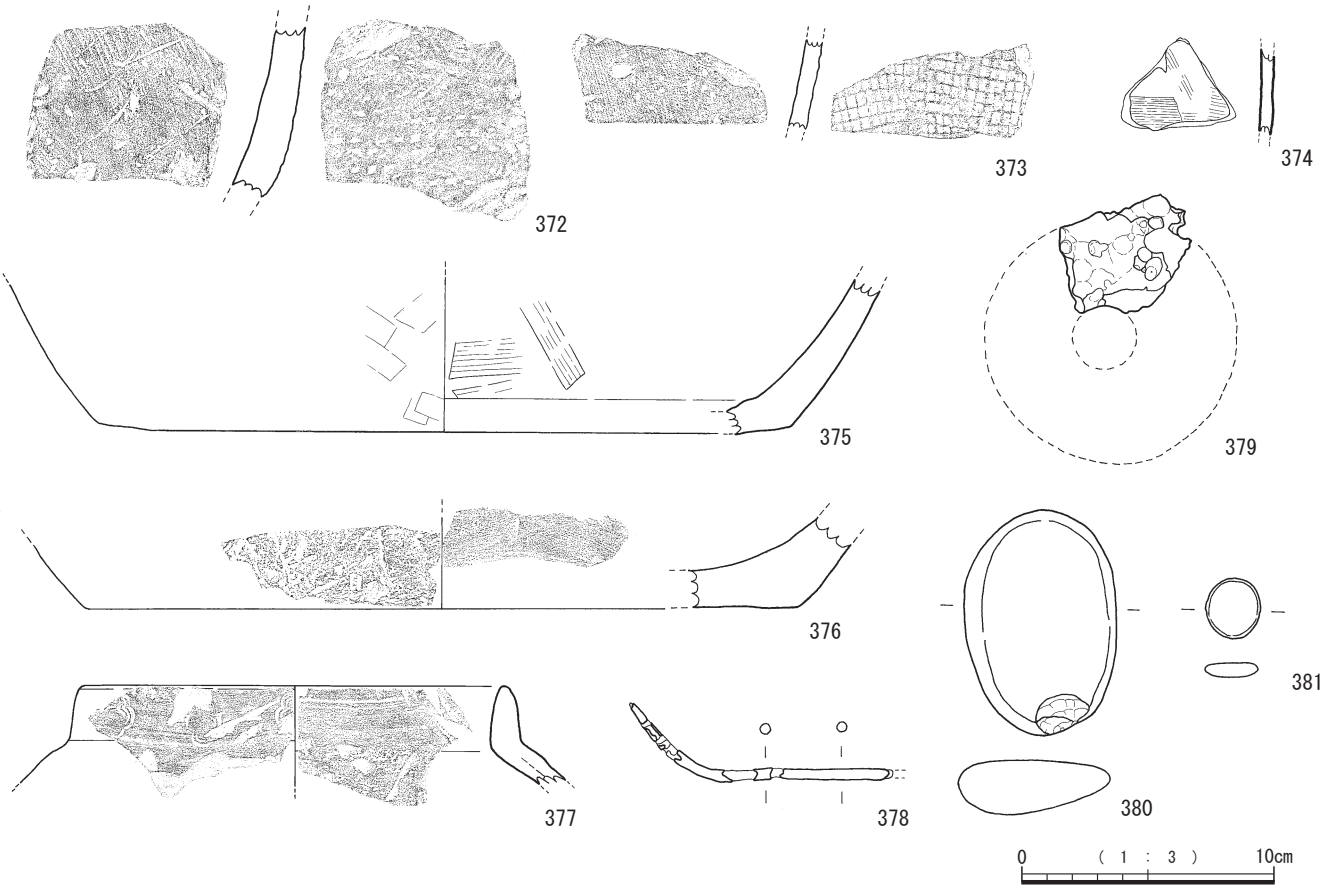
遺物は青磁１点，土師器３点，土器４点，瓦質土器１点，須恵器５点，粘土塊２点，敲石２点，鉄滓１点が出土した。

**出土遺物（第73図　394 ～ 401）**

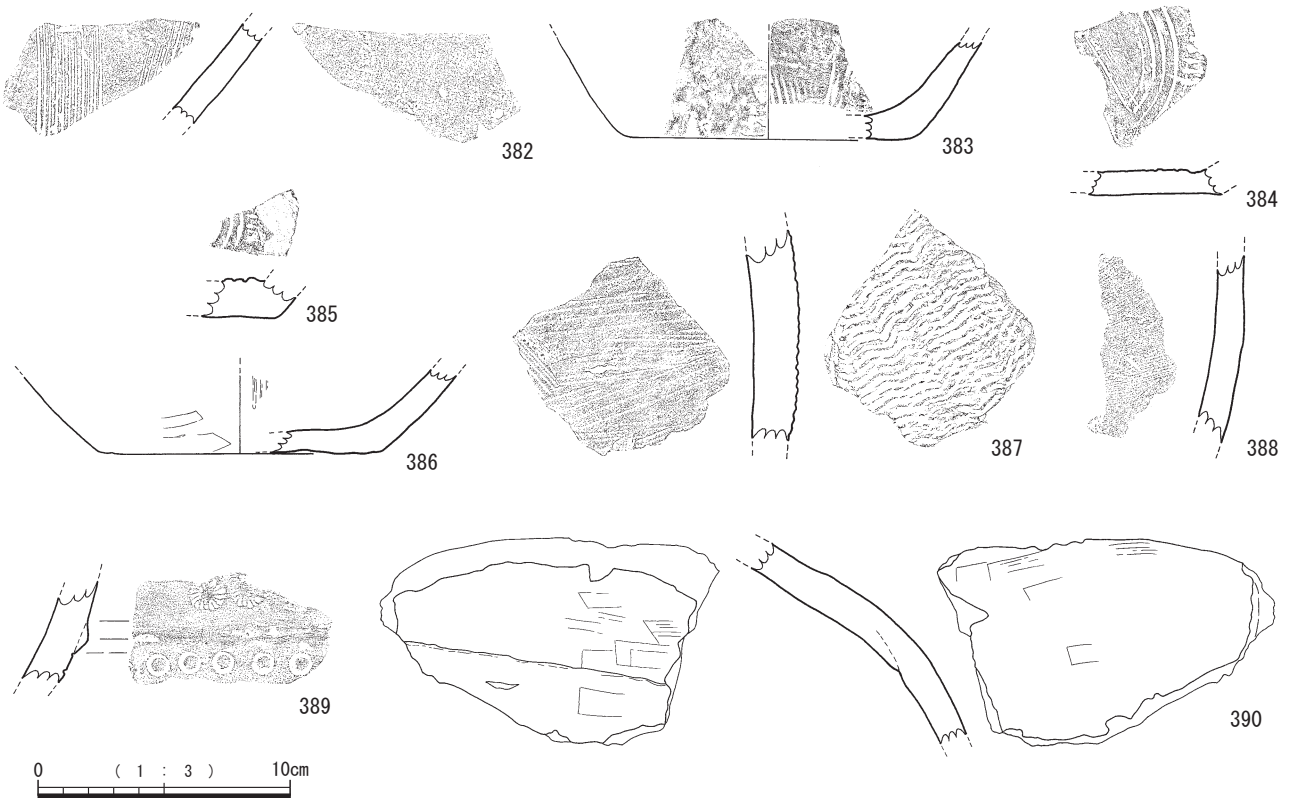
394は龍泉窯系青磁碗である。高台が細く，表面に気泡が多くみられる。見込みと高台内面は釉剥ぎを行っている。395は土師器の坏である。底部は糸切底である。396は瓦質焼成の鉢である。397は中世須恵器の擂鉢である。硬質で内面に９条１組の櫛目がみられる。398は古代の須恵器の甕である。399は常滑焼の甕の底部である。400は土師器の鉢と推測される。器壁が厚く，内外面ナデ調整を施す。401は椀型鍛冶滓である。




第70図　溝跡２号出土遺物１




第71図　溝跡２号出土遺物２




第72図　溝跡３号出土遺物

### ⑦　溝跡７号（第67・68図）

Ｈ・Ｉ－34区，Ⅲ層上面で検出した。年代は出土遺物から16世紀と考えられる。長さ10.2m，幅は0.8～2.9mで北側の幅が広くなっている。深さは0.1mと浅い。

遺物は土師器４点，土器６点，須恵器２点，擂鉢１点，青磁１点，白磁１点，黒曜石剥片２点が出土した。

**出土遺物（第73図　402～404）**

402は高台の径が大きいことから青磁の皿と考える。見込みの釉を輪状に剥ぎ取り，畳付きから高台内面は露胎である。大宰府分類皿Ⅳ類に相当し，年代は14世紀初頭から中頃であると考えられる。403は白磁の皿である。釉は乳白色で細かい貫入がみられる。胴部下半は露胎である。釉調から16世紀代の白磁と推測される。404は土師器の小皿である。

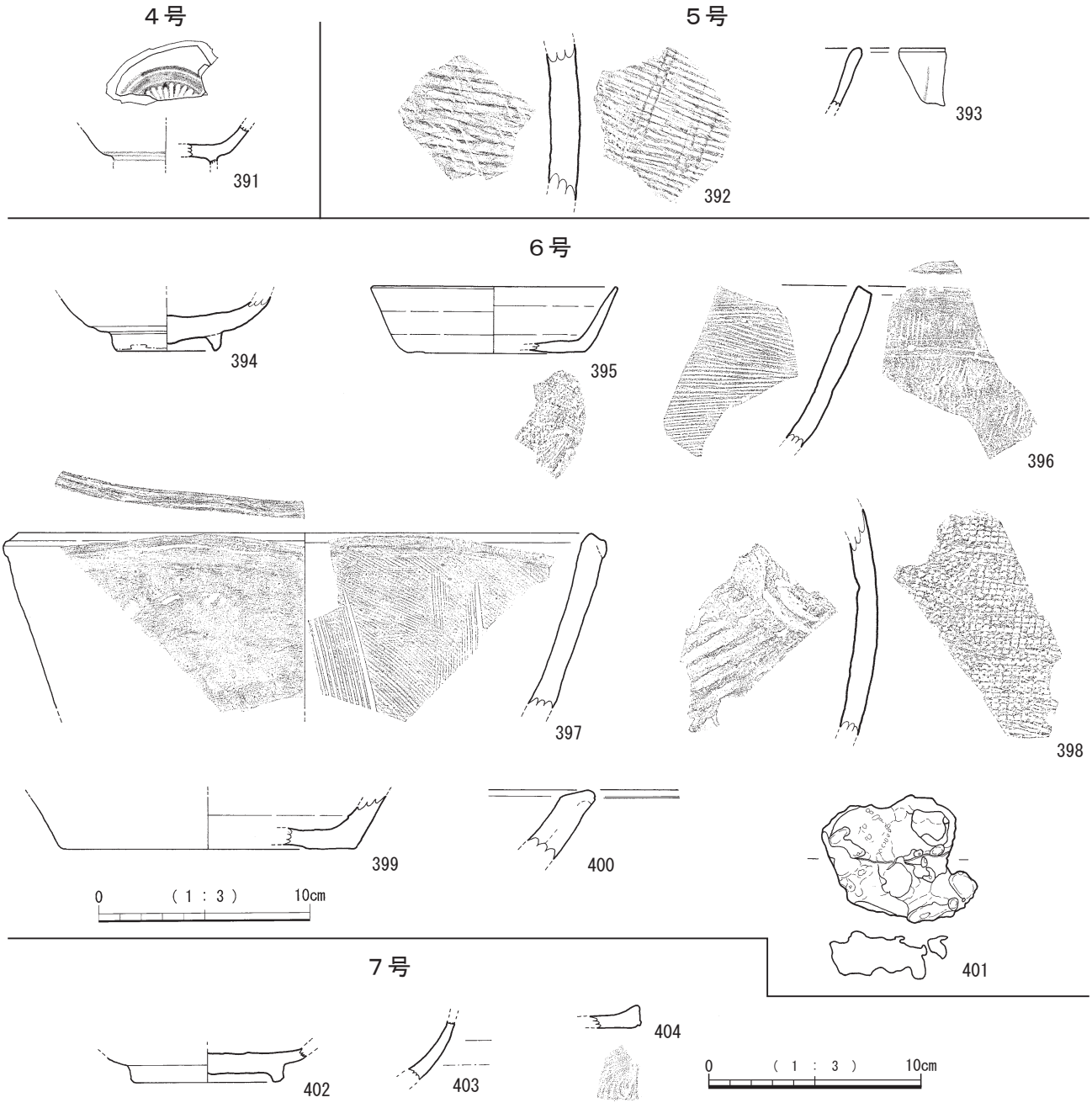
### ⑧　溝跡８号（第69図）

Ｇ・Ｈ－20区，Ⅶa層上面で検出した。調査区の東壁近くにあり，長さ5m，幅は0.4m，深さ0.24mである。

遺物は須恵器片４点，瓦質土器片３点，石器２点が出土した。

### ⑨　溝跡９号（第69図）

Ｅ－18・19区Ⅲ層上面で検出した。長さ14m，幅は１m，深さ0.25mである。平面は測量機器の不具合により上端のみの記録となった。




第73図　溝跡４・５・６・７号出土遺物

## 第 19 表　溝跡出土遺物観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 遺構名 | 出土地点 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 外面 | 調整 内面 | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 66 | 346 | 白磁 | 皿 | 1号 | SD7・1層 | − | 6.0 | − | − | − | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅸ類 |
| | 347 | 土師器 | 坏 | 1号 | SD7・1層 | − | − | − | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 348 | 須恵器 | 擂鉢 | 1号 | SD7・1層 | − | − | − | − | − | 黄灰 | − | |
| | 349 | 土製品 | 鞴の羽口 | 1号 | SD7・1層 | 内径 1.8 cm | | | − | − | − | − | |
| 70 | 350 | 青磁 | 碗 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | − | − | 明オリーブ灰 | 精良 | 大宰府分類Ⅱａ類 |
| | 351 | 青磁 | 碗 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | − | − | 灰オリーブ | 精良 | 上田分類BⅣ類 |
| | 352 | 青磁 | 碗 | 2号 | SD5・1層 | − | 6.4 | − | − | − | 灰白 | 精良 | 續分類Ⅶ類 |
| | 353 | 青磁 | 壺 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | − | − | オリーブ灰 | 精良 | 把手の痕跡あり |
| | 354 | 白磁 | 皿 | 2号 | SD1 | − | − | − | − | − | 灰白 | 精良 | |
| | 355 | 白磁 | 皿 | 2号 | SD1 F･G-23･24･2層 | − | − | − | − | − | 灰白 | 精良 | |
| | 356 | 白磁 | 皿 | 2号 | SD1・Ⅱa, 10T・Ⅱ | 14.4 | 8.0 | 3.1 | − | − | 灰白 | 精良 | 上田分類Ｅ－２群 |
| | 357 | 白磁 | 小型坏 | 2号 | SD1 | 7.6 | 3.8 | 3.2 | − | − | 灰白 | 精良 | |
| | 358 | 青花 | 碗 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | − | − | 灰白 | 精良 | |
| | 359 | 薩摩焼 | 片口鉢 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | − | − | 黒褐 | 白色砂 | |
| | 360 | 薩摩焼 | 擂鉢 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | − | 櫛目 | オリーブ黒 | 白色砂 | 17ｃ以降 |
| | 361 | 須恵器 | 壺 | 2号 | SD1 | − | − | − | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰白 | 精良 | |
| | 362 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD1 | − | − | − | 綾杉状タタキ | ナデ | 灰 | 精良 | |
| | 363 | 須恵器 | 擂鉢 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | ナデ | 櫛目 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 364 | 須恵器 | 擂鉢 | 2号 | SD1 | − | − | − | ナデ・ケズリ | 櫛目 | 黄橙 | 精良 | |
| | 365 | 須恵器 | 擂鉢 | 2号 | SD5・1層 | − | 13.5 | − | ケズリ | 櫛目 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 366 | 須恵器 | 擂鉢 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | ケズリ | 櫛目 | 灰白 | 精良 | |
| | 367 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD5・1層 | 34.4 | − | − | 格子目タタキ | ナデ | 灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 368 | 陶器 | 甕 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | ナデ | ナデ | にぶい赤褐 | 長石・石英 | 常滑焼 |
| | 369 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | 工具ナデ | ナデ | 外）明褐灰<br>内）赤灰 | 小石 | |
| | 370 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | ナデ<br>綾杉状タタキ | ハケ目 | 外）黄灰<br>内）灰白 | 精良 | |
| | 371 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | ナデ | ヨコナデ | 外）灰褐<br>内）にぶい赤褐 | 精良 | 近世の可能性 |
| 71 | 372 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD1 | − | − | − | 格子目タタキ | ハケ目 | 灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 373 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD1 | − | − | − | 格子目タタキ | ハケ目 | 外）オリーブ黒<br>内）暗灰黄 | 石英・角閃石 | |
| | 374 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD5・1層 | − | − | − | ナデ | ハケ目 | 外）灰黄褐<br>内）褐灰 | 雲母 | 外面に煤付着 |
| | 375 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD1・SD2 | − | 27.4 | − | ナデ | ハケ目後ナデ | 黄灰 | 精良 | |
| | 376 | 須恵器 | 甕 | 2号 | SD5・1層 | − | 28.0 | − | ケズリ後ナデ | ナデ | 外）灰黄<br>内）黄灰 | 精良 | |
| | 377 | 陶器 | 風炉 | 2号 | SD5・1層 | 16.9 | − | − | ヨコナデ | ヨコナデ | 浅黄橙 | 精良 | 口縁部にスタンプ |
| | 378 | 銅製品 | 簪 | 2号 | SD5・1層 | 長さ 10.3 cm，幅 0.4 cm，厚さ 0.4 cm，重量 8.7 ｇ | | | | | − | − | |
| | 379 | 土製品 | 鞴の羽口 | 2号 | SD5・1層 | 復元内径 2.5 cm，復元外径 10.0 cm | | | | | − | − | |
| | 380 | 石器 | 石器 | 2号 | SD5・1層 | 長さ 8.9 cm，幅 6.0 cm，厚さ 2.2 cm，重量 165.2 ｇ | | | | | − | − | 頁岩 |
| | 381 | 石製品 | 碁石 | 2号 | SD5・1層 | 長さ 2.4 cm，幅 2.2 cm，厚さ 0.6 cm，重量 4.4 ｇ | | | | | − | − | |
| 72 | 382 | 須恵器 | 擂鉢 | 3号 | SD2 | − | − | − | ナデ | ナデ，櫛目 | 淡黄 | 精良 | |
| | 383 | 須恵器 | 擂鉢 | 3号 | SD10・1層 | − | 11.0 | − | 摩滅 | 櫛目 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 384 | 須恵器 | 擂鉢 | 3号 | SD2 | − | − | − | ナデ | 櫛目 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 385 | 須恵器 | 擂鉢 | 3号 | SD2 | − | − | − | ナデ | 櫛目 | 浅黄橙 | 精良 | |
| | 386 | 須恵器 | 擂鉢 | 3号 | SD2 | − | 11.0 | − | ナデ | − | 外）灰白<br>内）灰 | 精良 | 内面摩耗 |
| | 387 | 須恵器 | 甕 | 3号 | SD2 | − | − | − | 綾杉状当具痕 | ハケ目 | 灰 | 精良 | |
| | 388 | 須恵器 | 甕 | 3号 | SD2 | − | − | − | − | ハケ目 | 黄灰 | 精良 | |
| | 389 | 陶器 | 火鉢 | 3号 | SD2 | − | − | − | ナデ | ナデ | 灰 | 泥質 | 菊文と竹管文 |
| | 390 | 陶器 | 火鉢か | 3号 | SD2 | − | − | − | ナデ | ハケ目後ナデ | 灰白 | 泥質 | 摩滅が著しい |
| 73 | 391 | 染付 | 碗 | 4号 | SD9・1層 | − | − | − | − | − | 灰白 | 精良 | 菊花文 |
| | 392 | 須恵器 | 甕 | 5号 | SD9・3層 | − | − | − | 平行タタキ | 平行タタキ | 褐灰 | 精良 | |
| | 393 | 青磁 | 碗 | 5号 | SD3 | − | − | − | − | − | 灰白 | 精良 | 上田分類BⅣ類 |
| | 394 | 青磁 | 碗 | 6号 | SD6・1層 | − | 5.0 | − | − | − | 灰白 | 精良 | |
| | 395 | 土師器 | 坏 | 6号 | SD6・1層 | 11.6 | 8.5 | 3.2 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 396 | 須恵器 | 鉢 | 6号 | SD6・1層 | − | − | − | ハケ目 | ハケ目 | 黒褐 | 泥質 | |
| | 397 | 須恵器 | 擂鉢 | 6号 | SD6・1層 | 28.4 | − | − | ナデ | ハケ目・櫛目 | 灰 | 精良 | |
| | 398 | 須恵器 | 甕 | 6号 | SD6・1層 | − | − | − | 格子目タタキ | 同心円状文<br>平行当具痕 | 外）灰<br>内）黄灰 | 精良 | |
| | 399 | 須恵器 | 甕 | 6号 | SD6・1層 | − | 7.0 | − | ナデ | ナデ | 明褐灰 | 白色砂 | 常滑焼 |
| | 400 | 土師器 | 鉢 | 6号 | SD6・1層 | − | − | − | ナデ | ナデ | 外）にぶい橙<br>内）橙 | 精良 | |
| | 401 | 鉄滓 | 鉄滓 | 6号 | SD6・1層 | 長さ 6.0cm，幅 7.2cm，厚さ 2.2 cm，重量 117.6 ｇ | | | | | − | 精良 | 鍛冶滓 |
| | 402 | 青磁 | 皿 | 7号 | SD8・1層 H-34・Ⅱb | − | 7.2 | − | − | − | 灰白 | 精良 | 大宰府分類Ⅳ類 |
| | 403 | 白磁 | 皿 | 7号 | SD8・1層 | − | − | − | − | − | 淡黄 | 精良 | 16ｃ代 |
| | 404 | 土師器 | 皿 | 7号 | SD8・1層 | − | − | − | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |

※　法量は復元値

### （７）ピット（第76・77図）

本調査区では402基のピットを検出した。ピット内の出土遺物は中世のものが多く，ピットのほとんどは中世の遺構と考えられる。ピット内で出土した遺物は第20表の通りである。代表的な遺物について報告する。

#### ①　出土遺物（第75図　405 ～ 414）

ピットで出土した遺物10点を図化した。

405 ～ 409は龍泉窯系青磁碗である。405 ～ 408は大宰府分類Ⅱb類で，外面に鎬連弁文を施している。409は外面に鎬連弁文とみられる凹凸が残っていることから，大宰府分類Ⅱ類の底部と考えられる。高台内面は釉剥ぎが行われている。

410は須恵器の擂鉢である。焼成が悪く，土師器に近い質感である。内面に櫛目が残る。411は須恵器の甕である。外面には格子目タタキ，内面はナデ調整を施す。

412は須恵器の甕である。小型品で口径20.6㎝，器高20.9㎝である。外面には車輪状のタタキを胴部全面に施す。内面は口縁部から上胴部にハケ目調整，胴部中位から底部にかけてはナデを施す。413は甕の底部である。焼成は土師器に近い。内外面に工具痕が残っているが，磨滅のため調整は不明である。

414は板状粘土塊である。不定形の粘土塊を重ねて板状に広げた後，工具で一部成形している。焼成が悪く，表面は２次焼成を受け変色している。胎土は粗く，小石や植物の茎が混入している。

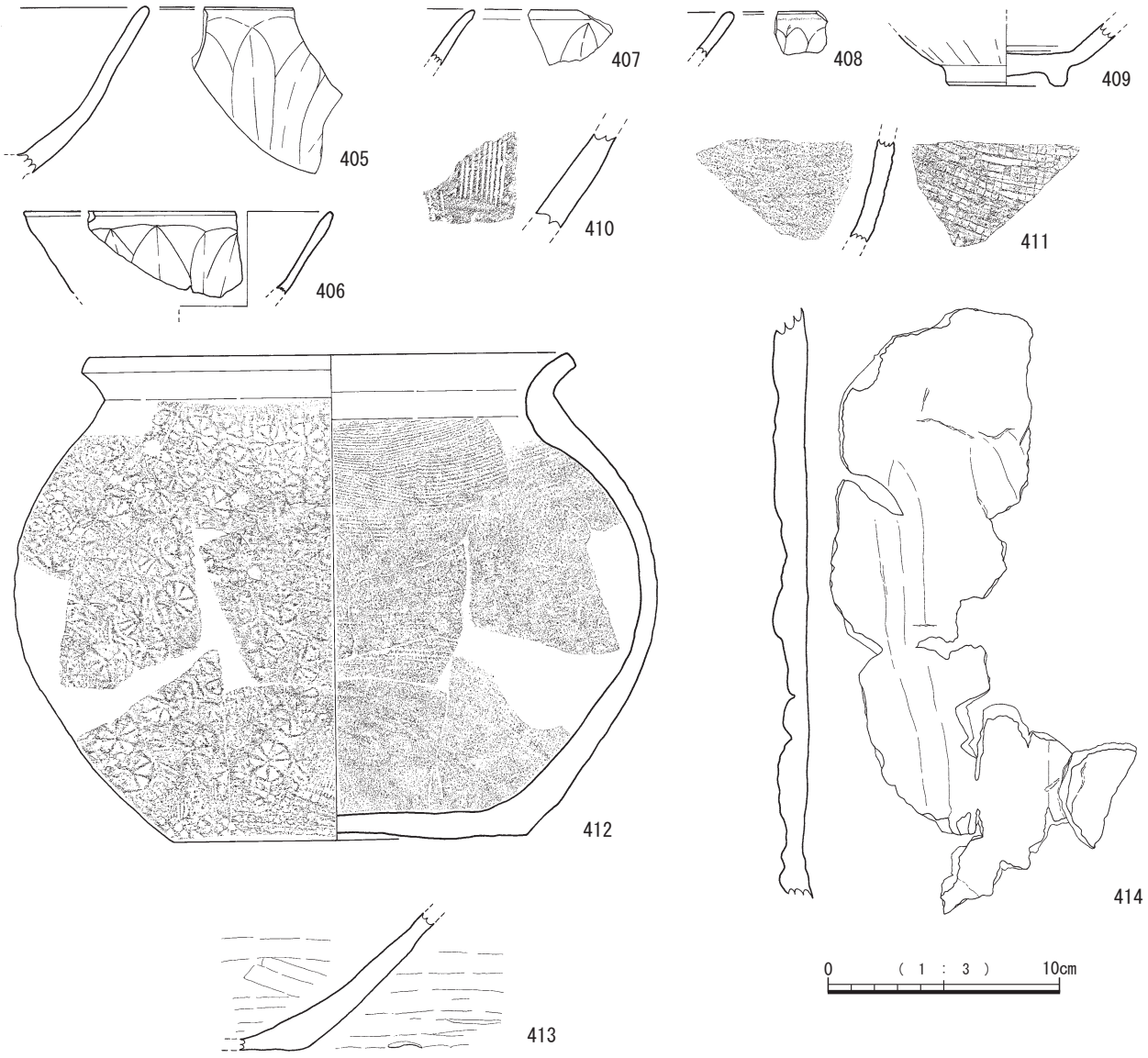
#### ②　自然遺物（第74図）

ＳＰ420から小型の二枚貝，巻貝が出土した。全て潮間帯の潮だまりで採取できる貝で，食用後，廃棄されたと考えられる。種別，個数については第74図に示している。貝殻の放射性炭素年代測定は，1,279calAD －1,475calAD（95.4%）である。




※ その他　巻き貝の軸５　破片あり

第74図　SP420内出土貝殻




第75図　ピット出土遺物




ピット出土遺物　写真

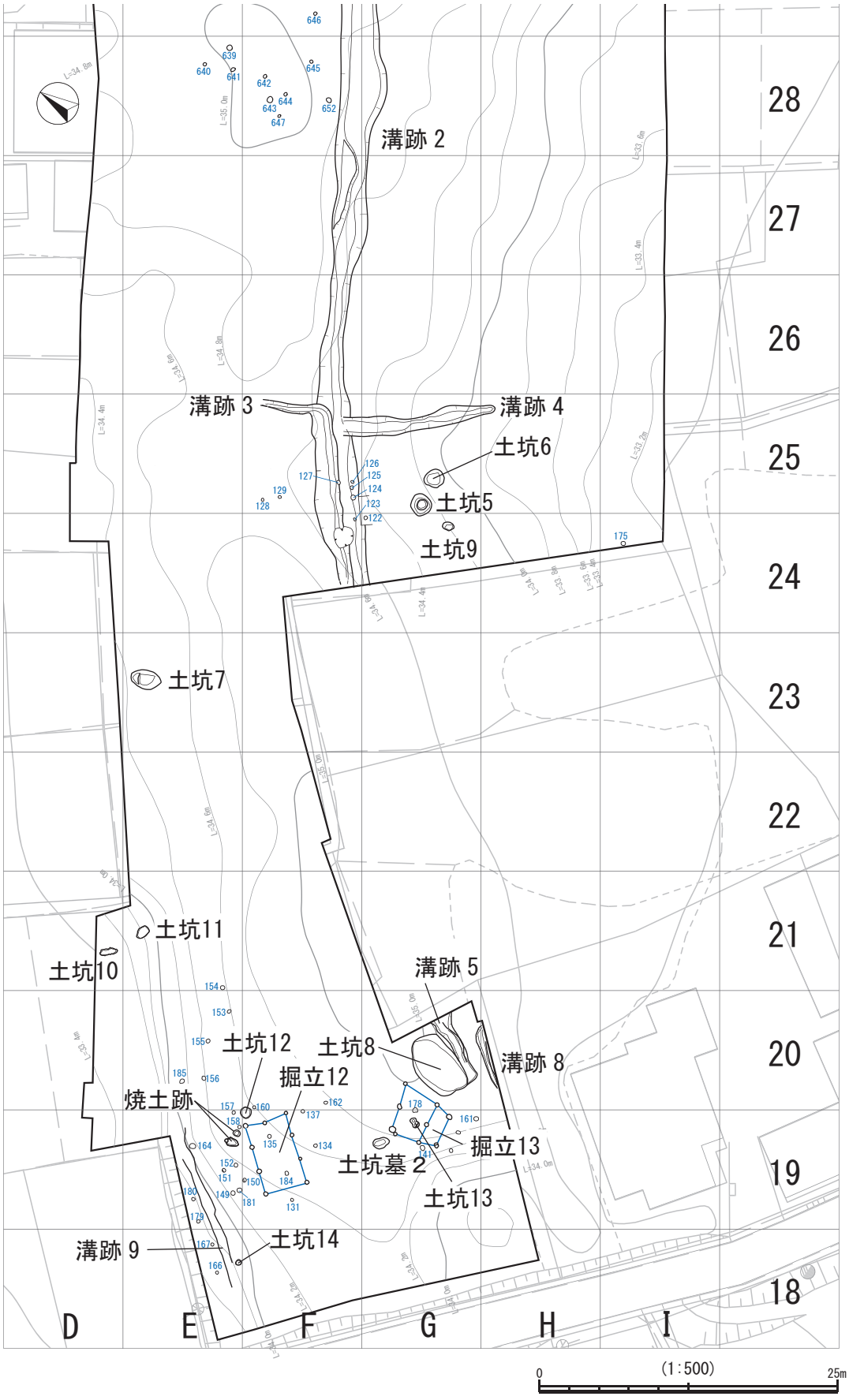
## 第 20 表　ピット出土遺物観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径 (cm) | 底径 (cm) | 器高 (cm) | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 75 | 405 | 青磁 | 碗 | SP676･1 層 | － | － | － | － | － | オリーブ灰 | 精良 | 大宰府分類Ⅱｂ類 |
| | 406 | 青磁 | 碗 | SP162･F-20 | 13.1 | － | － | － | － | オリーブ灰 | 精良 | 大宰府分類Ⅱｂ類 |
| | 407 | 青磁 | 碗 | SP616･1 層 | － | － | － | － | － | オリーブ灰 | 精良 | 大宰府分類Ⅱｂ類 |
| | 408 | 青磁 | 碗 | SP252･1 層 | － | － | － | － | － | オリーブ灰 | 精良 | 大宰府分類Ⅱｂ類 |
| | 409 | 青磁 | 碗 | SP162･F-20 | － | 5.2 | － | － | － | オリーブ灰 | 精良 | 大宰府分類Ⅱ類 |
| | 410 | 須恵器 | 擂鉢 | SP185･E-20 | － | － | － | 摩滅 | 櫛目 | 淡黄 | 泥質 | 焼成土師質 |
| | 411 | 須恵器 | 甕 | SP158･E-20 | － | － | － | 格子目タタキ | ナデ | 灰 | 白色小石 | |
| | 412 | 須恵器 | 甕 | SP185･E-20 | 20.6 | 15.2 | 20.9 | 車輪状タタキ<br>格子目タタキ | ハケ目・ナデ | 灰白 | 精良 | 17 ｃ |
| | 413 | 須恵器 | 甕 | SP676･1 層 | － | － | － | 磨滅 | 磨滅 | にぶい橙 | 石英・長石 | 焼成土師質 |
| | 414 | 粘土塊 | 板状粘土塊 | SP185･E-20 | 高さ 25.3 ㎝・幅 10.2 ㎝・厚さ 1.4 ㎝ | | | 工具ナデによる成形 | | | 小石 | 植物の茎あり |

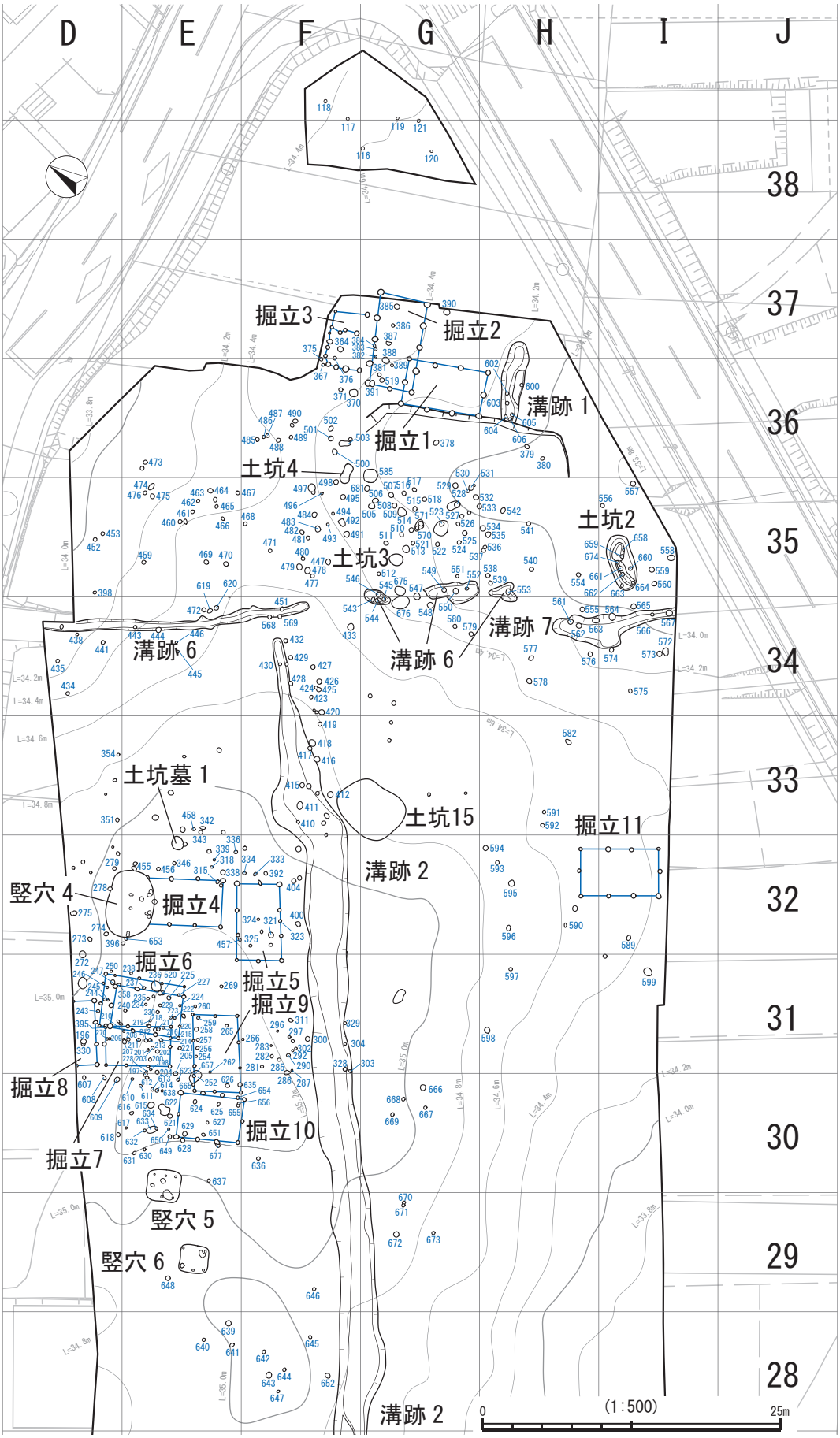
※　法量は復元値

## 第 21 表　ピット出土遺物一覧表

| No. | ピット番号 | 出土遺物 | No. | ピット番号 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 117 | 土器２ | 36 | 257 | 土器 10 |
| 2 | 122 | 土器１ | 37 | 262 | 土器４ |
| 3 | 130 | 土器６ | 38 | 269 | 土器１ |
| 4 | 132 | 土師器２，土器６，鉄器１ | 39 | 270 | 土器３ |
| 5 | 135 | 土器３ | 40 | 272 | 土器３ |
| 6 | 136 | 土器２ | 41 | 274 | 土器１，土師器１ |
| 7 | 146 | 染付１ | 42 | 279 | 土器１ |
| 8 | 147 | 土器６，鉄滓１ | 43 | 370 | 粘土塊１，土師器１ |
| 9 | 150 | 土器 18 | 44 | 380 | 白磁１ |
| 10 | 158 | 土器４，土師器１ | 45 | 420 | 貝殻，土師器１ |
| 11 | 159 | 土器４ | 46 | 477 | 鉄滓４ |
| 12 | 162 | 土器２，青磁２，羽口１ | 47 | 485 | 土器１ |
| 13 | 168 | 磁器蓋 | 48 | 494 | 土器１ |
| 14 | 170 | 土器１ | 49 | 503 | 土器 10 |
| 15 | 181 | 糸切土師器１，土器 21 | 50 | 506 | 糸切土師器１ |
| 16 | 182 | 土器１ | 51 | 512 | 陶器１ |
| 17 | 185 | 粘土塊１，土器１，擂鉢 | 52 | 518 | 土器１ |
| 18 | 190 | 鉄滓 11 | 53 | 526 | 土器１ |
| 19 | 196 | 土器１ | 54 | 537 | 土器２ |
| 20 | 202 | 土器１ | 55 | 535 | 白磁１ |
| 21 | 203 | 土器１ | 56 | 542 | 土師器３ |
| 22 | 204 | 土器１ | 57 | 547 | 土器１ |
| 23 | 207 | 土器１，陶器１ | 58 | 548 | 土器１ |
| 24 | 208 | 土器１ | 59 | 549 | 擂鉢１ |
| 25 | 212 | 土器１，土師器１ | 60 | 553 | 土師器甕 |
| 26 | 215 | 土師器１ | 61 | 571 | 土器１ |
| 27 | 217 | 土器３，土師器１ | 62 | 572 | 土器３，青磁１ |
| 28 | 221 | 土器２ | 63 | 585 | 白磁４，滑石１，白磁１，石斧１ |
| 29 | 225 | 土器１ | 64 | 608 | 土器３ |
| 30 | 230 | 土器１，土師器１ | 65 | 609 | 土器１ |
| 31 | 236 | 土器１ | 66 | 616 | 青磁１ |
| 32 | 237 | 土師器１ | 67 | 676 | 青磁１，陶器１，糸切土師器１，土器２，土師器１，鉄滓２，敲石１ |
| 33 | 246 | 陶器１ | 68 | 677 | 土器３ |
| 34 | 252 | 青磁１ | 69 | 681 | 土器１ |
| 35 | 254 | 土器３ | | | |




第76図　ピット配置図（18区～ 28区）




第77図　ピット配置図（28区～ 39区）

## ３　包含層出土遺物

### （１）青磁（第78図　415 ～ 444）

205点中30点を図化した。415 ～ 434は龍泉窯系青磁碗である。415は内面に片彫蓮花文を施す。大宰府分類のⅠ２類に相当する。416・418は外面に幅広の連弁文を施す。大宰府分類Ⅱａ類に相当する。417は外面に鎬連弁文を施す。大宰府分類Ⅱｂ類に相当する。419は体部外面に連弁文を施し，見込みに文字が刻印されている。底部は厚く，高台は断面四角形である。釉が高台内面の半分までかかっている。大宰府分類Ⅱａ類に相当する。

420・421は鎬連弁文と連弁文を重ねて施す。大宰府分類Ⅱｂ類に相当する。422・423は体部外面に鎬連弁文を施し，見込みに花文や「玉」と読める文字を刻印している。高台内面の釉は剥ぎ取られている。大宰府分類Ⅱｂ類に相当する。424は色調から420と同一個体の可能性がある。高台外面まで施釉されている。

425は体部外面に彫りが浅く不明瞭な連弁文を施す。釉は黄色味を帯び半濁化している。大宰府分類Ⅳ類に相当すると考えられる。426は体部外面に彫りの浅い鎬連弁文を施す。釉はかすんだ緑色で，目の粗い貫入がみられる。大宰府分類Ⅲ類に相当すると考えられる。

427・428は体部外面にヘラ先による線描連弁文を施す。427は細線と剣頭が連弁としての単位を意識して施されているもので，上田分類のＢⅣ類に相当する。428は剣頭が省略されたもので，上田分類ＢⅣ類に相当する。429は口縁部外面に雷文帯，体部外面に簡略化した連弁文を施す。上田分類のＣⅡ類に相当する。430 ～ 432は無文の碗である。

433は見込みに「顧氏」の刻印がみられる。発色の良い緑色釉が厚めにかかり，高台内面天井部は釉剥ぎが行われている。所属時期は15世紀中頃～ 16世紀初頭である。

434は小型の碗である。高台の径が小さく，釉の色調は薄い緑色である。15世紀以降の青磁と推測される。

435は浅形碗で，外面には簡略化した連弁文を施す。436・437は稜花皿である。437は口縁部内面に沈線がみられる。438 ～ 441は坏である。438・439は口縁が屈折し，438の体部外面には鎬連弁文がみられる。大宰府分類Ⅲ類に相当する。440は体部下半に稜線が巡る。透明感のない緑色釉が高台外面までかかっている。441は口縁部が小さく外反する。釉が厚く，胎土に黒色粒子を含む。

442は壺の肩部である。443は梅瓶と呼ばれる青磁である。梅瓶は各地域において有力な遺跡で出土することが報告されている。444は把手である。

### （２）白磁（第79図　445 ～ 459）

25点中15点を図化した。

445 ～ 447は口禿げの皿で，大宰府分類のⅨ類である。447は全面施釉の優品である。448 ～ 450は口縁部が外反する皿である。森田分類のＥ群に相当する。451は皿の底部で，大宰府分類Ⅸ類と考えられる。見込みに花文が描かれている。452 ～ 454は高台を有する皿の底部である。453・454の体部下半は露胎である。

455は小型坏である。近世に類似する遺物もあるが，白磁の範疇としてここに掲載する。口縁部が外反し器壁が薄い。

456は合子の蓋である。外面には型押しによる草花文を施す。457は合子の身で，体部下半は露胎である。458・459は中世前期の壺の胴部と考えられる。

### （３）青花（第80図　460 ～ 477）

68点中18点を図化した。

460 ～ 467は碗である。460は体部外面に菊花文が描かれている。高台が低く，高台外面まで施釉されている。461は体部外面に十字花文が描かれている。462は器壁が薄く，体部外面に家屋などの風景画が描かれている。464の外面には雷文帯が描かれている。465は広く開いた胴部を持ち，見込みが高台内に凹む器形である。内外面に波濤文が描かれている。小野分類の碗Ｃ群に相当するもので，いわゆる「蓮子碗（レンツー碗）」である。466の外面には芭蕉文が描かれている。467の外面には連点状の文様が描かれている。

468 ～ 475は皿である。468 ～ 470は碁笥底の皿で小野分類の皿Ｃ群に相当する。468の見込みには吉祥文字である「寿」・「福」のいずれかを人形化した文様が描かれている。469・470の体部外面には芭蕉文が描かれる。471は体部下半が露胎となる。見込みの文様については詳細不明である。469・471は胎土の色調が黄色味を帯びている。472 ～ 475は高台をもつ端反りの皿で，小野分類の皿Ｂ群に相当する。472は外面に唐草文が描かれている。474は見込みに蓮華とみられる花文，475は菊花文を描いている。

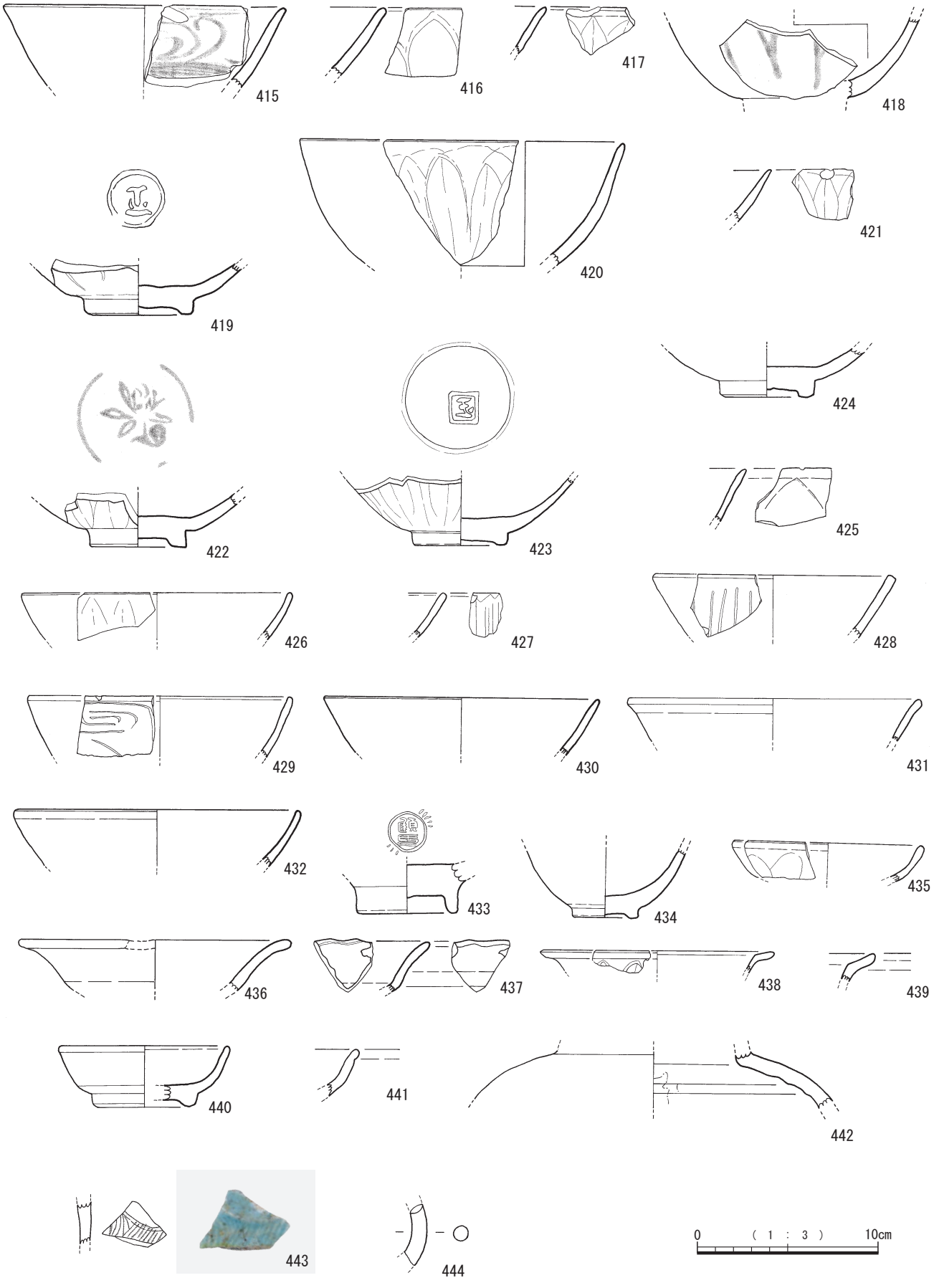
476は瓶，477は蓋である。

### （４）土師器（第81図　478 ～ 494）

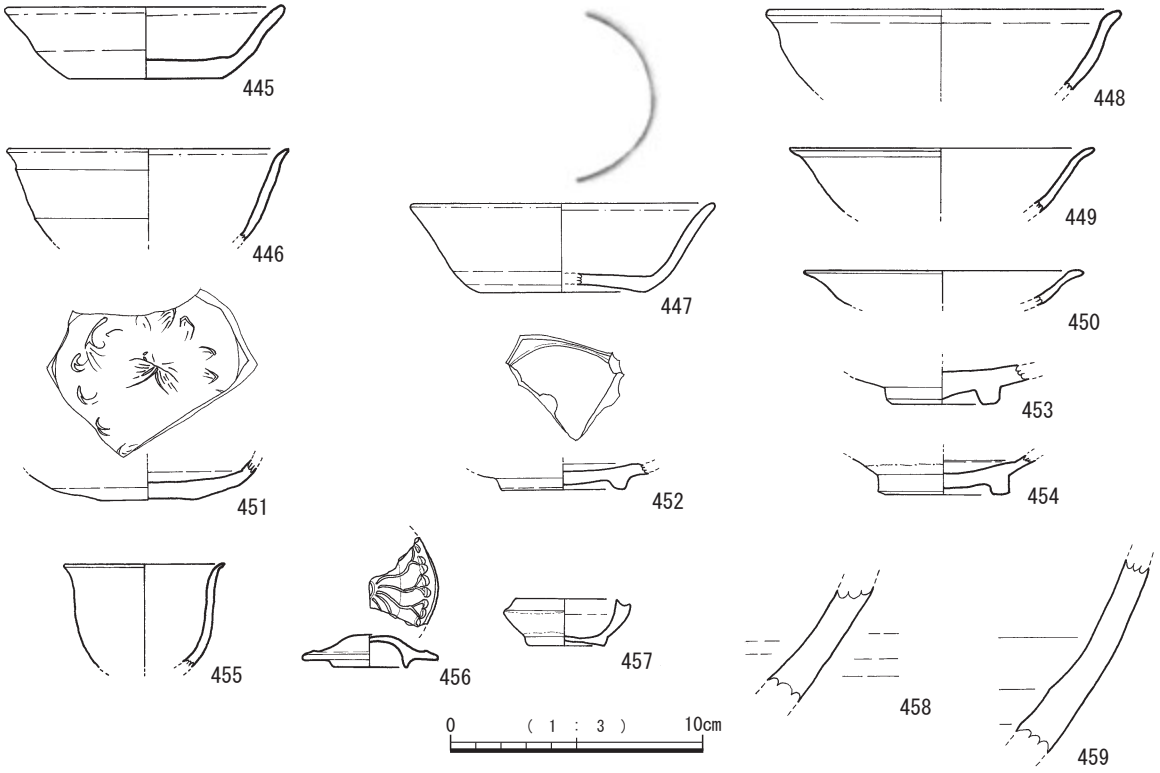
112点中17点を図化した。

478 ～ 484は糸切り底の坏である。内外面回転ヨコナデ調整が施されている。478・479は口径13.5㎝，器高3.6㎝前後で，坏の中では大型品である。480 ～ 482は口径10.5㎝，器高2.9㎝前後で，一回り小さい。坏は胎土に赤色粒子，赤色小石を少量含むものが多い。

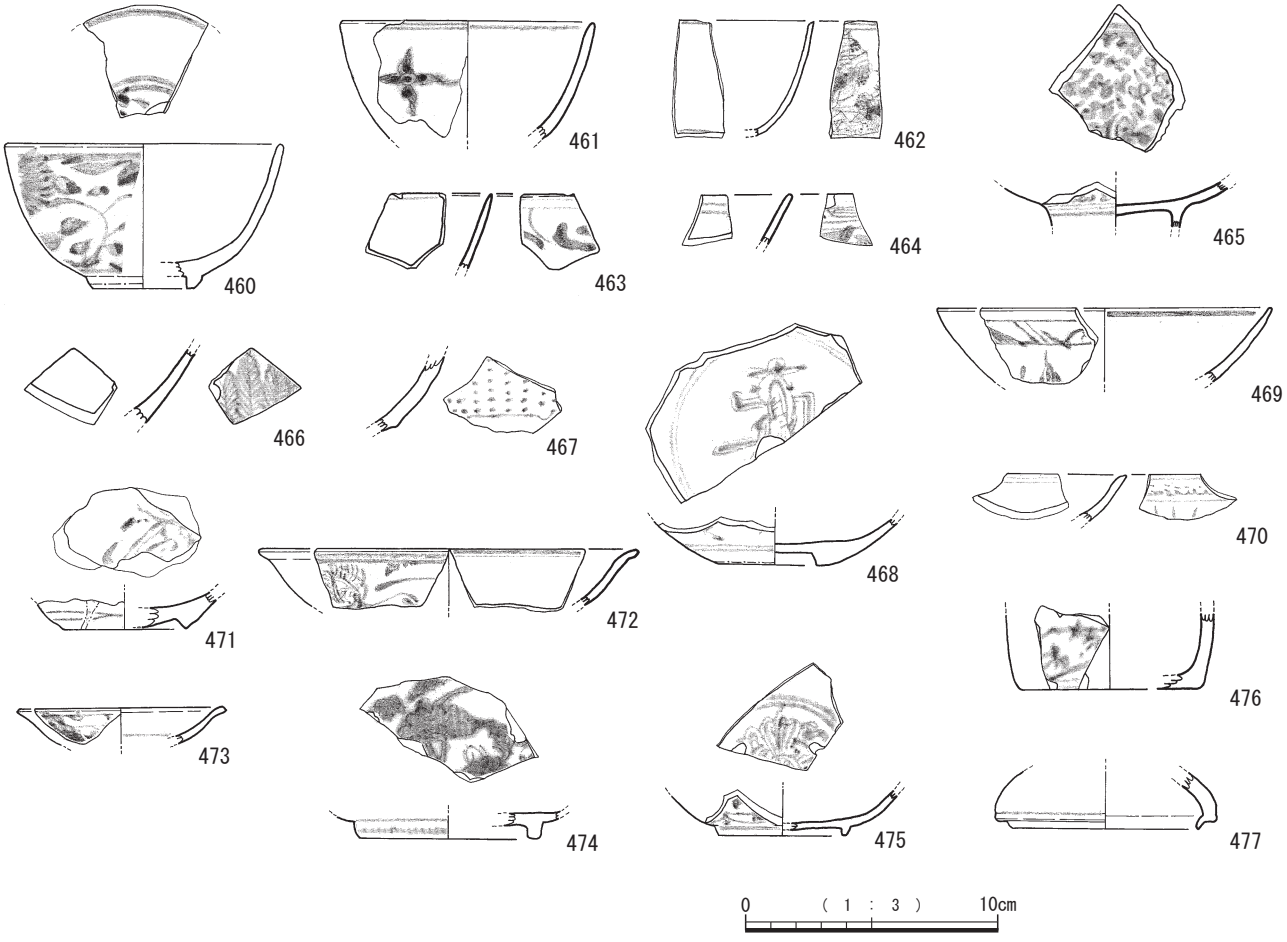
485 ～ 490は器高2.3㎝前後の皿である。糸切り底で器壁が厚い。485は内外面黒色の皿で，ミガキが施されている。486 ～ 490は見込みが盛り上がる器形となる。内外面回転ヨコナデを施す。491 ～ 494は器高1.4㎝前後の小皿である。体部は直線的で，口唇部は先細りとなる。全て糸切底で，内外面回転ヨコナデを施す。皿の胎土は坏に類似するが，491のみ金雲母を含んでいる。




第78図　包含層出土青磁




第79図　包含層出土白磁

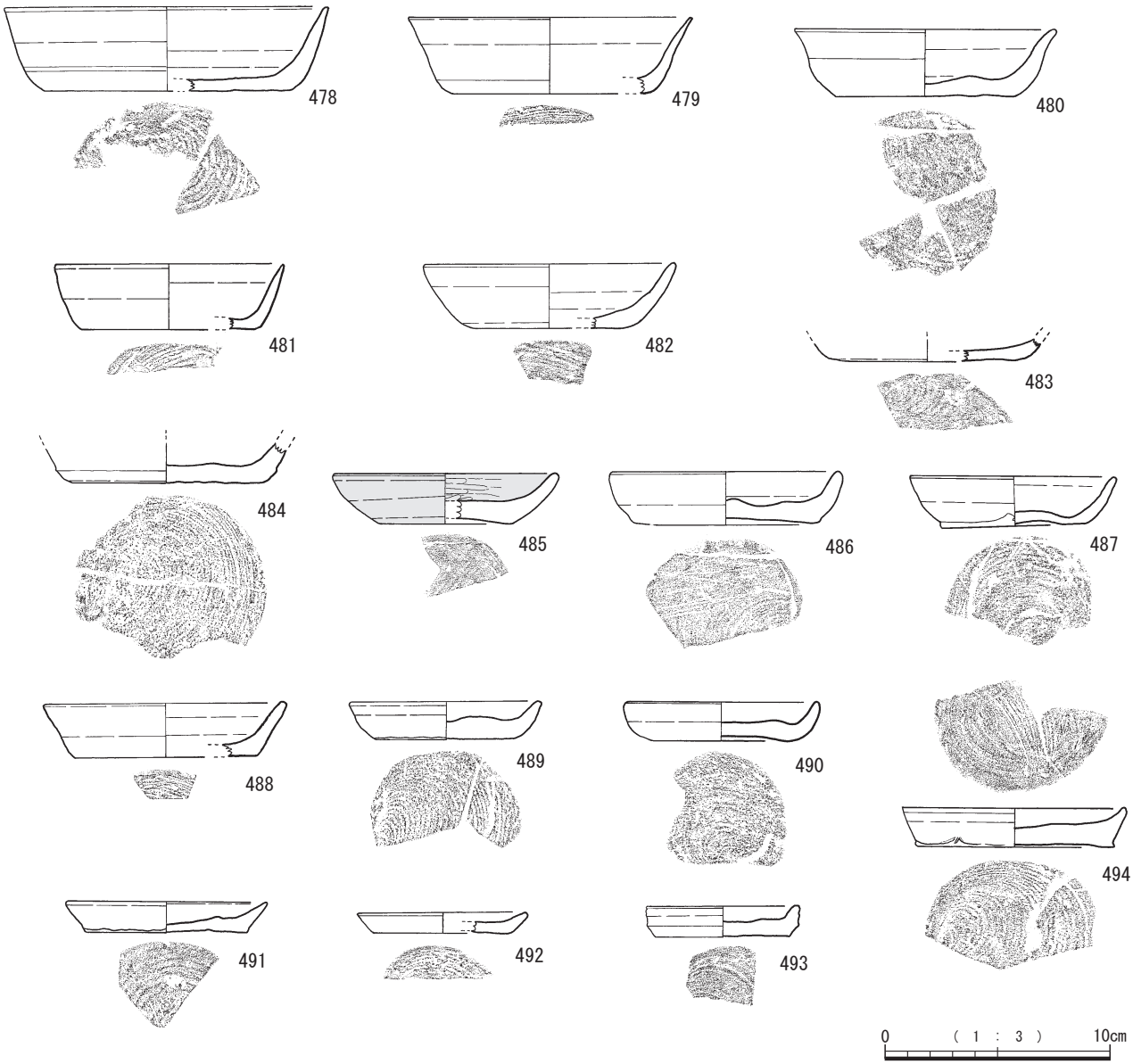



第80図　包含層出土青花

第 22 表　包含層出土青磁・白磁・青花観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 色調 | 胎土 | 分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 78 | 415 | 青磁 | 碗 | H-34 Ⅱb | 15.6 | − | − | 灰オリーブ | 精良 | 大宰府Ⅰ２ | 12 ｃ中～ 12 ｃ後半 |
| | 416 | 青磁 | 碗 | G-35 Ⅱb | − | − | − | オリーブ黄 | 精良 | 大宰府Ⅱａ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 417 | 青磁 | 碗 | I-35 Ⅱb | − | − | − | オリーブ黄 | 精良 | 大宰府Ⅱｂ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 418 | 青磁 | 碗 | I-35 Ⅱb | − | − | − | 黄褐 | 精良 | 大宰府Ⅱａ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 419 | 青磁 | 碗 | H-29 Ⅱb | − | 6.0 | − | 灰オリーブ | 精良 | 大宰府Ⅱａ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 420 | 青磁 | 碗 | I-34 Ⅱb | 18.0 | − | − | 灰白 | 精良 | 大宰府Ⅱｂ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 421 | 青磁 | 碗 | H-34 Ⅱb | − | − | − | オリーブ灰 | 精良 | 大宰府Ⅱｂ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 422 | 青磁 | 碗 | I-34 Ⅱ | − | 5.4 | − | 明オリーブ灰 | 精良 | 大宰府Ⅱｂ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 423 | 青磁 | 碗 | H-29 Ⅱ | − | 5.3 | − | 灰オリーブ | 精良 | 大宰府Ⅱｂ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 424 | 青磁 | 碗 | I-34 Ⅲ | − | 5.0 | − | 明オリーブ灰 | 精良 | 大宰府Ⅱｂ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 425 | 青磁 | 碗 | H･I-24･25 Ⅱb | − | − | − | オリーブ黄 | 精良 | 大宰府Ⅳ | 13 ｃ初頭～ 13 ｃ前半 |
| | 426 | 青磁 | 碗 | G-35 Ⅱb | 15.0 | − | − | 明オリーブ灰 | 精良 | 大宰府Ⅲ | 13 ｃ中頃～ 14 ｃ初頭 |
| | 427 | 青磁 | 碗 | F･G-23･24 Ⅱａ | − | − | − | 灰オリーブ | 精良 | 上田ＢⅣ | 15 ｃ末～ 16 ｃ前半 |
| | 428 | 青磁 | 碗 | H-29 Ⅱａ | 13.4 | − | − | 緑灰 | 精良 | 上田ＢⅣ | 16 ｃ中頃～ 16 ｃ後半 |
| | 429 | 青磁 | 碗 | D-24･25 Ⅱb | 14.6 | − | − | 灰オリーブ | 精良 | 上田ＣⅡ | 15 ｃ前半～ 15 ｃ中頃 |
| | 430 | 青磁 | 碗 | H･I-23 Ⅱb | 15.0 | − | − | 暗オリーブ | 精良 | | |
| | 431 | 青磁 | 碗 | H-28 Ⅱb | 16.4 | − | − | オリーブ灰 | 精良 | | |
| | 432 | 青磁 | 碗 | H-35表土 | 15.8 | − | − | 明オリーブ灰 | 精良 | | |
| | 433 | 青磁 | 碗 | I-35 Ⅱb | − | 5.6 | − | オリーブ灰 | 精良 | | 15 ｃ中頃～ 16 ｃ初頭 |
| | 434 | 青磁 | 碗 | I-34 Ⅱb | − | 3.7 | − | 灰オリーブ | 精良 | | 15 ｃ以降 |
| | 435 | 青磁 | 浅形碗 | 9T中央 Ⅱb | 10.4 | − | − | オリーブ灰 | 精良 | | 14 ｃ初頭～ 14 ｃ中頃 |
| | 436 | 青磁 | 皿 | I-33 Ⅱａ | 14.6 | − | − | オリーブ灰 | 精良 | | 15 ｃ末～ 16 ｃ前半，稜花皿 |
| | 437 | 青磁 | 皿 | 20T Ⅱａ | − | − | − | 暗オリーブ | 精良 | | 15 ｃ末～ 16 ｃ前半，稜花皿 |
| | 438 | 青磁 | 坏 | H-34 Ⅱb | 12.9 | − | − | 緑灰 | 精良 | 大宰府Ⅲ | 13 ｃ中頃～ 14 ｃ初頭 |
| | 439 | 青磁 | 坏 | F36 Ⅲ | − | − | − | 明オリーブ灰 | 精良 | 大宰府Ⅲ | 13 ｃ中頃～ 14 ｃ初頭 |
| | 440 | 青磁 | 坏 | H･I-23 Ⅱb | 9.2 | 5.6 | 3.4 | オリーブ灰 | 精良 | | |
| | 441 | 青磁 | 坏 | I-33 Ⅱａ | − | − | − | 灰オリーブ | 精良 | | |
| | 442 | 青磁 | 壺 | H-34 Ⅱb | − | − | − | 灰オリーブ | 精良 | | |
| | 443 | 青磁 | 梅瓶 | H-29 Ⅱａ | − | − | − | 明緑灰 | 精良 | | 13 ～ 14 ｃ |
| | 444 | 青磁 | 把手 | I-33 Ⅱａ | − | − | − | オリーブ灰 | 精良 | | |
| 79 | 445 | 白磁 | 皿 | G-34 Ⅱb　H-29 Ⅱb | 10.8 | 6.4 | 2.8 | 明オリーブ灰 | 精良 | 大宰府Ⅸ | 13 ｃ中頃～ 14 ｃ初頭 |
| | 446 | 白磁 | 皿 | 9T Ⅱb | 11.0 | − | − | 浅黄橙 | 精良 | 大宰府Ⅸ | 13 ｃ中頃～ 14 ｃ初頭 |
| | 447 | 白磁 | 皿 | E-24 Ⅱａ | 11.8 | 6.4 | 3.5 | 灰オリーブ | 精良 | 大宰府Ⅸ | 13 ｃ中頃～ 14 ｃ初頭 |
| | 448 | 白磁 | 皿 | 9T Ⅱb | 14.0 | − | − | 灰白 | 精良 | 森田Ｅ群 | 16 ｃ |
| | 449 | 白磁 | 皿 | 14T Ⅱａ | 12.0 | − | − | 灰白 | 精良 | 森田Ｅ群 | 16 ｃ |
| | 450 | 白磁 | 皿 | G-35 Ⅱb | 11.0 | − | − | 灰白 | 精良 | 森田Ｅ群 | 16 ｃ |
| | 451 | 白磁 | 皿 | F-36 Ⅱb | − | 4.0 | − | 明オリーブ灰 | 精良 | 大宰府Ⅸ | |
| | 452 | 白磁 | 皿 | G-35 Ⅱb | − | 5.0 | − | 明緑灰 | 精良 | | |
| | 453 | 白磁 | 皿 | I-34 Ⅱb | − | 4.4 | − | 淡黄 | 精良 | | |
| | 454 | 白磁 | 皿 | I-34 Ⅱb | − | 5.2 | − | 灰白 | 精良 | | |
| | 455 | 白磁 | 小型坏 | H-34 Ⅱａ | 6.4 | − | − | 灰白 | 精良 | | |
| | 456 | 白磁 | 合子（蓋） | G-35 Ⅱb | 5.4 | − | 1.3 | 明緑灰 | 精良 | | 12 ～ 13 ｃ |
| | 457 | 白磁 | 合子 | H-35 Ⅱb | − | 3.1 | 1.9 | 灰白 | 精良 | | |
| | 458 | 白磁 | 壺 | H-29 Ⅱb | − | − | − | オリーブ灰 | 精良 | | 中世前期 |
| | 459 | 白磁 | 壺 | H-35 Ⅱb | − | − | − | 灰白 | 精良 | | 中世前期 |
| 80 | 460 | 青花 | 碗 | 14T中央 Ⅱｂ | 10.8 | 4.0 | 5.8 | 灰白 | 精良 | | |
| | 461 | 青花 | 碗 | F-24･25 Ⅱａ | 9.8 | − | − | 明緑灰 | 精良 | | |
| | 462 | 青花 | 碗 | 14T Ⅱａ | − | − | − | 明緑灰 | 精良 | | |
| | 463 | 青花 | 碗 | G･H-18･19 | − | − | − | 明緑灰 | 精良 | | |
| | 464 | 青花 | 碗 | G-35 Ⅱb | − | − | − | 灰白 | 精良 | | |
| | 465 | 青花 | 碗 | H-34 Ⅱb | − | − | − | 明緑灰 | 精良 | 小野Ｃ群 | 15 ｃ末～ 16 ｃ中頃 |
| | 466 | 青花 | 碗 | E-22･23 Ⅱａ | − | − | − | 明緑灰 | 精良 | | |
| | 467 | 青花 | 碗 | 14T Ⅱａ | − | − | − | 灰白 | 精良 | | |
| | 468 | 青花 | 皿 | E-19 Ⅱb | − | 4.0 | − | 明緑灰 | 精良 | 小野Ｃ群 | 15 ｃ末～ 16 ｃ中頃 |
| | 469 | 青花 | 皿 | 14T Ⅱａ | 13.2 | − | − | 灰オリーブ | 精良 | 小野Ｃ群 | 15 ｃ末～ 16 ｃ中頃 |
| | 470 | 青花 | 皿 | I-29 Ⅱａ | − | − | − | 灰白 | 精良 | 小野Ｃ群 | 15 ｃ末～ 16 ｃ中頃 |
| | 471 | 青花 | 皿 | H･I-24･25 Ⅱb | − | − | − | 浅黄 | 精良 | 小野Ｃ群 | 15 ｃ末～ 16 ｃ中頃，越州窯系 |
| | 472 | 青花 | 皿 | 14T Ⅱａ | 15.0 | − | − | 明緑灰 | 精良 | 小野Ｂ群 | 15 ｃ中頃～ 17 ｃ前半 |
| | 473 | 青花 | 皿 | I-33表土 | 8.0 | − | − | 明緑灰 | 精良 | 小野Ｂ群 | 15 ｃ中頃～ 17 ｃ前半 |
| | 474 | 青花 | 皿 | G-20 Ⅱａ | − | 7.2 | − | 明緑灰 | 精良 | 小野Ｂ群 | 15 ｃ中頃～ 17 ｃ前半 |
| | 475 | 青花 | 皿 | H-29 Ⅱａ | − | 5.0 | − | 明緑灰 | 精良 | 小野Ｂ群 | 15 ｃ中頃～ 17 ｃ前半 |
| | 476 | 青花 | 瓶 | I-36表土 | − | 7.2 | − | 明緑灰 | 精良 | | 底部釉剥ぎ |
| | 477 | 青花 | 蓋 | E･F-19～22 Ⅱb | 7.3 | − | − | 明緑灰 | 精良 | | 見受け釉剥ぎ |

※　法量は復元値




第81図　包含層出土土師器

第 23 表　包含層出土土師器観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 81 | 478 | 土師器 | 坏 | G-35 Ⅱb | 14.4 | 11.4 | 3.8 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい橙 | 精良 | 粗痕　糸切り |
| | 479 | 土師器 | 坏 | H-35 Ⅱb | 12.6 | 9.0 | 3.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 淡赤橙 | 赤色粒子 | 糸切り |
| | 480 | 土師器 | 坏 | G-35 Ⅱb　G-36 Ⅱb　H-36 Ⅱb | 11.6 | 8.2 | 3.0 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 精良 | 糸切り |
| | 481 | 土師器 | 坏 | 9T Ⅱb　H-35 Ⅱb | 10.2 | 8.0 | 2.9 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰黄 | 精良 | 糸切り |
| | 482 | 土師器 | 坏 | E-18･19 Ⅱb | 11.2 | 6.4 | 2.9 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 赤色小石 | 糸切り |
| | 483 | 土師器 | 坏 | G-35 Ⅱb | － | 8.8 | － | 回転ヨコナデ・指頭圧痕 | 回転ヨコナデ | 外）橙<br>内）にぶい橙 | 赤色粒子 | 糸切り |
| | 484 | 土師器 | 坏 | H･I-24 Ⅱb | － | 9.0 | － | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 赤色小石 | 糸切り |
| | 485 | 土師器 | 皿 | H-32 Ⅱb | 9.8 | 5.8 | 2.2 | 回転ヨコナデ・ミガキ | ミガキ | 黒 | 精良 | 黒色土師器<br>糸切り |
| | 486 | 土師器 | 皿 | F-36 Ⅱb | 10.3 | 8.4 | 3.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい橙 | 赤色粒子 | 糸切り |
| | 487 | 土師器 | 皿 | G-36 Ⅱb | 9.2 | 6.7 | 2.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 赤色小石 | 糸切り |
| | 488 | 土師器 | 皿 | G-35 Ⅱb | 10.8 | 8.4 | 2.5 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい橙 | 赤色粒子 | 糸切り |
| | 489 | 土師器 | 皿 | F-36 Ⅱb | 8.6 | 6.4 | 1.7 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい橙 | 赤色粒子 | 糸切り |
| | 490 | 土師器 | 皿 | F-36 Ⅱb | 8.4 | 7.0 | 1.7 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 赤色粒子 | 糸切り |
| | 491 | 土師器 | 皿 | H-32 Ⅱb | 8.9 | 7.4 | 1.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 灰黄褐 | 金雲母 | 糸切り |
| | 492 | 土師器 | 皿 | G-35 Ⅱb | 7.6 | 6.4 | 0.9 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい黄橙 | 赤色小石 | 糸切り |
| | 493 | 土師器 | 皿 | H-35 Ⅲ | 6.8 | 6.2 | 1.4 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | にぶい橙 | 精良 | 糸切り |
| | 494 | 土師器 | 皿 | H･I-23･24 Ⅱb下 I-25 Ⅱb下 | 9.9 | 9.0 | 1.8 | 回転ヨコナデ | 回転ヨコナデ | 橙 | 赤色粒子 | 糸切り |

※　法量は復元値

### （５）陶器（第82図　495 ～ 498）

19点中４点を図化した。

495 ～ 497は中国産陶器と考えられる。495は黄釉鉄絵陶器盤の底部である。内面は薄い黄釉を施した後，褐色の鉄絵で文様を描いている。外面は露胎である。胎土に白色・赤色の砂粒を多く含んでいる。所属時期は14世紀代と考えられる。496は甕の胴部と考えられる。内外面に褐色で飴色の釉がかかっている。497は皿と考えられる。内面に白色釉を掻き取って文様を描いている。外面は露胎である。

498は備前焼の壺である。外面に沈線文が残っている。

### （６）須恵器（第83図　499 ～ 508）

67点中10点を図化した。

499 ～ 508は全て甕である。499は小型の甕である。内外面ナデ調整を施す。500は中世後期の短頸壺と考えられる。外面には幅の広い格子目タタキが施されている。501，502は大型品である。器面調整が粗雑で，色調は灰白色に近い。502は焼成が悪く，胎土は泥質で破断面が縞状になっている。

503は中世前期の東播系須恵器である。504は外面に格子目タタキを施した後，一部ナデ消しを行っている。505は外面に綾杉状のタタキが残っている。506は瓦質焼成に近い。胎土は泥質で破断面は縞状になっている。507・508は底部である。507の外面は幅１㎝程の板状工具を使って成形している。

### （７）擂鉢（第84図　509 ～ 520）

99点中12点を図化した。

509は備前焼の擂鉢である。口縁部上面が平坦で，内面には櫛目が残っている。所属時期は14世紀前半である。510 ～ 511は瓦質焼成の擂鉢である。510は復元口径25.8㎝，器高10.5㎝で，内外面に粗いハケ目調整を施す。内面には６条一組の櫛目が施されている。焼成が悪く，胎土は泥質である。511は内外面黒色である。

512 ～ 515は焼成・色調が須恵器に近い擂鉢である。内面には９～ 10条一組の櫛目が施される。513・515の内面は使用により摩耗している。

516 ～ 519は焼成・色調が土師器に近い擂鉢である。内外面ナデ調整を施している。516・517は色調が橙色，518・519は灰白色である。また，517・519は破断面の中心部が黒色になっている。518の内面は使用により摩耗している。

520は片口鉢である。色調は白色に近い。

### （８）瓦質土器（第85図　521 ～ 523）

13点中３点を図化した。

521は大型の甕と考えられる。口縁部は内側が張り出し，外面には削り出しによる突帯が１条残っている。内外面ナデ調整である。522は仏具の底部と考えられる。底部の端は上向きとなり，端部に沈線と刻目を施す。刻目は胴部にも施されている。熊本県球磨郡多良木町蓮花寺跡に類例がある。523は火鉢の口縁部と考えられる。口縁直下に縦方向の沈線と横位の突帯を巡らす。

### （９）滑石製石鍋（第85図　524 ～ 531）

９点中８点を図化した。再加工品が多く，全形を把握できる資料はないが，口縁部外面に鍔を巡らすものがほとんどである。表面には石鍋を製作する際のノミ痕（４㎜）や，再加工時の工具痕がみられる。

### （10）金属製品（第86図　532 ～ 541）

鉄器は30点中10点を図化した。鉄器には，古代，近世の資料が含まれている可能性がある。鉄器個別の時代分けが難しいことや，多くは中世に属すると考えられることから一括して報告する。

532は刀子の茎，533は刃部と考えられる。534は断面方形の棒状鉄器である。鉄鏃の茎の可能性がある。535は鋳造品で小さな脚が付くことから，鉄瓶の可能性がある。536は用途不明品である。537は角釘である。538はＬ字状に曲がる棒状鉄器である。539は鎹の可能性がある。

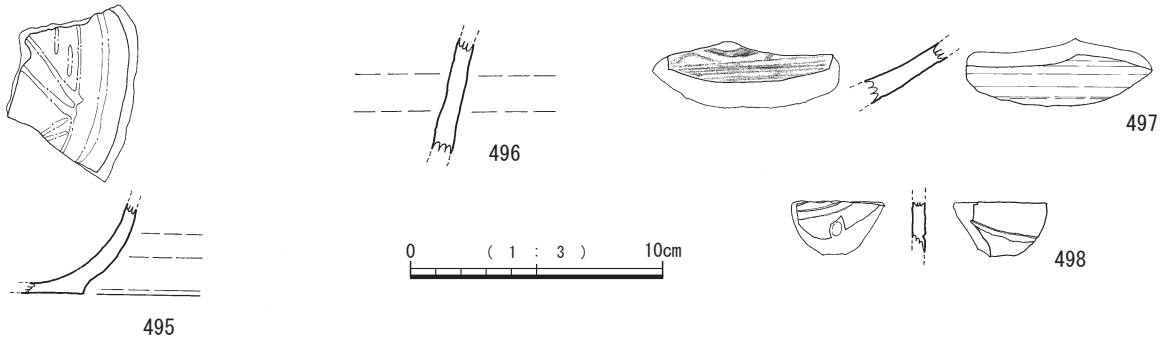
540・541は銅銭である。540は洪武通寶，541は治平元寶と考えられる。

### （11）鍛冶関連遺物（第87図　542 ～ 554）

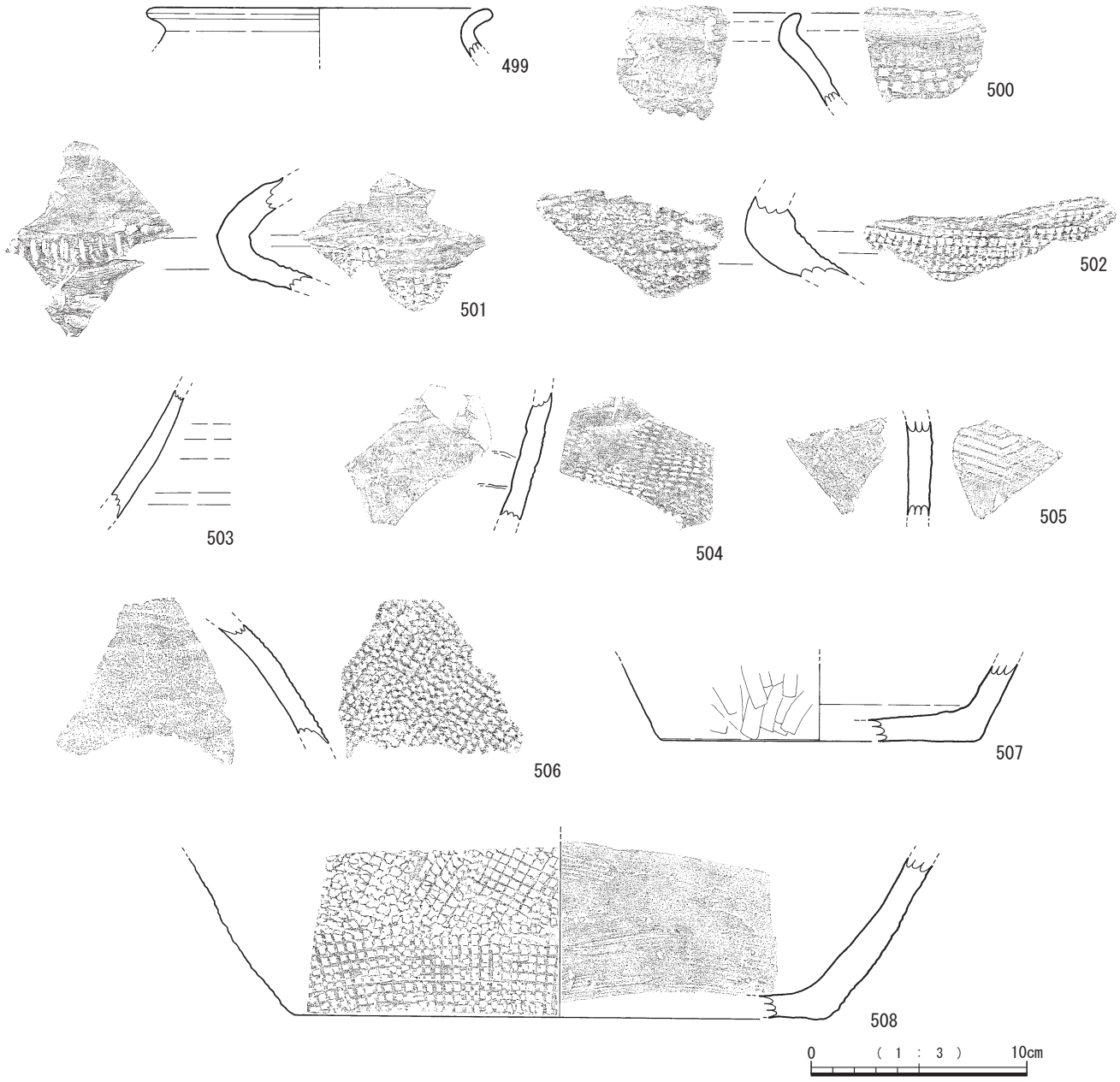
羽口は17点中３点を実測した。542は大型羽口の先端部付近である。外径11.4㎝，内径4.2㎝で，先端部近くは被熱のため黒色になっている。543は大型羽口の基部である。粘土を２枚重ねて筒状に製作し，端部は幅2.5㎝程，厚みをもたせている。外径9.5㎝，内径3.0㎝である。544は羽口の先端部で，表面が熱のため溶解している。外径8.1㎝，内径2.6㎝である。

鉄滓は205点中９点を実測した。出土鉄滓の総重量は5.8㎏である。545・546は製錬滓と考えられる。平面形は雫状で表面に小さな気泡があり，黒味を帯びた色調である。547，548は鉄塊系遺物である。磁力をもち，表面には亀裂がみられる。549 ～ 553は椀形鍛冶滓である。549は表面が赤茶けており，左上部が凹んでいる。550は下部に炉床が付着している。551は木炭をかみ込むために凹凸がある。下部に炉床が付着している。鉄滓付着炭化物の放射性炭素年代値は，1,429calAD －1,479calAD (95.4%)である。552は平面形が不定型である。凹凸が少なく重量感がある。鉄滓付着炭化物の放射性炭素年代値は772calAD － 888calAD (95.4%)である。

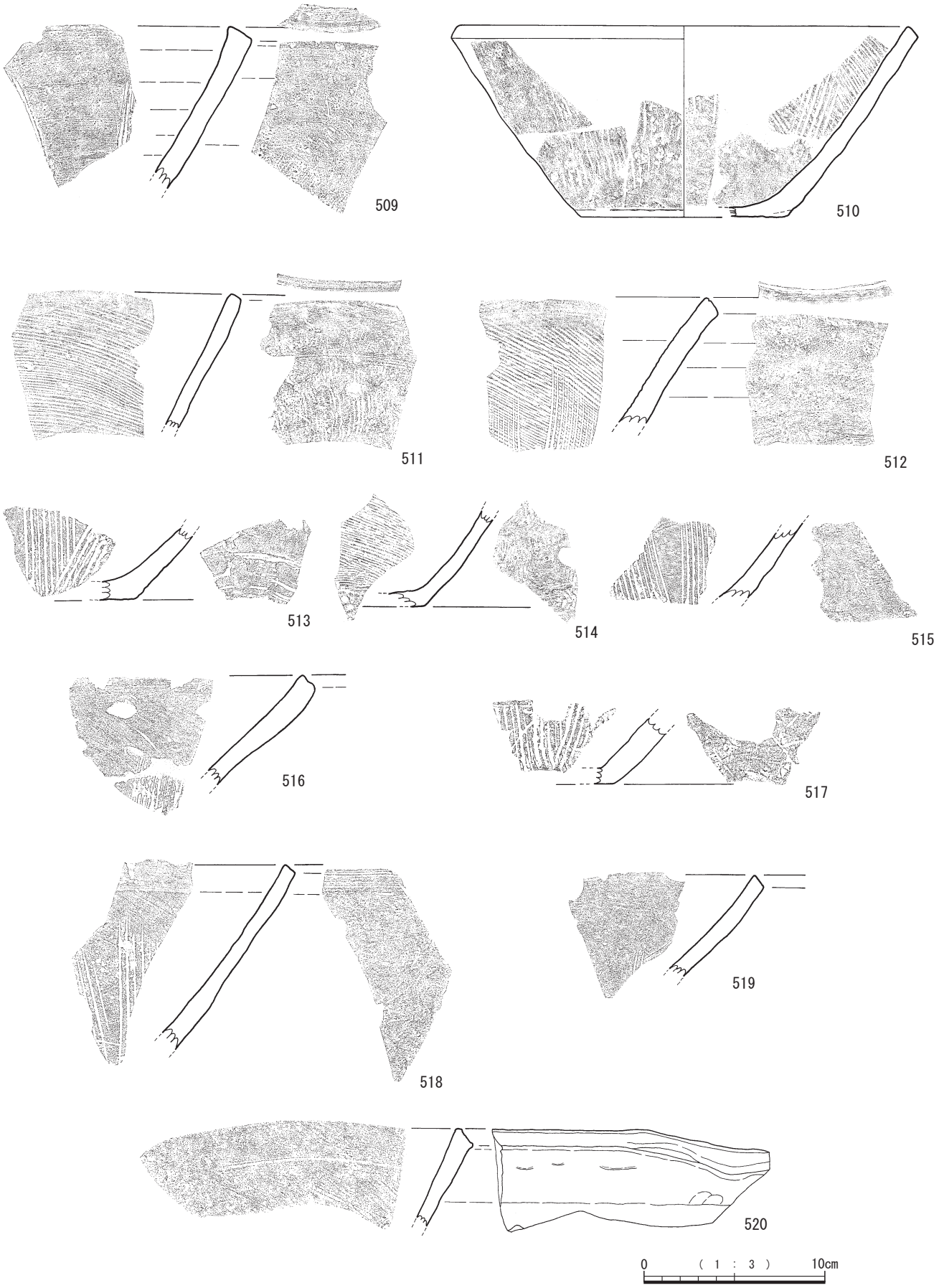
553は黒色を帯びた鍛冶滓である。気泡，凹凸が少なく少量の木炭を含んでいる。



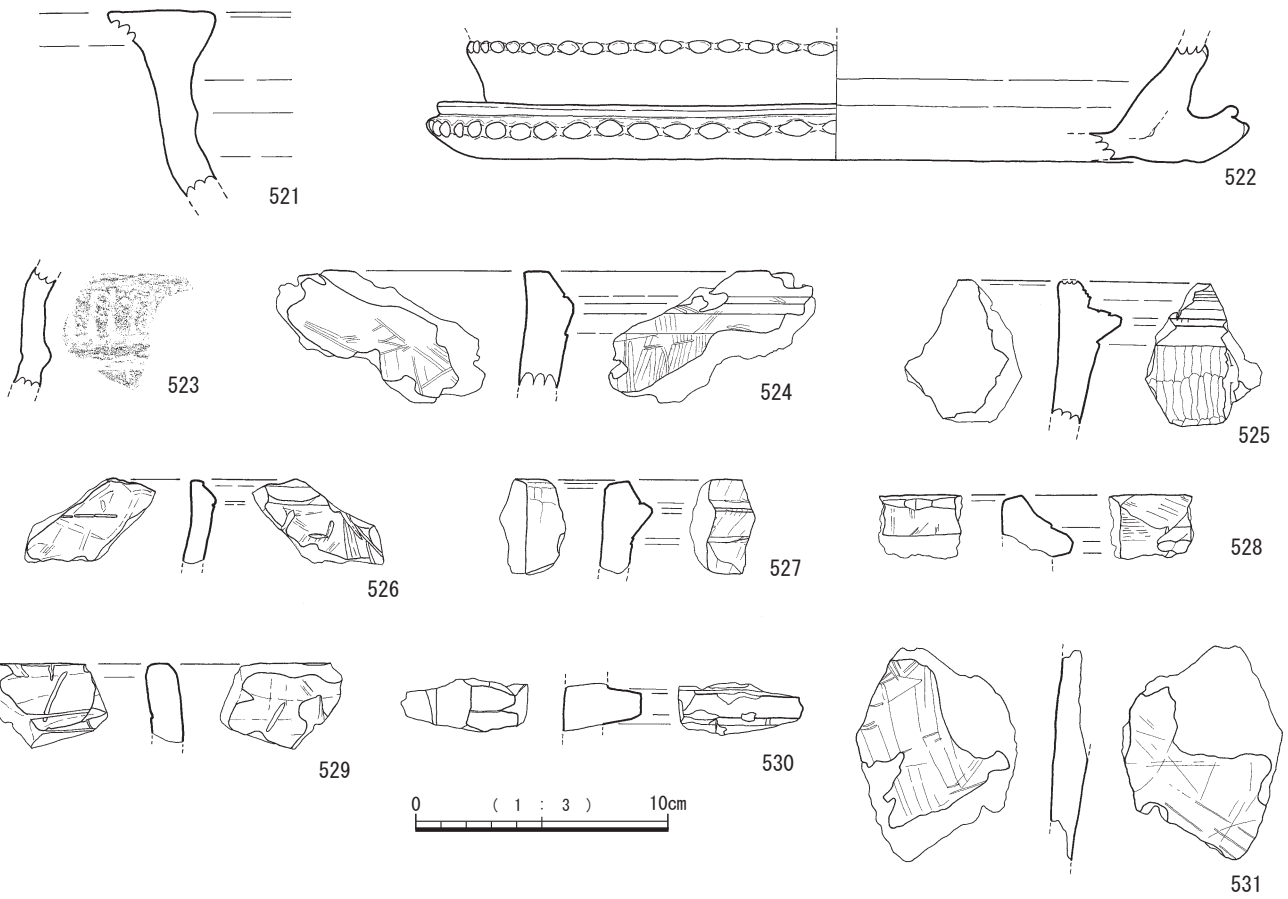

第82図　包含層出土陶器



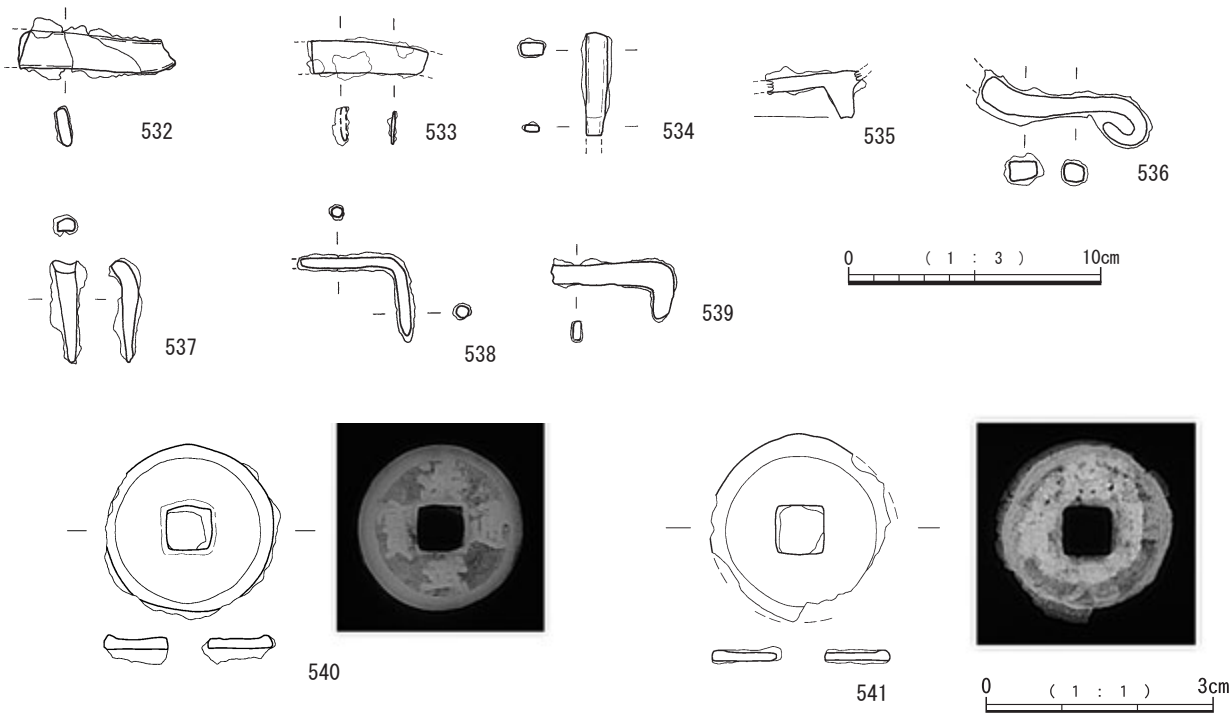

第83図　包含層出土須恵器



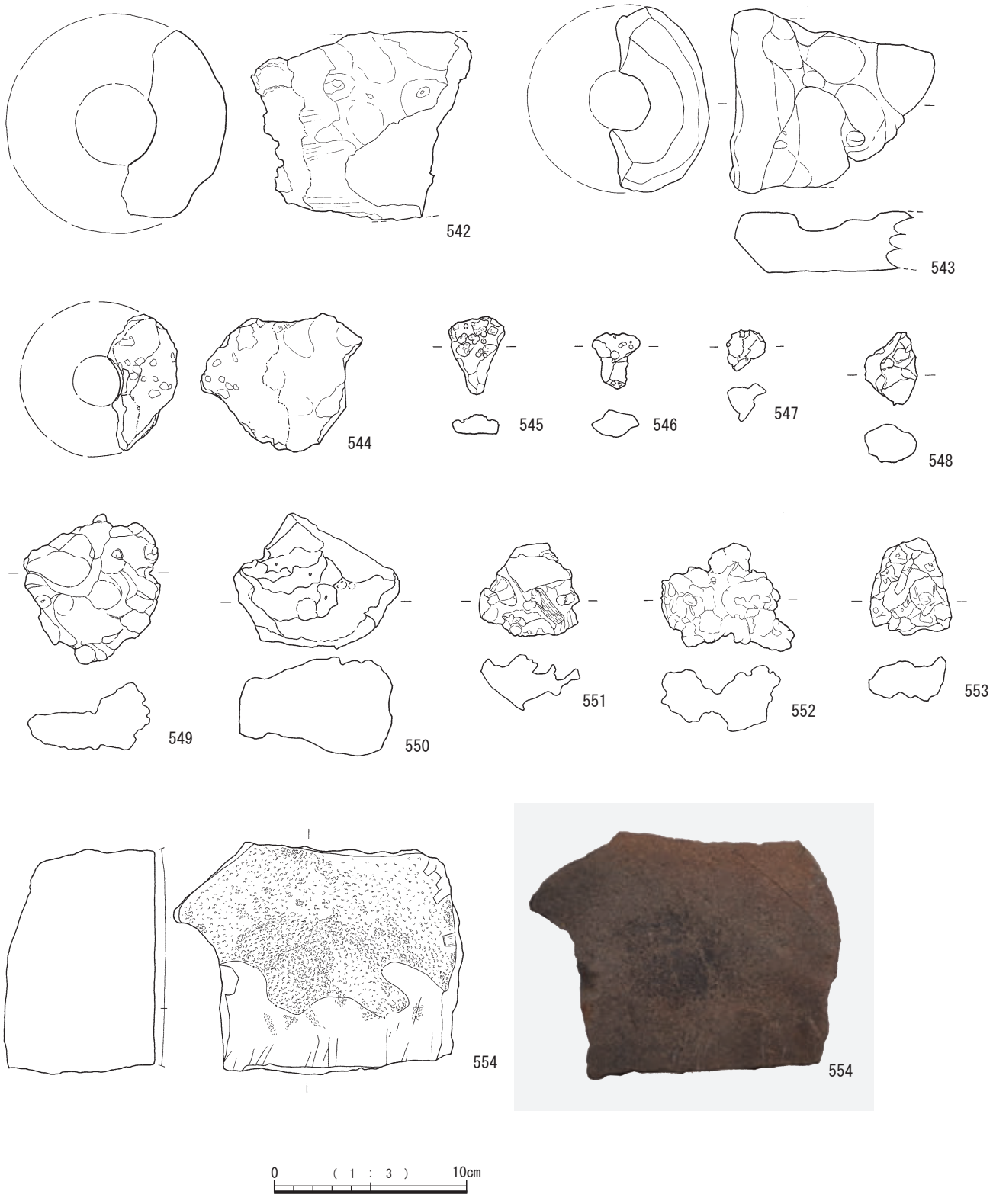

第84図　包含層出土擂鉢・片口鉢




第85図　包含層出土瓦質土器・滑石製石鍋




第86図　包含層出土金属製品




第87図　包含層出土鍛冶関連遺物

554は砂岩製の金床石である。焼けているため赤色化している。敲打痕が顕著に残り，特に中心部は敲打が集中し，黒く変色している。下部は砥石として利用され，刃物傷が確認される。

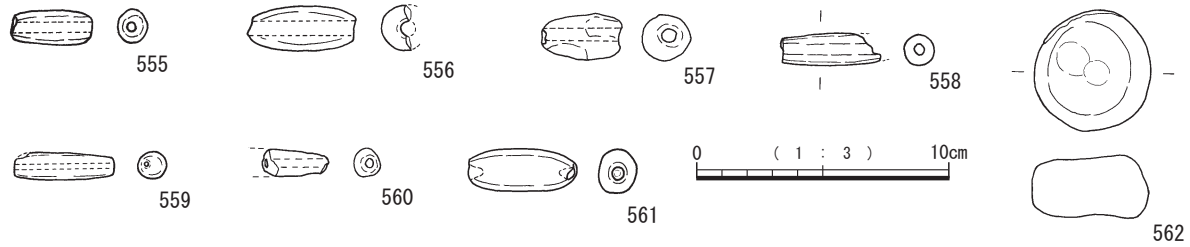
### (12) 土錘・石錘（第88図　555 ～ 562）

８点全て実測した。555は蛇紋岩製の石錘である。556 ～ 561は土錘である。561は両側から穿孔しているが貫通していない。未製品と考えられる。562は文鎮に適した円柱状の土製品である。

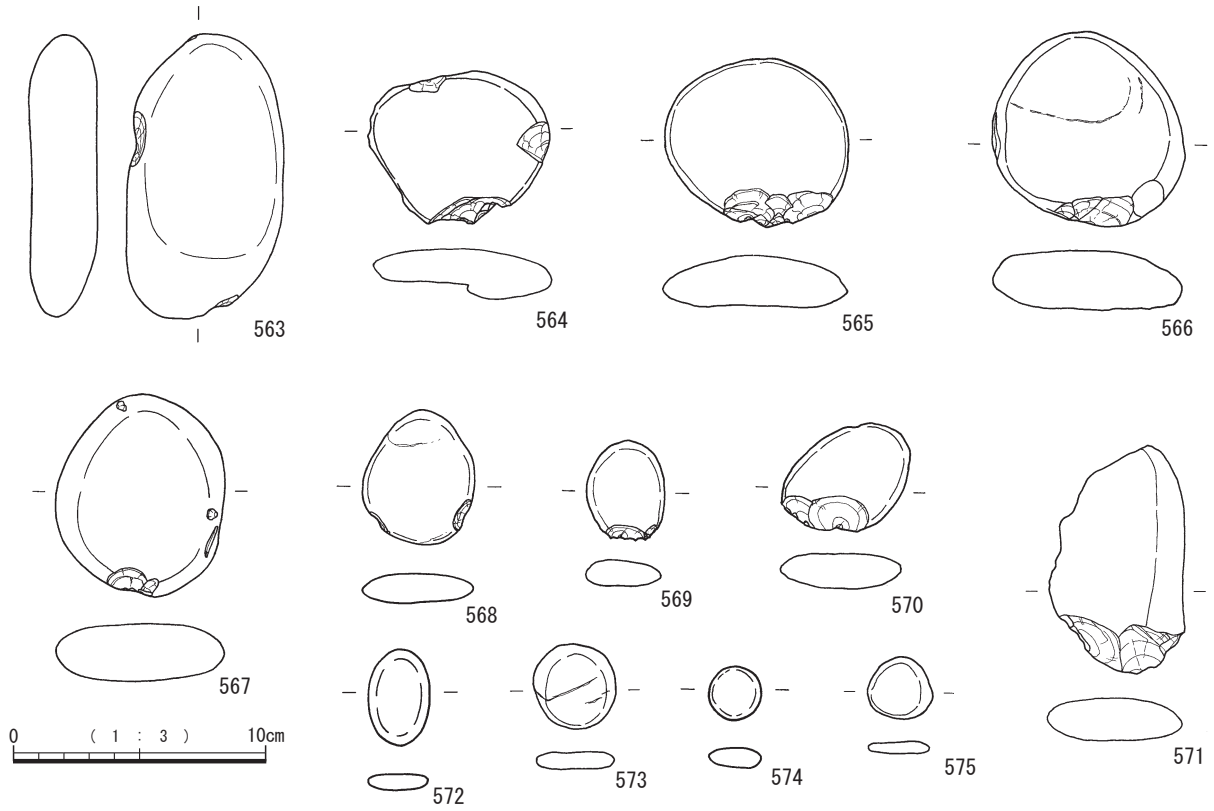
### (13) 石器（第89図　563 ～ 571）

14点中13点を図化した。563 ～ 571は円礫の一端を打ち欠いた石器である。全て頁岩を利用している。縄文時代の石器に類例がないことや，中世の遺構で出土していることを踏まえ，中世の遺物と判断した。剥離面を使用した痕跡は認められない。

572 ～ 575は碁石である。砂岩，頁岩の小さな扁平礫を利用している。




第88図　包含層出土石錘・土錘




第89図　包含層出土石器

## 第 24 表　包含層出土陶器・須恵器観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 82 | 495 | 陶器 | 盤 | E-19 Ⅱb | − | − | − | − | − | 浅黄橙 | 赤色・白色砂 | 14 c |
| | 496 | 陶器 | 甕 | E-34 Ⅱa | − | − | − | − | − | にぶい褐 | 白色砂 | |
| | 497 | 陶器 | 皿 | 14T 中央 Ⅱb | − | − | − | − | − | にぶい橙 | 精良 | |
| | 498 | 陶器 | 壺 | 9T Ⅱa | − | − | − | ナデ | ナデ | 外）灰赤<br>内）にぶい赤褐 | 白色砂 | 備前焼・中世後半 |
| 83 | 499 | 須恵器 | 甕 | E-32 Ⅱa | 16.0 | − | − | ナデ | ナデ | 灰 | 精良 | |
| | 500 | 須恵器 | 甕 | F-32 | − | − | − | ナデ・格子目タタキ | ナデ | 灰黄 | 白色砂 | |
| | 501 | 須恵器 | 甕 | G-35 Ⅱb | − | − | − | ナデ・格子目タタキ | ナデ | 灰黄 | 精良 | |
| | 502 | 須恵器 | 甕 | I-34 Ⅱb | − | − | − | 格子目タタキ | 摩滅 | 灰白 | 泥質 | |
| | 503 | 須恵器 | 甕 | H-35 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 灰白 | 白色砂，長石 | 東播系須恵器 |
| | 504 | 須恵器 | 甕 | H･I-23･24 Ⅱb下 | − | − | − | 格子目タタキ・ナデ | ナデ | 外）灰黄　内）浅黄 | 精良 | |
| | 505 | 須恵器 | 甕 | I-35 Ⅱb | − | − | − | 平行タタキ | ナデ | 外）にぶい褐<br>内）褐灰 | 精良 | |
| | 506 | 須恵器 | 甕 | I-34 Ⅱb | − | − | − | 格子目タタキ | | 灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 507 | 須恵器 | 甕 | H･I-25 Ⅱb | − | 14.8 | − | ナデ | ヨコナデ | 灰 | 精良 | |
| | 508 | 須恵器 | 甕 | G-35 Ⅱb | − | 25.0 | − | 格子目タタキ | ハケ目・ナデ | 外）褐灰　内）灰黄 | 白色砂 | |

## 第 25 表　包含層出土擂鉢・片口鉢観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 84 | 509 | 陶器 | 擂鉢 | H-34 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 灰褐 | 白色小石 | 備前焼・内面に櫛目・14C 前半 |
| | 510 | 須恵器 | 擂鉢 | G-35 Ⅱb･H-35 Ⅱb･9T Ⅱb | 25.8 | 11.3 | 10.5 | ハケ目・ナデ・指頭圧痕 | ナデ・ハケ目 | 灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 511 | 須恵器 | 擂鉢 | G-35 Ⅱb | − | − | − | ハケ目・ナデ・指頭圧痕 | ハケ目 | 灰 | 泥質 | 瓦質焼成 |
| | 512 | 須恵器 | 擂鉢 | I-34 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ハケ目 | 黄灰 | 精良 | |
| | 513 | 須恵器 | 擂鉢 | H-30 Ⅱa | − | − | − | ケズリ・指頭圧痕 | ナデ | 外）灰　内）灰白 | 精良 | 内面摩耗・内面に櫛目 |
| | 514 | 須恵器 | 擂鉢 | I-31 Ⅱb | − | − | − | ハケ目後ナデ | ハケ目 | 灰 | 精良 | |
| | 515 | 須恵器 | 擂鉢 | I-33 Ⅱa | − | − | − | ナデ | ナデ | 外）にぶい黄橙<br>内）にぶい橙 | 精良 | 内面摩耗，破面黒色・内面に櫛目 |
| | 516 | 須恵器 | 擂鉢 | G-35 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 白色砂 | 内面に櫛目 |
| | 517 | 須恵器 | 擂鉢 | I-34･35 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 精良 | 内面に櫛目 |
| | 518 | 須恵器 | 擂鉢 | I-35 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 灰白 | 精良 | 内面摩耗・内面に櫛目 |
| | 519 | 須恵器 | 擂鉢 | E-18･19 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 灰白 | 精良 | 破面黒色・内面に櫛目 |
| | 520 | 須恵器 | 片口鉢 | I-35 Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 灰白 | 精良 | |

## 第 26 表　包含層出土瓦質土器・石鍋観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 調整 | | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 外面 | 内面 | | | |
| 85 | 521 | 瓦質土器 | 甕 | 14T Ⅱb | − | − | − | ナデ | ナデ | 褐灰 | 精良 | |
| | 522 | 瓦質土器 | 仏具 | I-35 Ⅱb | − | 32.4 | − | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 白色砂・精良 | |
| | 523 | 瓦質土器 | 火鉢 | G-20 Ⅱb | − | − | − | 摩滅 | 摩滅 | にぶい橙 | 角閃石 | |
| | 524 | 石鍋 | 石鍋 | H-34 Ⅱb | 長さ 5.2 cm，幅 8.2 cm，重量 65.5 g | | | | | | | |
| | 525 | 石鍋 | 石鍋 | F-36 Ⅱb | 長さ 5.6 cm，幅 4.5 cm，重量 58.0 g | | | | | | | |
| | 526 | 石鍋 | 石鍋 | H-34 Ⅱb | 長さ 3.4 cm，幅 5.2 cm，重量 19.6 g | | | | | | | |
| | 527 | 石鍋 | 石鍋 | H-29 Ⅱa | 長さ 3.8 cm，幅 2.6 cm，重量 15.9 g | | | | | | | |
| | 528 | 石鍋 | 石鍋 | F-35 Ⅲ | 長さ 2.6 cm，幅 3.4 cm，重量 22.1 g | | | | | | | |
| | 529 | 石鍋 | 石鍋 | G-35 Ⅱb | 長さ 3.4 cm，幅 4.9 cm，重量 33.0 g | | | | | | | |
| | 530 | 石鍋 | 石鍋 | G-35 Ⅱb | 長さ 2.1 cm，幅 4.9 cm，重量 40.6 g | | | | | | | |
| | 531 | 石鍋 | 石鍋 | H-35 Ⅱb | 長さ 8.5 cm，幅 6.4 cm，重量 86.3 g | | | | | | | |

## 第 27 表　包含層出土金属製品観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 法量（cm，g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 86 | 532 | 鉄器 | 刀子 | 11T Ⅱ | 長さ 6.2 cm，幅 2.4 cm，厚さ 1.1 cm，重量 15.6 g | 茎 |
| | 533 | 鉄器 | 刀子 | H-28 Ⅲ | 長さ 4.8 cm，幅 1.7 cm，厚さ 0.6 cm，重量 5.0 g | 刃部 |
| | 534 | 鉄器 | 棒状鉄器 | G-35 Ⅱb | 長さ 4.1 cm，幅 1.2 cm，厚さ 0.8 cm，重量 7.9 g | 鉄鏃の可能性 |
| | 535 | 鉄器 | 鉄瓶 | F-35 Ⅱb | 長さ 3.8 cm，幅 2.0 cm，重量 20.0 g | |
| | 536 | 鉄器 | 不明 | I-35 Ⅱb | 長さ 6.9 cm，幅 3.0 cm，厚さ 1.6 cm，重量 30.6 g | |
| | 537 | 鉄器 | 釘 | 7T Ⅱb | 長さ 4.1 cm，幅 1.5 cm，厚さ 1.3 cm，重量 6.0 g | |
| | 538 | 鉄器 | 棒状鉄器 | Ⅱb | 長さ 4.6 cm，幅 3.7 cm，厚さ 0.8 cm，重量 6.5 g | |
| | 539 | 鉄器 | 鎹 | F-33 Ⅱa | 長さ 4.9 cm，幅 2.6 cm，厚さ 0.4 cm，重量 10.0 g | |
| | 540 | 銅製品 | 銅銭 | 14T Ⅱa | 長さ 2.3 cm，幅 2.3 cm，厚さ 0.4 cm，重量 4.3 g | 洪武通寶 |
| | 541 | 銅製品 | 銅銭 | I-34 Ⅱb | 長さ 2.5 cm，幅 2.5 cm，厚さ 0.2 cm，重量 2.0 g | 治平元寶 |

## 第 28 表　包含層出土鍛冶関連遺物観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 法量（cm，g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 87 | 542 | 土製品 | 羽口 | I-35 Ⅱb | 縦 9.9 cm，横 11.4 cm，内径 4.2 cm，外径 11.4 cm | 先端部付近 |
| | 543 | 土製品 | 羽口 | 14T Ⅱa | 縦 9.5 cm，横 10.6 cm，内径 3.0 cm，外径 9.5 cm | 基部 |
| | 544 | 土製品 | 羽口 | 14T Ⅱb | 縦 7.3 cm，横 8.3 cm，内径 2.6 cm，外径 8.1 cm | 表面溶解 |
| | 545 | 鉄滓 | 製錬滓 | H･I-25 Ⅱb | 長さ 4.0 cm，幅 2.9 cm，厚さ 1.0 cm，重量 16.0 g | |
| | 546 | 鉄滓 | 製錬滓 | E-31 Ⅱb | 長さ 2.9 cm，幅 2.5 cm，厚さ 1.4 cm，重量 13.6 g | |
| | 547 | 鉄滓 | 鉄塊系遺物 | H-30 Ⅲ | 長さ 2.1 cm，幅 2.0 cm，厚さ 2.0 cm，重量 6.0 g | 弱い磁力有り |
| | 548 | 鉄滓 | 鉄塊系遺物 | 9T Ⅱb上 | 長さ 3.8 cm，幅 2.7 cm，厚さ 2.0 cm，重量 30.0 g | 磁力有り |
| | 549 | 鉄滓 | 椀形鍛冶滓 | H-34 Ⅱb | 長さ 7.8 cm，幅 7.1 cm，厚さ 3.5 cm，重量 194.0 g | 磁力なし |
| | 550 | 鉄滓 | 椀形鍛冶滓 | I-32 Ⅱb | 長さ 7.0 cm，幅 8.5 cm，厚さ 5.0 cm，重量 349.0 g | 磁力なし |
| | 551 | 鉄滓 | 椀形鍛冶滓 | D･E-47 | 長さ 4.8 cm，幅 5.2 cm，厚さ 2.9 cm，重量 41.7 g | 1429calAD － 1479calAD<br>わずかに磁力有り |
| | 552 | 鉄滓 | 椀形鍛冶滓 | E･F-19～22 Ⅱb | 長さ 5.6 cm，幅 6.9 cm，厚さ 3.4 cm，重量 77.6 g | 772calAD － 888calAD<br>弱い磁力有り |
| | 553 | 鉄滓 | 椀形鍛冶滓 | 14T Ⅱb | 長さ 5.1 cm，幅 4.2 cm，厚さ 2.2 cm，重量 40.9 g | わずかに磁力有り |
| | 554 | 石器 | 金床石 | － | 長さ 12.1 cm，幅 15.1 cm，厚さ 8.1 cm，重量 2400.0 g | |

## 第 29 表　包含層出土石製品・土製品観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 法量（cm，g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 88 | 555 | 石製品 | 石錘 | G-35 Ⅱb | 長さ 3.2 cm，幅 1.4 cm，内径 0.4 cm | 蛇紋岩製 |
| | 556 | 土製品 | 土錘 | H･I-24･25 Ⅱb | 長さ 4.2 cm，幅 1.7 cm，内径 0.6 cm | |
| | 557 | 土製品 | 土錘 | 9T Ⅰ | 長さ 3.2 cm，幅 1.8 cm，内径 0.5 cm | |
| | 558 | 土製品 | 土錘 | E-19･20 Ⅱb | 長さ 4.0 cm，幅 1.2 cm，内径 0.4 cm | |
| | 559 | 土製品 | 土錘 | G-35 Ⅱb | 長さ 3.9 cm，幅 1.2 cm，内径 0.2 cm | |
| | 560 | 土製品 | 土錘 | 14T Ⅱb | 長さ 2.7 cm，幅 1.1 cm，内径 0.3 cm | |
| | 561 | 土製品 | 土錘 | 4T Ⅱ | 長さ 4.2 cm，幅 1.7 cm，内径 0.5 cm | 未製品 |
| | 562 | 土製品 | 不明 | G-36 Ⅱa | 長さ 4.9 cm，幅 4.6 cm，厚さ 2.5 cm，重量 61.0 g | |

## 第 30 表　包含層出土石器観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 法量（cm，g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 89 | 563 | 石器 | 剥離のある石器 | I-35 Ⅱb | 長さ 6.3 cm，幅 11.1 cm，厚さ 2.8 cm，重量 306.3 g | 頁岩 |
| | 564 | 石器 | 剥離のある石器 | I-35 Ⅱb | 長さ 6.0 cm，幅 7.1 cm，厚さ 2.0 cm，重量 96.5 g | 頁岩 |
| | 565 | 石器 | 剥離のある石器 | H-35 Ⅱb | 長さ 6.6 cm，幅 7.3 cm，厚さ 2.0 cm，重量 136.2 g | 頁岩 |
| | 566 | 石器 | 剥離のある石器 | I-35 Ⅱb | 長さ 7.7 cm，幅 7.6 cm，厚さ 2.3 cm，重量 202.1 g | 頁岩 |
| | 567 | 石器 | 剥離のある石器 | I-35 Ⅱb | 長さ 8.1 cm，幅 6.7 cm，厚さ 2.3 cm，重量 176.5 g | 頁岩 |
| | 568 | 石器 | 剥離のある石器 | G-35 | 長さ 5.4 cm，幅 4.4 cm，厚さ 1.3 cm，重量 42.1 g | 頁岩 |
| | 569 | 石器 | 剥離のある石器 | F-32 | 長さ 3.9 cm，幅 3.1 cm，厚さ 1.0 cm，重量 18.2 g | 頁岩 |
| | 570 | 石器 | 剥離のある石器 | H-34 Ⅱa | 長さ 4.3 cm，幅 5.0 cm，厚さ 1.4 cm，重量 41.6 g | 頁岩 |
| | 571 | 石器 | 剥離のある石器 | I-35 Ⅱb | 長さ 9.1 cm，幅 5.4 cm，厚さ 1.7 cm，重量 115.7 g | 頁岩 |
| | 572 | 石器 | 碁石 | I-33 Ⅱa | 長さ 3.7 cm，幅 2.5 cm，厚さ 0.7 cm，重量 10.3 g | 頁岩 |
| | 573 | 石器 | 碁石 | F-24･25 Ⅱa | 長さ 3.3 cm，幅 3.2 cm，厚さ 0.7 cm，重量 13.0 g | 頁岩 |
| | 574 | 石器 | 碁石 | H･I-23･24 Ⅱb | 長さ 2.2 cm，幅 2.1 cm，厚さ 0.9 cm，重量 6.1 g | 頁岩 |
| | 575 | 石器 | 碁石 | F-24･25 Ⅱa | 長さ 2.4 cm，幅 2.5 cm，厚さ 0.5 cm，重量 4.7 g | 頁岩 |

## 第５節　近世以降の調査成果

### １　調査の概要

近世以降の遺物包含層はⅡａ層である。Ⅱａ層は表土の直下に堆積しているため，耕作等の攪乱によって残存状況が悪い。遺構はⅥｂ層上面で掘立柱建物跡１棟を検出した。中世から近世に使用された溝跡は，中世の調査成果で報告しているため，説明を省いている。

出土遺物は，染付・薩摩焼・硯・煙管がある。

### ２　遺構

**掘立柱建物跡14号（第90・91図）**

Ｄ－25区，Ⅵｂ層上面で検出した。建物北側が調査区外に延びるため，全体の構造・規模については不明である。桁行方向の柱穴は，東側で３基，西側で５基検出した。建物内部には，６基の柱穴が規則的に配置されている。主軸は磁北から西に45°傾いている。

柱穴の直径は25㎝，深さ10㎝である。周辺の地形が削平されているため，柱穴は浅い。出土遺物は確認されていない。埋土の状況から近世以降の建物跡であると判断した。

### ３　包含層出土遺物

**（１）染付（第92図　576 ～ 582）**

356点中７点を図化した。

576・577は肥前系の碗である。578は内野山窯産の碗である。579の碗は見込みに折枝梅とみられる文様が描かれている。高台内面天井部には文字が描かれている可能性がある。580は初期伊万里の皿である。見込みには草花が描かれている。畳付きは露胎である。581・582は坏である。581の体部外面には雲，582の体部外面には菊花文を描いている。

**（２）陶器（第93図　583 ～ 598）**

287点中16点を図化した。薩摩焼は製作された窯跡を特定できない資料が多い。

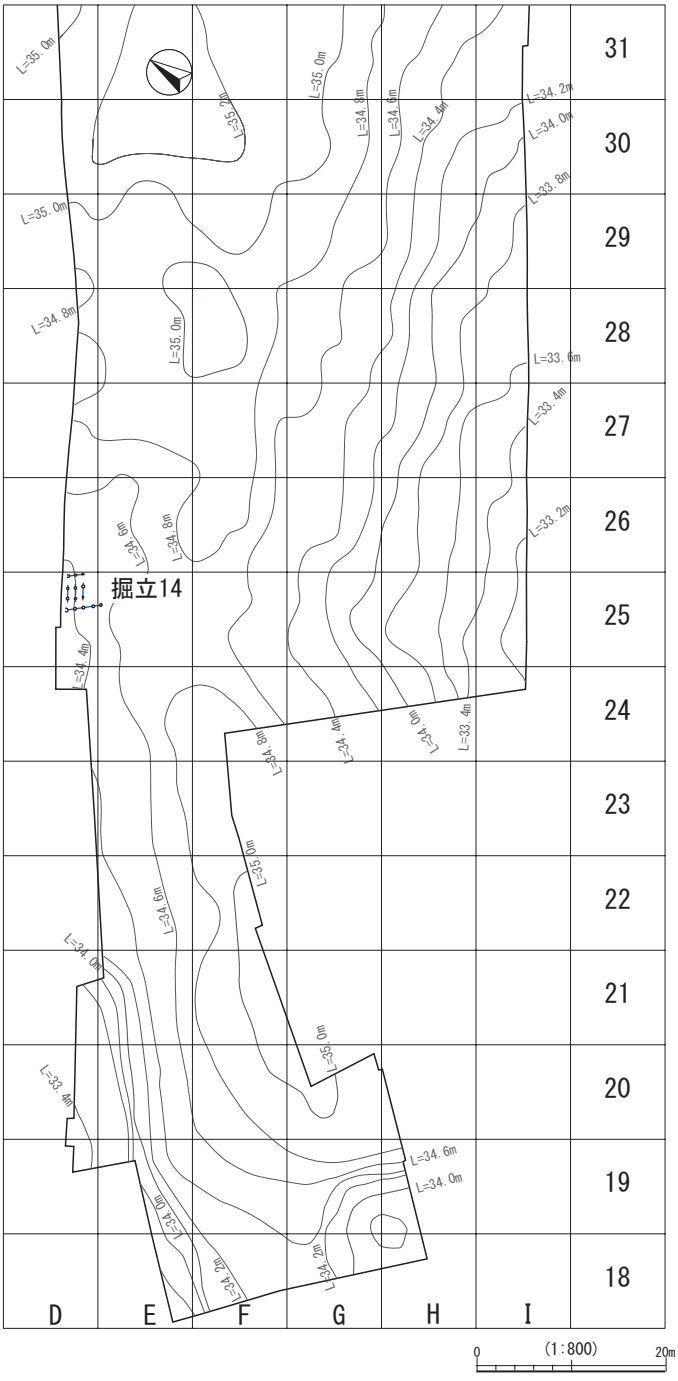
583は薩摩焼の甕である。口縁部が内側に張り出している。584は苗代川産の壺である。口縁部を外側に小さく折り曲げている。585は薩摩焼の壺である。上端を内側に折り曲げて口縁部を作っている。無釉である。586は口縁部が断面三角形となる薩摩焼の壺である。588は口唇部が二叉になる肥前系の鉢である。589は薩摩焼の擂鉢である。590は肥前系の擂鉢で，口縁部にのみ釉がかかる。591・592は薩摩焼の水注である。

593は肥前系の皿で，内面に曲線状の文様を描いている。594は薩摩焼の灯明皿である。外面は口縁部を除き露胎である。595は薩摩焼の土瓶の体部，596は土瓶の蓋である。597は薩摩焼の蓋である。598は薩摩焼の灰入れ（線香立）である。

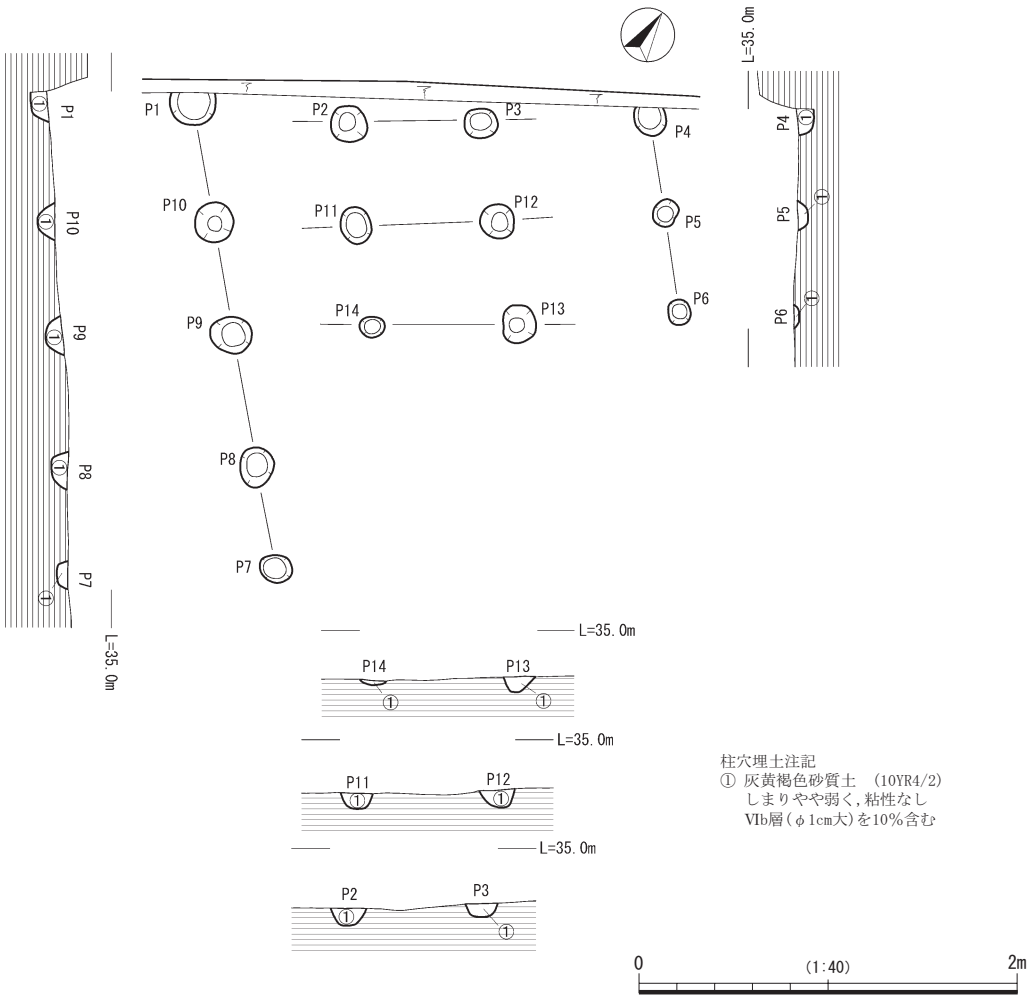
**（３）硯・煙管（第94図　599 ～ 602）**

599は石製の硯である。緻密な堆積岩を使用している。墨液を溜める部位（海）は，使用によって薄くなり欠損している。墨をする部位（陸）は摩耗している。

600 ～ 602は青銅製の煙管である。600は雁首，601は吸口，602は火皿である。




第90図　近世以降の遺構配置図



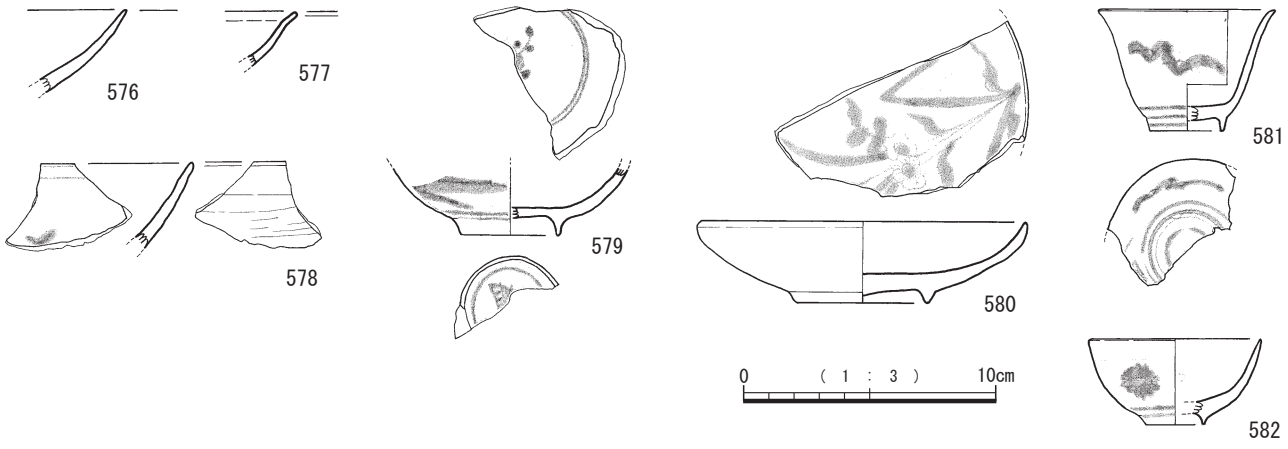

第91図　掘立柱建物跡14号



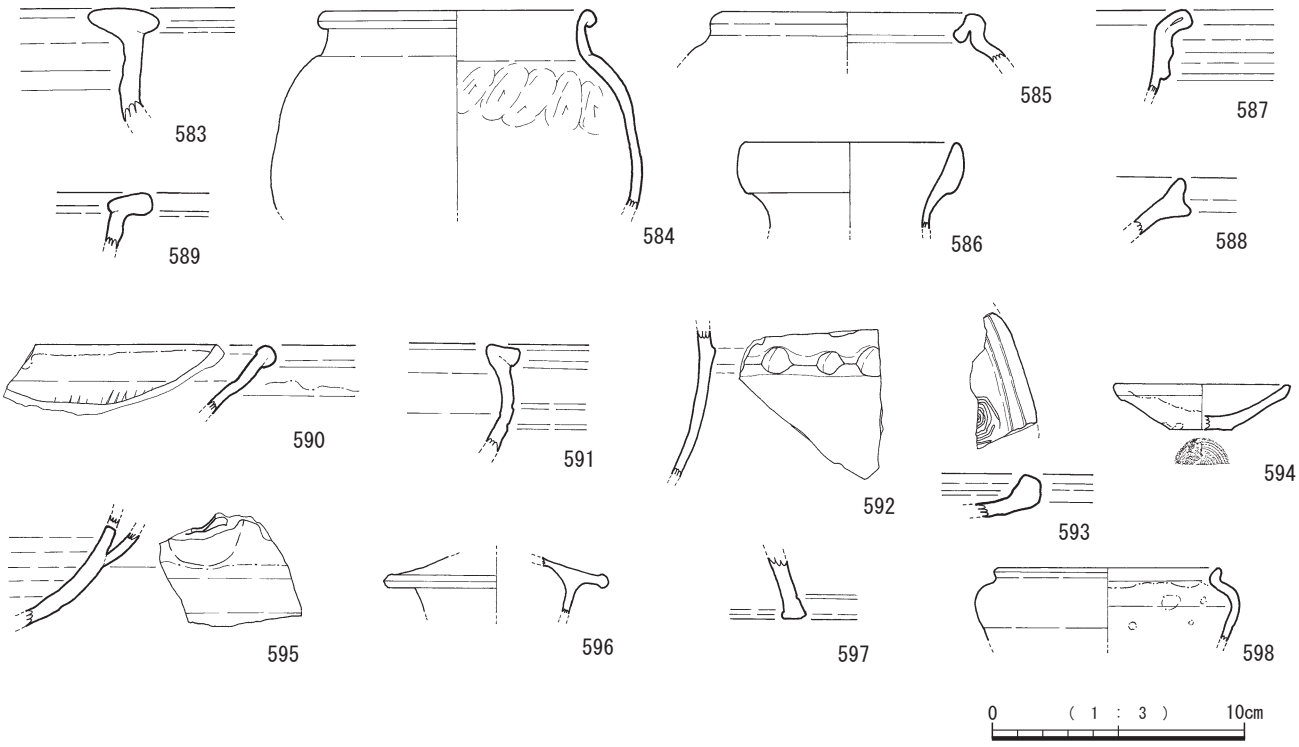
14号検出状況



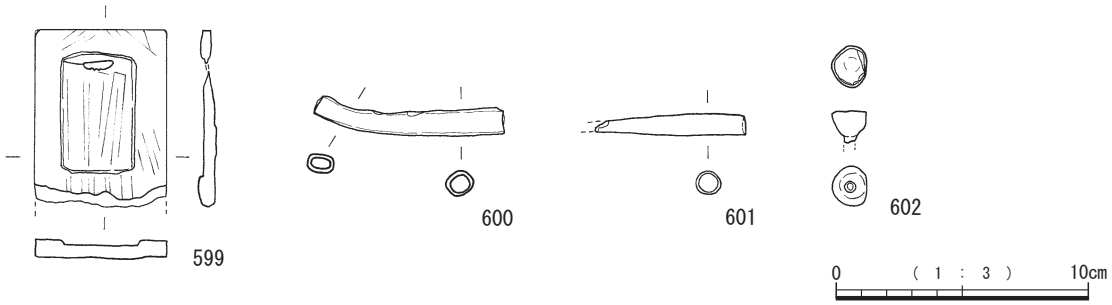
14号完掘状況




第92図　包含層出土染付




第93図　包含層出土陶器




第94図　包含層出土硯・煙管

第 31 表　包含層出土染付観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 92 | 576 | 染付 | 碗 | トレンチ | − | − | − | 透明釉 | 灰白 | 肥前系 |
| | 577 | 染付 | 碗 | G-20 Ⅱa | − | − | − | 透明釉 | 灰白 | 肥前系 |
| | 578 | 染付 | 碗 | 14T Ⅱb | − | − | − | オリーブ灰 | にぶい黄橙 | 肥前系（内野山） |
| | 579 | 染付 | 碗 | F-21～23 Ⅱa | − | 4.0 | − | 透明釉 | 灰白 | |
| | 580 | 染付 | 皿 | 14T Ⅱa | 13.0 | 5.2 | 3.2 | 透明釉 | 灰白 | 初期伊万里 17c 前半 |
| | 581 | 染付 | 坏 | 14T Ⅱa | 7.0 | 3.0 | 4.8 | 透明釉 | 灰白 | 肥前系 |
| | 582 | 染付 | 坏 | H-36 Ⅱb | 6.8 | 2.4 | 3.4 | 透明釉 | 灰白 | |

※　法量は復元値

第 32 表　包含層出土陶器観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種別 | 器種 | 出土地点 | 口径（cm） | 底径（cm） | 器高（cm） | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93 | 583 | 陶器 | 甕 | F-34 Ⅱa | − | − | − | 暗赤褐 | 精良 | |
| | 584 | 陶器 | 壺 | F-33 Ⅱa | 11.0 | − | − | 黒褐 | 精良 | 苗代川系壺 17c 後半 |
| | 585 | 陶器 | 壺 | 16T Ⅱa | 10.0 | − | − | 褐 | 精良 | |
| | 586 | 陶器 | 壺 | H-29 Ⅱb | 8.4 | − | − | 黄灰 | 精良 | |
| | 587 | 陶器 | 鉢 | 14T Ⅱb | − | − | − | 赤褐 | 白色砂 | |
| | 588 | 陶器 | 鉢 | F-33 Ⅱa | − | − | − | 黒 | 精良 | 肥前系 |
| | 589 | 陶器 | 擂鉢 | H-33 | − | − | − | 赤褐 | 白色砂 | |
| | 590 | 陶器 | 擂鉢 | G-20 Ⅱa | − | − | − | 暗赤褐 | 精良 | 肥前系 17c 後半 |
| | 591 | 陶器 | 水注 | トレンチ | − | − | − | 黒 | 白色砂 | 17c 後半 |
| | 592 | 陶器 | 水注 | 14T Ⅱa | − | − | − | 鈍い褐 | 精良 | |
| | 593 | 陶器 | 皿 | 14T Ⅱa | − | − | − | 暗灰黄 | 精良 | |
| | 594 | 陶器 | 灯明皿 | G～H-18･19カクラン | 7.0 | 2.5 | 1.8 | 鈍い赤褐 | 精良 | |
| | 595 | 陶器 | 土瓶 | F-24･25 Ⅱa | − | − | − | 明赤褐 | 精良 | |
| | 596 | 陶器 | 蓋 | H-34 Ⅱa | 9.0 | − | − | 灰褐 | 白色砂 | |
| | 597 | 陶器 | 蓋 | 16T Ⅱa | − | − | − | 灰黄褐 | 白色砂 | 17c 後半～ 18c 前半 |
| | 598 | 陶器 | 線香立 | 14T Ⅱa | 9.0 | − | − | 鈍い黄橙 | 精良 | |

※　法量は復元値

第 33 表　包含層出土硯・煙管観察表

| 挿図番号 | 番号 | 実測 No | 種別 | 器種 | 出土地点 | 法量（cm・g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 94 | 599 | 719 | 石製品 | 硯 | 7T Ⅱb | 縦 7.0 cm，横 5.2 cm，厚 0.8 cm，重量 45.7 g | |
| | 600 | 699 | 銅製品 | 煙管 | E-18･19 Ⅱb | 縦 7.5 cm，横 1.1 cm，厚 0.1 cm，重量 11.8 g | |
| | 601 | 728 | 銅製品 | 煙管 | 9T Ⅱa | 縦 5.9 cm，横 0.9 cm，厚 0.1 cm，重量 4.64 g | |
| | 602 | 727 | 銅製品 | 煙管 | H-34 Ⅱa | 縦 1.6 cm，横 1.4 cm，厚 0.1 cm，重量 2.4 g | |

# 第Ⅴ章　自然科学分析等

## 第１節　北山遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

（株）加速器分析研究所

### １　測定対象試料

北山遺跡の測定対象試料は，遺構，遺物包含層から出土した炭化物，貝殻の合計10点である（第34表)。

### ２　化学処理工程

#### (1) 炭化物の化学処理

1)　メス・ピンセットを使い，付着物を取り除く。

2)　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と第34表に記載する。

3)　試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO2）を発生させる。

4)　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

5)　精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

6)　グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

#### (2) 貝殻の化学処理

1)　メス・ピンセットを使い付着物を取り除き，超純水に浸し，超音波洗浄を行う。

2)　試料の表面を塩酸で約30%溶かし，汚染された可能性のある部分を除去する（Edg)。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。なお，試料が特に少量の場合，塩酸の処理を行わない場合がある(Non)。

3)　試料中の炭酸カルシウム（CaCO3）を分解し，二酸化炭素（CO2）を発生させる。

以下，(1) 4）以降と同じ。

### ３　測定方法

加速器をベースとした$^{14}$C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，$^{14}$Cの計数，$^{13}$C濃度（$^{13}$C/$^{12}$C)，$^{14}$C濃度（$^{14}$C/$^{12}$C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### ４　算出方法

(1)　$\delta^{13}$C は，試料炭素の$^{13}$C 濃度（$^{13}$C/$^{12}$C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第34表)。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

(2)　$^{14}$C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中$^{14}$C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977)。$^{14}$C年代は$\delta^{13}$Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第34表に，補正していない値を参考値として第35表に示した。$^{14}$C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，$^{14}$C年代の誤差（±１σ）は，試料の$^{14}$C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　pMC（percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の$^{14}$C濃度の割合である。pMCが小さい($^{14}$Cが少ない）ほど古い年代を示し,pMCが100以上（$^{14}$Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}$Cによって補正する必要があるため，補正した値を第34表に，補正していない値を参考値として第35表に示した。

(4)　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の$^{14}$C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の$^{14}$C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，$^{14}$C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（１σ＝68.3%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が$^{14}$C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，$\delta^{13}$C補正を行い，下一桁を丸めない$^{14}$C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，試料中の炭素が大気中の二酸化炭素に由来すると考えられる試料に対してIntCal20較正曲線（Reimer et al. 2020）を，大気中の二酸化炭素とは由来の異なる炭素を含むと考えられる試料に対してMarine20較正曲線（Heaton et al. 2020）を用い，いずれもOxCalv4.4較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用して較正年代を算出した。暦年較正年代については，特定の較正曲線，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第35表に示した。暦年較正年代は，$^{14}$C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## ５　測定結果

測定結果を第34・35表に示す。

試料10点の$^{14}$C年代は，1820±20yrBP（試料No.６）から430±20yrBP（試料No. ９）の間にある。暦年較正年代（１σ）は，最も古いNo. ６が210 ～ 306cal ADの間に２つの範囲，最も新しいNo. ９が1438 ～ 1460cal ADの範囲で示される。竪穴建物跡１号，竪穴建物跡５号では各２点の試料が測定され，各々近い年代値が得られている。

なお，試料No. ５，６が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては，これまで北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘があった（尾嵜2009，坂本2010など）。2020年に更新された較正曲線IntCal20（Reimer et al. 2020）では，新たに日本産樹木のデータが採用された結果，この範囲の較正年代値が日本産樹木の測定値に近づいた。系統的に認められる差異の原因究明を含め，今後も関連する研究の動向を注視する必要がある。

試料の炭素含有率は，炭化物No. １～９がすべて60％以上，貝殻No.10が98％という試料の種類ごとに適正な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

## 文献


Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Heaton, T.J. et al. 2020 Marine20-the marine radiocarbon age calibration curve (0-55, 000 cal BP), *Radiocarbon* 62(4), 779-820

尾嵜大真 2009「日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代」設楽博己，藤尾慎一郎，松木武彦編『弥生時代の考古学１』 弥生文化の輪郭，同成社，225-235

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－，第５回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集，（株）加速器分析研究所，85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363


第 34 表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}$C 補正値）

| 測定番号 | 試料名 | 採取場所 | 試料形態 | 処理方法 | $\delta^{13}$C（‰）(AMS) | $\delta^{13}$C 補正あり | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | Libby Age (yrBP) | pMC (%) |
| IAAA-220566 | No. １ | 区：E-29　遺構名：竪穴建物跡６号<br>位置：底面直上 | 炭化物 | AAA | -29.16 ± 0.22 | 870 ± 20 | 89.73 ± 0.25 |
| IAAA-220567 | No. ２ | 区：E-30　遺構名：掘立柱建物跡 10 号<br>位置：掘立柱建物跡 10 号－８ | 炭化物 | AAA | -28.62 ± 0.20 | 980 ± 20 | 88.55 ± 0.25 |
| IAAA-220568 | No. ３ | 区：E-30　遺構名：竪穴建物跡５号<br>位置：底面直上① | 炭化物 | AaA | -28.53 ± 0.21 | 840 ± 20 | 90.04 ± 0.25 |
| IAAA-220569 | No. ４ | 区：E-30　遺構名：竪穴建物跡５号<br>位置：底面直上② | 炭化物 | AAA | -26.80 ± 0.20 | 850 ± 20 | 89.91 ± 0.25 |
| IAAA-220570 | No. ５ | 区：E-20　遺構名：竪穴建物跡１号<br>位置：① | 炭化物 | AAA | -28.77 ± 0.19 | 1,770 ± 20 | 80.19 ± 0.23 |
| IAAA-220571 | No. ６ | 区：E-20　遺構名：竪穴建物跡１号<br>位置：② | 炭化物 | AAA | -27.98 ± 0.25 | 1,820 ± 20 | 79.73 ± 0.23 |
| IAAA-220572 | No. ７ | 区：EF-19 ～ 22　遺構名：ベルト崩し<br>位置：鉄滓付着炭化物 | 炭化物 | AAA | -25.91 ± 0.28 | 1,200 ± 20 | 86.07 ± 0.24 |
| IAAA-220573 | No. ８ | 区：E-31　遺構名：掘立柱建物跡７号　位置：掘立柱建物跡７号－８ | 炭化物 | AAA | -26.57 ± 0.27 | 640 ± 20 | 92.32 ± 0.26 |
| IAAA-220574 | No. ９ | 区：D ～ G-47　遺構名：14 トレンチ<br>位置：鉄滓付着炭化物 | 炭化物 | AAA | -33.76 ± 0.21 | 430 ± 20 | 94.75 ± 0.26 |
| IAAA-220575 | No.10 | 区：F-34　遺構名：SP420<br>位置：巻き貝 | 貝殻 | Edg | 0.72 ± 0.21 | 1,160 ± 20 | 86.56 ± 0.23 |

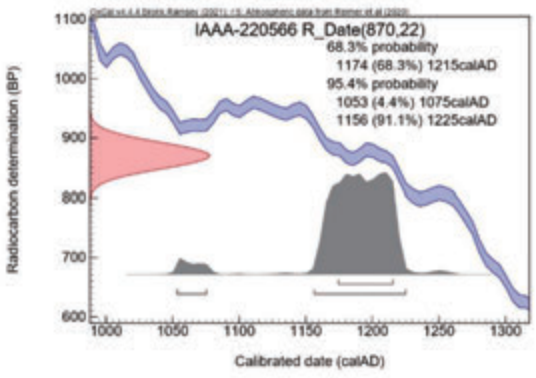
［IAA 登録番号：#B480］

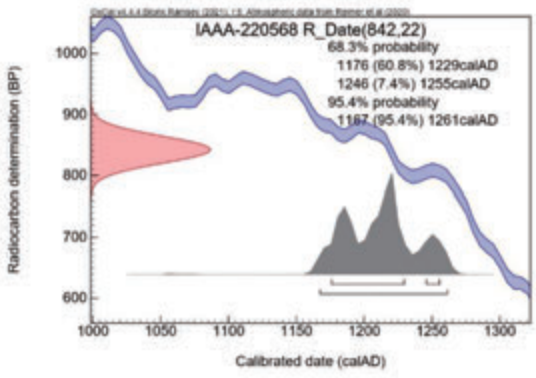
第 35 表　放射性炭素年代測定結果（δ $^{13}$C 未補正値，暦年較正用 $^{14}$C 年代，較正年代）

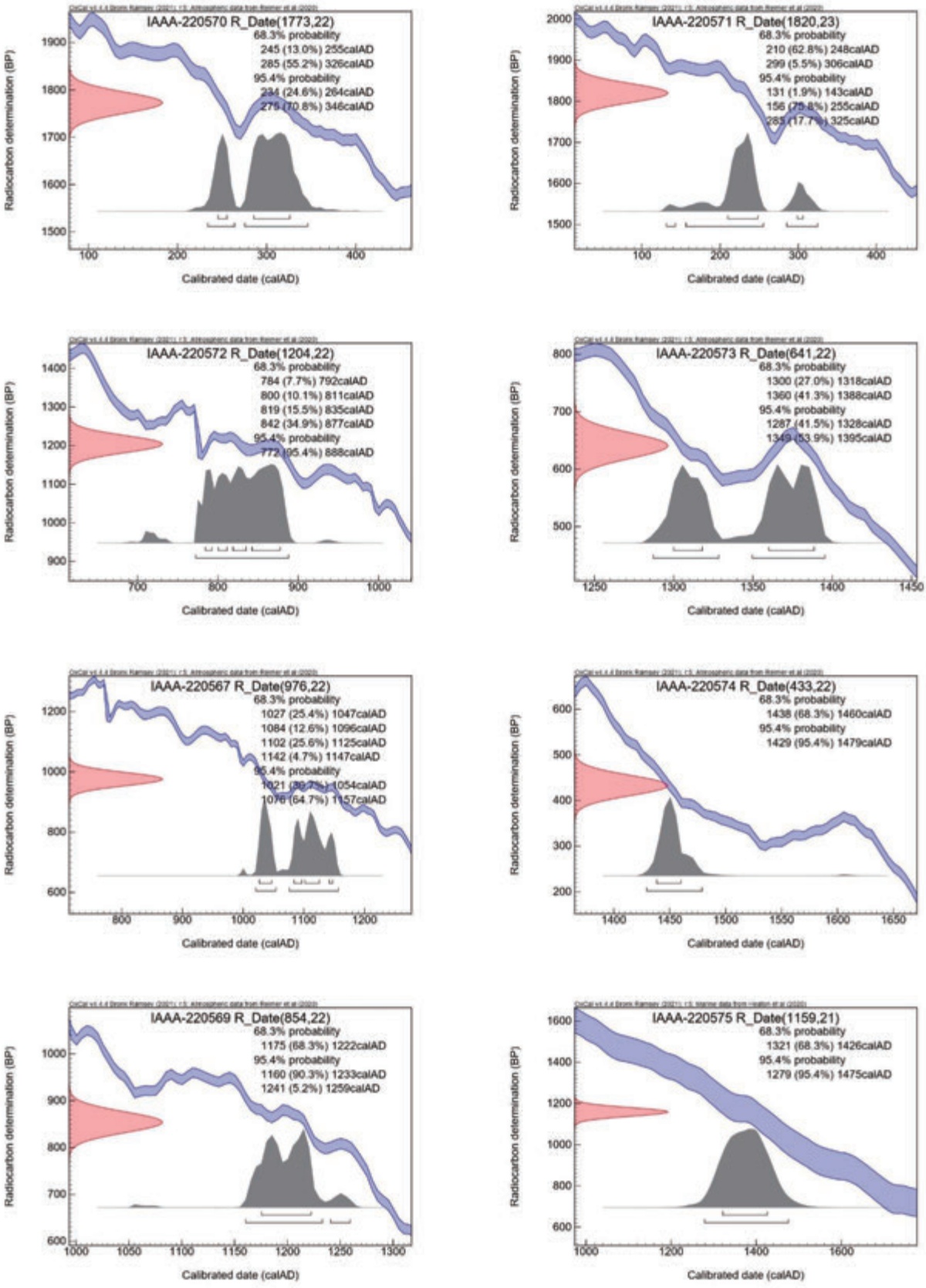
| 測定番号 | δ $^{13}$C 補正なし | | 暦年較正用 (yrBP) | １σ暦年代範囲 | ２σ暦年代範囲 |
|---|---|---|---|---|---|
| | Age(yrBP) | pMC (%) | | | |
| IAAA-220566 | 940 ± 20 | 88.97 ± 0.24 | 870 ± 22 | 1,174calAD-1,215calAD(68.3%) | 1,053calAD-1,075calAD( 4.4%)<br>1,156calAD-1,225calAD(91.1%) |
| IAAA-220567 | 1,040 ± 20 | 87.90 ± 0.24 | 976 ± 22 | 1,027calAD-1,047calAD(25.4%)<br>1,084calAD-1,096calAD(12.6%)<br>1,102calAD-1,125calAD(25.6%)<br>1,142calAD-1,147calAD( 4.7%) | 1,021calAD-1,054calAD(30.7%)<br>1,076calAD-1,157calAD(64.7%) |
| IAAA-220568 | 900 ± 20 | 89.40 ± 0.25 | 842 ± 22 | 1,176calAD-1,229calAD(60.8%)<br>1,246calAD-1,255calAD( 7.4%) | 1,167calAD-1,261calAD(95.4%) |
| IAAA-220569 | 880 ± 20 | 89.57 ± 0.25 | 854 ± 22 | 1,175calAD-1,222calAD(68.3%) | 1,160calAD-1,233calAD(90.3%)<br>1,241calAD-1,259calAD( 5.2%) |
| IAAA-220570 | 1,840 ± 20 | 79.58 ± 0.22 | 1,773 ± 22 | 245calAD-255calAD(13.0%)<br>285calAD-326calAD(55.2%) | 234calAD-264calAD(24.6%)<br>275calAD-346calAD(70.8%) |
| IAAA-220571 | 1,870 ± 20 | 79.24 ± 0.23 | 1,820 ± 23 | 210calAD-248calAD(62.8%)<br>299calAD-306calAD( 5.5%) | 131calAD-143calAD( 1.9%)<br>156calAD-255calAD(75.8%)<br>285calAD-325calAD(17.7%) |
| IAAA-220572 | 1,220 ± 20 | 85.92 ± 0.24 | 1,204 ± 22 | 784calAD-792calAD( 7.7%)<br>800calAD-811calAD(10.1%)<br>819calAD-835calAD(15.5%)<br>842calAD-877calAD(34.9%) | 772calAD-888calAD(95.4%) |
| IAAA-220573 | 670 ± 20 | 92.03 ± 0.25 | 641 ± 22 | 1,300calAD-1,318calAD(27.0%)<br>1,360calAD-1,388calAD(41.3%) | 1,287calAD-1,328calAD(41.5%)<br>1,349calAD-1,395calAD(53.9%) |
| IAAA-220574 | 580 ± 20 | 93.06 ± 0.25 | 433 ± 22 | 1,438calAD-1,460calAD(68.3%) | 1,429calAD-1,479calAD(95.4%) |
| IAAA-220575 | 740 ± 20 | 91.19 ± 0.24 | 1,159 ± 21 | 1,321calAD-1,426calAD(68.3%)* | 1,279calAD-1,475calAD(95.4%)* |

［参考値］

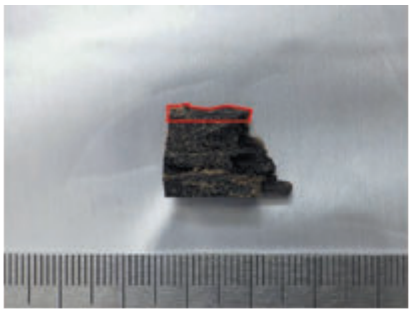
* OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021) にて Marine data from Heaton et al (2020) を使用し marine100% で較正





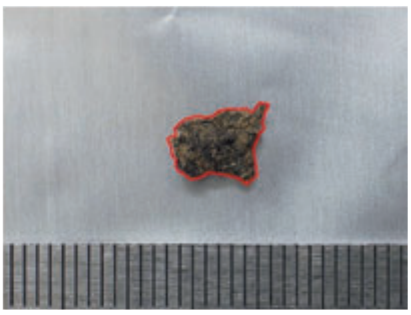

第95図　暦年較正年代グラフ（参考）



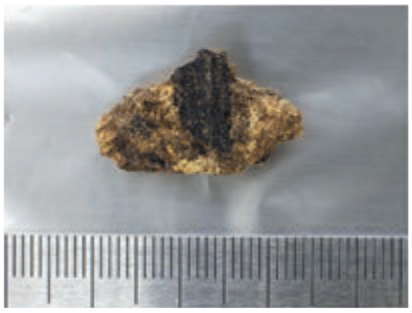
試料 No. 1



試料 No. 2



試料 No. 3



試料 No. 4



試料 No. 5



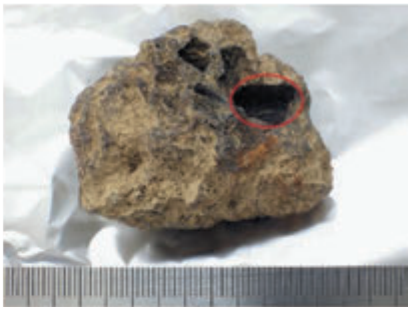
試料 No. 6



試料 No. 7



試料 No. 8



試料 No. 9



試料 No. 10

第96図　試料写真（赤枠の部位から採取）

## 第２節　北山遺跡および周辺の地形と地質

成尾　英仁

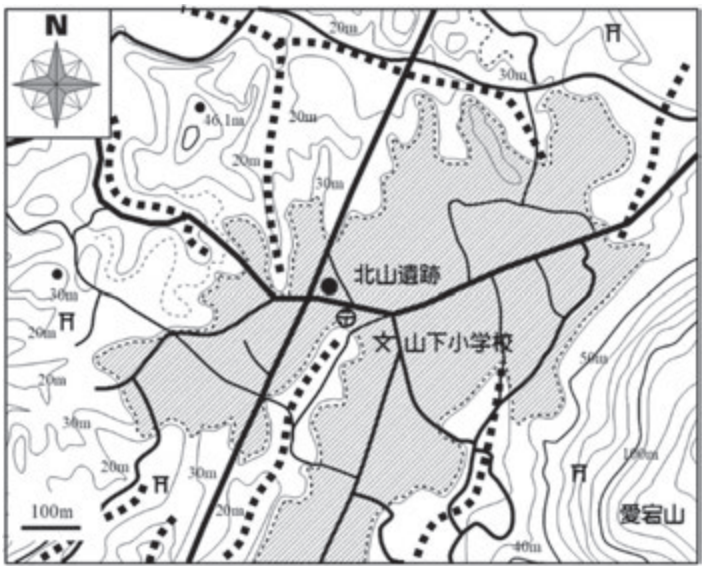
### １　地形

北山遺跡の立地する地域は，高松川および大橋川が運搬してきた土砂が堆積した沖積平野，後期更新世の砂礫層からなる台地・丘陵地，それを取り巻く入戸火砕流堆積物がつくる台地（シラス台地），鮮新世～更新世前期の火山である低平な山地からなる（第97図）。遺跡付近の南側には開析されたシラス台地があり，内部にはおおよそ北東－南西に走る深さ10m程度の数本の浅い谷が平行して延びる。遺跡の西側は入り組んだ浅い谷が多数入っており，遺跡付近と比べ古い台地が開析された地形である。遺跡より西方に位置する波留付近は標高数m程度の低地となっているが，ここは完新世の縄文海進による海であった場所である（太田ほか2011）。ボーリング調査では貝化石が確認されており，周辺の丘陵地には縄文時代の波留貝塚が形成されている。

山地は遺跡東方にある愛宕山で，主に安山岩類からなる標高195mのドーム状の浸食された火山である。シラス台地は基盤の礫層を覆って形成されており，台地南側縁辺部では浸食に取り残された入戸火砕流堆積物が急崖を形成している。これに対し北西側は人為による開削が進み，入戸火砕流堆積物がほとんど認められないが，これはもともと浸食作用で削剥され入戸火砕流堆積物が薄かったことも原因と推定される。シラス台地上面高度は約30mでほぼ平坦であるが，これは耕作など人為による平坦化が行われた結果であり，遺跡での入戸火砕流堆積物の出現状況から判断して，本来的には多少の凹凸があったと推定される。このことは国土地理院の陰影図にも反映されている（第98図）。

遺跡付近のシラス台地南部では北東－南西に延びる深い谷が形成されている。山下小学校付近は浸食谷の谷頭に相当し，その部分では湧水が認められる。谷内部は平坦で畑・水田として利用されている。北部でもシラス台地が浸食された谷が形成されているが，南部に比べ谷は浅くなだらかである。

遺跡の微地形は南側で入戸火砕流堆積物が地表面近くに現れており，この部分では旧地形が高くなっていたと推定される。遺跡西側～北側では入戸火砕流堆積物の上位の堆積物が１m程度の層厚で堆積しており，旧地形はこの方向へ緩く傾斜していたと判断され，北部の浅い谷へと連続している。このような微地形の相違は，南側では入戸火砕流堆積物が浸食されずに残ったことを反映している。




第97図　遺跡周辺の地形　斜線部はシラス台地。点線は谷部



第98図　遺跡周辺の陰影図　国土地理院による

## ２　地質

### (1) 遺跡周辺の地質

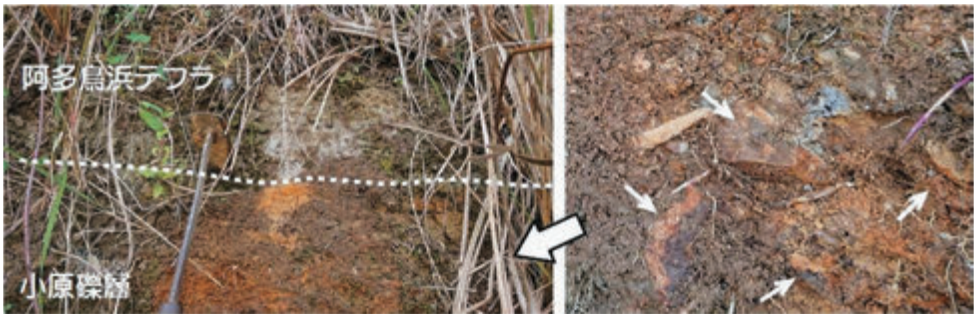
遺跡周辺において基盤となる地層は，中生代中期～後期ジュラ紀の付加体コンプレックスのチャート・石灰岩，及び後期ジュラ紀～前期白亜紀の付加体コンプレックスの砂岩・泥岩である（成尾1995，西山ほか1995）。これらは波留から牛ノ浜にかけよく分布する。遺跡周辺では北薩の屈曲と呼ばれる特徴的な地質構造が見られる。北山遺跡の東側には開析されたドーム状の山地があるが，主として安山岩溶岩および火山砕屑物からなり，鮮新世～更新世前期の火山である。この時代の火山噴出物は阿久根市一帯に広く分布し，北薩火山岩類と称される(内海･宇都1997)。一般に角閃石･安山岩を主体とし，阿久根火砕流1，2（宮地1980）の溶結凝灰岩を伴う。阿久根火砕流のFT年代は3.3Maと3.0Maであり，広く阿久根から出水地方を覆って堆積する（水野ほか2009)。

これら古い岩石類を覆うように更新世中期～後期の海成層や礫層，火砕流堆積物が堆積する。阿久根市北部の多田では海成層の多田層（大木ほか2000）を覆って礫層が堆積するが，この礫層は小原礫層(東牧内礫層)(満塩･五十嵐1997）と呼ばれる中期更新世の礫層（西山ほか1995）で，阿久根から出水にかけての広い範囲に分布する。本遺跡の北側の開削された斜面の崖には，中礫～小礫を主体とする礫層が露出している。礫は四万十累層群起源の砂岩・頁岩，火山岩の円礫からなり，大半が著しい風化を受け，いわゆるくさり礫状になっている。この礫層は礫種の構成や風化度から小原礫層（東牧内礫層）に対比される。

ここでは小原礫層を直接覆う白色粘土層が堆積する(第99図)。上部が削平され正確な層厚は不明であるが，崖面での層厚は十数cmである。軽石は明瞭でないが，実体顕微鏡下では高温石英が含まれ，長石・石英の無色鉱物に富む鉱物組成である。黒雲母が含まれていないことから花崗岩類のマサ土ではなく，火山噴出物が風化したものと判断される。小原礫層を覆う火山噴出物には加久藤火砕流堆積物，阿多鳥浜テフラがある（町田・新井2003）が，鉱物組成からは阿多鳥浜テフラ（24万年）に対比することができる。遺跡内では阿多鳥浜テフラの一部が混入した層が見られる（遺跡調査資料より）ことからも妥当と判断される。

入戸火砕流堆積物（シラス）は遺跡周辺の広い範囲に堆積する。全体に非溶結で白色軽石・岩片を含んだガラス質火山灰が主体である。遺跡南部の谷部に良好な露頭があるが，その部分での層厚は少なくとも10m以上と推定される。新鮮な部分では白色であるが，風化部分では黄色～黄橙色を帯びるようになる。入戸火砕流堆積物の上部にはそのラハール堆積物である二次シラスが堆積する。遺跡周辺の低地では高松川および大橋川が運搬してきた砂・礫層が堆積するが，下流域ではいわゆる縄文海進に伴う海成層が堆積し貝化石を産出する（太田ほか2011)。

本遺跡の実質的な基盤は入戸火砕流堆積物であるが，遺跡周辺の基盤となるものも小原礫層と北薩火山岩類と推定される。

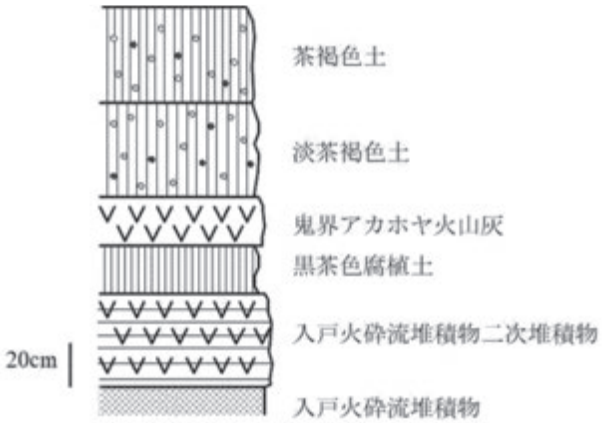



**第99図　左:阿多鳥浜テフラと小原礫層　右:小原礫層拡大　矢印は中礫サイズの礫**

### (2) 遺跡内の堆積物

本遺跡内に堆積するテフラは入戸火砕流堆積物とその二次堆積物（二次シラス），鬼界アカホヤ火山灰であり，桜島薩摩（桜島P14）は確認できない。二次シラス層と鬼界アカホヤ火山灰層との間には黒茶色の土壌層が堆積する。また，鬼界アカホヤ火山灰層の上位にも土壌層が堆積するが，色調と包含される岩片などの違いにより２層に区分される。

入戸火砕流堆積物を除いた，南側～西側部分における各層の概要は次のようである（第100図）。




第100図　遺跡の模式地質柱状図

#### a　入戸火砕流堆積物二次堆積物（二次シラス）

黄白色～黄色を帯びたガラス質の火山灰を主体とし，径数cmの黄色軽石が散在する。砂礫層の堆積などは不明瞭である。遺跡南端部における層厚は約40cmである。鏡下ではバブルウォール型の火山ガラスが多量に含まれる。火山ガラスの粒径は比較的大きく，大半は無色透明であるが，バブルの基部に相当する黒色を帯びたものも散見される。火山ガラス以外に有色鉱物としては斜方輝石が多く，単斜輝石も認められる。

#### b　黒茶色腐植土

黒色が淡色化した色調であり，二次シラス層との境界は不規則に入り混じり，二次シラス層から次第に黒茶色腐植土になるように漸移する。一般に二次シラス層の上位にある腐植土層は粘土化が著しく，いわゆるローム層と称されるが，本層の粘質は弱く全体にサラサラしている。鏡下では黒茶色を帯びた火山ガラスが多く含まれ，無色透明なものは少ない。有色鉱物として斜方輝石が多く含まれ，単斜輝石も認められる。ガラス・鉱物の粒径は下位の二次シラス層に比べ小さいが，含まれる火山ガラスの特徴が二次シラス層のものと類似すること，有色鉱物として斜方輝石・単斜輝石を含むことから，二次シラス層を母材として形成された腐植土層と推定される。岩片には淡赤色を帯びたものがあるが，全体として岩片は少ない。

#### c　鬼界アカホヤ火山灰

黒茶色腐植土層の上位にはやや茶色を帯びた赤橙色の層が堆積する。両者は不規則に混じり合うように堆積し，その境界は不明瞭である（第101図）。 この層は全体に粘質が弱く，ザラザラした手触りである。鏡下ではバブルウォール型の火山ガラスが多数含まれている。火山ガラスは褐色を帯びたものが多数であるが，無色透明なものも存在する。褐色火山ガラスはバブルの基部に相当する厚いものが多い。有色鉱物としては斜方輝石が多く，単斜輝石も入る。

鏡下では安山岩質の岩片が認められるが，その他に朱色を帯びたものも存在する。層位と含まれる火山ガラス，有色鉱物から本層は鬼界アカホヤ火山灰に対比される。



第101図　鬼界アカホヤ火山灰一時堆積物

本遺跡で見られる鬼界アカホヤ火山灰は堆積状況と構成粒子から，一度堆積したものが二次的に再堆積したものと推定される。遺跡中央西寄りの地点では，明瞭な赤橙色を帯びた鬼界アカホヤ火山灰一次堆積物が，円～楕円状の小塊に分かれて堆積している。そこでの観察では径２～３㎜の火山豆石がぎっしりと詰まった火山灰であり，鬼界アカホヤ火山灰の基底層に比定される。ここではそれに続く鬼界アカホヤ火山灰の一次堆積物は確認できず，堆積後の風雨の作用などで流れ去ったものと考えられる。

**ｄ　淡茶褐色土**

全体に淡い茶褐色を帯び，全体にフカフカした手触りの土壌で粘質は少ない。下位の鬼界アカホヤ火山灰層との境界は不鮮明である。層中には径数㎜程度の炭化物，赤色粒子などが混在している。この炭および赤色粒子は，本層およびその上位層中に焼土が存在することから，それに由来するものと判断される。鏡下では褐色のバブルウォール型火山ガラスや繊維状の火山ガラス，淡赤色の岩片が認められる。また，斜方輝石・単斜輝石も認められる。このような特徴から鬼界アカホヤ火山灰を母材とした腐植土層と考えられるが，炭や赤色粒子を含むことから，人為による二次的な攪乱を受けている可能性が高い。

**ｅ　茶褐色土**

地表面に近い部分に堆積する土壌で，白色粒子・赤色粒子，炭が点在する。下位の土壌層と類似するが，それに比べやや色調が黒色を帯びている。白色粒子は径0.5cm以下で比較的新鮮であることから，入戸火砕流堆積物に由来するものへ，耕作に伴う客土等による移入が想定される。赤色粒子はやや色が淡いが，これも遺跡内の焼土に由来するものと考えられる。鏡下では茶褐色のバブルウォール型火山ガラスが多量に含まれ，灰色～灰褐色岩片も多く認められる。有色鉱物としては斜方輝石が多い。これらの特徴から，入戸火砕流堆積物，鬼界アカホヤ火山灰が混在したものを母材とした腐植土と判断され，さらに加えて人為による攪乱を受けていると推定される。

## ３　まとめ

本遺跡の基本的な層序は，表層から茶褐色腐植土2層，鬼界アカホヤ火山灰，黒茶色腐植土，入戸火砕流堆積物二次堆積物（二次シラス）である。現在の地形は平坦で水平であるが，古い時代の地形は 若干の起伏があり，全体として北～西側へ緩く傾斜する。遺跡周辺は地形的には古い扇状地が高松川の支流で開析され台地であり，それを覆って薄く入戸火砕流堆積物が堆積する。遺跡はこの入戸火砕流堆積物がつくる台地（シラス台地）上に立地する。

本遺跡では表層から鬼界アカホヤ火山灰層までが浅く，表層部分の土壌層に炭化物・焼土片が含まれること，多くの時代にわたる生活の痕跡があることから判断し，人為による攪乱，さらには自然現象による土壌の移動などが加わり，表層付近は異なる時代の土壌が混在していると推定される。

## 引用文献


町田 洋・新井房夫　2003 『新編火山灰アトラス』360p 東京大学出版会

満塩大洸･五十嵐高雲　1997 「阿久根市北部の第四系」『高知大学学術研究報告，自然科学編』46，79-90

宮地 六美　1980 「鹿児島県阿久根地域の火砕流堆積物」『九州大学教養部地学研究報告』21，１－６

水野清秀・宝田晋治・星住英夫　2009 「八代海周辺地域に分布する阿久根１，２火砕流と水成層に挟まるテフラとの対比」『日本地質学会第116年学術大会講演要旨集』125

成尾英仁　1995 「北薩の特徴的な地質」『鹿児島の自然「北薩」』178-183，鹿児島県立博物館

西山健一・横田修一郎・岩松 暉　1995 「鹿児島県出水平野の地質構造」『鹿児島大学理学部紀要，地学・生物』28，79-99

大木公彦・下山正一・佐藤 亮・成尾英仁　2000 「鹿児島県，阿久根市から発見された第四紀 海成層「多田層」の層位学的意義」『鹿児島大学理学部紀要，地学･生物』No.33，61-68

太田俊之・尾塚禎久・塩満大洸　2011 「阿久根沖積平野の形成史，特に隔岡塩田の成因と黒神岩に関して－阿久根市周辺の自然・人工環境報告その５－」『鹿児島県立博物館研究報告』30，65-72

内海 茂・宇都浩三　1997 「20万分の1地質図幅「鹿児島」北西部の年代未詳火山岩類のK-Ar年代」『地質調査所月報』48，107-112

## 第３節　鹿児島県の杓子形土製品について

肥後　弘章

本遺跡では，竪穴建物跡の遺構内から完形の杓子形土製品が出土した。杓子形土製品については，「上水流遺跡２」（黒川2008）の中で古くから注目されてきた遺物の１つと紹介され，その特殊性等についてまとめてある。県内における出土事例を第36表にまとめた。なお器種名については，報告書に掲載されているものである。報告書等にて掲載が確認できた遺跡数は，27遺跡であった。遺物数は，110点であった。地図上にまとめたものを第102図に示した。大別すると薩摩半島が21遺跡103点であったのに対し，大隅半島は６遺跡７点となった。

報告書等に掲載されている時代で分けると27遺跡中23遺跡が古墳時代の出土遺物に区分されていた。共伴土器は，成川式土器の東原式段階と笹貫式段階であった。全国的に見ると，「匙形土製品小考」（大野1989）の中で，関東・信越地域で縄文時代前期と思われる出土品が記録されている。

鹿児島県の杓子・匙形土製品は，全国と比べると遅い時期に県内に広まり，成川式土器と連動している状況が確認できる（中村直子2015）。各遺跡の出土点数は，１・２点と少ない遺跡が多く，特別な事例に合わせて意図的




第102図　杓子･匙形土製品出土遺跡図

第 36 表　杓子・匙形土製品の出土が確認された鹿児島県内遺跡と点数

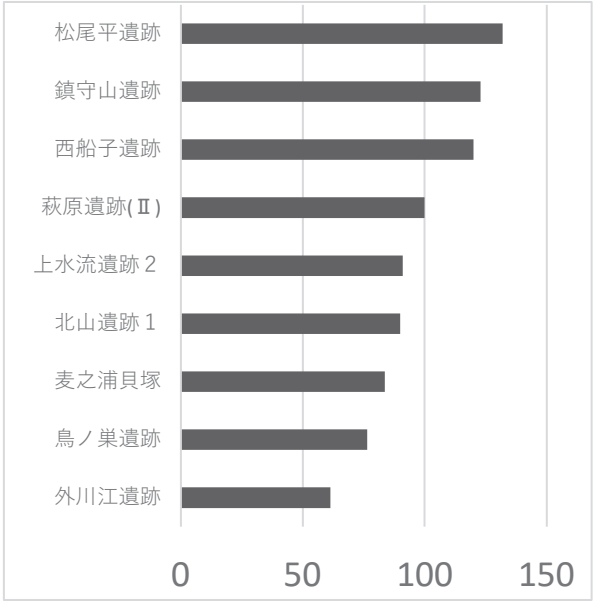
| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 出土遺構 | 時期 | 器種（掲載名） | 点数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 北山遺跡 | 阿久根市山下・波留 | 竪穴建物跡 | 古墳時代 | 杓子形土製品 | 3 |
| ② | 下鶴遺跡 | 伊佐市大口羽月 | 74 号竪穴住居跡 | 古墳時代 | 匙形土製品 | 1 |
| ③ | 坂ノ下遺跡 | 薩摩川内市東郷町 | 包含層 | 古代 | 杓子型土器？ | 1 |
| ④ | 麦之浦貝塚 | 薩摩川内市陽成町 | 1 号住居跡・包含層 | 古墳時代 | 杓子形土器 | 31 |
| ⑤ | 外川江遺跡 | 薩摩川内市五代町 | 包含層 | 古墳時代 | 杓子形土器 | 23 |
| ⑥ | 大島遺跡 | 薩摩川内市大小路町 | 包含層 | 古代 | 土製スプーン | 1 |
| ⑦ | 楠元遺跡 | 薩摩川内市百次町 | 溝状遺構２ | 弥生時代 | 匙状土製品 | 2 |
| ⑧ | 上野城跡 | 薩摩川内市百次町 | 包含層 | 古墳時代 | 匙の手づくね | 2 |
| ⑨ | 成岡遺跡 | 薩摩川内市中福良町 | ９号住居跡 | 古墳時代 | 匙形土製品 | 1 |
| ⑩ | 春花遺跡 | 姶良市船津 | 包含層 | 古墳時代 | 匙形土製品 | 1 |
| ⑪ | 萩原遺跡（Ⅱ） | 姶良市平松字萩原 | ６群住居址・包含層 | 古墳時代 | 杓子型土器 | 9 |
| ⑫ | 松尾平遺跡 | いちき串木野市大里 | 包含層 | 古墳時代 | 杓子状土器 | 1 |
| ⑬ | 本御内（舞鶴城跡） | 霧島市国分 | 包含層 | 古墳時代 | ひしゃく形土製品 | 1 |
| ⑭ | 大龍遺跡 | 鹿児島市大竜町 | 50 号土坑（３号住居） | 古墳時代 | 杓子 | 1 |
| ⑮ | 上水流遺跡２ | 南さつま市金峰町 | 竪穴住居跡・包含層 | 古墳時代 | 匙形土製品 | 11 |
| ⑯ | 持躰松遺跡 | 南さつま市金峰町 | 包含層 | 古墳時代 | 匙形土製品 | 4 |
| ⑰ | 高橋貝塚 | 南さつま市金峰町 | － | 弥生前期 | パイプ形土製品 | 1 |
| ⑱ | 西船子遺跡 | 鹿児島市喜入瀬々串町 | 溝状遺構 | 古墳時代 | 杓子形土器 | 3 |
| ⑲ | 鎮守山遺跡 | 鹿屋市古里町 | 19 号住居・包含層 | 古墳時代 | 匙形土製品 | 2 |
| ⑳ | 四方高迫遺跡 | 鹿屋市吾平町 | 包含層 | 古墳時代 | 匙形土製品 | 1 |
| ㉑ | 麦田下遺跡 | 大崎町岡別府 | 土器溜り | 弥生時代 | 杓子形土器 | 1 |
| ㉒ | 東田遺跡 | 肝付町野崎東田 | 包含層 | 古墳時代 | 杓子型土器 | 1 |
| ㉓ | 古市遺跡 | 南九州市川辺町 | 包含層 | 古墳時代 | 杓子形土器 | 1 |
| ㉔ | 中原田遺跡 | 枕崎市東鹿篭 | 包含層 | 古墳時代 | 杓子形土器 | 1 |
| ㉕ | 宮之前遺跡 | 指宿市西方 | 包含層 | 古墳時代 | 匙 | 2 |
| ㉖ | 橋牟礼川遺跡 | 指宿市十二町 | 土器集中廃棄所 | 古墳時代 | 杓子 | 1 |
| ㉗ | 鳥ノ巣遺跡 | 錦江町城元 | 掘り込み・包含層 | 古墳時代 | 杓子形土器 | 3 |

（※　表中の丸数字は，第 102 図と連動）

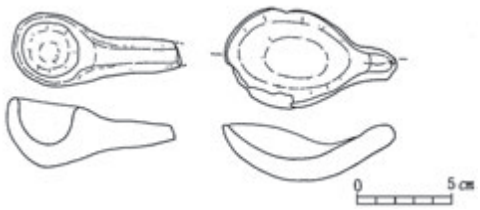
に製作されていた可能性が高い。

一方，北山遺跡出土の杓子形土製品の表面の状況を確認すると丁寧に仕上げた様子は少なく，どちらかというと粗製のものといえる。祭祀時に使う大切な道具というよりも，ある行為を行うために合わせて作られた使い捨てに近い道具とも捉えられる。本遺跡での出土状況は，南九州の出土状況と同じ傾向が確認され（鶴田1995），建物が埋没途中で遺物が廃棄されたであろう状況の出土であった。

器形の分類を身部の形状が分かるものについて行った。身部が円形のものを「杓子形土製品」，紡錘形のものを「匙形土製品」とした（第103図）。分類できた資料は，110点中66点であった。「杓子形土製品」は，11遺跡から26点となった。「匙形土製品」は，13遺跡から40点となった。それぞれを地域別にまとめると，「杓子形土製品」は，薩摩半島が10遺跡から24点であったのに対し，大隅半島は１遺跡から２点となった。「匙形土製品」は，薩摩半島が10遺跡から37点であったのに対し，大隅半島は３遺跡から３点となった。大隅半島の数が少ない結果となっているが，もともとの総数が大隅半島は少ないため，器形による地域差は小さいといえる。また麦之浦貝塚・外川江遺跡・上水流遺跡等，同じ遺跡内から「杓子形」と「匙形」双方の器形が，出土している例もあった。用途に合わせて器形を変え，製作されていることが考えられる。このように器形は，地域で特定の傾向がなく多種多様になっていた。しかし，長さに関してはある程度の地域性が見られた。長さの分かるものについて第37表にまとめた。北山遺跡出土品の長さは，隣接市である薩摩川内市内の麦之浦貝塚と近かった。両地域の文化交流があったことも推測される。




**第104図　出土遺跡毎の長さ平均（㎜）**




**第103図　杓子形土製品（左）・匙形土製品（右）例**
（麦之浦貝塚　出土遺物）

**第 37 表　主な県内出土の杓子・匙形土製品の長さ**

| 遺跡報告書名 | 掲載番号 | 長さ（㎜） | 高さ（㎜） |
|---|---|---|---|
| 西船子遺跡 | 229 | 139 | 63 |
| 松尾平遺跡 | 113 | 132 | 52 |
| 鎮守山遺跡 | 145 | 125 | 47 |
| 鎮守山遺跡 | 288 | 121 | 42 |
| 上水流遺跡２ | 57 | 117 | 55 |
| 西船子遺跡 | 231 | 113 | 50 |
| 西船子遺跡 | 230 | 108 | 45 |
| 萩原遺跡（Ⅱ） | 1198 | 100 | 33 |
| 北山遺跡１ | 116 | 90 | 31 |
| 麦之浦貝塚 | 1517 | 92 | 32 |
| 上水流遺跡２ | 30 | 84 | 53 |
| 麦之浦貝塚 | 951 | 83 | 30 |
| 鳥ノ巣遺跡 | 175 | 82 | 47 |
| 外川江遺跡 | 791 | 81 | 106 |
| 麦之浦貝塚 | 1240 | 76 | 26 |
| 上水流遺跡２ | 154 | 72 | 22 |
| 鳥ノ巣遺跡 | 193 | 71 | 27 |
| 外川江遺跡 | 793 | 58 | 45 |
| 外川江遺跡 | 792 | 45 | 39 |

**参考文献**

大野薫1989「匙形土製品小考」『大阪文化財論集』大阪文化財センター

黒川忠広2008「第7章　第2節　古墳時代のまとめ」『上水流遺跡２』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）

角南聡一郎2001「四国の匙・杓子形土製品」『旧練兵場遺跡』財団法人元興寺文化財研究所

鶴田静彦1995「第3章　まとめ　古墳時代について」『松尾平遺跡・安徳遺跡1』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

中村直子2015「祭祀と成川式土器」『成川式土器ってなんだ』 鹿児島大学総合研究博物館

## 第４節　中世須恵器の産地調査について

（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
川口雅之　肥後弘章

### １　調査の目的

北山遺跡で出土した中世須恵器について，熊本県荒尾市樺番城窯産ではないかとの指摘がなされた。本県では，内面にハケ目やナデ調を施した須恵器や胎土が泥質で破面が縞状を呈する須恵器については，樺番城窯産と認定されることがある。産地を検討するために本遺跡の須恵器を熊本博物館に持ち込み，樺番城窯産須恵器との比較調査を行った。

なお，調査に当たっては,熊本市教育委員会美濃口雅朗氏，熊本博物館下高大輔氏に実見・指導を頂いた。

### ２　所見

（１）北山遺跡と樺番城窯の甕を比較したところ，器形，調整，胎土から同一の製品は確認できなかった（第38表）。

（２）北山遺跡と樺番城窯の擂鉢を比較したところ，調整，胎土から同一の製品は確認できなかった。具体的には，本遺跡の擂鉢には樺番城窯産の擂鉢に認められない櫛目がある。また，本遺跡の擂鉢は，須恵質の焼成品が認められず，ハケ目が樺番城製品より細かいなど違いが認められた。

（３）上記の調査結果から本遺跡で出土した中世須恵器については，樺番城窯産の可能性は低いと考えられる。これまで本県では，樺番城窯産須恵器の出土が複数の遺跡で報告されているが，樺番城窯製品は熊本県内でも流通範囲が狭く，中世須恵器の産地については慎重に記載する必要がある。

第 38 表　甕の類似度比較表

| | 樺番城窯 | 北山遺跡 | 類似度 |
|---|---|---|---|
| 器形 | 甕の口縁部が緩やかに屈曲。口唇部は面取りされている。北山遺跡より器壁が薄く丁寧な作り。特に上胴部が薄い。口径の大きさも統一されている。 | 口縁部の屈曲が強く器壁が厚いものがある。口唇部が膨らみ丸いものが多く。口径サイズも不統一。全体的に作りが粗雑。 | × |
| 調整 | 胴部外面の格子目が小さく統一されている。内面のハケ目は幅が広く粗い。内面の口縁部と上胴部の境に稜をなす。 | 胴部外面の格子目タタキの大きさが不統一。格子目タタキの輪郭がシャープさに欠ける。内面はナデ調整が主体で内面口縁部と上胴部の境は丸みをもつ。 | × |
| 胎土 | 全体として須恵器に近く焼成はよい。発色が黄灰，白，瓦質の３種類がある。均一な焼きと仕上がりである。黄灰色が最も多い。土師質，縞状の胎土はない。 | 焼成が悪く，瓦質，土師質など焼成，胎土，色調が雑多。胎土は泥質で縞状のものがあり，樺番城窯産須恵器と一致するものはない。 | × |



口縁部（色調黄灰色）



口縁部（瓦質）



胴部（色調白色）



口縁部断面



破断面の状況



口縁部内面

第105図　樺番城窯出土の甕

# 第Ⅵ章　総括

## 第１節　縄文時代

縄文時代の遺物はアカホヤ火山灰の二次堆積であるⅢ層上面で出土した。縄文時代の遺物は，昭和57年(1982)の農道整備事業に伴う発掘調査で出土しているが，小片で出土量が少ないため様相が不明であった。今回の調査では，縄文時代早期，前期，後期，晩期の土器が確認され，遺跡の時代が明らかとなった。

遺物の特徴は，縄文時代前期の曽畑式土器，轟Ｂ式土器，尾田式土器，後期の南福寺式土器，磨消縄文土器など，西北九州を中心に分布する土器が中心である。特に縄文時代前期末の尾田式土器は，轟式土器に後続する土器型式（水ノ江1990）で，有明海沿岸域（長崎県・熊本県）に分布の中心がある（池田1998)。県内では伊佐市瀬ノ上遺跡に出土事例があり，それ以外の地域では深浦式土器に伴って１～２点認められる状況である。本遺跡の出土は，薩摩半島北部が尾田式土器の分布圏に入っている可能性を示している[1]。

石器は石鏃，スクレイパー，石斧，磨石，石皿など生活に必要な器種は一揃え確認できる。また，黒曜石の剥片が多数出土していることから，剥片石器の製作を行っている。石鏃の石材には，佐賀県の針尾産，腰岳産黒曜石が使用されている。

遺物は微高地周囲の窪地で出土しており，微高地からの流れ込みによって堆積したと考えられる。遺物の組成からみて，微高地には小規模な居住域が断続的に存在していたことが推測され，調査の状況は縄文時代の集落跡が，耕地開発によって削平されたことを示している。

北薩地域の発掘調査事例に目を向けると，出水市荘貝塚では轟式土器，同市前原遺跡や外畠遺跡では磨消縄文土器が出土しており，熊本に近い出水地域は，中九州の土器様式の影響を受けていることが報告されている（江神・吉岡2016)。さらに，阿久根市の沖合３㎞にある阿久根大島では，曽畑式土器が出土している。周辺遺跡や出土遺物の状況を踏まえると，本遺跡は海路を利用した西北九州との往来が活発であったことが大きな特徴といえる。

## 第２節　古墳時代

古墳時代の遺構は，竪穴建物跡を３軒検出した。３軒とも削平された状況での検出であった。２軒の遺構内からは，古墳時代前期に比定される東原式土器段階を中心とした大量の土器破片が出土した。遺構内炭化材の放射性炭化年代測定値は，弥生時代後期から古墳時代前期に相当する結果であった。中にはタタキ痕のある土器片も含まれていた。

近隣の六反ケ丸遺跡（出水市）においても，本遺跡と同じくタタキ痕のある東原式段階前半の土器が出土した竪穴建物跡が検出されている。その形状は，３段構造であった。両遺跡の遺構は，ともに近い地理・時期であり，上部が削平されている北山遺跡の竪穴建物も同規模の３段構造だった可能性がある。遺構の位置は，３軒ともに調査区の南西側Ｄ～Ｆ－20区の限られた狭い範囲から検出された。昭和57年の農道整備事業に伴う発掘調査では，調査区の南側である海側に近い範囲で古墳時代の土器が出土していた。北側が後世に大きく削平されたことも考えられるが，当該期の生活居住地域の中心は，北山遺跡の南西側から東シナ海方面に向けて広がっていた可能性がある。

古墳時代の遺物は，土器が主体であった。大部分は，器形や赤褐色系の胎土から在地で製作されたものであると考えられる。出土土器は，甕Ａ類の脚台を伴うカキアゲ口縁となる胴部上半の形態や頸部に突帯が伴わないこと，高坏・小型丸底壺の器形など，東原Ⅱ式に相当する(松﨑2021)。遺構内からは，甕形土器，壺形土器を中心に小型丸底壺やミニチュア土器，杓子形土製品がまとまって出土した。出土品や状況から，なんらかの祭祀的儀式の後，遺棄され流れ込んだ状態と考えられる。中には，前述の通りタタキ痕が確認できるものが含まれる。県内でタタキ痕を有する甕形土器は，前述の六反ヶ丸遺跡の他，長島町山門野遺跡（東町1983），薩摩川内市堀之内遺跡（(公財）埋蔵文化財調査センター2014）等，北薩地方を中心に出土例がある。

一部に東原式土器と器形が異なり，白っぽい胎土に赤色粒を含むものがあった（本書掲載番号141)。角閃石を含む量に違いはあるが，熊本県熊本市北無田遺跡（植木町2003）で出土した古墳時代前期の土器の胎土の特徴に類似したものであった。本遺跡出土の土器は角閃石の量が少なく，北無田遺跡出土の土器は器壁が薄く多量の角閃石を含んでいた。器壁や角閃石の量の違いはあるが，白っぽい胎土に赤色粒を含む胎土の特徴や地理的位置関係からも肥後地方からの搬入品の可能性が考えられる。

## 第３節　古代

古代の遺構・遺物は，土坑１基，土師器，須恵器，転用硯，越州窯系青磁が確認された。本遺跡周辺の波留・山下地域では，西海道や英祢駅に関連する遺構の発見が期待されていた（池畑1991)。残念ながら今回の調査では確認されていないが，越州窯系青磁や転用硯が出土していることから，地方官衙に関連する遺構が周辺に存在している可能性がある。

出土した土師器・須恵器は，川内平野を対象とした岩元編年の４期～５Ａ期，熊本平野の二本木遺跡編年のⅥ・Ⅶ期に相当する。暦年代は９世紀前半から中頃である（岩元2012，岡田2021）。土師器を細かくみていくと，製作技法や厚み，胎土から搬入品と在地製作品を推定することができる。坏や甕のほとんどは，厚手で赤色小石などを含み，これらの土師器は，遺跡周辺で製作された可能性がある。

ヘラ描きで「金」と書かれた土師器が１点確認された。一文字で「金」と書かれた文字資料は，県内に類例がない。現在，北山遺跡では「金」と書かれたヘラ描き土器が５点出土しており，珍しい事例である[2]。また，墨書土器ではなくヘラ描き土器が主体であることも本遺跡の特徴である。ヘラ描き土器が多数出土している遺跡は，南さつま市芝原遺跡や姶良市外園遺跡があり，薩摩半島南部の万之瀬川下流域や鹿児島湾西岸の姶良地域との関連性が注目される。

## 第４節　中世

### １　遺構の変遷

遺構は，13世紀から16世紀のものがあり，中世前期（13～14世紀）の集落跡から中世後期（15～16世紀）の溝跡・墓域へと変遷する（第39表，第106図）。中世前期の集落跡は13世紀初頭頃に出現し，掘立柱建物跡，竪穴建物跡，焼土跡，溝跡，ピットによって構成される。集落跡では，掘立柱建物跡の配置から４か所の居住区域を想定でき，うち１か所は竪穴建物跡を伴っている。掘立柱建物跡は，規格や方位の統一性が高く，建て替えを行いながら14世紀まで存続している。

溝跡は，最も新しい出土遺物の年代から15～16世紀の遺構として報告した。しかし，掘立柱建物跡と方向が一致することや，13～14世紀代の遺物も出土していることから，集落の出現と同時に区画溝として存在し，改修を行いながら近世まで使用されたことを想定しておく方が妥当ではないかと考える。つまり，中世前期（13～14世紀）には，溝に区画された計画性の高い集落景観を想定できる。

中世後期（15世紀）には，溝跡と土坑墓，土坑が中心となり，土地利用のあり方が，集落跡から畠・墓域へと大きく変化している。土坑墓１・２号は副葬品に乏しく，土坑の中には副葬品をもたない墓が含まれているとみられる。墓の被葬者は，それほど身分の高くない人々と考えられる。

この時期の溝跡は，周辺に建物がなく浅いことから畑等の区画溝と考えられる。畑跡自体は中世の包含層が削平・攪乱されていることもあって，未発見であるが，今後プラントオパール分析等を行い検討していく必要がある。

**第 39 表　遺構の年代別一覧表**

| | |
|---|---|
| 13～14世紀 | 掘立柱建物跡跡１～13号，竪穴建物跡４～６号，溝跡１号，焼土跡，ピット，（溝跡２～９号） |
| 15～16世紀 | 溝跡２～９号，土坑墓１・２号，土坑２～14号 |

凡例：() 内の遺構は想定

### ２　周辺地割との関係

発掘調査時に遺構の方位が現在の地割に一致するのではないかとの指摘を受けたため[3]，地籍図との照合を行った（第107図）。航空写真を見ると，中世の掘立柱建物跡や溝跡の方位は，現在の地割と良く一致している。特に溝跡の位置は，現在の畑境（字界）と重なっている。現在の地割は，昭和20年代の航空写真とほぼ同じであることから，13世紀に成立した方格地割が大きく変わることなく，現在まで引き継がれていることを確認できた。

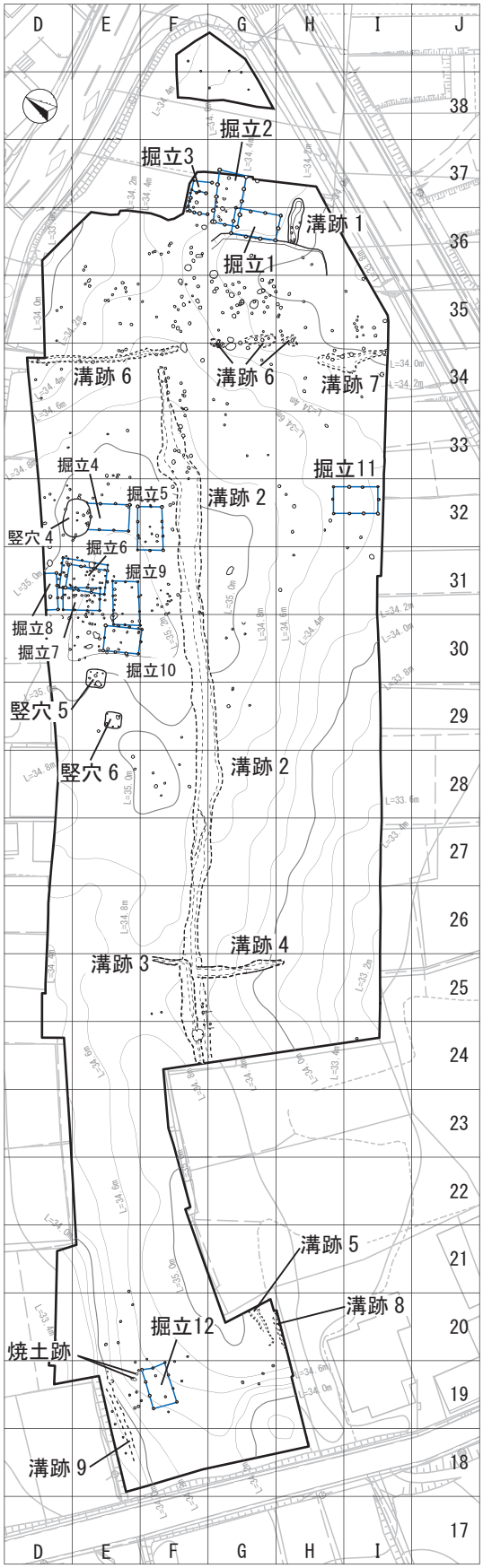
出水市大坪遺跡では，12世紀の条里型地割が昭和40年代の地籍図と一部重なる事例が報告されている。本遺跡の周辺には，中世の方格地割が現在まで良好に残っている可能性があり，今後の発掘調査・整理作業で確認していく必要がある。

### ３　集落跡の評価

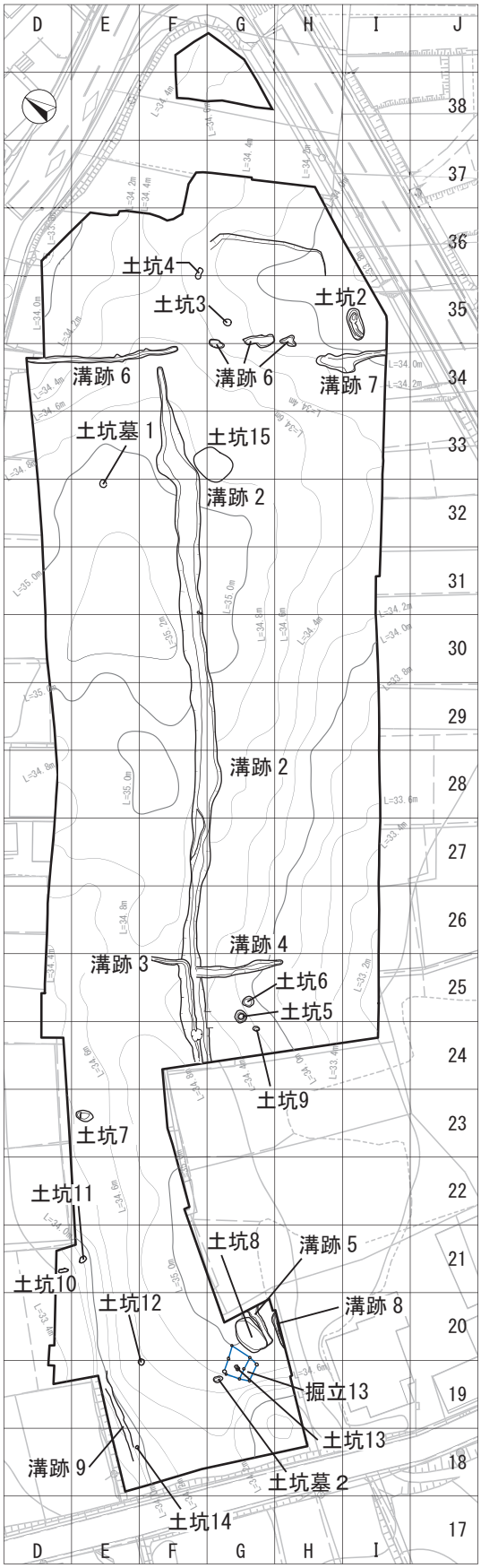
本報告は本調査面積の約４割でしかなく，現段階で遺跡を評価することは難しいが，遺構・遺物の性格や発掘調査事例から，現時点の見透しと課題について整理しておきたい。

まず，遺構の特徴を整理したい。北山遺跡は，13世紀以降に台地全体を対象として，集落や耕地の開発が始まっている。発掘調査区は台地を横断するように長さ約600ｍあるが，中世の遺構は途切れることなく検出されており，当時，台地全体を対象として大規模な開発が行われていることが推測される。本書で報告した中世前期の集落跡は，居住域が溝などに区画され，掘立柱建物跡と竪穴建物跡がセットになっている。土地の区画が明確であることや，遺構の主軸に統一性があることから，土地開発のマスタープランに基づいて建設された計画性の高い集落跡であると想定される。

また，令和３年（2021）度の調査では，本調査区の東側で居住域を囲むとみられる薬研堀が２条検出されている。堀に囲まれた集落跡の調査事例は，霧島市桑幡氏館跡・留守氏館跡・沢氏館跡（15世紀），同市本御里遺跡（15～16世紀），鹿児島市北麓遺跡（13世紀後半～14世紀），南九州市馬場田遺跡（13～15世紀），都城市郡元西原遺跡（11世紀後半～16世紀）で確認されている。いずれも，島津氏，千竈氏などの御家人や鹿児島神宮四社家など，地域の有力者に関連する居館跡である。




(13 ～ 14c)




(15c 以降 )

0 (1:1000) 20m

※破線の遺構は存在が推定されるもの

第106図　中世の遺構変遷

次に出土遺物についてみてみたい。遺物の特徴としては，広域流通品は少ないものの，青磁梅瓶，青白磁の合子，黄釉鉄絵陶器盤など有力な集落遺跡で出土する優品がある[4)]。また，茶道具である風炉，碁石，仏具，鉄鏃などは武士・僧侶階級の人々に関連する遺物である。

上記の考古学的調査成果から，本遺跡の中世集落は阿久根地域における有力武家の一党とその家人集団の集落を想定できる。なお，今回報告した調査地点は，掘立柱建物跡が小規模であることから，それほど身分の高くない人々の居住スペースの可能性を想定しておきたい。

中世の大規模な耕地開発の事例は，最近，都城市郡元西原遺跡周辺で報告されている（近沢2022）。郡元西原遺跡周辺では，13世紀後半以降に遺跡の形成が活発化し，開発が拡大していく様相がみられる。さらに，居館跡や溝状遺構に囲まれた多数の屋敷地，方格地割なども確認され，この地域が島津荘の開発拠点と考えられている。このような遺跡が出現する背景には，畿内地域からの技術関与が指摘されている（佐藤2022）ため，今後の報告書作成においては，南九州だけでなく西日本の調査研究状況を視野に入れた分析が必要である。

最後に中世に阿久根を所領した莫禰氏との関連について触れておきたい。莫禰氏の来歴は不明であるが，建久８年（1197年）には三代成光が莫禰院の郡司になっていたことが記載されている(「薩摩國圓田帳」)。これ以後，薩摩・大隅・日向国の守護職である島津氏に追従しながら，十四代良照まで莫禰院を統治したと伝わっている(阿久根市1974)。莫禰氏は南北朝期，島津氏とともに大隅加世田城の戦い（1336年，対肝付兼重），宮之城における湯田城の戦い(1339年，対祁答院氏)などに参加し，多くの戦死者と莫大な出費のため弱体化したといわれている。文禄２（1593）年，莫禰氏の主君である薩州島津家が，豊臣秀吉によって改易された際に，阿久根を離れ，鹿児島，宮之城，川内高城，加世田小湊，都城，小林の麓に移住した。

三代成光は，賀喜ヶ城から莫禰城に拠点を移したと伝わり，莫禰城の麓に広がる山下の台地には，十二代良正の法名が刻まれた石塔が現存している。さらに，現山下小学校や墓地付近には居館や寺院が存在していたと伝わり，山下の台地は莫禰氏の拠点と考えられてきた。

今回の調査地点は，山下の台地を横断しており，発掘された集落跡の出現年代は13世紀前半で，文献に記載された莫禰城の築城年代に近い。また，本遺跡は有力武家クラスの集落跡であることを踏まえると，莫禰氏に関連する集落跡の可能性が高いことを指摘しておきたい。

本遺跡は，南九州における中世武士の地域支配や集落のあり方を知る上で重要な遺跡である。

## 第５節　近世以降

遺構は，掘立柱建物跡１棟と溝跡のみで，中世に比べ遺構数が少なくなる。溝跡は，中世後期から継続使用され，現在の畑の区画と一致することから，区画溝としての役割が想定される。莫禰氏が16世紀末に退去した後，本遺跡周辺は薩摩藩の統治下に入り，元禄３（1690）年には阿久根郷の麓が現在の市街地である波留へ移転した。

本遺跡は阿久根郷の移転後も畑として利用され，中世の地割りを継承したまま，現在に至ったものと考えられる。

遺物は17 ～ 18世紀頃の肥前陶磁器，薩摩焼が出土した。薩摩焼は産地不明品が多く，未発見の窯跡で生産された可能性が指摘されている[5)]。

### 参考文献


阿久根市1974『阿久根市誌』

池田朋生1998「縄文時代前期末～中期初頭における土器の展開」『肥後考古』第11号

池畑耕一1991「英祢駅考」『交流の考古学　三島格会長古希記念肥後考古』第８号

岩元康成2012「鹿児島県内の平安時代の土器供膳具の様相」縄文の森から』第５号鹿児島県立埋蔵文化財センター

江神めぐみ・吉岡康弘2016「第５章　前原遺跡の調査　第11節総括」『中郡遺跡群Ⅱ　中尾遺跡　前原遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書10

岡田有矢2021「二本木遺跡群内における飛鳥～平安時代前半土器の分類試案と変遷」『二本木遺跡群28』熊本　市の文化財第98集

佐藤亜聖2022「Ⅴ.郡元西原遺跡と西日本の出現期居館」『郡元西原遺跡-確認調査総括報告書-』都城市文化財調査報告書第149集

近沢恒典2022「Ⅳ.古代・中世における周辺域の遺跡動向」『郡元西原遺跡-確認調査総括報告書-』都城市文化財調査報告書第149集

中村直子2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ』鹿児島大学総合研究博物館

松﨑大嗣2021「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学研究』18鹿児島大学

水ノ江和同1990「中・九州の曽畑式土器」『肥後考古』第７号


### 発掘調査報告書


姶良市教育委員会2012『城ヶ崎遺跡・外園遺跡』姶良市埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

阿久根市教育委員会1982『北山遺跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）

東町教育委員会1983『山門野遺跡』東町埋蔵文化財調査報告書（１）
出水市教育委員会1979『荘貝塚』出水市文化財報告書（１）
植木町教育委員会2003『北無田遺跡』植木町文化財調査報告書（16）
大口市教育委員会1986『瀬ノ上遺跡・平田遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（５）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『芝原遺跡３　古代・中世・近世編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『外畠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（175）
鹿児島県立埋蔵文化財調査センター　2019『本御里遺跡Ⅴ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（199）
鹿児島市教育委員会2017『北麓遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（79）
霧島市教育委員会2013『大隅正八幡宮宮内遺跡-総括報告書-』霧島市埋蔵文化財発掘調査報告書（18）
（公財）埋蔵文化財調査センター 2014『堀之内遺跡』（公財）埋蔵文化財調査センター発掘報告書（２）
（公財）埋蔵文化財調査センター 2022『六反ケ丸遺跡２』（公財）埋蔵文化財調査センター発掘報告書（40）
（公財）埋蔵文化財調査センター 2022『六反ケ丸遺跡３』（公財）埋蔵文化財調査センター発掘報告書（42）
南九州市教育委員会2009『馬場田遺跡』南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

注

1　志布志市教育委員会相美伊久雄氏の御教示による。
2　ラ・サール学園永山修一氏の御教授による。
3　滋賀県立大学教授佐藤亜聖氏の御教示による。
4　青磁梅瓶，黄釉鉄絵陶器盤，碁石は，北麓遺跡や馬場田遺跡でも出土している。
5　鹿児島県立埋蔵文化財センター関明恵氏の御教示による。




第107図　調査区と現在の地籍図（1:2500）

# 図　　版

図版1







調査区

①令和３年度前期調査区　②令和３年度後期調査区

図版2



















調査状況・土層断面

①古墳時代遺構調査状況　②中世遺構調査状況　③作業状況
④H・Ⅰ－24・25遺物出土状況　⑤H－25区東壁　⑥F－18区西壁











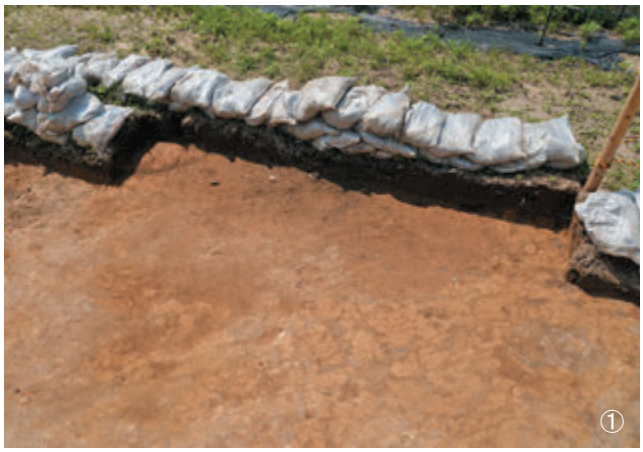





古墳時代　竪穴建物跡

①１号検出状況　②１号遺物出土状況　③１号炭化物出土状況
④１号完掘状況　⑤１号遺物出土状況

図版4


①


②


③


④


⑤

古墳時代　竪穴建物跡

①２号検出状況　②２号半裁状況　③２号遺物出土状況
④２号完掘状況　⑤２号遺物出土状況



















古墳時代　竪穴建物跡・古代　土坑

①竪穴建物跡３号検出状況　②竪穴建物跡３号完掘状況
③土坑１号検出状況　④土坑１号遺物出土状況　⑤土坑１号完掘状況　⑥土坑１号断面状況

図版6

























中世　掘立柱建物跡

①１号検出状況（手前は溝跡１号）　②１号完掘状況（奥は溝跡１号）　③２号検出状況
④２号Ｐ７土層断面　⑤４号検出状況　⑥４号完掘状況　⑦５号完掘状況　⑧５号Ｐ７土層断面













中世　掘立柱建物跡

①６～９号検出状況　②６～９号完掘状況　③10号完掘状況　④10号Ｐ２断面

図版8



















中世　掘立柱建物跡・竪穴建物跡

①掘立柱建物跡11号完掘状況　②11号Ｐ10断面　③竪穴建物跡４号検出状況
④４号土層断面　⑤４号Ｐ２・３断面　⑥４号完掘状況
















中世　竪穴建物跡

①５・６号検出状況（手前６号，奥５号）　②５号土層断面　③５号壁際溝完掘状況
④５号床面炭化物検出状況　⑤５号完掘状況

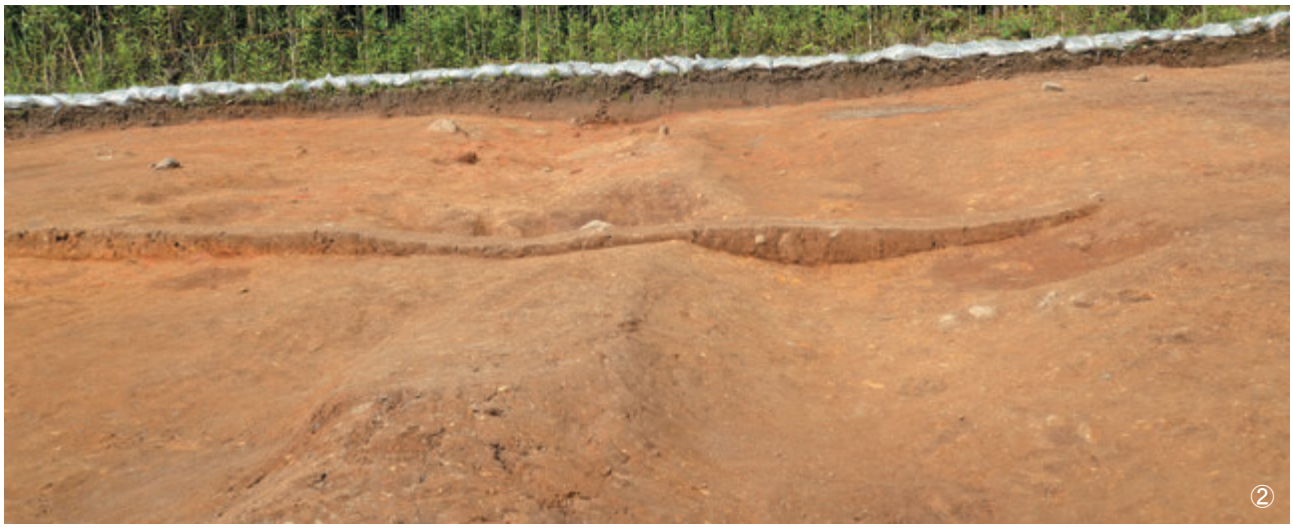
図版10




中世　竪穴建物跡・溝跡

①竪穴建物跡６号土層断面　②６号壁際溝検出状況　③６号床面炭化物検出状況
④６号完掘状況　⑤溝跡２・３号検出状況










中世　溝跡

①２・３号遺物出土状況　②２・３号土層断面　③１号土層断面　④１号完掘状況

図版12






















中世　溝跡

①４号検出状況　②４号土層断面　③４号完掘状況　④５号検出状況
⑤５号完掘状況　⑥６号礫出土状況　⑦６号完掘状況






















中世　土坑墓・土坑

①土坑墓１号土層断面　②１号銅銭出土状況　③１号完掘状況　④土坑墓２号半掘状況
⑤土坑墓２号副葬品出土状況　⑥土坑２号土層断面　⑦土坑２号完掘状況

図版14

























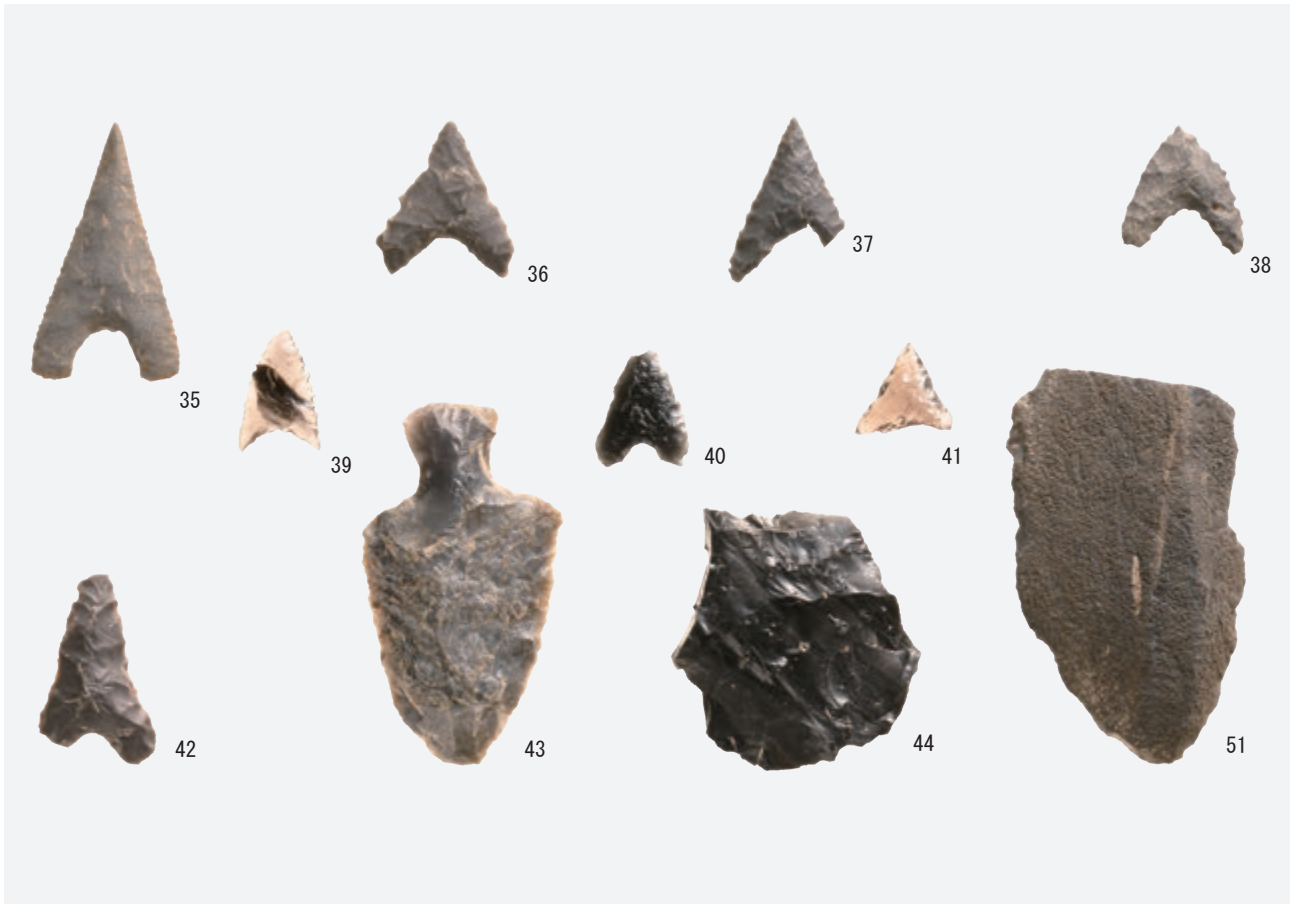
中世　土坑・焼土跡

①土坑３号半掘状況　②土坑５号半掘状況　③土坑６号半掘状況　④土坑７号完掘状況
⑤土坑８号検出状況　⑥土坑８号遺物出土状況　⑦土坑11号完掘状況　⑧焼土跡検出状況




縄文時代　包含層出土土器

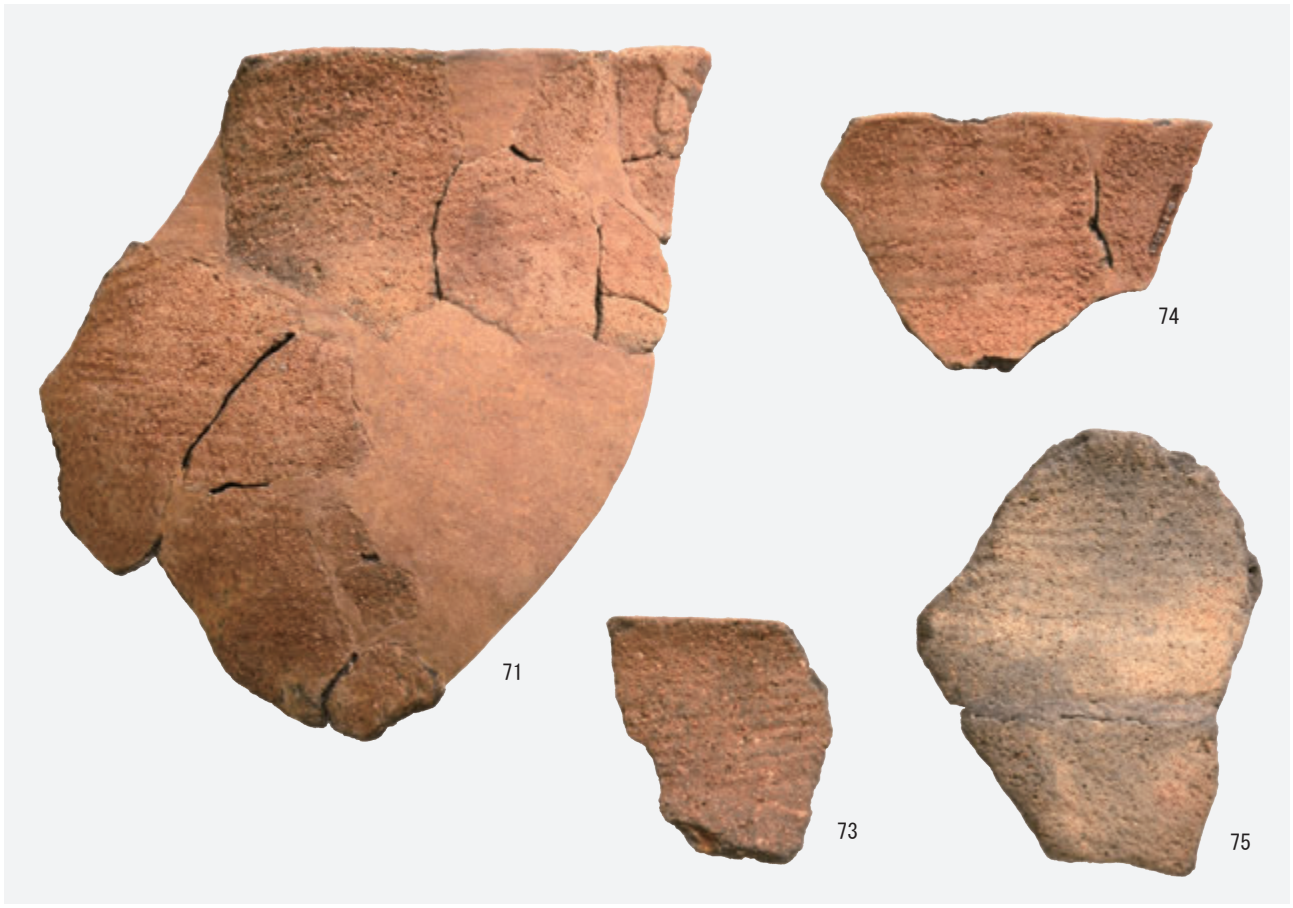
# 図版16　縄文時代







縄文時代　包含層出土石器







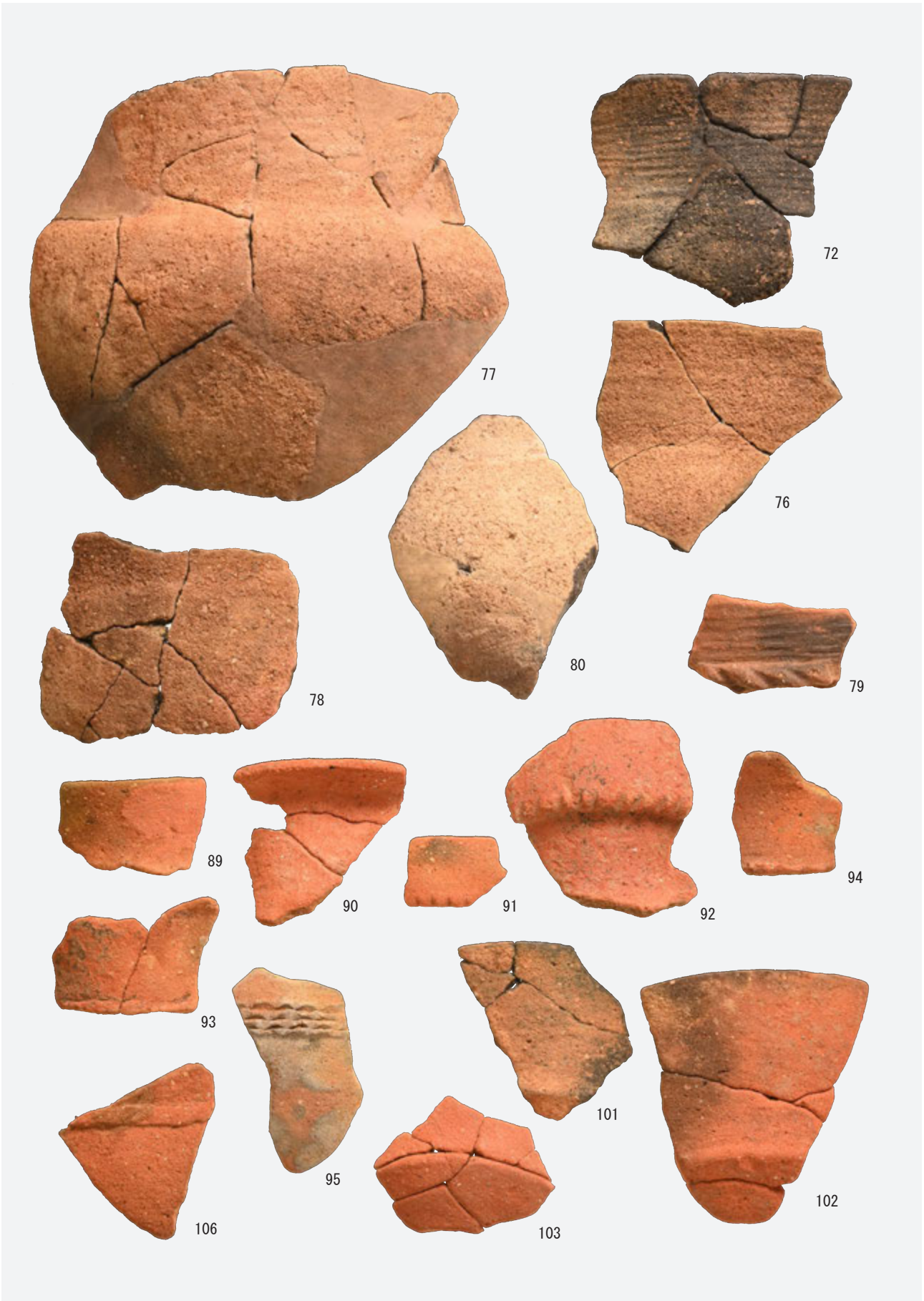






古墳時代　竪穴建物跡１号出土遺物１

図版18　古墳時代




古墳時代　竪穴建物跡１号出土遺物２

























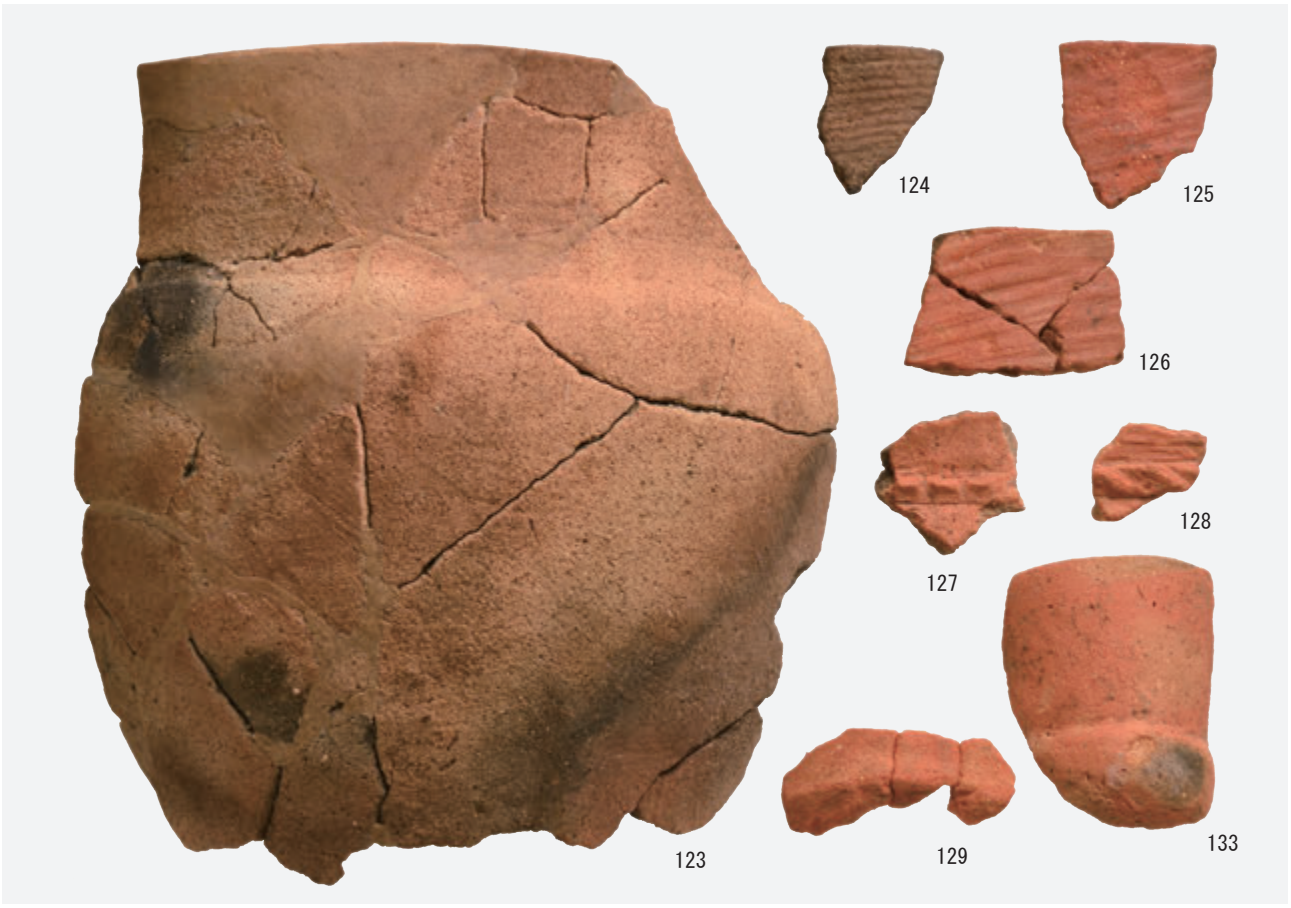









古墳時代　竪穴建物跡１号出土遺物３











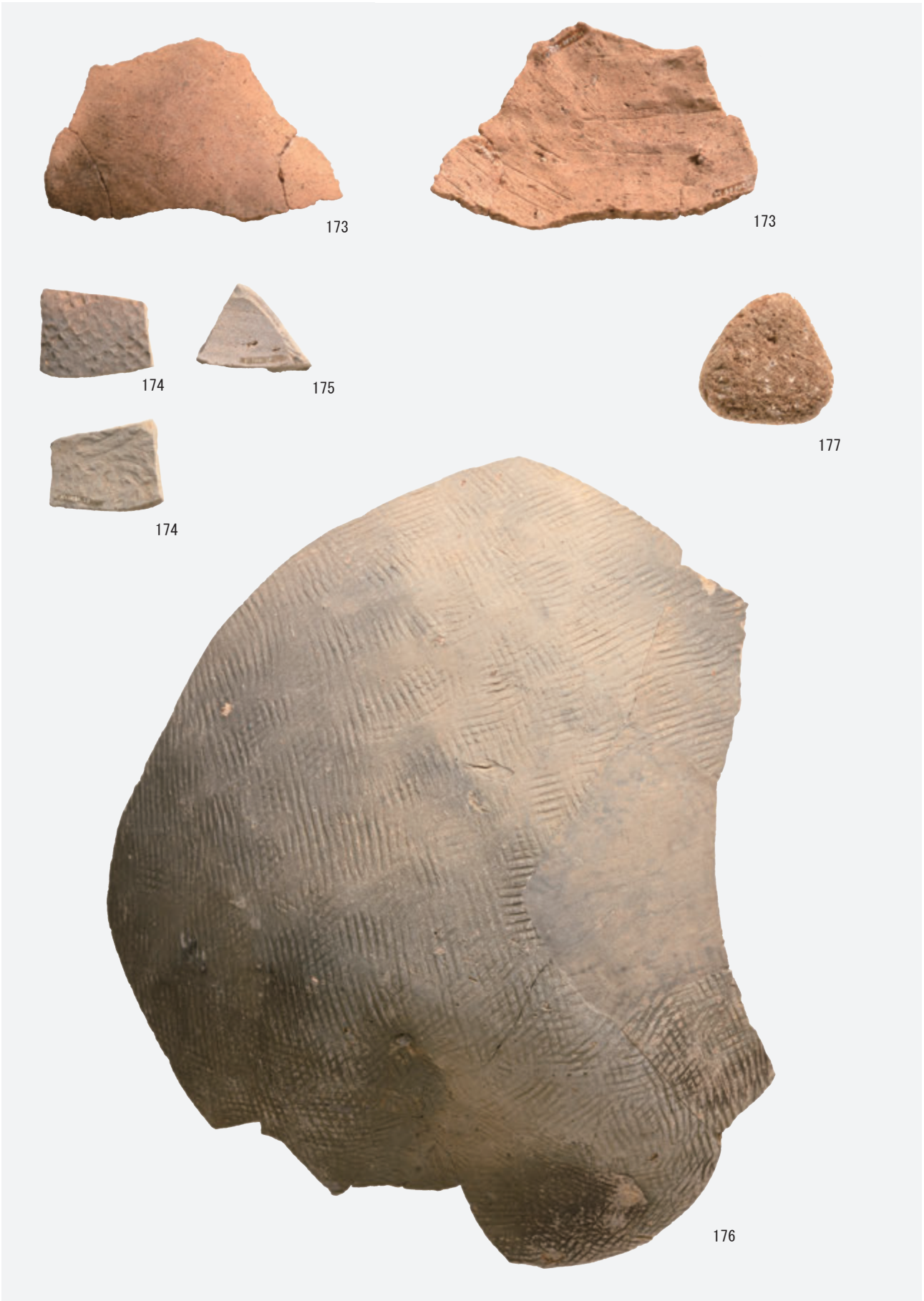





古墳時代　竪穴建物跡２号出土遺物・包含層出土遺物１




古墳時代　包含層出土遺物２




古代　土坑１号出土遺物


185
193
186
198
221
216
194
197
217
199
225
218
212
227
224
232
234
235
236

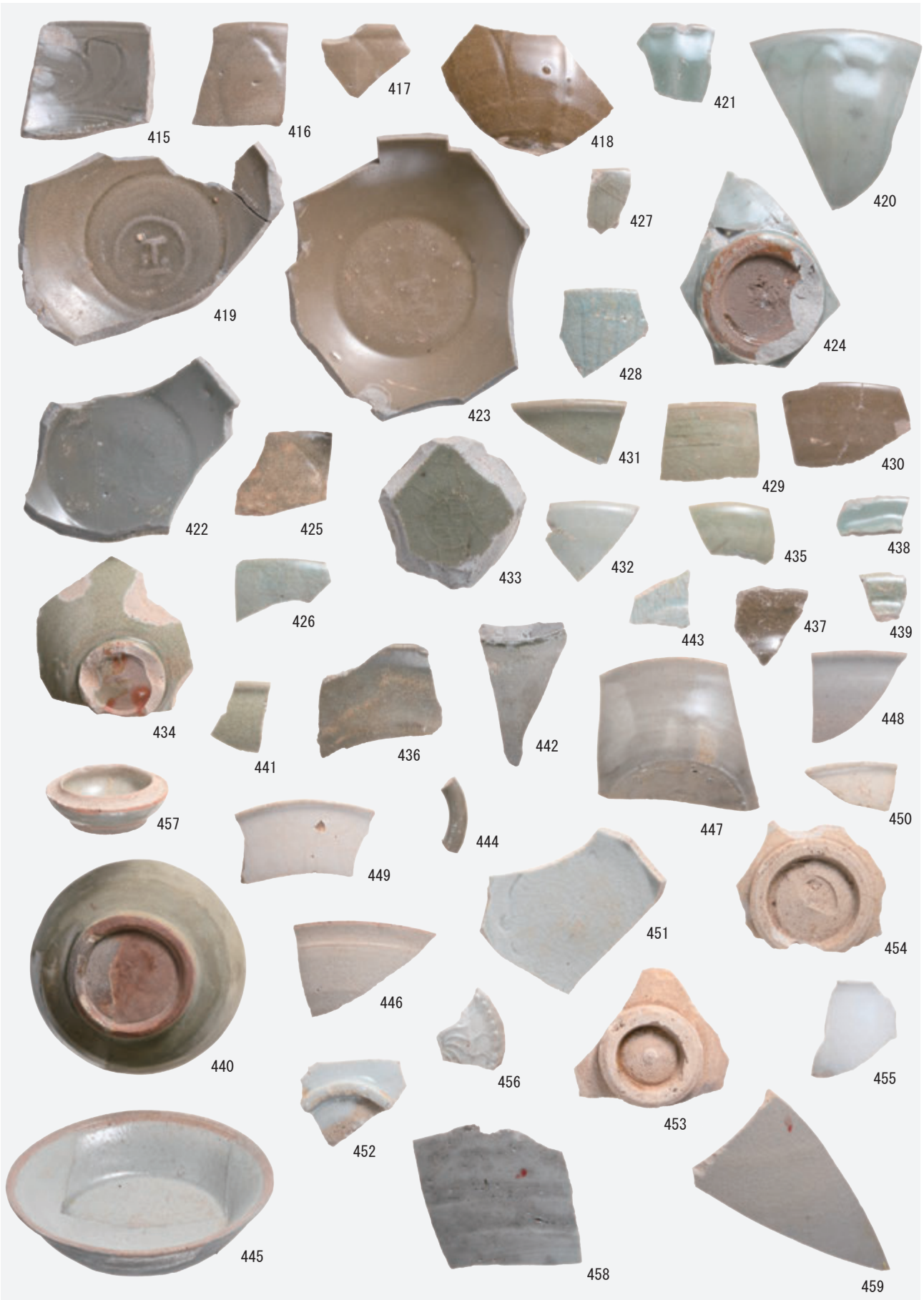
古代　包含層出土遺物１


242
243
244
251
239
247
249
250
259
254
258
256
257
262
264
266
268
270
269

古代　包含層出土遺物２


273
272
274
275
276
271
277
279
278
282
286
280
284
285
283
281
290
288
287
289
291
292
293
296
294
298
295
299
297

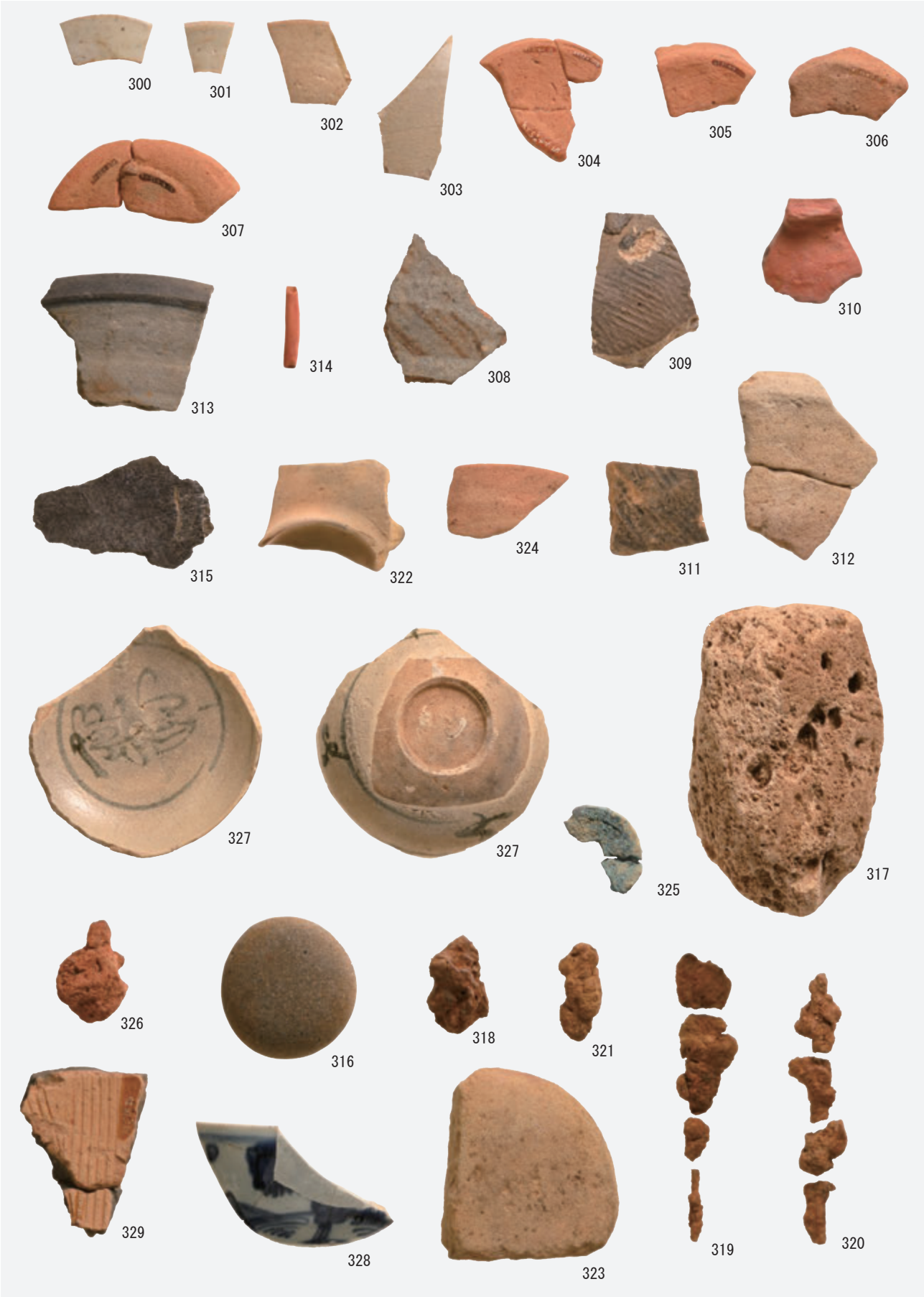
中世　遺構内出土遺物１


415
416
417
418
421
420
419
427
423
424
428
422
425
431
429
430
433
432
435
438
426
443
437
439
434
441
436
442
448
447
457
444
450
449
451
454
440
446
456
455
453
452
445
458
459

中世　遺構内出土遺物２


350
352
354
351
353
355
360
356
358
361
363
362
357
359
364
366
367
365
370
368
371
369
372
373
379
374

中世　遺構内出土遺物３


300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
322
324
325
326
316
318
321
317
327
327
329
328
323
319
320

中世　遺構内出土遺物４


330
332
331
333
334
336
335
337
338
341
343
339
347
345
346
348
340
342
344
349

中世　遺構内出土遺物５


377
375
381
376
378
383
380
382
385
387
384
393
388
386
389
392
391
399
390
395
400
394
397
396
402
403
404
398
401

中世　遺構内出土遺物６


460
461
462
465
465
469
473
466
463
464
474
467
468
468
472
470
476
477
471
471
475
475
487
480
485
490
494
496
497
498
495
523
525
509
532
536
501
522
535
539

中世　包含層出土遺物

# 図版32　近世




近世　包含層出土遺物

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（51）
南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 北山遺跡 1

発行年月　2023年３月
編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番1号
ＴＥＬ　0995-70-0574　　ＦＡＸ　0995-70-0576
印　　刷　株式会社　国分新生社印刷
〒899-4301　鹿児島県霧島市国分重久 620-１
ＴＥＬ　0995-45-4880　　ＦＡＸ　0995-45-6979